

南方の記録

今泉茂世

主人の遺稿とありやうた
「南方の記録」生々しく
ありありとてとどろ
く一部を抜華して
本に致しうた
お暇の折お読み頂けれ
ば幸甚に存じます

妻 今泉静枝

目次

横浜からセレベス島マカッサルへ（貨物船の旅）

南の海に船出	1
便乗者	3
水洗便所	6
金毘羅さん	8
船の食事	8
関門海峡	10
東支那海	12
無事、高雄港に入る！	15
思い出の街	17
アンボン上陸	19
護衛艦	23
マカッサルの街	25
スケッチ	29-34

アンボン物語

放送の準備 OK	1
有線放送	3
空襲は日常茶飯事	4
我々の宿舎	7
音響増幅器	8
テレマカシ バーニャ	11
隣の兵隊たち	14
豪州兵捕虜	16
ロケット	19
会社の先輩後輩	22
スケッチ	24-26

国際高等御下宿

「パビリアン」 1

切手帖 4

大きな坊や 5

白菜の漬物 7

デング熱 10

宮様！ 拝謁 13

敬礼、敬礼、敬礼！ 15

 スケッチ 19-20

山の要塞

マリノの山 1

感電 3

水力発電所 6

山の仙人たち 8

本物の将軍 11

ライター 15

ブランデー 18

火焰木 21

アリバイ 24

峠の茶屋 26

電波発射 29

 スケッチ 33

ニューギニアの一週間

バンダ海 1

草ボウボウの滑走路 3

感度ありっ！ 6

煙草一服の時間 9

弁当 11

士官食堂 13

銭湯のような風呂 16

トアール的一天	18
俊寛	22
果てしないジャングル	26
警備隊本部	29
風と共に去りぬ	30
ニューギニアの豪邸	31
毒虫	34
冒険着陸	37
『銀蠅』	39
バボ的一天	40
ゴーストタウン	43
将軍メニュー	46
トランプ占いの怪！	48
大きな飛行艇	51
さらば ニューギニア！	53
スコール	55
『アンボンの兵隊は元気じゃのう！』	57
スケッチ	60-63

敗戦前後

敵の暗号	1
黒い馬	4
匍匐前進	9
爆弾埋設	12
スパイ、スパイ、スパイ！	15
日本人退去！	17
占領軍現らわる	20
混血兵哀れ！	23

敗戦後の逃避行 マロスからランガへ（セレベス島）

～帆掛け船の旅～

マロス脱出	1
インドネシア独立の歌	4
メラ・プティの旗	6

プラウ	9
乗り遅れ	11
疑心暗鬼	13
槍の束	16
夕暮れの河	17
海賊	20
海の上の朝	25
何もする事が無い	27
水洗便所	28
スコール	29
ブギスの海の男	33
やっと上陸！	34
ジャンボ玉子焼	38
スケッチ	42-46

著者略歴	巻末
------	----

横浜からセレベス島マカッサルへ

(貨物船の旅)

南の海に船出

一万トン級貨物船・北陸丸は既に、白く光る帯のような防波堤の外に進んでいた。うす曇の朝の光を受けて海は滑らかな緑色に、波もない。見渡す周りの景色は爽やかな朝の空気の中にしっとりと静かに広がっている。

甲板の手すりに折り重なって集まっている人々は、誰も口をきかずに夫々の思いをこめて次第に遠ざかっていく横浜の街を見つめている。

防波堤の端には玩具の飾り菓子のような赤と白の小さな灯台が見え、港の中の岸壁には倉庫の群が同じ形に行儀よく並んでいる。倉庫群の屋根の向こうには造船所のクレーンや櫓が幾つも見える。

大きな旅客船の煙突やマストも見えるが、その中のひとつに緑の十字のマークが大きく描かれているのは、4、5日前にアメリカから戻って来た浅間丸である。アメリカ在住の外交官や非戦闘員の日本人を交換船として引揚げて来た船だ。

港の背後には大きなビルディングの群が横浜の街のスカイラインを描き出し、目にはいる陸地全体は家々の屋根がぎっしりと埋めつくし、丘も海岸も隙間なく人家が続いている。

港の外は東京湾が霞んでいるが、空には出帆を警戒しているとみえてフロートをつけた水上飛行機が3機、日の丸の標識も鮮やかに爆音を激しく轟かせながら船を中心にして高く低く飛び交っている。

北陸丸を見送るように後をつけてきたランチは、船がスピードを緩めると船首に近付いてきて、寄り添うように横付けして走っている。船から降ろされた縄梯子を軽業のように降りた水先案内のパイロットは、カンカン帽を片手で押さえながら猿のように巧みにランチに跳び移った。船はそれを合図に身を震わしてエンジン音を高め、スピードを増していった。船首は南に向かっている。行先は南も南、フィリッピン、セレベス、ジャワの島々である。

昭和16年12月8日、軍艦マーチつき「大本営発表」から大東亜戦争は始まった。日本軍はハワイ空襲、マレイ半島上陸、マレイ沖南支那海でのプリンスオブウェルス撃沈、香港占領と矢継早に戦果を挙げ、今年・昭和17年には、1月にはマニラ、2月にはシンガポール、3月にはジャワ島のジャカルタ、スラバヤを占領し、以後次々と熱帯地方の島々に手を広げている。ついさきほど6月には中部太平洋のミッドウェイで日米海軍の世紀の大決戦が行なわれたばかりである。

海軍の御用船、北陸丸は武器、弾薬、軍需品のほか、全国から集まってきた雑多な南方建設要員を満載して、今横浜を出帆して占領されたばかりの熱帯の島々に向かっているのだ。

時に昭和17年9月7日の朝である。

甲板を埋めて陸を見つめている群衆は、いろいろな服装をしたあらゆる職業、階級、年齢の人々である。戦闘帽、国民服に巻ゲートル姿の職人、白いヘルメットに半ズボンの会社員、白麻の海軍士官服を着た軍属……黄色いヨレヨレのスフなのであまりスマートじゃないが……。

日本刀を入れた紫の袋を後生大事に抱えているニッカーボッカー姿の一見土建屋。今さっき迄銀ブラをしてたと言いたげなシャレタ背広、流行のソフト帽、ニュウスタイルの靴をピカピカさせている男。

我々もこの中の一員として、南の島々に有線、無線の通信施設を建設するため、会社から派遣された数十人が混じっている。

この群衆の後ろには防暑服の半袖、半ズボン姿の海軍の水兵が数十人、ハッチの上やブリッジの屋根の高いところで、これまた名残惜しそうに港の方を眺めている。

陸地が遥かに遠ざかると甲板上の人々は、朝早く上船したまま船艙の中にはおり出してきた自分の荷物の整理をヤット思い出して、手すりを離れて穴倉の中に降りて行った。

たった一つしかない木製の階段を降りると、だだっぴろい船艙がうす暗く広がっている。幾つかぼんやり電灯はついているが、ここは普段は荷物を納れる場所なのでムーッと独特な臭いが漂っている。

これからは、ここが乗船者の大群の住処となる訳だが、あまり快適な場所と

は思えない。舷側の壁に点々と丸窓が幾つかあるだけで、床は鉄板である。我々はその鉄板にゴザを敷いて、割当てられた面積に寝る場所を作らねばならない。

ゴザの上にリュックサックやトランクを並べて垣をつくり、手回りの品を枕もとに置いて我々のグループや自分の寝場所をつくる。

我々の会社が割当てられた一角も、縦に寝たり横に寝たりといろいろ工夫して、足の先に頭がきたり腹がきたりするくらい、ぎっしり詰めこんで恰好がついた。なんの事はない、鰯の缶詰である。

船艙の中は隣も向こうも乗船者の群が寝場所づくりに苦心している。中には柱から柱に綱を張ってタオル干し場をつくったり、釘の打てない鉄の柱に針金で器用に鉤を作って取り付け、小物掛けにしている要領のいい旅慣れた男達もいる。

我々のグループはこういう事には経験のない、顔を合わすのも初めての寄せ集めなので、寝場所の設営もモタモタして、出来ばえもさっぱりスマートではない。

やっと寝場所もどうやら恰好が出来て、さて一服と腰をおろしたが、ゆっくりする暇はなかった。穴倉の入口から水兵のドラ声が響いてきた。「全員、甲板に集まれ。番船艙の横だ。駆け足！」

我々はあわてて甲板にとび出していった。

便 乗 者

半袖の腕に「甲板士官」の腕章を巻いたゴム鞆のように丸々とした、赫ら顔の兵隊が、ハッチの蓋の上に仁王立ちになって、大声で演説をはじめた。

黒の二本筋のある白の戦闘帽をかぶり、半ズボンに運動靴を履いている。「便乗者に対する注意を与える。本船は軍艦である。便乗者は何事も軍人の指揮に従わねばならない。便乗者は甲板以外の場所には立ち入ってはいけない。便乗者は……いけない。便乗者は……いけない。便乗者は……便乗者は……便乗者は……」

我々は便乗者であり、お情けで軍艦に乗せて貰っているのだった。お客さんでない我々便乗者は食事はセルフサービス。便所は甲板の特設仮便所。

水は一日洗面器一杯。風呂は一週間に一回くらいはあるかもしれないと。

なんともはや、心細い宣言の連続である。

すぐ後ろに高くそびえたブリッジの窓から、よぼよぼの老海軍将校の制帽姿が我々を見おろしていたが、この船の輸送指揮官である海軍大佐だと囁きが伝わってきた。

情けない話はそれだけでは済まなかった。もっと頼りない話が始まった。

「東京湾の出入口は敵の潜水艦がウヨウヨしていて、遭難の危険があるから注意を与える。近頃は毎日のようにやられているから、この注意をシッカリ聴いておくように」

話によると、便乗者の救命具は全然用意されていないから、遭難の場合は各自適当な板ぎれを素早く自分で捜して、渦巻きに巻きこまれぬよう出来るだけ速く泳いで、船から離れるようにとの事だった。

全くのところ我々はガックリときた。これまで新聞やラジオは勝った勝ったの報道ばかり流し、大本営発表も軍艦マーチ入りで景気のよいニュースを聞かせてくれたが、日本の玄関先に敵の潜水艦がウロチョロしている話は聞かされていなかった訳だ。

船は東京湾を出はずれて大きく揺れ始めた。

なるほど、船首や船尾の砲塔には兵員が配置され、高いブリッジの両端にある機関銃座にも兵隊がついて海面を厳しく監視している。我々便乗者一同は誰もかれも皆深刻な表情で、甲板から船艙にトボトボと戻っていった。

うちの会社の連中が割当の寝場所に戻って来たところで、今度は会社の幹部からまたまたショッキングな重大発表が行なわれた。

「我々第2班の出発に先だって、会社から南方に派遣された第1班5名は、ひと月前の8月中旬日本を離れたが、その一行の乗った船は台湾沖で敵の魚雷攻撃を受けて沈没した。幸い5名は無事救助されて元気に基隆に上陸することが出来た」という。

聞いていた一同は啞然として互いに顔を見合わせた。覚悟は一応出来てはいるものの不安の色は隠せず、中には何故乗船前に発表してくれなかったかとブ

ツブツ不満を漏らしている者もいる。

さっきの甲板士官の話といい、今の会社の発表といい、話は今までもいろいろ聞いて他人事として想像していた遭難という事態は、もはや自分自身の問題として直接我々の上にのしかかって来たことを、改めて自覚せざるを得なかった。

第1班遭難の情報は東京の本社でも秘密にされていたので、ごく一部の者しか知らなかった。

我々は本社で南方に送り出す無線機材、部品を日本各地の送、受信所やメーカーから掻き集め発送する準備を担当していた。ジトジトと蒸し暑い真夏の東京で、NHKからマイクを供出して貰ったり、メーカーの機器立合試験に汗を流してとび歩いていた。

ある日、本社内で急に幹部が右往左往し初め、ただならぬ様子である。こりゃ何かあったなと思っていると、担当の課長がやって来た。

「この前送った品物のリストがあるだろう。あれと同じ物を今一度集めてくれないか。面倒だからそっくり同じでいいよ」

課長はさりげない調子で事務的に言っている。だが、あまりにも事務的なだけに我々はピンときた。

「課長。とうとうやりましたね。奴ら助かりましたか」

我々が鎌をかけると、さすがに課長も困って兜を脱いだ。

「君たちに隠してもしょうがないな。実は……」と白状した。

「で、早速代わりを送らにゃならんのだ。暑い中を御苦労だが、も一度駆けずり廻ってくれ。だけど、この事は会社の中ばかりでなく、世間にも秘密なんだからな。そのつもりで。憲兵もうるさいぞ」

という事だった。

船艙の中では再び荷物の整理が忙しくなった。仲間の連中と相談しながら非常持ち出しの品を決めて適当な場所に置いたり、緊急第一号品は枕もとに並べるといった遭難対策に、各自夫々の知恵をしばっている。

非常持ち出しにもいろいろ個人差があって、貴重品を纏めている者もおれば、食料品を揃えている者もいる。『どうせ、俺は泳げないんだから、どうでもいいや』とノンキというか大胆というか、見ためは弱々しくても案外ズウズウし

い男もいる。

船はいつの間にか大島の鼻の灯台を後ろに見送り、本州の山々を遥か北に見ながら太平洋を西に進んで、昼が過ぎ、夜が近ずいた。

水 洗 便 所

昼間でさえうす暗くて風通しの悪い船艙の中は、夜になると外に灯が漏れないように、舷側の小さな丸窓は鉄の蓋が閉められるので、まさに蒸し風呂である。

鉄板の上のゴザには魚河岸の鮪のように人間がゴロゴロ寝ていて、天井からはタオルやシャツや洗濯物がわかめのようにブラ下がっている。

鉄板の寝床はすぐに腰や肩が痛くなって寝がえりをうつと、隣の人の体にブツッかる。暑さと寝苦しさから、人々は涼しい夜の甲板に逃げだしていく。なかには、甲板で寝るんだと毛布を抱えていく人もいる。

船艙の中の暑さも平ちゃらで、碁・将棋・麻雀・トランプに夢中の連中もいる。隅の方でコッソリ花札博打をやっているのもいる。悠々と毛布をひっかぶって、いびきをかいてグッスリ眠っているのもいる。

海の上の朝は、とにかく清澄で何とも言えない程良いものである。潮気を含んだ空気がヒンヤリとして新鮮でおいしい。夜が白みかけると、甲板はもう人の影が黒い塊になって、高いところにあがったり手すりにもたれて海上を眺めたりしている。

まだ海も空も暗く、東の水平線だけがほの白い。

北の方の海上には本州の陸地が墨絵のように横たわっているが、陸地の中段に灯台と無線のアンテナの柱が幾つか見える。潮の岬である。

僕は学生の頃、横浜と神戸の間を何度も船で往復しているので、このあたりの海は見なれた景色である。船は本州の南岸にそって西に進んでいる。

船は右に進んでいるかと思うと急に航路を左に曲げる。左に進んでは又急に方向を変える。蛇の蛇行である。

敵の潜水艦の魚雷攻撃を避けるため、いわゆるジグザグ行進を続けているが、

これを昼間も夜も休みなしに続けて走ってのるのだろうか。考えただけでも厄介な走り方である。

この北陸丸は1万トン級の優秀貨物船で、速力も潜水艦を上回る14ノットも出せるので、こうして単独で海上を突走っているが、速力の遅い船や小型船はもっぱら船団を組んで駆逐艦の護衛付で走るのが普通なのだろう。

北陸丸は三島型の貨物船で船首楼には立派な砲塔を備えている。

デッキには4つの船艙を持っていて、夫々スマートな橋桁式ガントリーデリックがある。

我々便乗者はこの甲板上だけ自由行動が許されているが、ここには近代的な優秀船のイメージとは対症的な、一風変わった仮設便所が我々のために設けられている。

便所は甲板の舷側に沿って建てられた木造バラック小屋で、上下見透かしの簡単な扉が付いた部屋が5、6個並んでおり、その床の真ん中を鉄製の樋が通っている。樋にはフンダに海水が流れており、先は舷側から滝になって海に流れ落ちている。

用便者はこの樋を跨いで用をたす仕掛けで、何の残留物も残さずに衛生的で簡にして要を得ている点、まことにナイスデザインである。あらゆる設計はこうありたいものである。

しかし、便所の数が少ないのが泣きどころで、食後のラッシュアワーには便所の前に長い列が出来て順番を待たねばならない。

便所当番も我々の仕事だが、これはフンダにある海水をホースを使って勢いよく噴出させ、小屋全体を洗い流せば終わりだから、暑い甲板での水遊びと思えば大した事ではない。

紀淡海峡が近ずくと船では再び警戒態勢がとられた。ブリッジの上には見張りの兵隊が立ち、砲塔や機関銃座にも兵隊がつめた。船員たちもあちこちに待機して海上を注意深く見張っている。

しかし、船は何事もなく穏やかな大阪湾に進んで行った。両側から迫った海峡は白い砂浜に緑の樹々が目にしみて美しかった。

大阪湾にはいと警戒態勢は解かれ、全員ホッとしてノンビリした気分になる。明るい陽の中に静かな美しい海が広がっていた。

船は大阪や神戸には寄らぬとみえて、淡路島沿いに進んで行った。船は明石海峡に進んだが、僕にとっては子供の頃から見慣れている須磨・舞子・明石の砂浜を目の前に、淡路島と本州を左右に眺めながら通り過ぎていった。そこには戦争中とも思えぬのどかな美しい風景が、明るい陽を受けて静まりかえっていた。

夕暮れがせまる頃、船は四国の沖近い瀬戸内海を進んでいた。

金 毘 羅 さ ん

夕食後のひととき、甲板上が夕涼みの人々で賑わっているとき、「国際の人は船首甲板に集まって下さい」という、口から口えのおふれが伝わってきた。皆は何事だろうと不審な顔で集まってきた。

「実は今、船は多度津沖を通っているのだそうです。多度津の奥の琴平の金毘羅さんは航海安全の守り神様なので、我々会社の者一同の安全を祈願して礼拝したいのです」という事であった。

一同、いささか照れくさそうに、人混みの舷側に並んで恭しく、深々とお辞儀して、手を合わせ手を拍いて祈った。危険なこの航海が無事でありますようにと祈る心は、その真剣さにおいて各人変わりはなかった筈である。

航海安全を祈った各人の賽銭は小さな酒樽に納められ、皆が見守る中で舷側から四国沖の海にはおりこまれた。

このあたりの海では、漁師たちが樽を見つけると必ず、金毘羅宮に届けてくれるのが、昔からの習わしだそうである。

船 の 食 事

船の食事は御馳走である。陸では配給が少なくて十分に食えない米の飯も船の中ではタップリ量が食べられ、これがまた美味しい飯である。凄い量を一度に炊くのでこんなに美味しい飯になるのだろう。

陸では滅多にお目にかかれない豚肉が毎日ゴツテリと出てくるから不思議である。こんな所に皆持って来ているので、日本内地では不自由しているんだとやっと分かった。料理はあまり手のかからないゴツ煮だが、肉じゃが玉ねぎと、美味しいものである。

我々は10人くらいが1組になって班組織を作っているが、組の中の数人が食事当番になって烹炊場から1組分の食事を提げてくる。さすがに食事用の道具は海軍さんだけあって、物凄く分厚いアルミバケツ・がっちりと大きな四角い飯入れ・そのチョット小型の汁入・大きなアルミやかんに汁杓子と、どれもこれも頑丈に出来ている。烹炊場も規模のでっかい台所で、こんな場所を見たことのない我々にはオドロキである。直径1mもある大きな飯炊き用鉄の鍋が7、8個並んでいて、蒸気で炊かれている。その飯を兵隊が何人もかかって、我々の飯入れにスコップで入れてくれる。

運ばれて来た食事は、おきまりのアルマイト製の飯カップ・汁カップ・お菜皿・湯呑みに注がれて各自に配る。食事の量は血気ざかりの男達でも、全部平らげるには苦勞するくらいタップリある。

食事がすむと当番は道具や食器を甲板に運んで、ジャージャーと出る海水の水道で洗い流して次の食事に備える。暑い甲板で仲間と賑やかな水遊びは結構楽しいものである。

我々はまだ、僅か数日の船内生活で、食事には不満はないが、暑さと水不足はスッカリ参っている。仲間が顔を合わすと話は決まっている。

「上陸してまず、ビールの冷たいのをギューッとやりたいな」

「俺はビールより先に風呂に飛び込むよ。こう体じゅうがベトベトではかなわんよ。ところで上陸は見込みはあるんか」

「水兵の話では必ずあるって言ってるぜ。何でもいいから、今、氷でもアイスクリームでも、冷たいものが飲みたいよ」

我々は舷側の手すりにもたれて港の向こうの町並みを見ながら、もっぱら陸の話である。

我々はこれまで水兵たちが「上陸」という言葉を「生甲斐」のように特別の扱いで話あっているのを聞いても、あまりピンと来なかったが、こうして暑い船の中に閉じ込められていると、その「上陸」という言葉がいかに貴重なも

のであるか、つくづく分かってきた。

「船の酒保に行けば、なんでも買えるんだそうだね」

「うん、買えるらしいね。だがすぐに売り切れだそう。それに第一、俺達は日本の金は一銭も持って無いから、売っていても買えないよ」

「横浜で残りの有金、全部飲んじゃったからなー。あれが、あればなー」

関 門 海 峡

今まで単調に動いていたエンジンが急に止まったので目が覚めたらしい。もう朝方だったので甲板に出てみると船は暗闇のなかに停泊していた。目が暗闇に慣れてあたりが少し見通せるようになると、場所はどうかや関門海峡の入口らしい。僕も見覚えのあるそれらしい山や海が横たわっている。

昨夜は日暮れまで続いた荷役の騒音がおさまって、船艙の蓋が元通り閉められ、キャンバスのカバーが掛けられたが、船は夜になって動きだし瀬戸内海を西に進んでいた。

我々は久しぶりで穴倉の中の鉄板の寝床に戻ることが出来た。いくら蒸し暑くて缶詰の鰯だろうと、乞食のようにゴザを抱えて甲板のあちこちを寝場所を探してさまようよりはましと云う訳だ。

水路がはっきり見える明るさになると、船はユックリと海峡の中に入っていた。この関門海峡は、中学生の頃か何度となく往来して、山や海や街の様子をよく知っている。僕にとっては馴染みの場所である。しかし、僕はヒョットするとこれが最後の見納めになるかもしれないと、いささか感傷的な気持ちで舷側の手すりにもたれながら、左右の景色をむさぼるよう視続けていた。

門司港あたりにはこれまでと変わり無く沢山の船が並んでおり、両岸の工場からは煙が昇り始めている。

関門国道トンネルの工事現場がすぐ目の下の水際に見えたり、船のすぐ横を針のように細くて長い水雷艇が、スカールのようにスルスルと海面を滑って追いついていくのが見下ろされる。

彦島を過ぎると玄海灘が見えてきたが、天気具合が怪しくなってきた船は揺

れが激しくなってきた。船が陸に沿って北え北えと直進するのでおかしいな—
—と思っていると、急に直角に西に折れて、ジグザグ航行を始めた。

船上の警戒態勢は嚴重だ。兵隊たちは配置につき、船橋には輸送指揮官の老大佐初め、緊張した士官たちの姿が見える。便乗者たちも皆甲板に集り無言のまま海を見つめていた。

この付近は瀬戸内海から玄海灘に通ずる関門海峡の出口だけに、通常の航路には機雷原が設けてあるので、船は遠く北の方を迂回して走っている。しかしその先には敵の潜水艦が待ちうけているかも知れない甚だ危険な場所である。東京湾を出はずれた場所もそうであったが、直線航行からジグザグ航行に変わると急に身近に危険が迫ったような感じになって不気味なものである。

玄海灘はどんよりした低い雲の下で白い波がしらを見せて、荒れ模様の前兆を示している。甲板の隅では数人の人々が一人を取り囲んで話を聞いている。以前航行中魚雷攻撃をうけて遭難し、海を泳いだ経験のある人がその時の話をしているのだ。周囲の人々は真剣な顔で食い入るように話を聞き色々質問している人もいる。

誰もかれも敵潜の潜望鏡か、魚雷の航跡でも見えてこないかと本気になって海面を見渡しているが、白い波頭を見せて荒れ気味の海は素人がいくら見つめても発見出来そうにないくらい、泡だっていた。

北九州の山々や島影が、水平線のむこうに消え去っていった。

静枝やひらくや小さなあきらと、年老いた父を残してきた福岡の街は、あのあたりだろうと眺めていたが、それも見え無くなってあたりは、唯広々とした海が広がっている。魚雷の心配は薄らいだが船の揺れは相当激しくなってきた。

僕は台湾航路の船でこの玄海灘は何度も通ったことがあるし、船にはある程度自信があるので、仲間の連中が船酔いしたら大いに自慢してやろうと期待していたが、当てが外れた。

わずか数人の人々が舷側でゲイゲイやっているだけで、2千人近くに膨れあがっている乗船者は誰も船酔いしていない。

敵潜の魚雷攻撃の危険に緊張しきって、のんびり船酔いなどしている閑はないらしい。

船艙の蓋には雨覆いのズックカバーも掛けられていたが、とうとう雨になっ

て、唯一の出入口の階段にも雨避けのカバーが降ろされ、船艙は完全な穴倉になった。

呉からは大勢の人が乗船してきたので、我々の船艙も今まで空地になっていた中央の蓋の広場も、ギッシリ便乗者の寝場所に変わってしまった。

我々の船艙だけでも便乗者は500人位は居るだろうから、外に三つある船艙も同じような状態だとすると、総勢2000人くらいの便乗者が乗っていることになる。

外界から遮断されている船艙の中は、両舷側に点々とある小さな丸窓が唯一の天然光源で、たださえずる暗い電灯は蒸風呂のような湿気でボンヤリと霞んでいる。

雨で甲板にも出られなくなった人々は、船艙の中でごろ寝するより仕方がないが、この中にしばらく居ると息苦しくなり新鮮な空気を求めて階段を駆け登り雨の甲板に飛び出す。そして金魚のようにパクパクと深呼吸する。

お達しの方も段々厳しくなってきた。

航跡を発見されないため、海上に浮かぶ物は一切投棄を禁ずる。煙草の火も夜は遠くから見えるから、指定の場所以外の喫煙を禁ずる。船艙の丸窓は、夜は光が漏れぬよう鉄の蓋をしっかりと閉めること。

小さな丸窓には鉄の蓋をし、階段の出入口はカバーを降ろした500人の人間がギッシリ詰まった鉄の函……でっかい鰯の大缶詰だ……。

東 支 那 海

寝苦しい夜が明けると、やれやれ助かったと、ホッとした気持ちで明るい甲板に飛びだしていく。だが別に仕事のない我々は、一日じゅう船の中を歩き廻って、甲板に登ったり降りたり、船艙に戻ったり、寝そべったりしている。といっても、僕は活字は見る気もしない。

いつからか、毎朝甲板に集まって集団でラヂオ体操をやるグループが増えていた。これが段々本格的になって今では海軍の兵隊さんが号令をかけて大集団が海軍体操をやるようになった。

海軍体操は学校の体操やラヂオ体操と違って相当激しいものだが、船艙の蓋の上、甲板の通路、大きな積み荷の上まで、人が鈴なりになって元気にやっている。

ラヂオのニュースは楽しみのひとつであるが、横浜出港以前から始まっているスターリングラード攻略戦は、今にも陥落しそうなニュースが毎日毎日流れてはいるが、なかなか落ちそうにない。

無線室から流されている特別情報は、輸送船が敵の潜水艦にやられたニュースで、我々より一日先を走ってのる船やすぐ後から来ている船が襲われ沈没している。

我々の船、北陸丸は時速14ノットの速さで、単独で突走っているので、10隻ぐらいで組んだ船団が駆逐艦に護られてヨタヨタ走ってのるのを、横目でみながらスイスイと追い越して行く。

まったく、心強く、快よく、気持ちの良いものである。

ブリッジの下の方の部屋に、この船の足どりを毎日書き込んだ大きな地図が壁に貼ってある。航路はすでに東支那海に長く伸びて、僕が思っていたより遙かに支那大陸に近い側を南に下り、台湾海峡に迫っている。

船は何処を見廻しても島影ひとつ見えない青海原のまっただ中を、一刻の休みもなくジグザグ航行を繰り返しながら、南へ南へと進んでいる。

日をおって太陽の光線は刺すように厳しくなり、鉄板に手が触れると慌てて手を放すほど熱くなってきた。船艙の中に入ったトタン体じゅうの汗が吹き出してくる。まるでオーブンの中に居るようなものである。

船艙の蓋は明け放されたが、ギッシリ詰まった便乗者なので、開口部の真下に棲んでいる連中は、今度は直射光線が暑くて寝てもおられず陰を求めて逃げ歩いている。

その為、開口部にはテントが張られたが、トタンに船艙には風が吹き込まず相変わらずの蒸し風呂になる。大きなサウナといった蒸し暑さである。

汗だらけになったシャツやパンツの洗濯も一仕事である。海水で洗ってから僅かに配給される真水で濯ぐ要領もなかなか難しいもので、陸上では考えられない真水の貴重さが身にしみて強く感じられる。

時たまある風呂にいたっては、大騒動である。数十人づつ時間を限られて、

甲板の一隅に設けられた風呂小屋の前に集まって待機する。一組が終わると兵隊が鳴らす笛を合図に用意ドンと裸になってワッと小屋の前に駆けつける。小屋の前の甲板で体じゅうを石鹸の泡だらけにしたところで、洗面器一杯の真水が配給された水を頭からかぶれば、風呂一丁あがりである。

小屋の中では兵隊や下士官連中が、海水ではあるが温かい本物のふろに入っている。

便乗者でも、運よく客室の一等か二等の部屋を割り当てられた連中は、ノンビリと部屋付ボーイのサービスを受けて、風呂もちゃんとバスルームを御使用になっている。もちろん悠々と専用で。

戦争中のごたごたした最中でも、船では昔からの船のしきたりを頑固に守っているところが面白い。

そして、手続きの関係で会社の偉方が下の船艙に押し込まれ、下っぱのペイペイが船室に収まっていたりするから、なお面白い。

太陽の光線は南に下るにつれて鋭さを増してきたが、空気の湿度の方はその逆に日ましにサラサラしてきた。風通しのよい日陰に入るとヒンヤリする感じである。

東京の本社で仕事をしていた時や、船艙のなかの住まいのジトジトと蒸し暑いのを不快指数100とすれば、甲板の上など50程度に感じられる爽快さである。

僕は船艙で汗をかき、甲板で冷やし、また船艙で汗びっしょりになる事を繰り返しているうちに、すっかり体の調子が狂ってきて体じゅうが具合が悪くなってきた。

どうやら風邪をひいたらしい。

風邪は時間とともに本格的になり、持参した薬をあれこれ飲んでみるが、これが又良くなかったらしい。アスピリンを生のまま飲んだのがこたえたのか、胃腸の調子までおかしくなってきた。

僕は下痢が激しくなって、船艙から飛び出しては、甲板の便所にお百度を踏まねばならなくなった。朝夕のラッシュアワーには長蛇の列が出来る便所である。僕にとってはその順番を待つのが大変な苦勞になってきた。

無事、高雄港に入る。

澄みわたった大空に明るい太陽……台湾の島影が目の前に見えてきた。まったく救われたような嬉しさで、この景色を眺めた。淡青色の海の向こうに長く横たわった白い砂浜、緑の林、はるばると広がっている平野、それに製糖会社らしい白い工場の建物や高い煙突が見える。

煙突からは黒い煙が朝の静かな空気の中を真っ直ぐ大空に立ち昇っている。疑いもなく台湾南西部の穏やかな朝の風景であった。

波ひとつない緩やかなうねりの海面には、竹筏の漁舟が点々と浮かんでいる。所変われば品替わる珍しい漁舟だ。その筏の上で働いている人の姿が、久し振りにみる平和な人間の姿なので実に心温まる眺めであった。

船は砂浜の海岸に沿って静かに南に進んでいく。昼過ぎになって船は高雄の港外に近づいた。ここが又、敵潜水艦の暴れる有名な場所らしい。

空には飛行機が舞い、船には警戒体制がしかれて、全員が哨戒、監視の緊張状態になる。だが、船は何事もなく港の入口に近づいていった。

海際から高く聳えている樹木の多い寿山が間近に迫り港の入口も見えてきた。ぼくは甲板の手すりにもたれて、懐かしい思い出のある、その見覚えのある景色を食い入るように見つめていた。

高雄港は、切り立った岩の崖が両側から迫っている狭い水道が港の入口で、奥は広々とした湾になっている天然の良港である。狭い水道の一方の岸から長い防波堤が沖に伸び、その防波堤の北側から寿山の麓にかけての広い砂浜が、かつては海水浴場になっていた。

僕がこの砂浜で海水浴をして遊んだのは5年ほど前のことである。高雄の街を訪れ、末岡の家に泊まり、海水浴などし、しいちゃんに会い、そして彼女と結婚し、戦争となり、静枝を日本内地に残して、こうして僕独りこの高雄にやって来たのである。

僕の頭の中には、あの頃のことを次々と映画のシーンのように浮かんでくる。そして思いは遠く日本に残してきた静枝や子供達へと戻っていく。

船は兩岸に手が届きそうな狭い水道を静かに奥へ進んで行った。岩の上の灯台や信号旗の揚がっている海洋気象台らしい建物も以前に見た、そのままの姿

を見せている。水道の奥の広い湾には大小様々な船が沢山停泊しており、小舟も忙しそうに往来している。立派な岸壁や大きな倉庫が建ち並んだ高雄港は以前よりグーンと大きくなっているようだ。

背後に見える市街も近代的なビルがビッシリと増えて、いかにも活気がありそうだが、右手に見える旗後の街は昔と変わりなく、漁夫の街がそのまま残っているらしく、台湾人の小さな家並みが支那式情緒を見せている。

船腹に大きな孔のあいた大型貨物船の横を擦り抜けて船は進む。ぞっとするほどの傷痕である。その船の甲板は、カーキ色の服を着た兵隊が蟻の群のようにギッシリ埋め尽していた。彼らは我々の船に全員が手を振っている。我々も思わず夢中になって手を振りつづけた。お互いに生きている喜びをぶちまけ合っているのかもしれない。

厳めしい砲塔を船首と船尾に備えた貨物船の横を通る。よく見ると砲塔も大砲も剥げちょろのペンキ塗りの木製である。その船も沢山人が手を振り、甲板上に溢れていた。こちらも手を振りながら『ガンバレーッ』などと叫んでいるが、なんとなく暗然とした気持ちだ。

我々の船は周囲の船々から見ると、ずばぬけて立派な一万トン級快速貨物船である。今更のように無傷で無事の航海に感謝の気持ちで一杯である。

水面には変わった形のサンパンが走っている。尻っぽの方が燕の尾のようにピンと二つに分かれて跳ねあがった可愛い小舟だ。三角の菅笠を被った台湾人が舟尾に前を向いて立って、二本のオールを前に押しやって巧みに舟を進めている。後ろ向きに坐ってオールを漕ぐボートとは違ってなかなか合理的である。台湾独特の舟らしく、舟体は赤・白・緑と派手な原色で彩られた支那式模様である。頭には大きな黒い目玉が描かれているので、何か大魚を表しているのだろう。

荷役をやる沖仲士が大勢乗船してきた。連中は皆台湾人だが、台湾語を喋るのは仲間うちだけで、仕事は皆巧みな日本語でやっている。ウインチ巻き上げを見事な手振りで指揮している三角笠の親方も、大きな声で自由に日本語で怒鳴って指示している。

団平船からガラガラッと釣り上げてくる品々は、此処でも相変わらず砲弾・爆弾・機雷・ドラム缶といった物騒な物ばかりだ。

射るように照りつける太陽の光は、亜熱帯だけに明るく鋭く海にきらめいて目がクラクラするくらいだ。しかし、晴れあがった空は透き通るように澄んでいて、空気が肌にサラサラッと感ずる気持ちよいものである。

思　い　出　の　街

夕方になってアッサリと上陸が始まった。甲板で渡し舟の順番を待つ人々は子供の遠足の時よりも、もっと切実な喜びを隠しきれないガタガタの表情である。

今回は上陸棧橋がすぐ目の前に見えるせいか、渡し舟は大きな海軍のカッターで、若い水兵たちが長いオールを漕いでいる。

上陸した場所は高雄駅の横手のうす汚い裏街にある船着き場だった。僕は静枝の父の家を訪ねるため、特別の外泊許可を貰っていたので仲間の連中とは別れて、勝手知った街筋を独りで歩いていった。

何処を見ても思い出深い、懐かしい場所であった。

歩道が停仔脚になった赤煉瓦2階建の街並みには、股にピッタリのズボンをはき、ノースリーブの太腕に大きな乳を垂らした肥ったオカミさん、パナマ帽にゆったりした巾広のうす絹のズボンが涼しそうな台湾紳士、竹の皮の三角笠に天秤棒で湯気の出る食べ物を売っている担ぎ煮売屋、それに人力車も走っていて、昔懐かしい街がそのまま残っている。

日本内地から来て目を引くものは、やはりザボンやバナナや色々な果物が豊富な果物屋、見慣れない煙草や酒を並べている店、日本では見られなくなった甘い菓子がフンダンに飾られている菓子屋など。さすが亜熱帯の台湾である。

高雄駅前のロータリのあたりは以前とチットも変わっていなかった。そこには数本のココ椰子の大木が聳え、そのあたりいささか貧相に見える日本人の商店街が並んでいた。日本式木造の店構えは年数がたつと古さが目だって何となく侘しげになっている。

あの高雄駅のガランとしたプラットフォームで18歳のしーちゃんに見送られて汽車にのった……。この道を歩いている時しーちゃんに会って急に映画を

見に行く約束をした……。と思い出しながら停仔脚の歩道を山の手歩いていった。

大きな病院の前を通り、樹木が繁った法院の敷地の坂道を登り、榕樹の繁みやビンロウジの林が以前とチットも変わっていない石段を登り、寿山の麓にある静枝の父の家を訪ねた。

元気な父、初めて会う母、見違える程娘らしくなっている静枝の妹が、僕の思いがけぬ不意の訪問を、喜んで迎えてくれた。事前に何の連絡も出来なかっただけに、さぞかし驚いたことだろう。

早速お風呂を頂き、それから静枝の話、子供の話、日本の話、船の話と弾んだが、せっかく用意してくれた美味しい台湾料理は、残念ながら腹の調子が心配なので、僕はとうとう手が出せなかった。

腹の調子は益々具合悪く、食事どころか病院に行く事のほうを望んだ。父の親しい台湾人の医者の方に案内されて、詳しく診てもらったら悪性の胃腸カタルと云うことで、すぐに注射をうって薬をくれた。

結局、飲むことも食べることも出来ず、夜中じゅう便所通いの一夜を過ごした。

山ほど抱えて来た洗濯物を一晩で洗ってもらい、その上土産や食料品を買って、それを両手いっぱい抱えて舟着場に戻り、朝の便で船に帰った。

船に戻ってみると、船は荷役が延びて出帆が一日遅れるという事であった。僕は早速、も一度上陸したいと申し出た。看護兵の下士官は僕の申し出を聞くと内心ニターッとした様子で、すぐさま僕を甲板士官のビヤダル上曹のところへ連れていった。

「伝染病だと大変ですから、私が付添って行って医者によく診て貰ってきます。上陸許可をお願いします」

ガムシャラらしく見える甲板士官はギョロリッと我々二人を見たが、案外アッサリと上陸を許可してくれた。サスガである。

「伝染病は困る。注射でも何でもジャンジャンやって貰ってこい」

再び高雄に上陸して舟着場の構内を出ると、看護兵がニヤニヤしながら顔を寄せて言った。

「独りで歩いて行けるんでしょう。私は午後3時迄に此処に来ますから、あな

たも時刻迄に此処に来てください。そして一緒に戻りましょう。いいですね」と念をおす。

こちらも独りのほうが具合がいいので、そのまま兵隊と分かれた。ブラリブラリと昨日の医者を訪ね、また注射をしてもらう。注射が効いたのか今朝から下痢も止まり、体の調子もいたってよいので、見たいところや歩きたいところを充分見物してまわった。

ア ン ボ ン 上 陸

アンボン湾は深いので有名なのだそうだ。船は潮の流れと、岸近くまで海が深いため錨が効かず、タグボートの力を借りてもなかなか上手く栈橋に着かない。2度、3度やり直してヤットがっちりした木の栈橋に横付けになった。

栈橋は岸からT字形に海に突きだした立派な栈橋で、一万トン級の船がちょうど一隻横付け出来る。岸には新しく出来たばかりの倉庫群が建ち並んでいるが、その奥の港の広場は爆撃で壊されたのか倉庫や港の設備が廃墟となって草に覆われている。港の背後には鉄色・赤色・緑色のトタン屋根の家々が軒を連ね、中世紀風のキリスト教会の塔や回教寺院のネギ坊主形の塔も見える。

港の隣の海岸は市場らしく、テントや掛け小屋が並んで人々と賑わい、前の海にはインドネシア人の漁舟（プラウ）が帆柱を並べて沢山泊まっている。

市場に群がっているインドネシア人の服装は赤い色が目につくが、それは女たちではなく、男が付けているスカート（サロン）や肩に掛けた布やパンツの色だ。女の方はむしろ目だたない白っぽい色や渋い色の布を身につけているようだ。

フィリッピン人の派手な赤いネクタイに呆れていた我々は、インドネシア人の赤色好みにも、まず頭の切替えをやらねばなるまい。

栈橋に船が着くとすぐに荷役が始まった。ここでは栗色をしたインドネシア人がハダシで船にあがって来た。栈橋ではオーストラリア人捕虜がインドネシア人に混じって働いていた。

裸の上半身を真っ赤に日焼けさせた金髪の捕虜たちは白人というより、赤人

である。洗い晒の短いパンツに自動車のタイヤで作った手製のサンダルを履いている。我々にとっては初めての敵国人である。

同じ栈橋で働いているインドネシア人の皮膚の色には驚いた。小麦色・栗色・重油色から茄子色まである。とにかく此处では金髪の白人から縮れ髪に厚い唇のパプア系とかニグロ系とか黒い男たちまで、世界のあらゆる種類の人種が働いている。

我々便乗者はまた例によって轟音ともうもったるホコリに船艙を追われて、もっぱら甲板の手すりから栈橋の作業を眺めるだけである。

白人は船に向かって「タバコ、タバコ」と叫ぶ。船からは栈橋に煙草を投げ与えている。彼らは四っばいになって、争ってそれを拾う。

荷役は夜になっても電灯をつけて続けられ、この夜も我々は寝場所を失って、一晩じゅうゴザを抱えて小雨の甲板をうろついた。

四っばいになってタバコを拾う白人捕虜たち、ゴザを抱えて雨の甲板に寝場所を求めてさまよう我々便乗者。どっこい、ドッコイ。

小雨の降る甲板の夜は毛布一枚では寒く、夜中に何度も目を覚ましたが、夜が明けると良い天気ですぐに温かくなった。

高雄いらいお預けになっている「上陸」が出来るというので、船の上は朝からハシャイデいる。我々のグループは食料品から日用品まで、すっかり使い果たしているので今日こそはと張り切って準備していた。

我々はオランダ語やマレイ語に通じているH君を案内役として、いつものグループで上陸することになっている。H君はジャワで子供の頃を過ごしたという大学出の電子技術者だが、顔からしてインドネシア人そっくりで、着こんでいる白い洋服も南方製でパリッとしている。

我々の仲間も一張羅の長ズボンやら半ズボンにネクタイをつけ、ヘルメットに色眼鏡とひとかどの南方旅行者の姿はしているが、物資欠乏の日本からの一行だけに、洋服も皺だらけのよれよれである。

栈橋から廃墟の倉庫跡を抜けるとすぐに、市場や商店が並んだ通りである。チャチな家並はトタン屋根に古びた木造の支那式の店ばかりである。どの店の看板も漢字かローマ字綴りで支那語の店の名が書かれている。

通りには回教徒のソンコ帽をかぶったインドネシア人がゾロゾロ歩いている

が、ほとんどの店は表扉を閉めている。よく見ると人がやっと通れるくらい半開きにして商売をやっているらしい。

戦争で売買する商品が少ないためか、或いは暑い熱帯の陽を避けるための慣習なのか、まだ僕にはわからない。

うす汚い菓子屋を見つけ入ってみたが、駄菓子も駄菓子チョット手がでない。しかし甘いものに飢えているので思いきってカステラのような菓子を買ってみる。バカに安くて凄く甘いが口に入れると、何とも言えぬ変な臭いで喉が受け付けない。H君の説明によると果物の王様ドリアンの味が付けられているのだそうだ。

裏通りの道ばたのニッパ掛け小屋で、果物を沢山並べて売っている。バナナの種類の沢山あるのに驚く。腕のように大きいのが、細くて長いのが、小指のように小さくて可愛いのが、黄色や緑色や随分色々あるものだ。

船旅の一ヶ月、僕はマレイ語の本を勉強していたので、実際に使ってみるのはこの時とばかり、「イニ、イニッ」と値段を聞こうとするが、次の言葉がサッパリ出てこない。結局H氏にさばいて貰ってバナナをしこたま買い込む。バナナだけは皮を剥いて食べるのだから比較的に安全だと、誰もかれもやたらとバナナを買い込んでいる。

食ってみると、実に美味しいバナナだ。改良された台湾のバナナのように奇麗ではないが、味は数等上のようなものである。

我々のグループは飲み食いする店を探してあちこち歩き回ったが、店らしい店は海岸通りの一筋しかなく、後は樹木に覆われた街並みが山の斜面に広がっているだけだった。舗装が立派な道路に家々は沢山あるが、それより樹木の方が多い静かな街である。船から上陸した連中があちこちゾロゾロ歩いているが、バナナを枝ごと買って子供に担がせているのや、酒や菓子の包みを子供達に持たせてお供に連れている連中にも会う。我々のグループにも『荷物を持たせろ、煙草を呉れ』と子供達が何処までもついて来る。

このアンボンの街は、港近くでは壊れた建物やひん曲がった鉄の橋など、戦争の爪跡も見えるが、山の手はオランダ時代そのままの姿を残して戦争の痕跡は見られない。立派な道路に沿って洋風の住宅や古い教会・時代色のある官庁の建物などが緑の中に建っている。昔のオランダ理事官邸らしい大きな建物は

今海軍の司令部になっていて、木で覆われた広い公園の中にあった。

古い中世紀時代の西洋のお城が海に望んだ場所に残っていた。城壁は苔むしてお伽話のお城のようである。お城の前はひろい芝生の広場でサッカーでもやる所だろう。広場の周囲には空高く伸びた大木の並木が整然と並んでいる。明るくて広々とした西洋しきの美しい景色である。

広場の端に道ひとつ挟んで石造りの音楽堂らしい建物があるが、それが今ではチョットしゃれた喫茶店になっていた。

涼しい風の通る、明けばなしの広いポーチにテーブル、椅子や植木鉢が並べられ、船からあがった日本人たちや水兵、船員が沢山は入りこんで音楽を聞きながらコーヒーを飲んでいた。我々も早速この仲間に混じって果物やケーキを注文した。

色は黒いが可愛い紅いワンピースのアンボン娘が飲み物を運んで来る。

ショートケーキの上にはNKKとクリームで文字が描かれている。さしずめ、南方に進出してきてこの喫茶店を経営している日本の商社の頭文字なんだろう。

日本では不自由していた本物の甘いケーキや氷の入ったアイスコーヒーに我々の頬はトタンに緩んだ。街を歩いて感じていた寂びしい田舎街アンボンの印象もいっぺんに吹きとんだほどだった。

冷たい氷や、生のパイナップルなど、久しく御目に掛かっていない御馳走に、皆は大喜びで各自随分と詰めこんだ。胃の腑は久しぶりに充分満足の意を表した。

船に戻ってみると、残った連中は船首や船尾の甲板で魚釣に興じていた。透き通った綺麗な海には魚が沢山、キラキラと泳いでいて、船の周りは特に多く集まっている。このあたりの魚は日本と違って人擦れしてないとみえて、垂らした釣糸に次々と簡単に釣上げられている。

棧橋と反対側の舷側では甲板の手すりや船腹の丸窓からまで首を突出して、紐の先に煙草をくくりつけてソロソロと海面に降ろしている人々がいる。

海面に群がっている一人乗りか、二人乗りのカヌーがその紐の下に集まって来て、煙草の代わりにバナナやパイナップルを括りつけている。歓声のうちにバナナが釣り上げられると、又別の人が煙草を海面に降ろしていく。

我々も早速その仲間入りして、乏しい煙草を餌に面白いバナナ釣りを初め、

夢中になってしまった。

忽ち物価の方が釣りあがって、石鹼をぶら下げる人が現れ、石鹼が二つ、煙草が三っになってくる。「しょうがないなー、あんな大きな石鹼を餌にしちゃー」と、インフレに文句を言いながらも人々は次々とバナナ釣りを続け、止めようとはしない。

カヌーは小さな丸木舟で、インドネシア人はピンポンのバットのような櫂で、巧みに左右に漕分けて水スマシのように水面をスイスイと走り廻る。乗っているのは子供が多く、カヌーは子供が暴れ回っているように自在に動きスピードも素晴らしく速い。大きな浮きフロートを船体の片側に突き出した安定の良いカヌーもやって来るが、これは大人が二人位乗って物資も山盛りした商売舟だ。

この日も荷役は夜迄続けられ、我々は又また甲板流浪の夜となった。真っ暗な甲板に集まった我々グループは車座になって、昼街で買ってきた菓子や果物をわいわい喋りながら食って時をすごした。

護 衛 艦

次の朝アンボンを出港した我々の北陸丸に護衛の軍艦がついた。

小さくて針のように細い駆潜艇である。いくら小さくても船尾にヘンボンと旭日の軍艦旗を翻す軍艦の護衛は、いかにも心強いものである。船じゅうの人々は何度も甲板に上がって来ては駆潜艇の勇姿を飽きずに眺めている。ジグザグコースを走っている我々の船から数百m離れた海上を駆潜艇は大きくピッチングしながら付き添うように走っている。剃刀のように鋭い船首は海を切開くように左右に白い浪を高く上げて軽快に走り廻る。

船は終日島影一つ見えない海上を走り続けたが、あたりがうす暗くなった夕暮れになると、駆潜艇がピカピカッとサーチライトの点滅信号をやり始めた。我々通信屋にはその内容が分かる。

暗い海上に今一隻の駆潜艇が現れた。今までの駆潜艇はピカピカと信号を交わしながら、くるりっと向きをかえてアンボン島の方へ戻っていった。我々の船はアンボン地区からセレベス地区に入ったので護衛が交代になったのだろう。

夜になって、船艙のなかのバクチに遂に手がはいった。大騒ぎの中で数人の男たちが兵隊に連れていかれたが、毎夜々々その連中の勝手な騒ぎを横目で苦々しく睨んでいた我々はセイセイした気分での捕物を見物した。

兵隊たちも心得たもので、この長い船旅の明日は目的地マカッサルに着くという、ドタン場の夜まで見てみぬ振りして遊ばしておきここでガバッと手入れをして責任を一応果たしたと云ことになるのだろう。

夜が明けると船は、油をながしたような波ひとつない海面をユルユルと動いていた。右手にセレベスの陸地が一線となって遠くまで続き、その背後に山並みが朝もやの中にかすかに浮かんでいる。船は昨夜のうちにセレベス島の南を回ってマカッサルの沖に来ているのだった。

海面には船の通った跡が長々と尾を曳いて、鏡の面のように光った巾広い筋を作っているが、ちかくに今一筋の航跡が光っている。その漑を辿っていくと、その先に先日出会った浅間丸の巨体がソロソロと前進していた。

海上には大小幾つもの島影が見るが、どれもこれも珊瑚礁の島だ。椰子の林だけが水面から生えているように見える。小舟も点々と浮かんでいるが変わっているのはその帆だ。

大きな長方形の帆を小さな舟の上に横に張っていて安定が悪そうだが、舟は舷側に長い柄を突き出して浮き材のフロートが水に浮いている。いわゆるアウトリガー（舷外浮材）付きの船だ。2、3人乗りの丸木舟だから魚とりの漁舟だろう。

浅間丸と北陸丸は前後に並んでユックリと陸地に近付き、昼前にはマカッサル港内の岸壁に縦に並んで横付けになった。1万トンと8千トンの大な船2隻がドッカーリと腰を据えた様子は、まさにあたりを睥睨している感じである。岸壁はまだ5、6隻横付け出来る大きさがあり、多少壊れてはいるが倉庫が広い埠頭にズラリと並んでいる。マカッサルの街はこの立派な港の様子から見ても相当の大都会らしい。

船の高いところに登って眺めると、広い港の施設のすぐ隣には赤レンガ建の2階、3階の支那街風の街並が続き、その先は緑の多い樹木の中に西洋風の赤や緑の家々の屋根が遥か遠くまで続いている。

空はあくまでも青く木々の緑は濃い。我々は1カ月の苦しい航海の末無事目

的地マカッサルに着いたのである。

岸壁には、我々より先に当地に到着している会社の先発隊の数人が、大きな社旗を振りながら迎えにきていた。久し振りに会う懐かしい顔も見える。

船と岸壁とでお互いに手でメガホンを作って大声で叫び、再会を喜びあっている。

やがて、ゾロゾロと下船が始まった。1ヶ月近い長くて苦しい船旅の最後としてはバカにあっさりした下船風景である。

船に溢れていた便乗者は此处で皆降りてしまうのだが、船艙暮らしの便乗者達は兵隊達や船員達とは余り縁がなかったので、下船の時はお互いに手はにぎり合っているものの、ヤレヤレこれで船艙暮らしにもおさらばだとホッとした気分で逃げ出している感じの方が強い。

我々は迎えのトラックに分乗して宿舎に向かった。初めて見るマカッサルの街はいかにも外国らしい異国情緒が漂っていた。

港近くの赤レンガの倉庫街を通り抜け、漢字とローマ字の看板の多い支那人街を横に見て、並木が美しい広い舗道となる。並木は大きくて高い巨木の列で、広い道路が鬱蒼として緑に覆われている。道路と言うよりまるで公園だ。傍の花壇は見事な芝生や、珍しい花が鮮やかな彩りを見せている。

マカッサルの街

通りにはオランダ語で書かれた道路標識がまだ其のまま建っている。英語から見当のつく物もあるが、どれもこれもチンプンカンプンである。しかしいかにも外国に來たんだな—という、感慨が湧いてくる。

色は黒いが服装の整ったインドネシア人の勤め人や、ハダシでソンコ帽をかぶった派手なサロン姿のインドネシア人男女が並木道の木蔭を歩いている。

男女相乗りの自転車や、前に客を乗せ車夫が後ろでペダルを踏む三輪車、それに小柄な馬に曳かせる二輪馬車が多い。

我々は宿舎として割当られた洋風住宅街の中の一軒に到着した。この住宅街には同じような芝生の庭に同じ規格の石造りの住宅が並んでいる。さしずめ標

準的な中流サラリーマン住宅らしい。庭には木がよく茂っており、庭から一段高くなったタイル張床の家に入ると、ひんやりとした感じで暑い熱帯地方の外部とはかわって冷房でもしてあるかのように快い涼しさである。この家には玄関らしいものは無く、表の庭からすぐに明けっぴろげの広間があり、奥は食堂に寝室が三つ、別棟にバス・トイレや使用人の部屋や台所がある。

早速昼食になったが、インドネシア人男女使用人にサービスしてもらって食べる。セレベス島の米の飯はピカピカの艶のある美味しい米だった。日本で『外米』と言えば、パサパサして砂まじりの碎米が浮かんでくるくらいだったので、この米……外米の美味しさには驚いた。

食事はさすがに物資豊富な南の国だけあって、想像以上の御馳走だった。食後の果物も甘いコーヒーも自由にとれるし、煙草もふんだんにあるらしい。

長い間の船艙暮らしで、水に不自由し甘い物や果物を夢んでいた乞食生活から何でも自由に手に入る王様のような贅沢な生活に一足跳びにはね上がったような気持ちである。

ボストンバッグ一杯の汗になった衣類を洗濯女に渡し、自由に水の出る水道で気持ちよく体を洗った後、昼寝のベッドに長くなると体じゅうの緊張した腺がトロトロに蕩けていくような安心感が湧き出してくる。

午後は夕方まで自由な時間となった。渡された現地の10ギルダー紙幣1枚をポケットに入れると、僕はすぐに独りで街に飛び出していった。

予備知識は全然ないが、街の中心街はさっきチラッと見て通ったので、見当は何かつくだろうと勝手に歩いていった。

並木のある大きな道路に出ると、すぐに三輪車に掴まった。日本では厚生車って名前をつけてたっけ？なんて考えながら黙って車に乗り込むと、車夫は無言のまますぐトットと車を走らせた。

車は巨木の並木が、まるで公園のように広々とした道をスピードを出して走り続けた。立派な病院・役所・大邸宅・住宅街とあたりは次第に緑が多くなり道路が狭くなってきた。どうやら車は郊外に向っているらしい。

街の中心街に行くよう僕は車夫に言いたいのだが、どっかいマレイ語が出てこない。あれでもない、これでもないと思いつきのマレイ語を並べてみるが、車夫は馬耳東風である。

苦心惨嘆の結果、「トコ、トコ、ブッサール（店、店、大きい）」と言うと、車はトタンにくるりと向きを替えて、今来た道を逆に走り出した。

車は港近くの商店街に戻って来たが、人通りの多い通りはどの店も支那人の店で看板も漢字とローマ字の氾濫である。

どの店も客が入って賑やかだが、表の扉は半開きが多い。アンボンでもそうだったが、僕ははっきり戦争中で物資不足で商売にならぬのかと思っていたが、そうではなく暑い熱帯地方の生活の知恵で暑さを避けての商売のやり方らしい。小さな店が込み合っている市場は黒山の人ばかりで、繊維品を売っている店には船で着いたばかりの日本人の姿が群がっている。

此处でも繊維品は日本と同じく統制品らしいが、それは表むきで市場では闇物資の綿製品が堂々と売られているのだ。日本と違ってまだまだ豊富にあるらしい。

さて僕はポケットに10ギルダー紙幣一枚しかないので、車をとめてはワイシャツを買い、食い物を買いして小銭をつくった。

しかし考えてみると、僕は慌てて飛び出してきたのはいいが、肝心の宿舎の所番地を聞いてくるのを忘れていた。言葉の通じない車夫相手ではこれは厄介だわいと、我々のグループの誰かに会って聞くことにした。彼らもどうせこの中心街にくるに決まってる、賑やかな場所を狙って車を走らせると、案の定彼らに出会った。

一応安心した僕は手近の理髪店に飛び込んだ。1カ月ぶりに頭をサッパリしてもらい、すっかり良い気分になって床屋を出たが、三輪車は表の道ばたで昼寝の車夫をのせて僕を待っていた。

さて宿舎に戻ろうと、車に乗ってから教わった通りの住所を「ジーストラットノーモルティガ」と喋ってみるが、車夫はポカンとしている。オランダ語は通じないらしい。

海岸通り3丁目という意味らしいことは僕にも分かるので、とにかく車を海岸の方へ走らせ道路標識を確かめながら宿舎に辿りつくことが出来た。

宿舎には仲間の連中が夫々珍談を抱えて戻っていた。ボーチの涼しい椅子に腰をおろし、ジョンゴスが運んでくるコーヒーを鷹揚に飲みながら、近所のドイツ人の奥さんが作ってくれたという、日本では考えられない甘い甘い大きな

ケーキを食うと、はるけくも来たるものかなーとの感慨がまたもや湧いてくる。

ジョンゴスはタイル張りの床に膝をついて、両手でコーヒー盆を捧げてにじりよって来るが、オランダ人と違う日本人は、これは我慢できないのですぐさま改められた。

この夜我々一行の無事到着を祝う歓迎会が、マカッサルの中心街の支那料理店で開かれた。我々は夕方になって支給されたばかりの、お揃いの防暑服を着こんで出かけた。うす緑のはいったベージュ色の半袖、半ズボンで、厚手の木綿の布地の熱帯服は我々仲間を見違えるほどスマートに見せてくれた。

支那料理屋はあまり奇麗でない古い店で、狭い二階は我々で一杯になった。しかし料理はなかなかおいしく、まして餓えている我々にとっては久し振りの御馳走なので、幹事の挨拶も偉方の話も耳にはいらず、ただもう飲み且つ食うのに夢中だった。

仲間の一人がテーブルの下にビールを2、3本隠し並べている。「宿舎に運んで後で飲もうや」なんて浅間しい事を言ってる。長い苦しい船旅の結果がこうさせるのだが……。

支那料理が終わって外に出ると、まだそれほど遅い時刻ではないが、街は真っ暗である。店は固く扉を閉めて人通りもない。我々は千鳥足の散歩組や3輪車での散歩組など夫々のグループに分かれて散っていった。

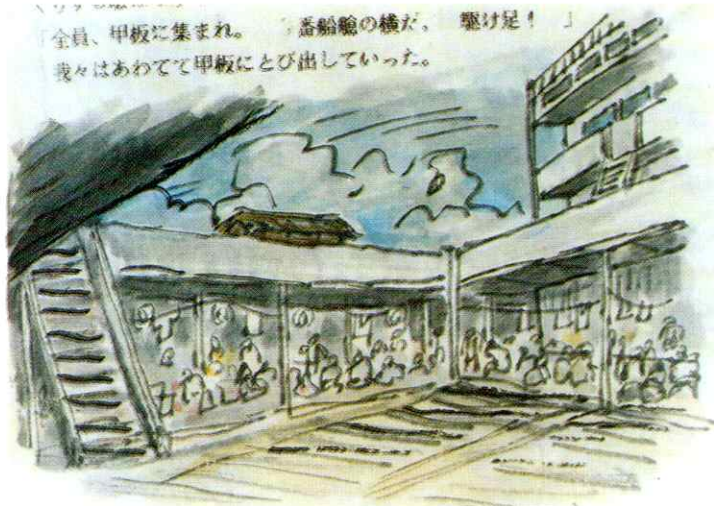
我々のグループは先着組に案内されてバーや喫茶店に行ったが、最後に行った所は大きな邸宅をそのまま使ったクラブだった。

部屋の中では赤や緑の薄暗いあかりの中でバンドがジャズを演奏しており、広い庭の涼しい木陰には暗くした飾り電灯の下にテーブルが設けられさっき分かれた顔ぶれがあちこちに集まっていた。

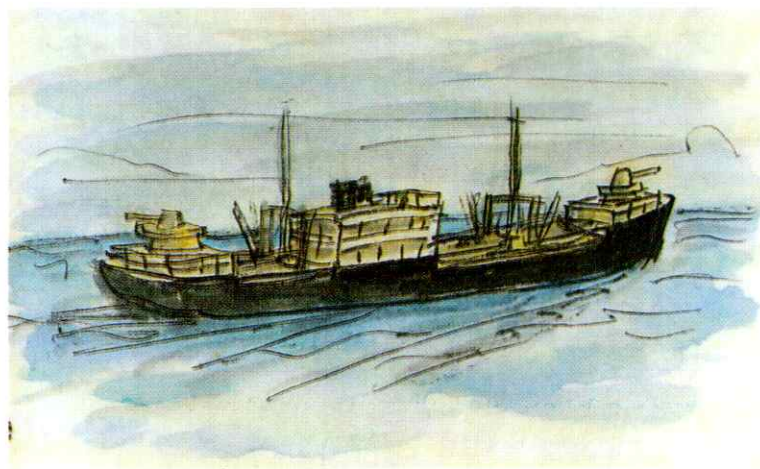
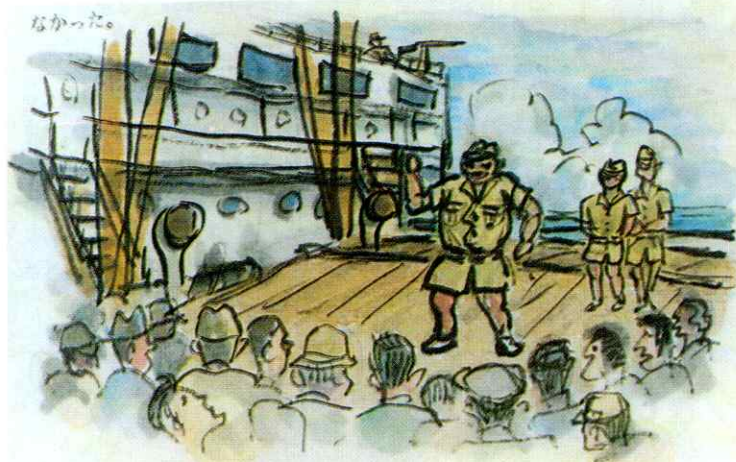
もう相当に酔った日本人のあいだを混血の白い綺麗な女の子がスマートにサービスして回っている。我々の仲間は誰かれの見さかいなく、喋り、飲み、歌い、ただもう生きているよろこびを確かめるように、ハシャギにはしゃいでいた。

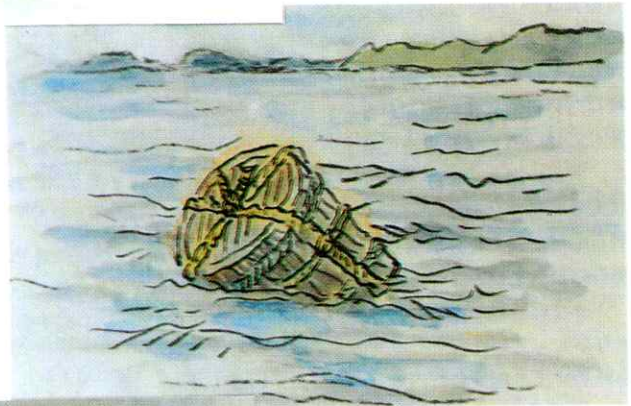
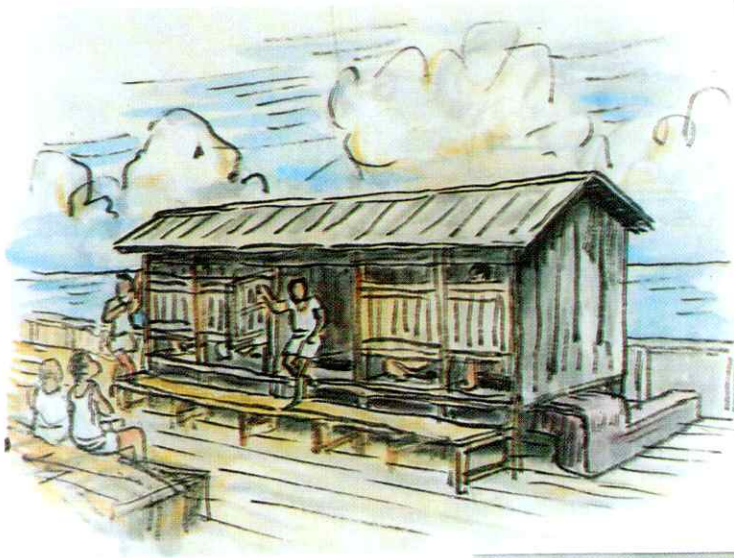
空一杯が星で埋まっている、これこそ満天の星を仰ぎながら宿舎に戻り、シャワーを浴びてさっぱりすると、又皆はポーチに集まって来て又々話が弾んでくる。誰もなかなか寝ようとしなない。

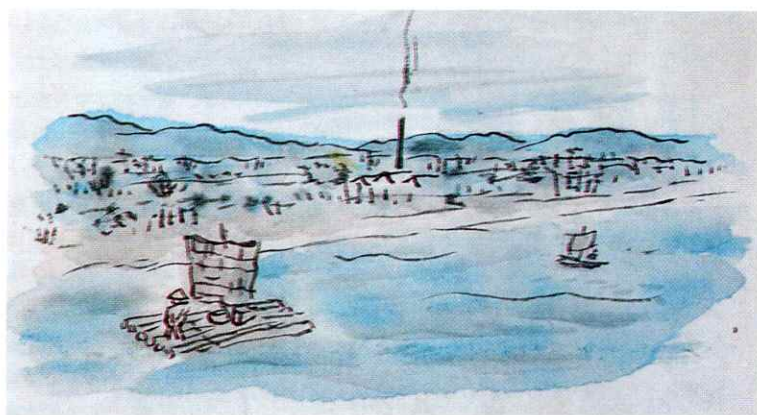
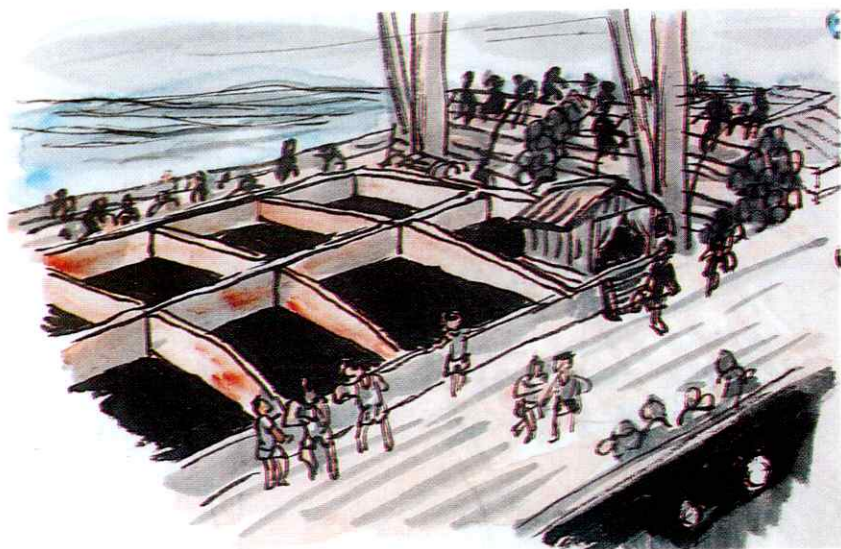
全員、甲板に集まれ。『番船の橋が、墜け足！』
我々はあわてて甲板にとび出していった。



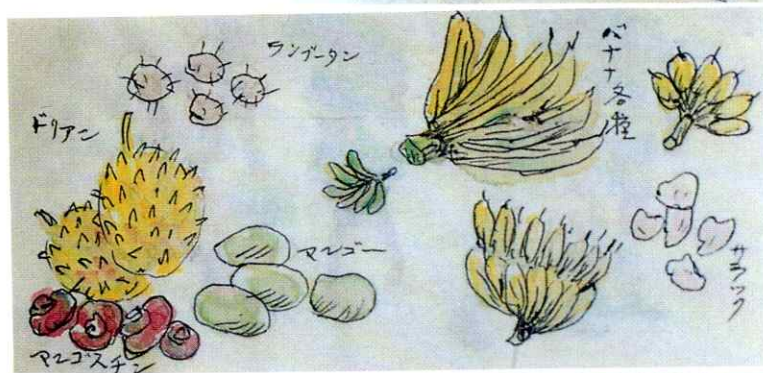
なかった。

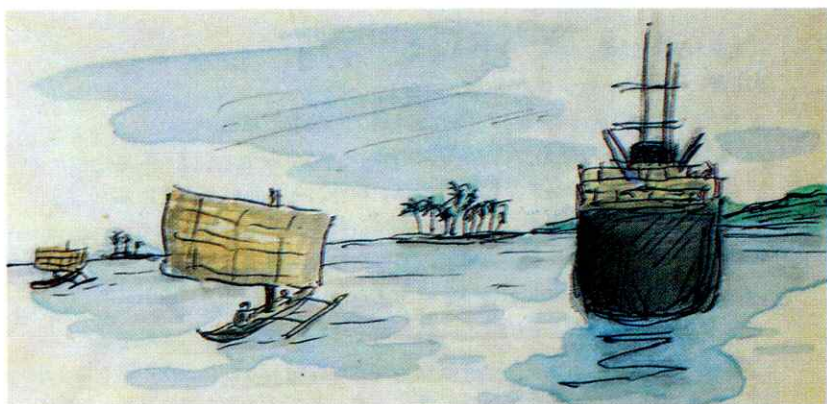
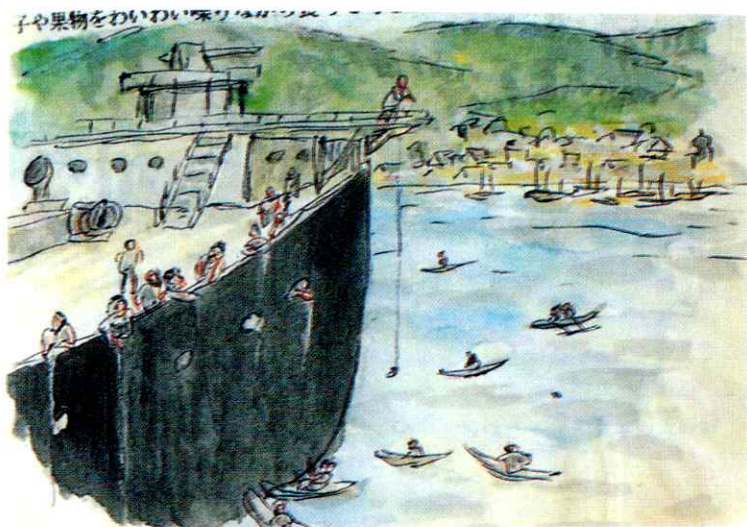


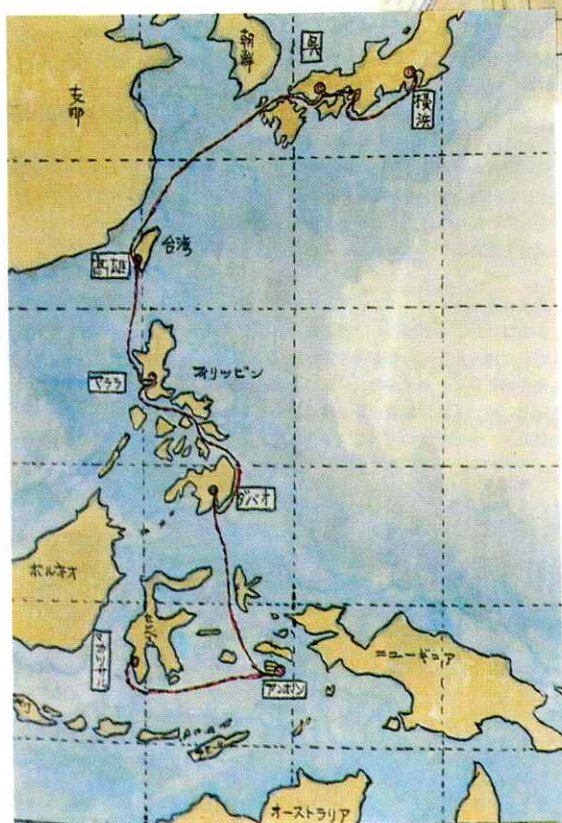
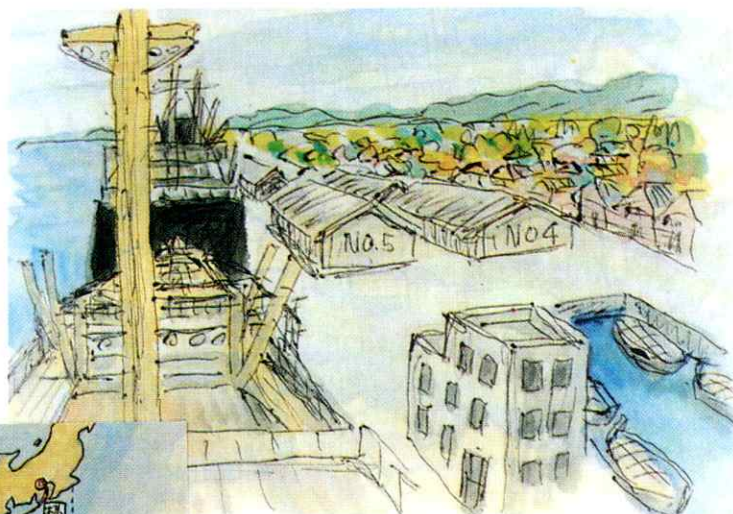












アンボン物語

放送の準備OK

民政部のOさんがニコニコと顔をほころばしてやって来る。

「スタジオの壁に張る防音材料があったよ。街で映画館をやっているリム氏に話をしたら、映画館をトーキーに替える時に買いこんだテックスが残っているんだそうだ。分けて貰う事にしたよ」

Oさんは我々の仕事場に毎日顔を見せているが、壁ひとつ隣で行なわれている大工仕事を眺めては色々注文をつけている。まるで現場監督である。

「テックスの方は天井と壁に張って、床の方はモルタルだから此の儘でいいだろう。厚いカーペットを敷くんだなー」 Oさんは大張切りである。

柱が建てられ壁が張られ、テックスが打ちつけられると忽ち小さなスタジオらしい格構が出来てきた。出入り口が一つしか無いマッチ箱のような小さな部屋だが我々の部屋に面した側だけが長いガラス窓になっていて、こちら側にアンプリファイヤーを置き窓越しにQサインをスタジオに送る仕掛けである。

街の中の人通りの多いパッサル（市場）や、あちこちの十字路の角など10ヶ所ほどラヂオ塔が建てられた。

ラヂオ塔と言っても、屋根付の木箱を丸太棒の上に載せただけの物で中にスピーカーが1個はいつている。何のことはない鳩小屋そのものだ。

電話屋のオッサンたちがスタジオからあちこちのラヂオ塔まで電線を張ってくれた。線は道路添いの電柱や木の幹に無造作に巻きつけて引っ張り回されている。早速テストを始めた。

このアンボンはバンダ海に浮かぶ小さな島だが、日本海軍の最前線の重要基地なので敵の空襲が激しくサイレンが鳴れば敵機が来ているという、常時が警戒警報発令下という街である。

日中でも人通りの少ないこの街は日暮れ時になると、それこそ街全体がシーンと静まりかえってくる。

放送はその日暮れ時の僅かな時間、ラヂオ塔を鳴らすのだからパワーの方は

余裕たっぷりである。20Wのアンプリファイヤー1台、クリスタル・マイクロフォン1本、レコード・プレイヤー1台にピアノ1台が我々の放送局の全設備である。

問題はアナウンサーである。僕はベイに尋ねてみた。

「このアンボンには、今まで放送局が無かったんだから、アナウンサーなんて居るはず無いな。ベイ、それとも誰かやった奴がいるか？」

「そんなの居ませんよ。……でも、トアン、イマイズミ。私にアナウンサーをやらせて見ませんか？　きっと旨くいきますよ」

日頃、女の子の前や日本の兵隊の前ではモジモジと妙に尻ごみするベイがいやに積極的である。

「じゃー、テストしてみよう。マイクの前で今日の新聞を読んでみな。おーいタン、シン、チイ。ベイがアナウンスするから、こちらに来て聴いてみて呉れや」

ベイはマイクに向かうと、悠々と落ち着いた態度でニュースを読みはじめた。スピーカーから流れる声は軟らかく快い音調でリズムも素晴らしい。これはイケルと僕は感じた。

ラヂオ屋をやっていたタン、シン、チイはいかにも専門家らしく、アンプの音量を加減してみたり、腕を組んで聴きいったりしていたが、

「いゃー、驚いた。ベイにこんな才能があるとは知らなかった。ジャワあたりのアナウンサーよりうんとましだぞ」

日頃あまり口の良くないタンが、珍しく感動している。タンはスタジオから出てきたベイの手を両手で握って振りながら、しきりに興奮してしゃべっている。

僕は早速、民政部のOさんに話してベイのアナウンス振りを見て、いや聴いてもらった。勿論Oさんに異存がある筈はなかった。

もう、放送の準備はOKである。

有 線 放 送

放送は始まった。

ベイの柔かくて響きのよいソフトムードの声は、いささかの渋滞も途切れもなくその日その日のニュースをラヂオ塔から街の中に流していった。

放送は、はじめのうちは当局発表の幾つかのニュースとその合間にレコード音楽を送る簡単なものだったが、それでも娯楽に飢えていたアンボンの街では大評判の人気になった。

しばらくして本格的に音楽の生放送が始まると、街じゅうがえらい騒ぎになってきた。音楽きちがいのアンボン人の事である、続々と素人楽団の放送希望が殺到してきた。

昨日は「アンボン・スター」が放送し、こんどは「サクラ・バンド」がやるそうだが、その次は是非我々の「ヤングヤング・アンボン」を出演させて呉れと、まるで町内対抗のような申込が相つぐ。

アンボン人の音楽好きは僕も前から知っていたが、次々に現れる素人楽団はビックリするほど素人離れした演奏をやっている。

マッチ箱のように狭いスタジオに5・6人から10人以上もひしめいてタラタラ汗を流しての熱演である。ガラス窓越しに彼らを視ながらアンプを調整している我々もついつい引きこまれて、汗を流しての奮闘となる。

しかし次々に現れる楽団はどれもこれも、スチールギター中心にウクレレにギターのハワイアン形式の軽音楽だ。一人の女声を混じえた編成まで同じで、顔色こそ黒あり白あり小麦色といろいろだが、音楽の方はどれもこれも同じようなものだった。

毎日の新聞には放送音楽批評欄が出現した。

どこの横丁の何々バンドはメロディの流しかたが上手くりズムがどうのこうの……。これは指揮をとったマスターの何々氏の腕の冴えだなどと、まるでカネギー・ホールのオーケストラ批評のような記事を載せるものだから、放送熱は上がる一方である。

ラヂオ塔の方も大賑わいである。夜ともなれば塔の前は黒山の人だかりとなり、地面にあぐらをかいて坐りこむ半裸の若者たちや、家から椅子を運んで正

面をドッカと占領しているオッサン達もいる。

集まったインドネシア人たちはスピーカーからの歌声に合わせて声をあげ、口笛を吹き、拍手を送ったり奇声を発したりしている。

しかし、あまり人だかりの多い交差点のラヂオ塔は、交通の邪魔になると言
って、司令部から他の場所に移転させられる始末だった。

空襲は日常茶飯事

我々がアンボンに上陸して以来、敵の飛行機は三、四日め毎に定期的に襲って来て、数十発の爆弾をばら撒いていく。

それも決って4発のコンソリテッド機3～4機が相当の高空を湾口から侵入し、爆弾を落とすとスッと消えていくのが常だ。

アンボンはバンダ海に浮かんでいる小さな島なので、レーダーの効きが良いとみえ、敵機の行動は30分も前から正確に掴んでおり、空襲警報には誤りはなかった。アンボンではサイレンが鳴ったら敵機はすぐそこに来ているのである。

アンボン島は日本の真南4000km、ニューギニア島はすぐ東にあり、オーストラリア大陸はアラフラ海を経た南側の対岸である。

アンボンを襲って来る敵機はどうやらオーストラリア島北端のポートダーウィンから1000kmの路をはるばるやって来るらしい。

日本の最前線の重要な海軍基地を叩けという訳だろう。

街のインドネシア人達は、サイレンが鳴っても案外平気な顔で、慌てる様子はない。敵機の攻撃目標が、ほとんど軍事施設に限られている事を知っているからであろう。敵機が狙っているのは、港の栈橋、倉庫、艦船、飛行場、軍の兵営や基地などで、市街地には滅多に爆弾を落とさない。

空襲の被害情報などは公表されないの、我々民間の日本人は何も知らないがインドネシア人情報は速いものである。

空襲警報が解除されるとすぐに、ベイが僕のところにやって来て報告する。「今日は捕虜収容所がやられましたよ。オーストラリア人捕虜が何人か怪我し

たらしいです。しかしあれじゃ同士討ちですね。バラック長屋がずらりと並んでいるんで、日本軍の兵舎と間違えたのでしょうね」

「今日はガララにある海軍の水上飛行基地がやられました。何かの記念日で白服を着た水兵が整列しているところを襲われたらしく、白服が血だらけになっていたそうです。敵機は日本の祭日や記念日を狙って来るようですね。我々だってそれに気付いているのに、どうして日本軍は水兵に白い服など着せて式典などやるんでしょう！」

ベイは軍事評論家のような顔をしてシャベリやがる。

サイレンが鳴ると、栈橋で作業中の大きな船は慌てて岸を離れ、湾内に停泊していた船も一斉に動き出す。敵機に狙われるのを避ける為、広い湾内を右に左に走り回る。

しかし、爆弾という物はなかなか当たらぬものだと思った。敵の爆弾は、走り回る船から4～50mも離れた所に大きな水柱をたてるだけで、命中したのなど見たことがない。

一方、防空砲火の方もサッパリ敵機に命中しない。飛んで行く敵機のはるか後方に炸裂した弾幕だけが、青空に褐色の墨雲となって残っている。

僕がその話をしたら、ベイが口を尖らして抗議した。

「とんでもない。あなたは見ていないから知らないんです。アンボン湾には随分、沢山敵機が沈んでいますよ。敵はそれに懲りて、最近では低空を飛ばなくなりましたからね」

ベイの話によると、戦争の初期、アンボン湾の中に日本の艦隊（機動部隊か）がうじゃうじゃ居た頃、敵機は毎日のように襲って来たが、日本の軍艦は敵機が高空にいる間は一発も応戦せず、軍艦を狙って低空に舞いおりて来ると、唯の一発でこれを仕留めたという。

ベイの話しっぷりは、まるで自分が仕留めたような得意満々の調子で身振り手振り入りである。

敵機が去ると待ちかまえていたインドネシア人のカヌーが、一斉に海上に漕ぎ出して行くそう。爆弾をくらって海面に浮かんだ魚を濡れ手に粟と網で捌いて行くのだ。

僕も用があって空襲直後の栈橋に行ったことがあるが、目の前の海には水面

が白くなるほど魚が沢山浮いていた。海中にもヨタヨタと漂う魚が層になって流れており、海底にも何十となく大きな魚が横になっている。深いので有名なアンボン湾も水が澄んでいるので、岸近くでは海底までよく見える。

栈橋近くは特に魚が多いところだが、立ち入り禁止地区なのですばしっこいカヌーだけが、こっそり近づいて来てはたんまり盗みどりして、さーっと大急ぎで逃げ出している。

魚は爆撃のショックで浮袋のコントロールが狂っているだけらしく、死んではいないので時間がたつと生きかえって逃げてしまう。だからインドネシア人たちが忙しい訳だ。

話によると、この濡れ手で粟の漁法も最近では競争が激しくなって、敵機がまだボンボンやってる最中からカヌーたちは岸を離れて現場に一番乗りを競っているらしい。

とにかく、性懲りない毎回、毎回の空襲で一番の被害者は海の魚と、陸では軍事施設周辺の椰子の木の群だろう。

一日じゅう警戒警報発令中であるアンボンの街は、夜は真暗なので僕はほとんど外出したことは無い。しかし或る晩、ベイに日本料理を紹介するため、放送の終わったあと軍がやっている酒保に出かけることにした。

僕は軍人でも、軍属でもないただの民間人だし、ましてやインドネシア人のベイと一緒になので、果たして軍の酒保が我々を中に入れて呉れるかどうか、気にしながら行ってみた。

だが、行ってみると平気で入れて呉れるし、何の変哲もない只の安料理屋で酒保とは名ばかりの物だった。料理の方もインドネシア人が料理したインドネシア式日本料理でスッカリ当が外れてしまった。

ベイと別れたあと僕はホロ酔い機嫌で暗闇の中を、宿舎に向かって自転車を走らせていた。暗いので見当をつけて、道路の中央を走っていたが、突然現れた二人連れの間に突込んでしまった。

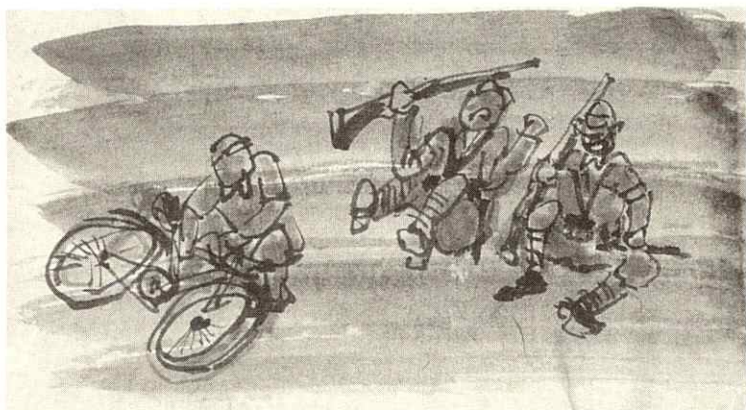
自転車ごと転んでしまったが、酔ってる勢いで思わず「気をつけろ！」と怒鳴ってしまった。まったく、いい気なものである。

ひっくり返った相手方二人が、ガチャガチャ音をたてて起き上がる様子を見ると、銃を持った兵隊である。夜の街で武装した兵隊は警羅中の特警（憲兵）

に決まっている。

僕はハァッと酔いも醒めた思いで、慌てて自転車に飛び乗り大急ぎで逃げだした。「お怪我はありませんか」と後ろから特警が声をかけていたが、どうやら僕が白の半袖、半ズボン姿だったので士官と間違えているらしかった。

これも、空襲の被害の一つだろう。



我々の宿舎

我々が送信所に予定している学校の中の、半壊れだった宿舎の修理が出来あがった。日本から赴任して来たばかりのF・S（フランケン・シュタイン）タイプの白髪の巨人、電報屋のE老人、ミニチュア真空管タイプの電話屋のM君、それに日本からの船でも行動を共にしてきた坊主頭のノッポ、送信屋のT君と受信屋の僕の四人が、この家に一緒に住むことになった。

我々の送信所になる学校跡は、アンボンの東の街はずれの人家の疎らな林の中であって、広い敷地には教室が並んだ2棟と住宅が1棟あるだけで、昼間でもシンカーンとした場所である。裏にはすぐに山が迫っており、庭も傾斜していて運動場もない。教室は7、8つあるが小学校らしくない。隣に半壊れの煉瓦の教会があるところを見ると、どうやら教会に関係のある学校だったのかも

しれない。

宿舎は校舎から廊下が続いている大きな建物で、寝室4つ、ポーチ、居間、食堂がある。裏には浴室、トイレがあり、別棟に使用人の部屋や台所、洗濯場がある。

屋根はトタン葺きの赤塗、外壁はクリーム色、床は全部コンクリートのモルタル仕上げ、庭から一段高くなったポーチの柱や手すりも赤塗りで、鎧戸付の窓も真っ赤に塗られている。随分派手な色彩だが、こないだまで化物屋敷のようだったこの家も、修理が出来てコザッパリした住宅に変わっている。

そう言えば、このアンボンでは瓦葺きの家をあまり見かけないが、さすがに大地震で有名なアンボンの歴史を物語っているのだろう。

E老人やM君は、寒くて物資不足の日本から常夏の国に着いたばかりで、この宿舎で生活することになって、豊富な食糧や果物にはご満悦だが、何をするにも言葉が通ぜず、毎日汗びっしょりの、熱帯の島の生活にいささか、とまどっている風である。

M君がこっそり僕に訊ねる。

「こないだこの宿舎を見に来たら、まだ仕上げ中だった床のあちこちが血の跡のように真っ赤だったよ。戦闘の時、惨虐事件があったんじゃない？」

M君が大真面目なので、僕はついカラカッて、

「うん、あったかもしれんな。そんな話は嫌というほど聴かされたよ。僕もこの家のことは知らんが、そのうちに幽霊が出て来るから判るよ」

ところが、本気になって彼が気にしだしたので慌てて訂正した。

「この家は屋根を飛ばされ、天井に大穴があいて屋根のトタンが床に散らばっていたよ。それが雨で錆びて床が真っ赤になっていたよ」

音 響 増 巾 器

僕は2台並んだ、背丈より高い大型受信機の間にはいって、調整に忙しい。次から次と何処か具合が悪くなっている。

すぐ傍の長机ではインドネシア人オペレーターたちが5、6人、カタカナの

勉強をしている。E先生が頼信紙をめくりながらカタカナ原稿をキイで叩くとスピーカーからピ、ピ、ピーと信号が流れ、オペレーターたちは真剣な顔つきで鉛筆を走らせている。

あまり広くもない部屋の中はスピーカーからの信号音だけが、ある種の音楽のように響きわたっている。だが、通信のスピードはまだ、あまり速くはないようだ。

カタカナ勉強の時間が終わったところで、僕はE先生のところに行って、ベイの成績をたずねてみた。

「うーむ、あの連中のなかでは中ぐらいかな。相変わらず熱心じゃないが、これから段々スピードを速くして、テストもチョイチョイやることにするから、奴にさぼらないように、よく言っといてくれよ」

「本人は年寄り連中には負けないと、自信満々ですよ」

「奴、筋はいいようだな。昔首席級のオペレーターだったという男など、頭も腕もスッカリ固くなって伸びが遅いが、若い奴は上達が速いよ」

話の途中に電話があってE老人が応対していたが、

「司令部の少佐のひとが、君に会いたいと言って会社の事務所で待っているそう。すぐ行くと返事しといたよ」

「少佐？そんな偉い人、僕は知らんなー」

不審に思いながら、僕はすぐ自転車で事務所に向かった。

会社の事務所は街の中心部にあるが、ちょっと風変わりな建物である。アスファルト道路に面した、一段高く広いポーチの中央部に階段があるが、両側から登り降りする重々しい石段だ。

ポーチの奥は高く広い壁で仕切られ、2ヶ所の出入り口は3 m近い高さで、ドアは丈の高い両開扉だ。まるで西洋芝居の荘厳場面の舞台装置を、正面から見るような仕掛けである。

扉には大きな十字架のマークとSALVATION ARMYの金文字が、まだそのまま残っている。以前は救世軍の本部だったのだろう。

奥の広い部屋は、今では幾つかの部屋に区切られ、ゴチャゴチャと机や戸棚を並べた、ありきたりの事務室になっている。

応接間には顔も体も立派な、毛並みのよさそうな若い海軍少佐が僕を待って

いた。

「私は司令官の副官を勤めている者ですが、司令官のご命令であなたを軍の通信隊にお連れして、軍の機械類をお見せするようにとの事です。もしあなたが必要とする機械があったらお貸します」

物腰態度が立派で、言葉も節度あるスマートな軍人だ。

だが、一体なにを貸してくれるのかと尋ねると、専門が違くとみえて軍の兵器名を色々並べて説明に困っている。とにかく、一緒に行って品物を見ることにした。

副官と一緒に立派な車に乗ると、車は山の手海軍通信隊にむかった。日頃はビクビクと小さくなって通る、番兵の立っている営門前も、今日は偉い少佐と同道なので「捧げ銃」である。

隊の中に入ると、四角ばった拳手の敬礼、敬礼また敬礼だ。副官が通信隊長に何か言い、隊長が士官に何か言い、士官が兵隊に何か命令する。

数人の兵隊が兵舎の前の広場に、大きな作業台を担いできて据え付けた。何が始まるのかと、僕は興味シンシンと眺めていた。今度は数人の兵隊が夫々小さな機械を肩にかついできて、台の上に並べた。色々型の違う幾種類もの機械はみな、ただの音響増巾器だった。

「海軍の通信隊では無線通信の訓練に、こんな機械を必要に応じて使っているんです。司令官は、このなかで役に立つものが有ったら貸してあげると、言っておられるのです。あなたが必要なら、どれでもお貸します」

さっきから、軍隊の兵器名で云われてサッパリ訳が分からなかった、副官の話も、現物を見ればどんな機械かすぐに分かった。

「そうですか。よく分かりました。ご親切にどうも有難うございます。しかし、これなら私の方にも同じような物がいろいろ有りますから、お借りしなくても大丈夫です」

先日の夜、忽然と現られて僕をびっくりさせた老人はヤッパリ司令官だったのだ。司令官の好意は本当にうれしかったが、機械は我々に必要がなかった。「じゃあ、何か困ることでも出てきたら、いつでも司令部の私の方か、こちらの通信隊の方にでも申し出てください。出来ることは何でも援助しますから遠慮しなくていいですよ」

副官は心のこもった話ことばで、僕にそう言った。

日頃、威張りくさった兵隊ばかり見慣れている僕だが……司令官のお声がかりとはいえ、こうゆう毛並みのいい軍人もいるのだなーと、改めて副官の兵隊に対する態度など注意して見ていた。

テレマカシ バーニャ

ある休みの日に、長、中、短の3人、Tと僕とMは弁当持参で送信所裏の山にハイキングを試みた。

何事にも大袈裟なM君はこの登山行にまるでアフリカ探検にでも出かけるような道具一式を携さえている。呼子笛、鉦、ロープ類を用意し、薬品を詰めた革のバッグを腰にぶら下げている。

手荷物を嫌うズボラ型の僕とT君は何ひとつ荷物のない手ぶらの身がるさである。

裏山は、アンボンの街の背後に、僅かに高く見える500mくらいの平凡な山で、グヌンノナと呼ばれている。マレイ語でグヌンは山、ノナは女の事だが、この山は、いかにも女性的な、柔らかい感じの山だ。

朝の空気がまだヒンヤリとする頃、登りはじめて、1時間たらずで頂上らしい所まで登ったが、別に山の頂はなく、ただなだらかな草原が広がっている丘のような感じだった。

だが、山からの眺めは素晴らしく、アンボン島をとりまくバンダ海が、一望のもとに見わたせて、淡い海の色が絵のように美しい。濃い緑の岬や、山々に囲まれた湾は、蒼い彩りを見せて、戦争最中とも思えない、平和な風景である。

我々は喉が渇くと、連れてきた案内のインドネシア人に、椰子の実を採ってもらった。インドネシア人は、10mも高く伸びた幹に、手先と足さきだけで猿のようにスルスルと登っていく。重なりあって、なっている実のところに達すると、腰のパラン（鉦）を抜いて、一振り、二振りで、大人の頭ぐらいの椰子の実を、斬り落とす。

椰子の実をいくつか落とすと、彼は降りてきて、今度はその実を上手に料理

してくれる。左手の掌に実をのせて、トントンと調子を取りながら、右手のバランで皮の一部を、パッサリと切って落とす。そこには実の中の汁を吸うのに手頃な、孔があいている。

夜のうちに冷えていた椰子の実の汁は冷たくて、ほんのりと甘く、それにソーダ水のように泡立っている。山歩きの渇いた喉にはまことに快い天然の清涼飲料水である。実の中の汁の量は、一人では飲みきれないほど、タップリとはいっている。

インドネシア人は、空になった椰子の実を二つ割にして、我々に差出す。皮の一部をパッサリ削って作った、スプーン付である。

我々は、その即席スプーンで、堅い殻の内側にフアフアとくっ着いている真っ白な果肉をすくって食べるのだが、甘味こそほんのりだが、プルンプルンした感じは、まさにプリンの感触である。

果肉は、実の熟した程度によって、半熟卵の白み程度から、完熟卵の白み程度まで、色々な歯ごたえである。熟し過ぎたものはコリコリしている。

しかし、椰子の実の汁は、喉の渇いた山歩きの時には、うまいのだが、我々の宿舎で、冷蔵庫の中から取り出した、椰子の実の汁を飲んでみたが決してうまい物ではなかった。

ほんのりと甘く、かすかに泡立っているのはまだいいが、どうしても青くさくて、街のなかで飲んででは、あまり有難みがない。

人っ子一人いない山の中で、小さなニッパ小屋の一軒家を見つけた。谷を見おろす崖っぷちに、危なっかしく建っているが、見晴らしだけは最高だ。蒼い谷や緑の山々が目の下に広がって、まるで深い山の中のような景色である。我々はここで持参の弁当を開くことにした。

我々は小屋の前の空き地に竹の縁台を借りて休み、靴を脱いで足の裏を乾かし、出来た豆にメンソレータムを塗ったりした。

いつの間にか数人のインドネシア人が集まってきて、物珍しそうに我々の動作を眺めている。その中の一人がオズオズと話かけてきた。

「トアン。トアンが使っているのはオバット（薬）か？」

「そうだよ。オバットだよ。誰か怪我人でもいるのか？」

「私の年取った父が、足が痛くて動けないのです」

ヒョロヒョロと背が高く、まっ黒に日焼けした若い男が、真剣な顔つきで願をこめた口調で言う。

M君はさっそく腰のバッグを手を下げて、うす暗い小屋のなかに入って行った。汚い竹の寝台に、皺だらけの痩せた老人が脚を投げ出して坐っていた。話を聞くとどうやら神経痛らしい。

物好きなM君は、メンソレータムを取り出し、日本語でブツブツ説明しながら、自分で薬を老人の足につけたり、よく擦り込むよう手まねで伝えている。老人は貴重薬でも扱うように、丁寧に手で擦り込み始めた。

老人の顔に悦びの表情が浮かび、非常に気持ちが良いと口ばしりながら、M君に何度も頭を下げている。不安そうに横で見ていた息子も、嬉しそうに親父と言葉を交わしながら、両手で薬を擦り込んでいる。

すっかり救世主になったM君は、老人の背中にも薬を塗ってやり、わざわざ自分の手でヨイショ、ヨイショと擦り込んでいる。

老人はヒイヒイと歓喜の声をあげて喜んだ。

いつの間にか小屋の内外は、女子供を交えた数十人のインドネシア人でざわめいていた。人っ気のない山の中の一軒家なのにと、我々は驚いた。

集まったインドネシア人たちは我々をとり囲んで、老婆も若い女も口々に病状を訴え始めた。マレイ語には多少自信のあるT君も僕も、難しい病気の話はまるでチンプンカンプンだ。

我々よりはるかにマレイ語に弱い、名医M君は如何と振り返って見ると、彼もインドネシア人に取り巻かれているが、流石に心臓男！ 革のバッグから仁丹、マーキュロ、ヨードチンキ、梅干丸薬と、次々取り出しては御自から口に入れてやったり、腕に塗ってやったりしている。

我々は一仕事終わってから、縁台に戻り弁当を開いたが、小屋の内外のインドネシア人の群は、まだ感激の興奮状態でお祭騒ぎが続いている。

小屋の中でゴトゴトやっていた女たちが茹卵や果物を持って来たり、粗末な料理を盛った皿を次々と運んで来て、恭しく「どうぞ、これも食べてください」と差し出す。さっきの若い男も、「とっときのケチャップ（醤油）が少し有りますから使ってください」と、底のほうにドロドロした黒い液体の入った汚い瓶を持ってきた。

しばらく休憩した後、我々救世主一行は「テレマカシ・バーニャ。テレマカシ・バーニャ」の声に送られて、この一軒家を去った。

これが本当の「テレマカシ」であり、また我々がM君の大胆不敵の名医ぶりにテレ負かされた一幕だった。

隣の兵隊たち

陸軍の兵隊たちと隣組になって往ったり来たりしていると、色々な事件に巻き込まれてショックを受けることが多くなってきた。

〔酔っぱらい〕

夜の食事を終えて、そのまま食堂のテーブルでダベっている時、突然裏のドアーから顔色を変えた兵隊が跳び込んできた。あまり会ったことはないが、隣の部隊の上等兵だ。

「酒に酔ったうちの兵隊が、私を斬ると言って追かけて来るんです。お願いします、隠して下さい。ドアーに鍵をかけて下さい」



上等兵は早口にしゃべると、食堂をバタバタと駆けぬけていった。

僕は啞然としていたが、とにかく事件らしいのでドァーに鍵をかけようと席を立てていった。ハンドルに手をやりながらフト正面を見ると、ガラス越しに上半身裸の兵隊が僕に向き合って立っていた。半分ほど抜きかけた日本刀を両手で握り、肩で息をしながら僕を睨みつけている。

目が合ってしまったからには、鍵を掛ける訳にもいかず、僕は仕方なしにドァーをあけた。

兵隊は一瞬ためらった風だったが、この場の勢いでドタドタと食堂に入ってきた。

「どうしたんです。椅子に坐って水でも飲んで落ち着きなさい」

僕はこわ怖わではあるが、なるべく平静にゆっくりと言った。

兵隊は抜きかけの日本刀を鞘ごとガチャーンとテーブルに置くと、僕が注いでやったコップの水をゴクゴクと飲みほした。

「あいつ殺してやるんだ。いつも生意気言いやがって、酒ののんでる時まで上官面して大口たたきゃがる。今日という今日は勘弁ならねい」

興奮はいささか収まった様子だが、それでも激しい口調だ。

「刀は鞘に収めなさい。どうせ相手は表に逃げただろうから、裸で追いかけたらあんたの方が憲兵に捕まるよ。もうよしなさい」

息づかいもだいぶ静かになった男は話を黙って聞きながら、赤い目でテーブルの一点を見つめていた。突然立ちあがると、小さな声で「帰ります」と一言いって、テーブルの日本刀を取ってスタスタと部屋から出ていった。

泥だらけのハダシだった。

数日後、表で仲間と一緒に作業しているこの兵隊を見た。日焼けした威勢のいいこの男は仲間の兵隊とガラガラ賑やかにやっていた。

「罰は喰わなかったの？」僕が訊ねると、

「ウンニャ。何とも音沙汰なしだよ。握りつぶしだろう。上等兵だって恥さらしな報告なんか出来るもんか」

兵隊は吐捨てるようにそう言ったが、急に改まって、

「いやぁ、あん時は迷惑かけました。勘弁して下さい」

ペコリと頭を下げたが、自分でも照れくさがって、明るい大声で笑いだした。

〔試 し 斬 り〕

日暮れ時、表の方が騒がしいのでポーチに出てみると、うちの庭の向こうの隅で兵隊たちが4、5人、塊まってわめき合っている。その前の大きな木の幹には、若いインドネシア人の男が後手に縛られていた。

隣の兵隊部落からは兵隊たちが、ゾロゾロやって来る。その中の一人、一目で軍曹とわかる体のがっしり男がノッシ、ノッシと歩きながら、振り返って怒鳴った。「おーいっ、誰か俺の日本刀を持ってこい」

軍曹は兵隊が抱えてきた日本刀を受け取ると、ゾロリと抜いてエイッエイッと素振りしている。軽々と振回すところを見ると中々の使い手らしい。

「お前たち、人間を斬るのを見た事はないだろう。今日は俺がバッサリとぶった斬って見せてやる。中支じゃあ、何人も斬ったからなー」

軍曹は胸を突だして、兵隊たちをね（睨）めまわしていたがフト振り返った時、我々がジューッと見つめているのに気がついた。

我々の宿舎のポーチには我々の外、バブ（洗濯女）やジョンゴス（下男）たちまでやって来て彼らを見つめていた。軍曹はちょっととまどった風だったが、それでも拔身をさげて木に縛られている男の方に歩いていって、刀の切っ先で縛った縄をつついてみたり、男の前を往ったり来たりしていた。

「駄目だ。こんな平和なとこじゃ、人は斬れないや。やっぱり戦闘で殺気立ってなきゃ斬れるもんじゃないな。おーい。縄を解いて一つ二つぶん殴って放してやれ」

軍曹は我々に顔を背けるようにして、兵隊部落に戻っていった。

濠 洲 兵 捕 虜

アンボン湾の入口に近い岬の蔭に白い砂浜の小さな湾がある。この辺は山が崖になって海に落ち込んでいる場所が続いているので、砂浜は珍しい。

砂浜には小さいがガッチリした鉄木の栈橋が海に突き出ており、栈橋の前はちょっとした広場があるだけで、周りは緑の山に囲まれている。砂浜は海水浴場のように美しいが、栈橋には1万トン級の大貨物船が横付になっている。

アンボン湾は海が深いので岸から10mも離れると、大きな船でも悠々と接岸できるのだ。

貨物船の甲板ではウインチが喧しく音をたて、船首や船尾のデリックは忙しく上下して荷物を降ろしている。栈橋の上では下りてくる荷物の網に大勢の人夫が蟻のようにたかって大声をあげている。インドネシア人やオーストラリア兵捕虜が働いているので船上も栈橋も日本語、マレイ語、英語が混じりあった大声が喧かましい。

インドネシア人たちは黒い体にシャツなど着ているが、濠洲兵捕虜たちはボロボロのパンツ1枚の裸で、足にはゴムタイヤで作った手製のサンダルを突っかけてただけである。見あげるほど大きくて逞しい彼らの、桃色に陽やけした肌に金髪のうぶ毛が光っていた。

この栈橋は「石炭栈橋」と呼ばれて、石炭を運んで来る小さな貨物船だけが出入りして、広場には石炭が野積みされていた。

だが、最近では様子がすっかり変わってきている。

南太平洋の戦局が緊迫してきているこの頃、アンボン港に出入りする船の数が急激にふえて、荷降ろし、積み荷の順番待ちの船が何隻も湾内で仮泊するようになったので、この石炭栈橋もちょいちょい大型船の荷揚げに一役買うようになってきた。

僕が「石炭栈橋」にやって来たのも、僕がジャワ島のスラバヤでこの船に積込んだ軍の通信機を荷揚げするためなのである。

僕はこの荷降ろし作業をやるのに、最初はインドネシア人の人夫集めにかかったが、人手不足のアンボンでは無理なことだった。もともとこの仕事は軍の仕事なので、僕は人夫集めの件を海軍司令部に持ち込んだ。しかし軍の御威光を以てしても、無い人手は集まらない。結局、司令部は濠洲兵捕虜を貸してやるから使えという事になった。

捕虜を使うことなどあまり有難くなかったが、外に方法がないので僕は仕方なしに濠洲兵を借りることにした。

荷物がデリックで栈橋に降ろされるたびに、僕は梱包のマークを確かめ荷札を調べて「ワン、ツウ、スリー」と数えてチェックした。

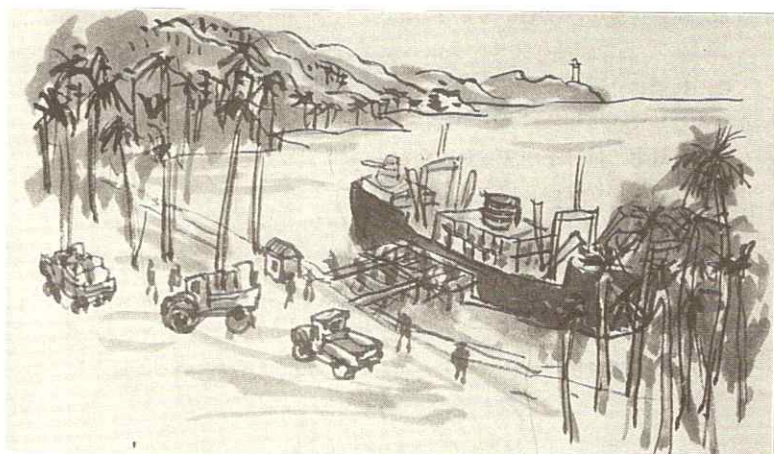
捕虜たちはこの英語を聞いて大悦びである。

「イングリッシュ、ベリ、グッド」「トアン、バグッス」とはしゃいで、インドネシア人がやるように親指を突立てて前にさし出しながら、捕虜たちは英語やマレイ語で僕に話かけてくる。

隣の組で働いている捕虜たちまで、その場所を離れて僕らの組の方に集まってくるので、その組の本職のオッサンが怒鳴っている。

「やいやい。そのデッカチ、何しとる。こっちに来んか。何ぐずぐずしとる。速くしないと、また空襲が来ておおごとだぞ」

隣の捕虜たちは、不満そうにボソボソ言いながら、のそのそとオッサンの持場の方へ戻って行く。



空襲のサイレンが鳴ると、栈橋の船はすぐに錨を捲き揚げ沖に向かい、空襲が終わるまで湾の中をウロウロと爆弾を避けて走り回らなければならない。

その間、捕虜たちは街の反対側の外れにある捕虜収容所まで駆け戻って避難するのが普通なんだそうだ。

捕虜たちは勿論、オーストラリアの兵隊だが、一緒に働いてみるとやっぱり同じ普通の人間だった。

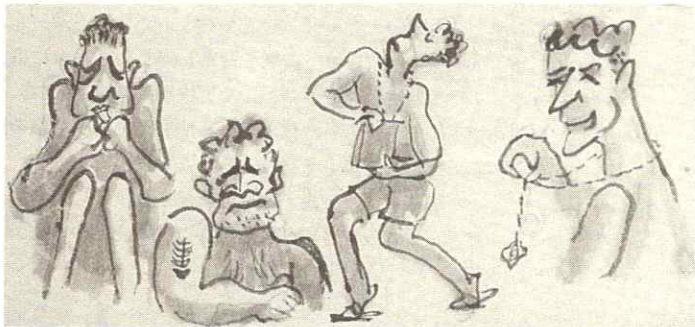
こないだまで、濠洲の田舎で百姓をやっていたという朴訥な男、まさにカーボーイその者といった男、映画に出てくる鬼軍曹そっくりの職業軍人、それに

青白いインテリ風なのや少々イカれた男もいる。

彼らはなかなかテキパキと仕事をする。体力があるせいかスピーディーな仕事振りで、近くでノロノロと働いているインドネシア人の人夫たちと比べものにならない働きである。

荷物を区分して運ぶ要領も、僕が数回やってみせると後は別に細かく指示する必要もなく、彼らだけで荷物のマークや荷札を調べてサッサと区分し、手押し車に載せてトラックまで運び、車に積み込んでくれる。

手押し車で交通ラッシュの栈橋の出入口には、銃を肩にした完全装備の日本兵が警戒している。兵隊は栈橋上の賑わいには無関心の態度で、動物園の熊のように10数mの間を歩調正しく往ったり来たり、往復運動を繰り返している。



ロ ケ ッ ト

荷物がデリックで降されるたびに、栈橋には玉葱、南京豆、砂糖などが勿体ないほど、バラバラこぼれ落ちてくる。時にはビールの雨まで降ってくる。

捕虜たちは作業中に素早くこぼれ物を拾い集めて、紙切れやボロ布に包んで、身のまわりの品が置いてある片隅に運んでいる。中には濠洲兵の顴の広い大きな帽子を持って来て、この中に詰め込んでいる者もいる。

超ロングサイズのノッポが僕のそばに来て小声で言った。

「うちの隊長を見ていな。面白いぜ」

彼らの隊長は他の兵隊とは違って、チャンとした正規の軍服を着用して、ひ

さしの硬い赤腹の制帽をかぶり、ピカピカの長靴はいて、暑いのに御苦労にも将校マントをはおっている。彼はもちろん作業はしてないが、兵隊たちが働いているすぐ後ろを、時計の振り子のように大股に行ったり来たりしている。栈橋の端から端まで規則正しく、同じ歩調で往復運動をしている隊長の姿は、どうしてどうして誇りに満ちた堂々たる軍人の態度である。

ノッポに言われてこの誇り高き隊長さんを見ていると、彼はある瞬間キョロキョロと辺りを窺ってサッと身をかがめた。彼は転がっているジャガイモをすばやく拾ってハンカチに包んだが、たちまち前の歩調に戻って胸を張って歩き出した。

僕はハッと目をそらしたが、さっきのノッポが僕の方を見てニヤッと笑ってみせたのには、わざと知らん顔をしていた。

僕はトラックに乗って送信所の倉庫まで荷物を運んだ帰りに、宿舎に寄って電気冷蔵庫の氷を、広口の魔法瓶に一杯詰めこんで栈橋に持って来た。

休憩になって、僕の周りで腰を下ろして休んでいる捕虜たちに魔法瓶を差し出すと、「わーっ、氷だ！」と歓声を上げてよろこんだ。

氷を囓る者、頬に付けて擦る者、氷で桃色に焼けた体を撫でている者。

「久し振りだなー」と静かに口に入れて感慨にふけっている男もいる。

毛むじらの胸にロケットをぶら下げている男がいるので、僕が手を差し出すと、首から外して蓋をあけて見せてくれた。肥った女の写真だった。

「女房です。美人でしょう」 髭むじゃで、若いのか年とっているのかわからないこの男は、顔をクシャクシャにしてほほえんでいる。

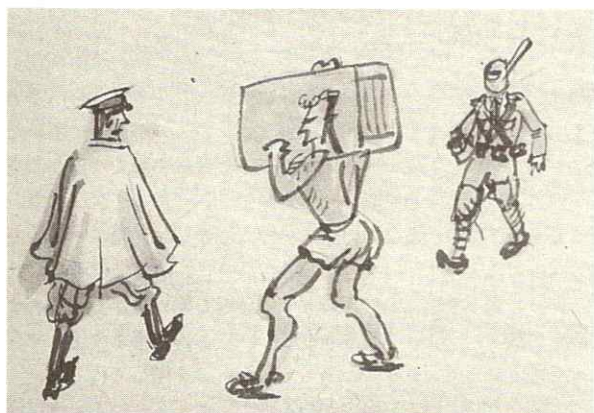
「私のも見てください。恋人だよ」 若い男がわざわざ寄ってきてロケットを首から外して見せる。

「俺はワイフも恋人もいないんだー」 ひょうきんな男が両手を拡げて唄っている。僕は足下に落ちていた大きな木の荷札を拾い、紐を通してその男の首に掛けてやった。

男は立ち上がると木の荷札を両手で抱えて歌いながら、栈橋の板の上をステップを踏んでいとも優雅に踊りはじめた。周りの男たちは口笛を吹き、手を叩いて調子を合わせ、そして最後は大笑いになって拍手喝采である。

銃を肩にした日本兵は、歩調を止めてこちらを振り返りジッと見つめていた

が、すぐ向きなおって今まで通りの歩調に戻り、檻の中の熊の往復運動を続けた。



「今日は空襲のある日に当たるんじゃないか」 捕虜の一人が言っている。
「今日は来ないよ。明日あたりが危ないな」 相手の男はしたり顔で返事している。「お前の占いは当たらんからな、こないだなんか安心してたら、酷い目にあったじゃないか」「栈橋の下に逃げこんだ日だろう。アハハッハ。あれはメリケンが急に予定を変更したんだよ。俺に断りなしにな、アハハッハ」

捕虜たちは英語、マレイ語チャンポンで色々と話を聞かせてくれる。老人のような顔をした男が真面目な口調で僕に質問した。

「我々が、作業を終えて収容所に戻った時、一番最初に何をやるか知ってますか？」 「知らないね。何するの？」

僕があっさり返事すると、彼は立ちあがって大きな身振りで腕と膝を、上下左右に屈伸させながら言った。

「まず、体操をするんです。わしは全く分かん。日本兵はなぜあんなに体操を重視するんかね？我々は一日中重労働をして充分過ぎるほど運動しとるのに。その上、収容所に戻ってすぐ更に運動することはないと思うんだがなー」 男は大げさに嘆いてみせる。

「一日中何もしない日本兵が運動不足なんだよ。」

横から、まぜっかえすのがいる。

作業開始の笛が鳴った。「さあ。仕事だ。ハリアップ、ハリアップ」 僕が立ち上がって叫ぶと、捕虜たちはゾロゾロと物の方に歩いたが、その中の一人、いかにも鬼軍曹といったひとときわ体の頑丈な男が僕を手招きした。「あんた、この箱を動かせるかね」

彼が大きな箱を指すので、僕は力いっぱい押してみた。箱は一寸持ち上がったが動かなかった。

彼は笑いながら、両手を箱にかけ岩のように筋肉を盛り上がらせて、その箱を抱え上げその儘ノッシノッシと歩きだした。手押し車まで運んで、車に載せると僕を振り返ってニヤリと笑ってから、車を押して行った。

「命令するのは簡単だが、運ぶ方は力があるよ」 と言っているように僕には思えた。

会 社 の 先 輩 後 輩

陸軍の若い少尉と軍属の二人連れが送信所に訪ねて来た。

「私は移動無線の隊長として部下と一緒に、今度アンボンに来た者です。アンボンに来てみると、街の中に懐かしい会社のサインマーク○があちこちに見られるではありませんか。しかも私達が隊を設営した近くに会社の送信所があると聞きましたので、早速お伺いしました」

この二人の若者は我々の会社の後輩だったのだ。

「私は会社の福岡受信所で養成所の3期生として勉強し、その後入隊したのですが、その時の先生だった1期生のHさんが軍属として、偶然私の隊に来られたのです。養成所で教わった先生と一緒になので色々助かりますが、生徒だった私が隊長なので少々妙な具合なのです」

彼らは内輪の話をしながら、我々の仕事や会社の様子を懐かしそうに聞いていた。

R少尉とH軍属は、それからチョクチョク連れだって遊びに来た。

「ここに来ての間は、私もR少尉を呼び捨てで気楽に話していますが、隊に戻る

とそうはいきません。隊長殿、と敬礼してから話すのですからね。ここでこうして、一杯ご馳走になっている間が命の洗濯です」

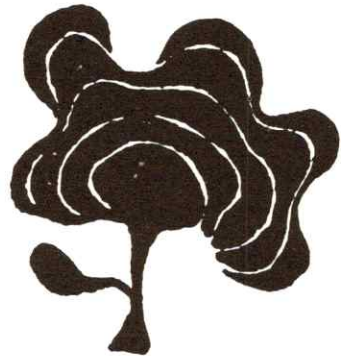
H軍属がぼやくとR少尉もうなずいて言う。

「私だって調子が良くないですよ。Hさんがもっと年配ならよいですが、私と大して変わらない年齢なので、他の軍属の手前特別扱いも出来なくて困ってるんです。こうやって、ここに来てるとまったくホッとします」

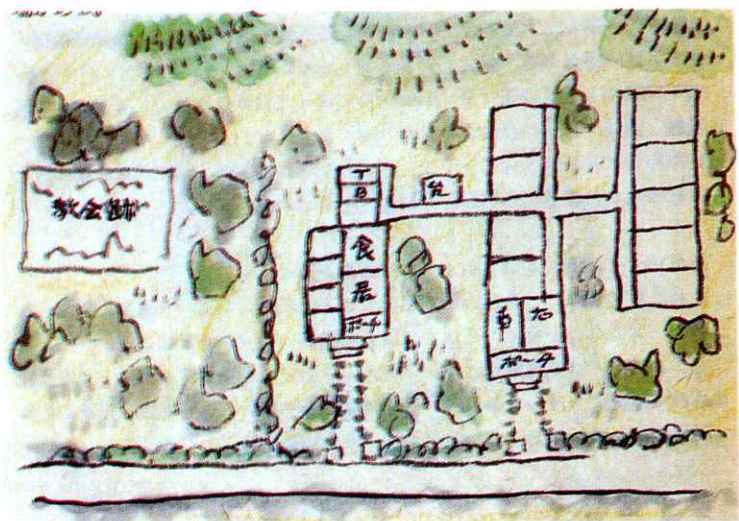
彼らは我々のところに現れるとトタンに、会社の人間にたち戻り仲間の話や会社の話に夢中だ。彼らが会社に居た頃は僕は神戸の方にいたので直接には知らないが共通の話題は豊富だった。

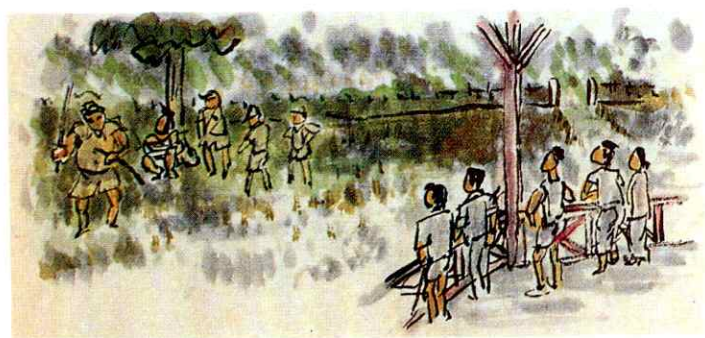
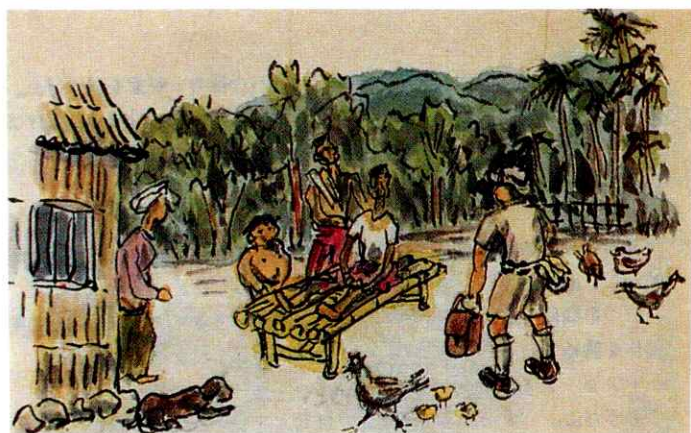
彼らは束の間のリラックスの後、また軍人にたち戻り「お邪魔しました。隊に戻ります」と厳しい直立不動、挙手の礼をして戻って行った。

しかし、彼らが遊びに来たのはほんの僅かな期間だった。彼らの隊は我々が知らぬ間に、ニューギニア方面に転出して行ったと後で聞かされた。









国際高等御下宿

「パビリアン」

僕がスラバヤで滞在していた宿は、会社の連中が出張してくるといつも泊る「パビリアン」というホテルだ。この家はスラバヤの賑やかな電車通りから、家並みがゴチャゴチャした横丁に入った裏街にある。あまり奇麗ではないが、ありきたりの住宅で、同じような隣近所の住宅に較べると、ちょっとした前庭もあり奥も広い。

表通りに面した生垣のある石の門柱に「パビリアン」と表示してあるからこの宿の名称だろうが、辞書をひいてみると語源はテントで、楼・閣・仮屋・離れ・別館・別荘・亭・館などと出ているから、要するにホテル・旅館・宿屋・アパート・下宿などの呼名なんだろう。

東京のあちこちで見かける「〇〇荘」とか「〇〇館」と言う高等下宿らしい名前なのかも知れない。この家には7カ国くらいの外国人が住みついているから、さしずめ「国際高等御下宿パビリアン」といった所だろう。

この家は、両隣と裏を高い煉瓦塀で囲まれた敷地一杯に、平屋の建物がコの字形に建っている。母屋と両袖の付属の建物の間は廊下で繋がっている。

庭は表の道路に面した小さな植え込みと裏にある猫の額ほどの中庭だけだ。

壁と廊下に囲まれた中庭には少しばかり緑の葉が茂っている。とにかくこのあたりは、建物がひしめくスラバヤの中心街である。

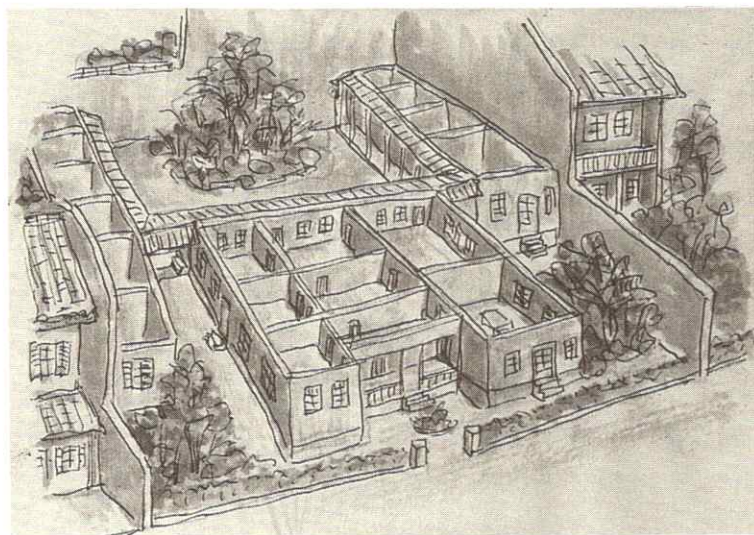
母屋は道路に面した正面から石段を2、3段上がるとポーチになっており、玄関らしい物はない。表側が手すりになっているタイル張の広いポーチの奥は、テーブルやソファなどある居間で、その奥が食堂になっている。これらの部屋を挟んで母屋の両側に客室が4ツばかりと事務室がある。裏の廊下で続いた片袖には主人一家の部屋と台所・炊事室・洗濯室などがあり、もう一方の廊下には客用の浴室・トイレの外部屋が5ツ6ツ並んでいる。

僕が泊まっている部屋はこのホテルでは大きい部屋だが、中央の敷物の上に応接セット、壁際には事務机に木造蚊帳つき寝台があって、壁に油絵が掛かっ

ているだけの粗末な部屋である。それでもこの部屋などがAクラス級で廊下づたいでいく幾つかの部屋は寝台と机ひとつでいっぱいになる狭い部屋ばかりである。

廊下にはトイレとマンデー場があるが、トイレは水洗式ではあるがペーパーの用意がないのでマゴつく。よく見ると便器の傍に水を詰めたビール瓶が幾つか置いてある。オランダ人やインドネシア人は用便後紙を使わず、水処理するという話は本当だった。マンデー場には浴槽は無く、水道の水を浴びるシャワーがあるだけだ。

主人一家はデンマーク人で中老の夫婦に大きな息子が一人いる。使用人はインドネシア人男女何人かいるが、料理人は支那人のおばさんで美味しい御飯や漬物を作ってくれる。客室はほとんどが長く住みついた連中で占められ、表の部屋だけが我々旅行者で時々入替わっているらしい。



同宿の面々はオランダ人の女医者・チェッコ人の靴屋の店員・ハンガリー人の退役軍人やその外、怪しげな女達など国籍も雑多な国際下宿人たちだ。

僕は毎朝、外の連中より早く暗いうちに会社に出掛けるし、彼らは夕方遅く戻って来るので連中と顔を合わす機会は割に少ないが、それでも休日など食堂やベランダで顔を合わせるとけっこう色々世間ばなしに時を過ごす。

この宿の連中はお互いにマレイ語で話あっている。ぼくもある程度マレイ語を喋るし聞いても判るので、彼らとの話には言葉の不自由は全然感ぜず誰とでも気安く話している。

外人たちは皆なかなか愛想が良く、僕と顔を合わせると向こうから挨拶してきて世間ばなしをするが、外交辞令がうまく、お付き合いが巧みである。しかし、これも日本が武力で勝って占領中である故だと思うと、いささかくすぐったい気持ちである。

戦前白人が威張りくさって支那人・日本人を見下し、我々も色が白いというだけで、白人の前でオドオドしていた事を思うと、力関係という事をつくづく思いしらされる。

しかし、靴屋の店員だというチェッコ人は余り人なつこくない。小柄な若い男で、髪を油で固めて真ん中からわけたキザっぽい色男だが、いつも僕と出会うことを避ける風で、偶然出会っても目をあわさない。

男でも女でも大体において若い連中は、我々日本人に近付くことを潔よしとしない風である。「チェッ、あんな若造の日本人が威張りくさりやがって」といった気持ちを持っているらしい事は会っただけでピンとくる。

我々だって欧米人にそんな気持ちを持っていたし、今だって持っているんだから……。

オランダ人の中年の女医者は裏の方に住んでいるが、いつ会ってもオドオドとまるで猛獣にでも出会ったように、おののきながら丁寧に僕に挨拶する。

日本軍が上陸してきたとき何かあったのか、あるいは彼女の夫が日本軍に捕まっているのかしらと気になる。

切 手 帖

白髪頭のハンガリヤ人の老人は母屋の中庭に面した部屋に住んでいるが、夕方になるといつもベランダの藤椅子で中庭の築山に向かって涼んでいる。

膝の上には分厚い切手帖を拡げて丹念に一枚々々眺めるのが日課らしい。中庭の築山は僅かばかりの木が茂っていて、大きいのはバナナの樹が2、3本茂っているくらいで、すぐ後ろは白い漆喰があちこち剥げかかったレンガの壁が裏の二階建ての家の屋根まで高く背景を遮断している。まさに猫の額のような中庭である。

老人の隣の椅子で煙草をふかしながら涼んでいる僕に、老人がユッタリと話かけてくる。

「この戦争はどのくらい続くと思います」 返事に困った僕が、
「百年戦争だと言っている人もいますよ。こればかりは僕なんかには分かりませんよ」 と言うと、老人はいかにも憂鬱そうに、

「四、五年のうちに終わってくれないと、私は困るんです。私は国にも帰れずこうして居ますが、財産といたらこの切手帖だけですからね。この切手を少しずつ売っていけば、まあまあ四、五年は持ちますが、それ以上は難しいです」

厚い切手帖には珍しい切手がギッシリ貼ってあって、素人目にも相当の蒐集品らしい。老人は切手帖とは別に印刷された切手の見本帖を持っていて、丹念に自分の切手と見比べながらページを繰っている。

切手の見本帖には世界じゅうの珍しい切手の美しい写真が並んでいて、切手の下には発行した国や、年代、時価、短い解説などが細かく書きこまれていた。その写真を見せながら老人は言う。

「これは古い日本の切手ですよ。知っていますか」

指さして見せてくれる切手はもちろん、僕など見たこともない物だ。大政官などと言う文字が見える古い切手が幾つか並んでいた。

「こんなのや、ほれこんなのを見てごらん。すごい値段でしょう。こんなのを何枚か持ってたら、戦争が何年続いても大丈夫なんですがね……」

老人はうつろに寂しく笑ったが、この老人は体もガッチリした大柄な男で以前は軍人だったという話だ。今では殆ど部屋に閉じ籠もりきりで、めったに外

出もせず、こうして毎夕切手帖を眺めるのが唯一の楽しみなのかもしれない。

切手蒐集は西洋人の共通した趣味らしいが、この影響を受けたのかどうかインドネシア人たちもなかなかマニアが多い。僕なども出張で遠くに出掛けるたびに、知り合いのインドネシア人に珍しい切手があったら頼みますよと、別れの挨拶がわりによく言われる。

しかし、この切手蒐集も単なる趣味だとばかり軽く考えるのは我々日本人で、彼らはもっと古切手の価値を重要視しているようだ。

物が小さくて軽く、嵩張らないので持ち運びに便利で、物によっては金やダイヤよりも高いものもあり、財産としては確かに重宝な物である。

この老人のようにいざという時に、生活を支える大切な物である事を僕は初めて実感した。

戦後の日本では、デパートは何処でも切手コーナーがあり、小学生、中学生がワイワイ夢中になって切手を買集めている。大人も記念切手には列をつくってたかっている。

日本の敗戦が自然の本能として彼らをそうさせているのだろうか……。

大 き な 坊 や

この宿のひとり息子は時々僕の部屋に遊びにくる。

見上げるほど背が高く色が白くて美男である。北欧系の皮膚の色は白よりは赤い方とも言える白さだ。僕は青年だとばかり思っていたが顔つきがあどけなく、話が子供っぽいので齢を尋ねてみたら十四歳だった。

「日本語を教えてください」と、色々な言葉を訊ねてくるが、この少年はけっこう日本語を知っていた。「いらっしゃいませ」とか「お気をつけて行ってらっしゃいませ」なんて言葉をまことにうまく発音する。数からいっても相当色々な言葉を知っていた。

しかし、「じゃー、また来てね」なんて言葉を変な女口調で喋るので僕は慌ててた。何処かで自分で覚えたのか、誰か悪い日本人が教えたのか、とにかくそいつは使わぬように注意すると、坊やは怪訝な顔をしていた。

「『明日の朝、何時にあなたを起せばいいんですか』と言う日本語はどう言うの」とか「『今晚は夕食の用意は要らないのですね』と言うのは何て言うの」とか、彼が覚えたがる日本語は商売がら必要な現実的な日本語が多い。

なかなか遅ましい、やる気のある少年である。

この子は母国語のデンマーク語は勿論、オランダ語・英語・マレイ語はペラペラだし、支那語もけっこう操っているようだ。その上テキスト持参でフランス人の部屋に押しかけフランス語を勉強し、僕のところにやって来ては日本語を覚えようって訳だ。日本語の覚えかたも驚くほど早く、僕がこの宿に滞在していた数週間のうちに、大抵のことは日本語で話あえるくらいになっていた。結局この坊やは7カ国語ぐらいはこなしている事になる。

「私はお母さんと一緒に日本に行ったことがあります。小さい時でしたからあまり覚えていませんが、長崎に行きました。最近では、やはり母と二人でデンマークに里帰りしました」

父親は暑いスラバヤで一年じゅう夏休みもなく働き、母と子の二人は年に一回は山に避暑に行ったり、時には遠く海外旅行をしているのだと言う。

「うちの父さんは働くのが大好き、母さんは旅行して遊ぶのが大好き」と、息子は笑っていた。

「日本の大都会は東京・大阪・京都・長崎・横浜・神戸で東京の人口は…」と、日本の子供と同じように地理で教わった暗記物をペラペラと並べたてて僕に聞かせるが、どの場合でも長崎が上位の方に現れて来るから面白い。流石だなと、オランダ植民地、蘭領東印度時代の教育が察せられる。

とにかく、日本の山々の高さ・川の長さ・面積・産業など何でも順序をつけて暗記しているが、材料が少し古いのと、オランダ偏向が混じっている点、なかなか興味がある。

「デンマークの総人口は400万で東京の人口より少ないですが、デンマークはヨーロッパ有数の文化国です」 お国自慢も相当なものである。

デンマークは食料が豊富で貧乏人がいない話。保健設備が充実していて衛生観念が徹底している話。例えば、公共プールでは体を消毒した後まっ裸で泳がせるとか、夜中の自動車の警笛は罰金をとられるとか。

半分は父や母から聞いた話だろうが、彼は得々として自慢げに僕に話して聞かせる。

坊やは暇さえあると、あちこちの部屋に遊びにいったり、いや勉強にいったりかな。フランス語のテキストを持って僕の部屋に来るから、どうしたのかと訊ねると「あの小母さん、出かけて留守だった」と僕の部屋で駄べっていく。

しかしあまり長く遊んでいると、奥の部屋から母親の調子をつけた高い声が「ボーヤ、おつかいに行っちゃうだーい」と呼びだしてくる。

坊やは「はい」と高い声で長く答えてすぐ立ちあがり、「また後でね」と日本語で言ってピョコンとお辞儀をして走り去っていく。

2m近い金髪の大男も跳んで行く姿はまったくの可愛い坊やである。

僕が表のポーチで藤椅子に腰を降ろして新聞を読んでいると、息子が自転車にのっておつかいから戻ってきた。

「今晩は最高の御馳走ですよ。ほーれ、牛の脳味噌」

ポーチの手すりに寄ってきて、血のついた包みを片手でブラブラ差し上げて見せる。

「おいおい。振り回すなよ。汁が垂れて気味が悪いよっ」 僕が顔をしかめると、

「御免なさい。でもうちのコッキーは脳味噌料理が最高に上手なんだよ」

彼は言い訳しながら自転車を押して裏に回って行った。

白 菜 の 漬 物

此処では毎朝、目を覚まして起き上がり部屋の中をごそごそやっていると、タイミングよくジョンゴス（ボーイ）がコーヒーを盆に載せて運んで来る。

どこから覗いているのかと疑いたくなるほどタイミングがいい。

盆の上には温かいミルクがカップ一杯・ウイスキーグラスの柄のついた瀬戸物カップ…クリームを入れてくる奴に、ドロドロしたコーヒーのエキスが一杯・それに白砂糖を山盛りにした小皿が載っている。

濃いコーヒーエキスはコーヒーの粉を瞬間的に熱い蒸気で漉したもので、エキspreッソとかダッチコーヒーとか言う事は知っていたが、現実に見るのはこれが初めてである。見たところコーヒーの煎じたエキスのようだ。

朝食は普通のパンかトーストパンに半熟卵・目玉焼・ベーコン・ハムなどである。目玉焼のことをマレイ語でマタサピ（牛の目玉）と言うが、言い得て妙である。勿論頼めば御飯も出来るが、味噌汁に焼海苔に梅干しが出るかどうか注文したことが無いからわからない。案外、ここのオカミサンは心得たものだから、OKかもしれないが、こちらの方が目下その日本趣味が無くやたらと、肉や脂ばかり要求している。

午後の3時頃には部屋に紅茶を運んで来る。盆の上には綿入れのカバーを被せた紅茶ポットに紅茶カップ、それにまた白砂糖が小皿に山盛り一杯だ。

いくら砂糖黍の産地であるジャワにしても、毎回々々富士山のように小皿に山盛りの砂糖は奇妙なものである。しかしそれより奇妙なのは紅茶ポットの綿入れカバーだ。おそらくは寒いヨーロッパでの習慣をそのまま熱帯に持ち込んで忠実に守っているのだろうが、この暑いスラバヤでは何ともはやむさくしくて、ピンとこない。

そう言えば、炎天下のバトミントンの試合で、選手諸君は汗をかきかきぶ厚いセーターを肩に掛けているが、熱帯地方でもやっぱり肩を冷やさないため寒帯地方の習慣が持ち込まれているのかな。

ここはデンマーク人の宿だけに食事の料理は肉料理が多く、しかも牛の舌とか豚の肝臓とか日本人には珍しい家庭料理で、こってりとした美味しいものがよく出てくる。

その上、大きなピフテキや色々手を加えたコッペパン程の肉の塊が毎回食卓に現れる。米の飯も時々現れるが、御飯としてではなく料理の皿の上に肉や野菜の添え物として料理されているものだ。

僕は肉には目がない方だから、出てくる料理は片っ端から片づけて満足しているが、それでもパンちょっぴりでは物足らず御飯を注文する。しかし出てくるのは大皿一杯盛った御飯が出てくるので閉口する。

ここの米は日本で言えばいわゆる外米だが、姿といい味といいなかなかの上米である。我々が外米は不味いものだとか教えてまわっていた先入感は、とんでもない間違いだと分かった。我々が外米と言っていたのはサイゴンやビルマの3等米や等外米を配給されていたのだろう。

だがどうやら西洋人にとっては肉が主食であるらしい。ここの親父やお袋の

まるでビヤ樽のように丸々と肥ったデブ姿を見ると、あの肉料理を毎日々々食ってりゃ…あぁなるに違いないと思わざるを得ない。

野菜や果物はさすが熱帯の本場だけに豊富である。トマトなどは日本のものと較べると貧弱だが味はよく、西洋野菜・東洋野菜が料理やサラダにふんだんに出てくる。ある日、日本風の白菜の漬物が出てきた。

僕が喜んでお代わりを請求すると、肥ったお袋が大皿に山盛りした漬物を自分で捧げて食堂に現れた。

「この白菜の漬物は日本で食べてるのと全く同じで、とてもおいしい」と僕が言うと、お婆さんはすっかり喜んで、

「これは支那人に教わって私が漬けたんですよ。そんなに好きなら毎回作ってあげます」とニコニコして戻っていった。

それからというものは、毎回々々、僕のテーブルには白菜の漬物が山のように現れた。婆さんもチョクチョク僕の横にやって来て、塩味がどうのと漬かり具合などを訊ねながら、僕の食べ方を観察している。僕は婆さんのために一生懸命漬物を食う恰好になってきた。

「もう漬物はいいよ。日本ではね、毎回食事に漬物が出るが、小さな皿に上品に少し盛って出すのが習慣だよ」とウンザリした僕が悲鳴を上げると婆さんは、すこぶる御機嫌斜めであった。

食堂では頭にターバンを捲き、金ボタンの白詰襟上着をつけ、サラサ模様のサロンを腰に巻いて裸足の、一見老人風のボーイが食卓に付ききりでサービスするが、婆さんもしょっちゅう食堂に現れては、料理の講釈や料理作りの苦心談を身振り手真似も大袈裟に聞かせてくれる。

牛の腿の肉を二日がかかりでどうしたの、牛の脳味噌をこれこれ何種類の香料を使って料理したの、豚の肝臓をこうして味付けしたのだとまくしたてて、とにかく「うまい、うまい」というお褒めの言葉を強要する。

西洋人はこんな料理の話で食欲が増進するのかもしれないが、僕にとっては食事時、そんな話はあまりゾッとしない。

だが、ビヤ樽夫婦の喋るマレイ語はヨーロッパ訛の捲舌のベランメイ口調ときているので、ただでさえ良く分からないのに、料理の専門語がふんだんに出てくるので益々僕によく分からないのが幸いである。

デ　ン　グ　熱

ある日僕は熱をだして会社を休んだ。

宿の主人夫婦は早速そのビヤ樽のようなデッカイ体を僕の部屋に運んで、熱を計ったり氷嚢の氷を丹念に取り替えてくれた。おやじは僕の熱の具合を見て、どうやら本物の熱病らしいと、奥の部屋に住んでいるオランダ人の女医者呼んでくれた。

この女医はいつもオドオドした中年の女だが、流石に診断の時はしっかりした態度で僕を詳しく調べて、最後にデング熱だと断言した。

早速、おやじはグラフ用紙を持ってきて部屋の壁にピンでとめ、時刻を決めて現れては体温を計って几帳面にグラフに記録した。

これはなかなか正確なもので、時刻になってオヤジが現れないと思うと婆さんか息子が代わりにやって来てカーブを書き込んでいく。

僕は食欲がなく何も欲しくないのだが、婆さんは果物を搾ったジュースを無理やりに僕に飲ませ、僕が食事をとらないと今度は凄くドロドロしたポタージュを持ってきた。

「これは肉のエキスにチーズ・バター・精力のつく薬味・それに……」と例の調子で効能がきを並べたてて僕に飲めと言う。

僕はその好意に応えて、仕方なしに皿を口の辺りに持っていくが、そのムーッとする脂っこい臭いに喉が受け付けない。無理をすると吐き気を催してくる。これは大変な苦勞である。

「日本人はね、病気になるとお粥に梅干しといった至極あっさりしたものを取る習慣なんだよ。こんな脂っこいものは到底口に入らないよ」と、僕が婆さんに拒否の態度をとると、婆さんはこわい顔をして首を振る。

「とんでもない。熱が出て体力が消耗したうえ、食事も取らないのだから、普通以上にカロリーを補給しなければ抵抗力が無くなってしまいます。体力をつける為にはこうして、普通の食事では取れない消化のいい、カロリーの多い、濃いスープを飲む必要があるんです」

婆さんは理論的に強硬にポタージュを僕に押し付ける。いくらカロリーが有っても鼻や喉が受け付けられないものは、第一口に入っていけないし、強制圧入し

か手はないんだ……それじゃ消化しないだろう……なんて事を婆さんと難しいマレイ語で遣り合うのも厄介なので、僕はトニカク絶対拒否の問答無用方式をとることにした。

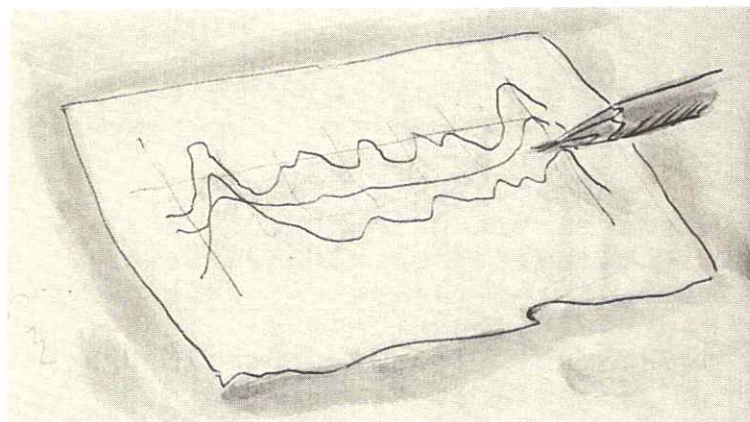
婆さんはコワイ顔をして脅してみたり、猫撫で声で優しく説得方式をとったりしていたが、僕がガンとして問答無用なので遂に諦めて、肉汁エキスの代わりに果物ジュースを作って不満そうに持ってきた。

熱は1日出たきりで翌日からは平熱になり、気分もたいして悪くなく食欲も出てきたので、僕は3日目には会社に出ることにした。

僕が服を着ていると親父が跳んで来て、こわい顔をする。

「あんた。デング熱は最初に熱が出て、それから後1週間目に又熱が出るのが特徴の病気ですよ。熱の出方は色々有りますが、1週間の間熱が出ばなしのも有れば、途中が中弛みになるもの、最初と最後だけピーク状に熱が出る型など有るんです。あんたも、きっと1週間目に熱がでますから、それまでは無理をせずにジューッと静養しなければいけません」

オヤジは紙に熱の型を色々描いて見せながら、トウトウと説明する。オヤジが雄弁になればなるほどその捲き舌のマレイ語はヨーロッパ訛が激しくなって、何処の国の言葉か分からなくなってくる。



親父があまり熱心に説くので、僕はとうとう一週間のあいだ、毎日部屋をブラブラするだけの退屈な日を過ごしてしまった。だが熱は最初に出ただけで、一週間たっても熱は出なかった。

自由の身になってみると、体の調子がスッカリ前に戻って何ともないのに、なんだか少し妙である。これまで大好物でガツガツ平らげては婆さんを喜ばしていた肉料理が急に食えなくなっていた。

あのドロドロと脂っこい肉汁エキスの臭いが鼻の中に蘇ってきて、肉料理を見るたびにいささかゲンナリするのである。……その代わりに、我慢出来ないほど食べたいのが、あのアッサリした日本料理の数々である。

僕はとうとう会社の出張所長のHさんの家に出かけて、日本料理を御馳走してもらう事にした。Hさんとこの料理人は支那人だが、日本料理は何でもこなす料理のベテランである。僕はこのコッキイの作った酢の物・刺身・煮魚に豆腐の味噌汁と漬物でやっと人心地づいた。

僕はHさんのところに転がりこむ事に決心した。

僕が洗濯物など纏めさせているのを見て、親父がやって来た。

「何処かに出張ですか？」

「そうじゃ無いよ。ここを出るんだ。Hさんのとこに泊めてもらうことにしたんだ。勘定するから、計算書頼むよ」

荷物を纏めながら僕が言うと、親父は笑っている。

「勘定なんか何時でもいいですよ。きっとあなたは、すぐ戻ってくるんだから……一週間もしないうちに。ハハハハ……部屋は明けときますよ」

「さあどうかな。そのまま何処かに消えてしまうかもしれないぜ」

「大丈夫ですよ。貴方の会社のHさんは金持ちですから平気です。貴方が居なくなったらあの方が払って呉れますよ」

「Hさんがどうして金持ちなんだい」

「だって、Hさんは自動車を4台も持ってるじゃありませんか」

親父はしたり顔ですましている。

僕はHさんの所で、テンプラ・すきやき・お茶漬と日本料理を堪能した。しかし数日たつと、またあのビヤ樽婆さんの肉攻め料理が恋しくなってきた。日本料理も毎日じゃねー、って気分である。

僕は一週間たたぬうちにフラリッと親父の宿に戻って来ていた。

— 終 —

宮 様 ！

拝 謁

僕たちは民間会社の社員であるが海軍の仕事をしているため、毎日スラバヤの港の中の海軍基地……海軍工廠に通っている。

ある日担当のM大尉に呼ばれた。

「実は伏見の宮様が君たちに会いたいと言っておられるんだ」

大尉が面白そうな顔をして言うので、カツガレルのかなと僕は半信半疑だった。相手は、たしか軍令部長か何かしている伏見元帥の宮の息子、伏見大尉である。

「君たちに軍通信施設の建設をやってもらっていることを宮様に話したら、宮様が一度会ってみたいと言われるんだ。伏見大尉は艦隊の通信参謀だからな」

どうやら冗談話では無いらしい。

「コチコチになって拝謁だなんて、あまり有難くありませんね」

「いやあ、大尉はザックバランな方だよ。君たちと一緒にスラバヤの海軍の通信施設を見て廻ろうと言っとられるんだ。宮様だと言っても別に普通の軍人と変わらないんだよ」

「ただね……ウフフ……一緒に飲み屋に行くと、やった事が無いのかどうか、自分で金を払う事をやらないんだ。僕なんか被害甚大だがね。……しかし、司令官が煙草を取り出すと誰よりも先にマッチを擦って火を差し出すなんてエチケットには機敏な宮様だよ。とにかく、あまり心配しないで会ってくれ。時間が決まったら後で報らせるからな」

伏見大尉は想像していたような貴公子ではなかった。相撲とりのような背丈も肩幅も特大の体に、砂色の作業服に半ズボンをつけ大きなヘルメットを被った、あまりスマートな方ではなかった。その上、伏見家親ゆずりのロンドン・パリらしい目つきをしていた。

我々が会って挨拶をすますと、彼はすぐに席を立って「じゃ出かけよう」と我々を促し、ノッシ、ノッシと部屋のそとに出て廊下の先に待っている自分の

車に歩いていった。

車の傍で堅くなって敬礼する運転手の兵隊に、彼は「今日は俺が運転するから、お前はいいよ」と言って運転席に乗りこんだ。

助手席にM大尉、後の席に会社のU老人と僕の二人が乗り込むと、車は工場構内の広い道路を走りだした。

一緒に宮様に会ったK技術部長や外の連中は我々を見送っていたので少々変に感じたが、U老人が乗ったので僕は気にならなかった。Uさんは別に老人ではないが、僕が南方に来るまで勤めていた神戸の受信所長で、僕を送り出した所長さんなのだ。白髪の坊主頭姿が歳の割に老けて見えるので、南方になど出掛けて来る人とは思ってもいなかったから、スラバヤでの再会に僕は驚いていた。

この海軍工場は以前はオランダの海軍基地だっただけに、敷地も広く大きな道路が縦横に走っている。入り組んだ港の岸壁にはドック・造船台・機械工場・溶接工場やクレーンが立並んでいる。轟音が響き、蒸気や煙が勢いよく空に吹き上げられ、水上にはランチや荷物船が忙しく行き交い海も陸も活気に満ちている。

自動車は広い構内を出はざると、しばらく家並みがゴチャゴチャしたスラバヤの賑やかな街のなかを走った。狭い道に馬車や三輪車や人通りが多くて車もなかなか上手く走れない。

「心配そうな顔をしているな、大丈夫だよ」

伏見大尉は片手で運転しながら、左手で胸のポケットから大きな紙切れを取り出して肩越しに後部座席の我々にそれを振って見せた。

「チャンとした正式の免許証だぜ。警視庁のハンコが押してあるだろ」

それは普通の免許証ではなかったが、一枚の紙に何か書かれ大きな四角いハンコが押してある証明書のような物だった。

車は繁華街を通り過ぎると郊外の緑の多い並木道に出てスピードを上げていった。坦々と延びているアスファルト道路は明るい陽に白く輝き、よく繁った濃い緑の並木は規則正しく道路の両側に連なっている。並木の木陰にはインドネシア人の男女が白い衣を翻かして自動車を避けていた。

さすがに暑い日中の野外の道路には人影は少ない。時々見えるのは小さな馬

に曳かせたドッカル（二輪馬車）が鈴を鳴らして走っているくらいのものだ。インドネシア人の交通機関は車夫がペダルを踏むティガロダ（二人乗三輪車）かドッカルしかなく、戦争でガソリンが統制されているため自動車は日本軍の軍用のものしか走っていない。

伏見大尉は向こうから来るドッカルを見つけると、車のスピードを上げてわざわざ傍に近寄ってシューッと音をたてて走り抜ける。長い鞭を持った男が馭者台で慌てて手綱を取直している姿が後ろに跳んでいく。

「どうだった。間隔はどのくらい離れていたかね」

伏見大尉は悪戯っぽくM大尉に訊ねている。

「一尺くらい空いていましたよ」 という返事に、

「じゃあ、よし。今度は五寸くらいに縮めてみよう」

大尉は次の馬車を狙ってスピードをあげていく。

敬礼、敬礼、敬礼！

門の前に衛兵が厳しく構えている海軍の無線送信所に車は入って行った。建物の玄関前の、砂利を敷きつめたロータリの広場には、白い服の士官とベージュ色の防暑半袖半ズボンの兵隊がズラリッと二列横隊に並んでいた。

宮様が海軍送信所に向かったという情報がチャンと入っているらしい。

車が止まると士官の一人が跳んで来て、僕の坐っている席のドアーに手をかけた。僕が降りるとウヤウヤしく腰をかがめていた彼は姿勢を正してサッと敬礼した。並んでいる兵隊も緊張した顔つきで号令を待っている。

慌てたのは僕である。

「違います、違います」 僕がソッと彼に言うと、士官は慌てて次に降りてくるU老人に目を移したが、怪訝そうな顔つきである。……宮様はこんな老人ではなかった筈だが……と。

「運転席の方が宮様ですよ」 僕が彼に教えると、士官は肝を潰したように驚いて運転席のドアーにとびつき、扉を開けると直立不動の姿勢で宮様が車から降りてくるのを待った。



伏見大尉は大きなヘルメットを阿弥陀に被って、運転台の下に手を差し込んで何やらゴソゴソやっていて、なかなか腰をあげない。

大尉は、士官が待ち草臥れた頃やっと降りてきたが士官の敬礼に軽く会釈すると今度は自動車の前に回って、エンヂンカバーを持ち上げ首を突こんで何やらいじり始めた。

緊張した兵隊の列が痺れを切らした頃伏見大尉は玄関口にやって来て、大声の号令でサッと行われた兵隊の敬礼を受けた。

我々4人は応接間に通されて暫く休息した。なるほど伏見大尉はただの軍人らしくM大尉とざっくばらんな調子で話をしている。

体を堅くして控えていたこの送信所の隊長は話の切れたところで、「では所内を御案内申し上げます」とひどく鄭重な態度で宮様に言上した。

伏見大尉は軽く手を振って、「ああ、俺たちは専門家だから見なくてもいいんだ。この国際の人に見せてあげて呉れ」と言って振り向きもしない。

Uさんと僕の二人は案内の士官に先導されて長い廊下をシズシズと進み、大きな送信機がずらりと並んだ機械室を上品に歩きまわった。先導の士官の歩き方があまりにもギコチないので、こちらの方までおかしくなって、例のやんちゃ皇太子の歩き方になってきて、歩き難いことおびたしい。

実を言うと、僕はこの海軍の送信所は前に一度来たことがあり、中も見せてもらった事がある。同じ無線通信業務をやっている民間会社の一員として見せてもらった訳だが、その時の余りサービスの良くなかった待遇に較べると、今回の扱いはイササカ極端に違い過ぎて尻がこそばゆい思いである。

我々が所内の端から端までゆっくり案内された後応接間に戻ってくると、二人の大尉はすぐに腰をあげて、玄関に向かった。

「さぁ、次の所に出かけよう。ぐずぐずしていると日が暮れちゃう」

玄関前で再び兵隊の列に送られて車に乗ると、

「飛ばすぞー」と伏見大尉は張切っていた。

次に行った無線方位測定所では、既に電話連絡が先回りしてあったとみえ、出迎えの士官は僕の坐っている後部坐席には目もくれず、専ら運転席のデブさんに注目しており、車が止まると真っ直ぐに運転席のドアにとんで行った。

方位測定所は広い原っぱの中のインドネシア人の部落がパラパラッとあるまばらな林の中にあった。チャチな木造の塔が建っていて、中は階段だけのガランドウの部屋に小さな送信機が在るだけだった。

電波障害で電波の方向が狂っては困るので、建物は釘一本使っていないという金属恐怖症の木造建築物なのだと、下士官が説明してくれた。設計者や大工さんが苦労したろうと同情する。

見学の方は塔に登って降りるだけで簡単に済み、すぐ次の施設に向かった。

次の場所は連絡がもう既に伝わっているものと思っていたのに、さにあらず、海軍の通信設備が完備していないのか、僕は再び高貴なおん方と間違われる騒ぎとなった。

あの不細工な運転手が宮様であり、白の防暑服姿もスマートな僕が単なる一般市民である事を、泡を食っている隊長さんに説明しなければならなかった。

伏見大尉はM大尉を彼の宿舍まで送り届けた後、我々を会社の宿舍の表通りまで送ってくれた。

「チョット寄って、コーヒーでもお飲みなって休憩なさっては」

僕が挨拶がわりに言うと、彼は運転席で手を振りながら、

「不味いコーヒーは結構だよ」と、サッサと車を走らせて行ってしまった。

僕が宮様と間違われた話は、兵隊たちの口から拡がったとみえて、僕が行くあちこちで話題になり、当分のあいだは仕事相手の兵隊たちや、会社の仲間から、からかわれたり、冷やかされたりしていた。

そして、それからしばらくたった或る日。

僕は夕食後のひととき、宿舍のポーチで長くなって、煙草をふかしながら涼んでいた。その時技術部長のKさんが外から戻って来たが、僕を見るとそのまま、真っ直ぐに僕のところに寄ってきた。

「大事件が起きたの知ってるかい」とソーッと囁やく彼に、僕が首をふると、

「極秘の話だけれど、偉い人が飛行機事故で亡くなったよ」と言う。

「また、司令長官がやられた」僕はキョトンとして尋ねた。

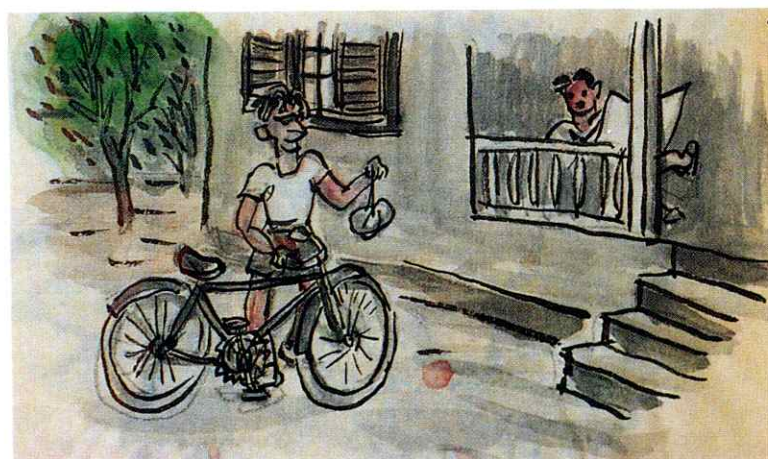
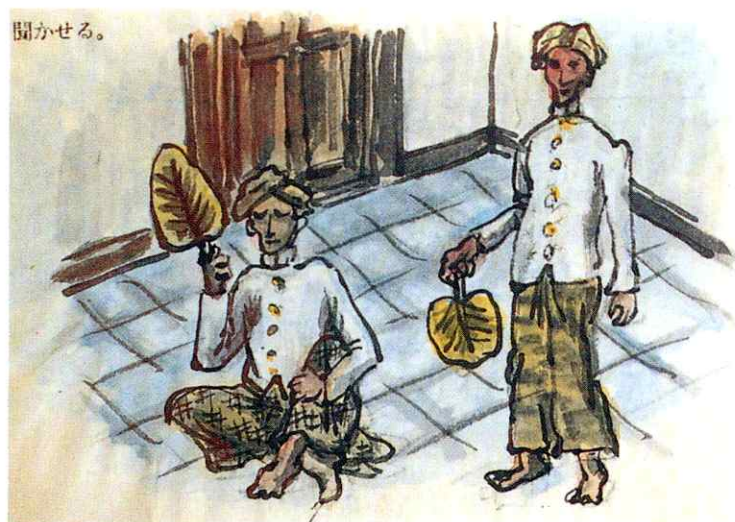
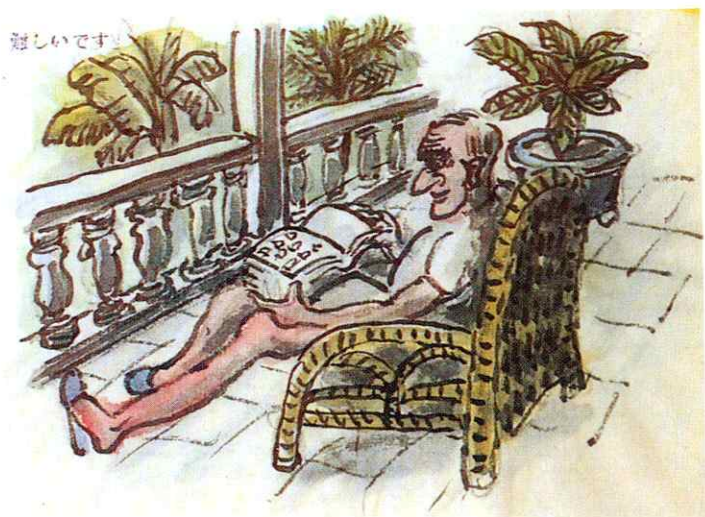
「いやいや、そうじゃ無いんだ。君が知っている人だよ。……君が最近会った高貴なおん方だよ」

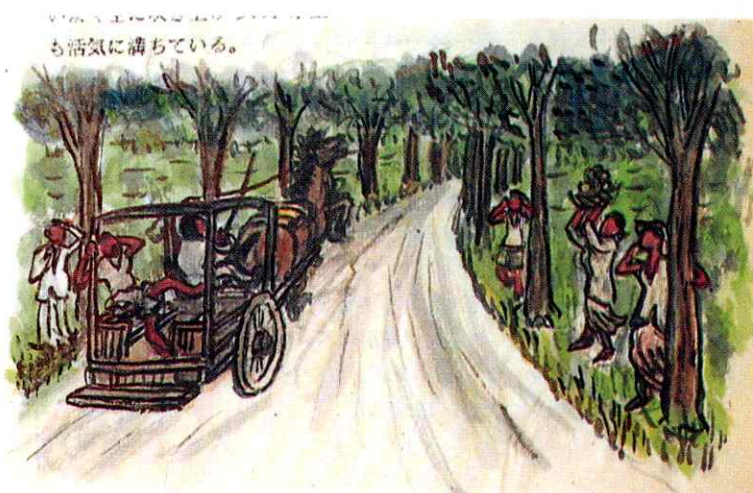
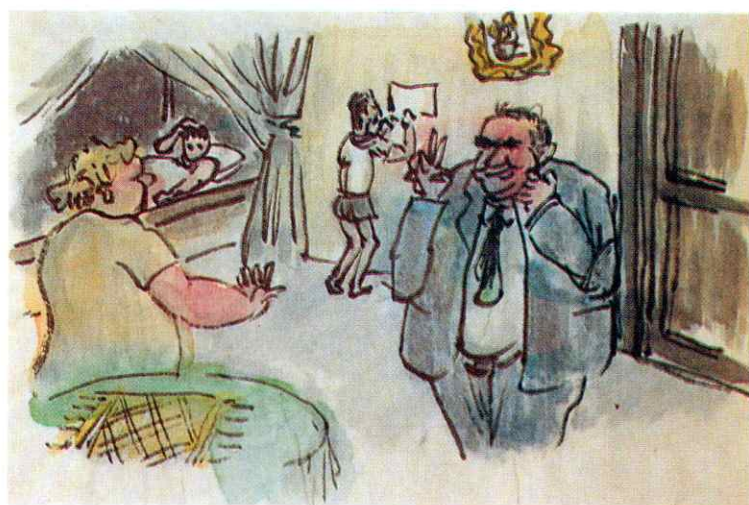
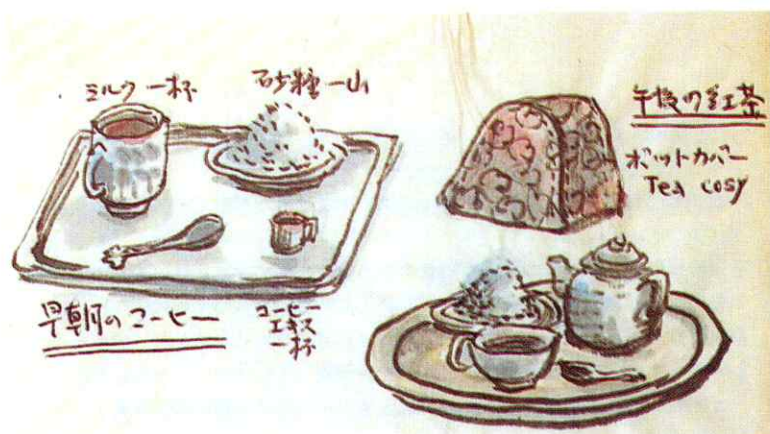
Kさんは僕の耳もとで声をひそめて話出した。

伏見大尉は我々と会った後、スラバヤからアンボンに飛び、その後マカッサルに向かったが、途中のケンダリーの飛行場近くで追跡の敵機に撃墜されたと言う。

敵は日本海軍の無線通信の暗号を自由に解読していたので、宮様の行動を手取るように握っていて、常にチャンスを狙っていたらしい。

伏見大尉はボルネオからスラバヤに来たのだが、その時も敵機に追跡されたので、わざわざジャカルタ辺りまで迂回してジャワ島の陸上を飛来したと僕は聞いていた。





山の要塞

マリノの山

僕はT兵曹に案内されて山の工事場を見に出かけた。T兵曹が先にたって登って行った山道は、マリノの別荘村から更に尾根を登った道で、自動車も通る道だが急な坂だった。

丸々とした童顔のT兵曹は小肥りの体だが、さすがに兵隊だけあってこの坂道を苦もなくスタスタと登って行く。僕はその調子には付いて行けず時々休んではあたりの景色を眺める。

この辺りは僕にとっては1年ほど前に独りで歩き回ったことのある懐かしい場所である。遥かに高い山々につながっているこの尾根道は左側が草に覆われた緩やかな傾斜で深い谷に落ちこんでおり、右側は大きな木が蒼黒く繁った密林になった谷である。

僕が野性の大鹿に出会ったのは確かこの辺だったと、あたりの草原を見わたした。

その時僕は蕨採りに夢中になって草の中を屈みながら進んでいた。突然物音がしたので、身を起こすと目の前数メートルのところに大きな枝角をつけた大鹿がジーッと僕を見つめていた。アッと驚いて対持した後、鹿は忽ち草の波の上に跳んで谷底に消えて行った。

T兵曹が思いがけない処に立ち止まって密林の中を指差している。

「このジャングルの中の沢を下って下の方の谷川に出るまでの間が、我々の工事場です。まだあちこち洞穴を掘っている段階ですが、この山全体では随分沢山穴を掘っているようです。こんなにシーンとして人っ気が無いようですが、このジャングルの中には相当の人数が入りこんで仕事をしているんですよ。私もあまりよくは知りませんが山は穴だらけかもしれません」

T兵曹は明るい山道を離れて右手の鬱蒼と繁ったうす暗い森の中に足を踏み入れた。道らしい道もない岩がゴツゴツした急な坂を木の根や岩角に掴まりながら下って行く。沢には水は無いが地面はジメジメと湿っており、周囲には宿

り木が密生したひと抱えもある大木が林立して、梢を見上げても空も見えない。

沢に面した山の急斜面にはあちこちに洞窟掘りが進んでいる。

「あの穴が送信所の予定、ずーっと先のあの穴が通信所です。下の方に見えるあの穴は発電所造りの工事場です」

T兵曹は岩だらけの急斜面を用心深く左右に渉り歩きながら朴訥な口調で説明してくれる。



僕がこの前マリノで一週間ほど過ごした時は、広々とした高原の別荘群が建並んだあちこちを歩きまわったが、こんな近くに深山幽谷のようなジャングルがあることは知らなかった。

マリノの山はマカッサルの街から広い平野を東に50 kmほど離れた山岳地帯の中腹にある標高1000 mの、熱帯地方とも思えぬ涼しい高原である。

戦前のオランダ時代は熱帯の暑さから逃れて別荘で過ごす、日本で言えば軽井沢といった避暑地だったのだろう。しかし、この前僕が来た時はしゃれた別荘群は全て空き家で人っ子ひとり見かけなかったものだ。

ところが今度来てみると、マリノじゅうの家はギッシリ人や物で埋まっている。兵隊や工事関係の人々の宿舎や兵器・弾薬・食糧・機材の倉庫になっている。

たり、病院や酒保に衣替えしている。

天下の形勢がすっかり変わってしまっているのだ。

アメリカ軍は太平洋の島々を渡り石のように渡って来て、ニューギニア・モロタイ近くまで迫ってきており、我々の居るセレベス島のマカッサルも敵の上陸に備えねばならなくなって居るのだ。

マカッサルの司令部はその時に備えて、このマリノの山を最後の抵抗の拠点とするため、山の中に洞窟を掘ってあらゆる設備を移つそうと考えているらしい。

掘られている洞窟はどれもこれも工事が始まったばかりの様子で、土木関係の日本人の姿も見えるが、大半はザンバラ髪にボロをまとった現地の山の住人が働いている。彼らは超スローモーのゆっくりした動作で岩のかけらや土をザルに入れて穴から運び出しているが、近代的土木機械など見あたらないから、もっぱら人力一点張りで岩を砕き土を掘って掘窟工事を進めているらしい。

暗くて長いトンネルがあった。所々にあるカンテラの灯を頼りに、狭くて低いトンネルを抜けると、先は別の谷に開いていた。

「この辺は洞窟工場になるんだそうです。兵器製造や修理の工場・倉庫・病院・厨房まで出来るって話です」

T兵曹は谷を下り山を登りしてジャングルの中をあちこち案内してくれるが、僕は何処をどう歩いているのかサッパリ見当がつかない。

いつの間にか森の中を抜けて再び明るい尾根道に出たが、そこは最初にジャングルに踏み込んだ場所が、遥かに下に見える高い山道だった。

感 電

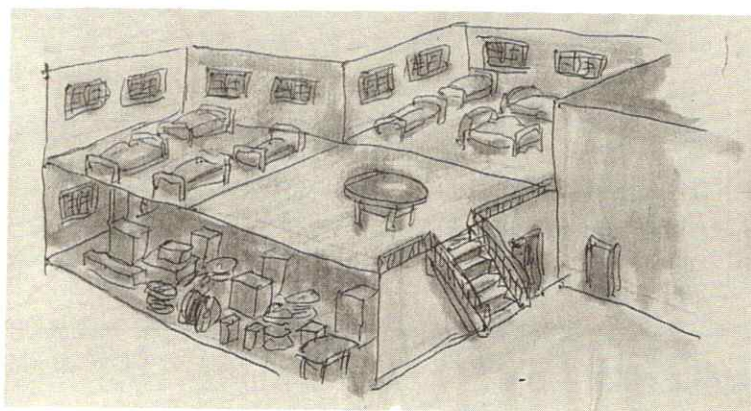
マカッサルの海軍司令部の通信隊からは、T兵曹を長として兵隊や軍属が10名ばかり、この山の工事のために派遣されて来ていた。

彼らは谷に面した崖の近くにある、美しいプール公園を前にした大きな別荘を宿舎にしていた。この家は以前は支那人でも住んでいたのかチョッと変わった大きな家である。道路から樹の多い前庭を通して、建物に入るとすぐ大広間

になっており、その奥は二階まで吹抜けの部屋で、そこから広い階段を登ると二階は明けっ放なしに続いたような部屋が三つあった。

今では階下の広間はまるで倉庫のようにマカッサルから送られて来た送信機・受信機・線材・機器・工事材料が足の踏場も無いくらいほおり込まれている。奥の部屋は若い兵隊がいつも炊事をしたり食事の用意をしたりする台所兼食糧倉庫のようになって居る。階段を登ったすぐの広間は大きな丸テーブルを置いて食堂として使い、その奥の二部屋はベッドを並べて兵隊や軍属の寝室になっていた。

広間の機械類はあちこちからかき集められて送られたものらしいが、壊れているものは修理し具合の悪いものは調整して、やがては山の洞窟の中に据え付けて電波を発射出来るようにするのがこの兵隊や軍属の仕事である。



実は、僕も会社から命ぜられてその仕事の応援のためにこの山にやって来た訳だが、僕はKとSの二人の若い会社の仲間を連れて山に登って来た。

会社からは大学出の若手の技術者を連れて行くように言われたが僕はそれを断った。人里離れた山の中での条件の悪い仕事を、兵隊相手にやるにはヒョロヒョロした優等生ではとても持つまいと思ったからである。

Sは修理課で働いている心臓のタフなガラッパチで、Kは受信所に勤めてい

る機械いじりの好きなボーヤだが、鎌倉丸の遭難で漂流数日、生き残った男である。どちらも大抵の事では簡単にへこたれそうもない若者なのだ。

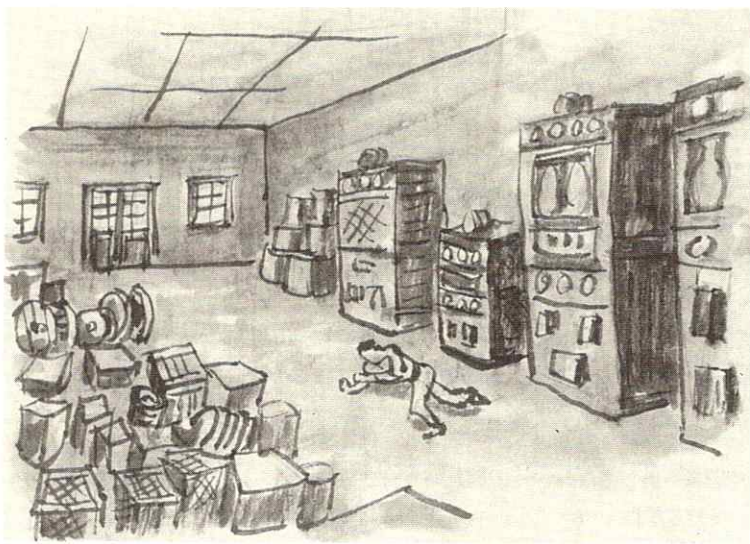
我々三人はマリノの別荘群の中で一番高い場所にある会社の『山の家』に泊まりこんで、其処から毎日テクテク歩いて下の方にあるプールわきの家まで通って機械いじりをやっているのだ。

広間にギッシリ置かれた送信機に次々と電気を入れて仮アンテナを張って電波を出してみた。簡単に働き出す機械もあれば、ご機嫌斜めであちこち修理に手間を喰うものもある。道具や部品の揃っていない山の中なのでガラクタの中に部品を捜したり、どうしても手に負えずマカッサルに部品を手配するものもある。手直し修理も容易で無いが、あれこれ工夫して仕事はどうやら進行して行く。

仕事が順調に進行している時は、この広間の中は人っ気がないように静まりかえっていて時々、スイッチを入れたり切ったりする音だけが聞こえてくるだけである。

この静まりかえた中で突然バーンと大きな音が響き大部屋じゅうにこだました。うす暗い部屋の中がバーッと明るくなって青い火花が飛んだ。

警報のベルがジャリリーンリーンとけたたましく鳴り響いている。



僕は部屋の奥まった処で仕事をしていたが、慌てて広間の送信機のところへ跳んでいった。黒い大きな送信機の前にK君が長くなって倒れていた。

左手の肘を右手で押さえたまま、目をつむって動かない。抱えおこすと日頃でも色白の彼は蒼い顔をしかめて腕の火傷の跡を示した。命に別状がないと判ってホッとした。

ドヤドヤと駆け集まって来た兵隊たちの手で彼はそのまま病院に運ばれていた。抱えられながら自分で歩けるようだから大した事はない筈である。

我々の仲間は誰でも2度や3度は感電して火傷をしている。僕もこの山に来てから何度か指先を軽く焼いたが、恥ずかしいのでKやSには内緒にして黙っている。

送信機を調整していると、何千ボルトの高圧のスイッチを切っては機械の中に手を差し込んで調整し、スイッチを入れては調整して、同じような動作を繰り返している訳だが、だんだん面倒くさくなってくる。

用心すれば大丈夫とばかり、スイッチを切らずに生きた高圧の線をいじったりするが、これも何度も繰り返すうちに段々とおかしくなって、高圧が生きている事を忘れて失敗する。

しかし感電する場合は大抵用心している指先の方ではなくて、反対側の手の甲や肘などがアースに触れては失敗することが多い。

エレキは正直である。電気はアースに触れた最短ルートを瞬間的に走り抜けて行く。

水 力 発 電 所

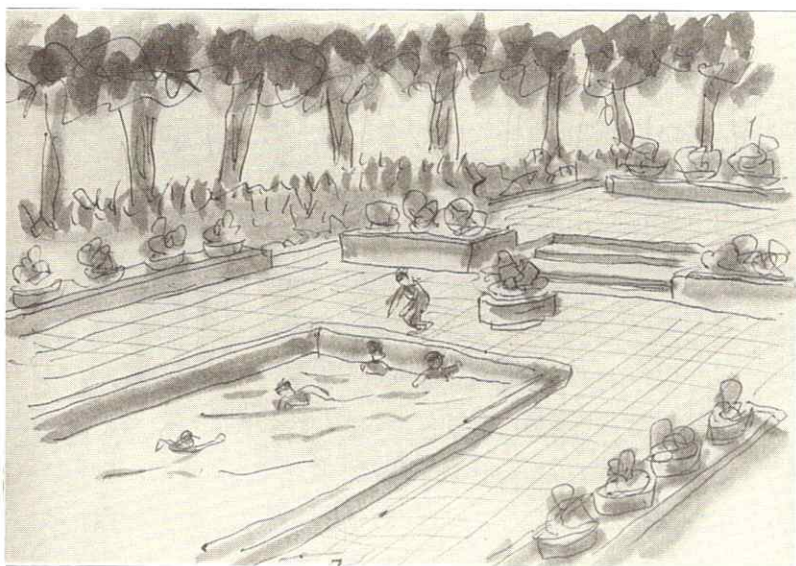
兵隊たちの宿舎の前の小公園にあるプールは25mくらいの大きさだが、周囲は奇麗に飾られ、高級庭園風の花の植木鉢が並び、磨きのかかった大理石の床や階段がいささかベルサイユ宮風である。

以前は別荘族の美女たちが派手な水着で社交を楽しんでいたのだろうが、今では訪れる人もなく、もっぱら兵隊たちの宿舎の若者たちが毎日利用しているだけである。

プールは大きなパイプからきれいな水が常にコンコンと注がれている。マリノの水道は山の奥の清水から引かれているので、朝など顔を洗うとき歯に染みるほど冷たい水である。

その冷たい水のプールなので、僕も泳いでみたが、汗を流すどころか背中に氷を背負っている感じで震えあがってしまう。

マリノは標高千メートルの高原なので、陽の輝く日中ですら暑さをあまり感じないのに、若者たちは一日の仕事が終わるとプールに飛び込んでひとしきり水遊びするのを日課にしている。仲間で競争しているらしく、雨の日の寒さの中でも震えながら泳いでいるが、庭の隅にはドラム缶に湯を沸かして、プールから唇を紫にして駆け戻ると、ドラム缶風呂にとびこんでいる。



プールの水はすぐ傍の谷の崖下数十メートルの場所に在る小さな発電所に落されている。要するにこの綺麗なプールはマリノの別荘村の電気を賄っている発電所の水車を廻すための水源用プールとして造られているのだった。

なるほど上手く水を利用したものだと感心する。

発電所は崖の途中にへばりついたような小さな石造りの小屋で、ジメジメした林に覆われ、古びて苔むしているが中にはガッシリした3kWくらいの発電機が2台並んでいる。

インドネシア人の電気係が一人いるが、
「私は電気は何も知りません。教わった通りに決められた時刻にスイッチを入れ、または切り、決められた通りに発電機を切り換えて使うのです。その外の事は判りません。この発電機はドイツ製で据え付けてから20年、まだ一度も修理せずそのまま動いています。故障になった時のことは考えておりません」
だと。

以前は数十軒しか住んでいなかったこのマリノも、今では兵隊や工事関係者がギッシリ入りこんだので、電気の需要は急速に増えて我々の仕事場で無線機を働かせると、ヒューズがとんで村じゅうの電気が停まってしまう騒ぎがチョイチョイ起こるようになってきた。

停電騒ぎが起きるたびに、T兵曹はインドネシア人電気係を走らせて応急処置を取っていたが、いつの間にかマリノじゅうの電気はT兵曹がコントロールするようになってきた。

彼はマリノじゅうを駆け巡って、あちこちに在る病院・施設隊・ホテル・警備隊と交渉して、その電気使用を自由にコントロールしている。T兵曹は長年兵隊の飯を食ってきたベテランだけに、色々な手を巧みに使って、マリノじゅうのうるさい各部隊をうまく手なずけてしまっているらしい。

T兵曹は新潟の山奥の出身で丸々した童顔が人懐っこく、我々にものを言う時もオドオドした訛のある朴訥な喋りかたをする。それがいかにも魅力的だが、兵隊の中では見た目は老けて見え、その世慣れたいや兵隊慣れのしたようすはまさにベテランである。

山の仙人たち

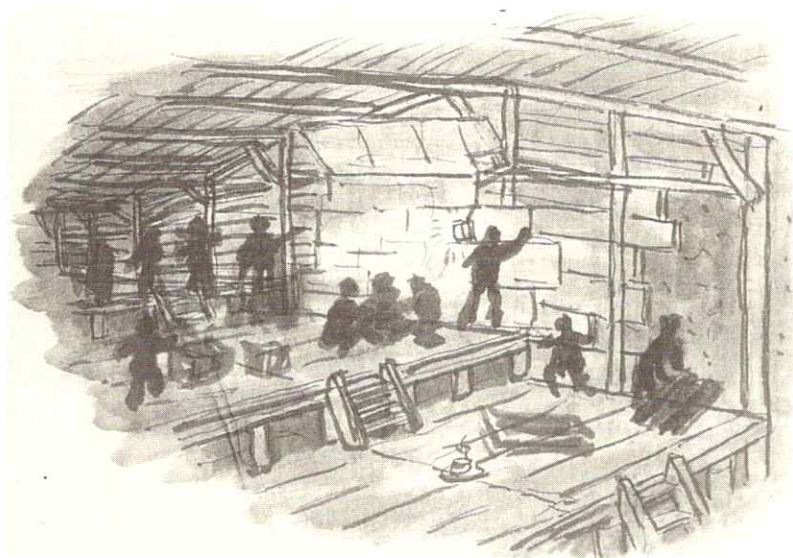
山の穴掘り工事がある程度進んでくると、我々も山登りが忙しくなってきた。今まで静かだった山の中も大勢の人が出入りして、うす暗い傾斜の急な岩だら

けの沢にも、ひとりでに踏み固めた人の通る路が出来て、銀座通りとまではいかないが人影がチラチラするようになってきた。

山の奥には製材の設備も出来て、太い丸太や厚い板材を切りだす電気鋸の音が喧かましく響いている。しかし洞窟の方は相変わらず真っ暗な中で、カンテラを頼りに手掘りをやっていて、ボロをまとった山の仙人たちが箆に入れた岩のかけらや泥土を、穴の中からモッサリモッサリと表の沢まで運び出してノンビリと捨てている。

穴掘りのすんだ洞窟には大工さんが入って、炭鉱の坑道のように太い丸太で梁や柱を組んで、天井や壁には土砂止め板材を張っている。

洞窟は入口と出口のあるコの字型の穴だが、山の急斜面に掘られているので洞窟の中は傾斜している。大工さんはこの地面に、傾斜に合わせて階段状の床を張る訳である。



我々は毎日工事材料を少しづつ山の洞窟まで運び上げている。
テクテク歩いて山道を登ったり、時にはトラックの荷台に乗せてもらったり、
時には馬に跨がって山登りをする。雨の日はカッパを被り、ズルズル滑る沢道
を登り降りした。現場に行きつく迄がひと仕事である。

我々の山への出勤はいつも後ろにゾロゾロと付いてくる山の仙人たちと一緒に
である。我々は毎朝仕事に連れていく人夫たちが集まってくる場所で待ち合わ
せしたが、山の仙人たちは何処からやって来るのか、山の蔭や森の中からポツ
リポツリと現れて来てノッソリノッソリと集まってくる。どんなに時間に遅れ
ていても急ぎ足で来るような男は一人もいない。イライラと顔が揃うのを待つ
のはいつも我々である。

僕は山に出かける時、手製のスケッチブックを抱えて行くことにした。顔振
れが揃うまでの間、僕は道端の岩に腰をおろして面白そうな仙人の顔や姿を片
っぱしから描きまくるのである。

これは上手い方法であった。アッという間に時間がたって『顔が揃ったから
出かけよう』とマンマンデーの仙人たちから催促されるようになった。

浮世離れた仙人たちも、僕の可笑しいスケッチには興味があるとみえて、
描き始めると黒山のようにタカッて来て、肩ごしに臭い息を吐きかけながら盛
んに批評をオッシュャッている。彼らの使う山の言葉がさっぱり判らないのが幸
いである。

山の仙人たちはどれもこれも、雀の巣のようなバサバサ髪を肩まで垂らし目
鼻がどれか判らないくらい皺だらけの顔で、垢と汚れでまっ黒な骨と皮の体に
雑巾のようなボロ布を肩や腰にちょっとまとっただけの姿である。支那の絵に
よく出てくる寒山・拾得か地下道に寝ているルンペン乞食をもっと栄養不良に
したような方々である。

僕のスケッチの腕ではあまり紳士風の整った顔は上手に描けないので、仙人
の中でも特にうす汚いボロ仙人を選んで、木の根っこか岩のかげらのように描
くと、周りの仙人たちの御批評はよく似ていると好評のようである。

仙人たちの中でひととき目立って汚なく、目やにをたらし、デキモノだらけ
の足をした、顔全体がクシャクシャと皺だらけのボロ仙人は、何度となく僕の
前に坐るので僕のNo.1モデルである。

スケッチもこの仙人に関する限りスッカリ堂に入って、自分でも上手く描けると気に入ってくる。他の仙人たちもこれを認めて、このオンボロ仙人は僕のチンタ（愛人）と言う事になってしまった。

「ホラホラ、トアンのチンタがやって来ただ。今日はバカに遅かっただが、何をグズグズしてたんだべーか」なんて僕をカラカウ。

この辺りの山坂道を馬賊のような馬の群が砂煙を上げて駆け抜けて行くのを時々見かける。煙草や砂糖や山の産物を背にした数十頭の馬を曳きつれ裸馬に跨がった陽焼けで黒光した半裸の精敢な若者たちである。

我々と行動を共にしている、この気の遠くなるように動作の鈍い仙人たちも、かつてはカーボーイかコサックのように巧みに馬を馭して山野を駆けめぐった逞ましい男たちだったのかもしれない。

彼らは税金代わりに賦役として山の工事に、塩や食糧を目当てにノコノコとやって来るのだろう。元気のいい若者たちはこんな仕事に出てくる筈もないから、体の自由のきかないどこか具合の悪い連中だけが集まって来て居るのだろう。

本物の將軍

我々が宿舎にしている会社の『山の家』から道ひとつ隔だてた隣に、谷間に臨んだ崖のうえに見晴しの良い別荘があるが、今ではこれが『水交社』になっていた。水交社とは海軍士官たちが食事や宿泊や集会などに利用するクラブ組織らしいが、海軍のあるところ何処でも見かける施設である。

ここマリノの水交社も避暑や保養のために設けられているのだろうが、この山の中では訪れる軍人も滅多になく、もっぱらうちの会社の連中が一番利用させて貰っているらしい。

うちの会社では『山の家』に据え付けてある連絡用無線送受信機を保守するという名目で年中誰かがこの山の家に寝泊まりしているからだ。

僕は一年ほど前にこの『山の家』で一週間ほど過ごした事があるが、その頃はまだ『水交社』は無かったので、毎日、三度の食事のため馬に乗って坂の下

の方にある唯一のホテルまでテクテク通ったものである。

現在我々三人・KとSと僕は、三度の食事をいつも客のいないガラーンとした水交社の食堂で世話になっている。

水交社の親父はたった独りの日本人で且つ腕ききの板前さんらしいが、我々3人相手では腕の振るいようが無く、もっぱら我々とのオシャベリを楽しみ、これまでに知り合ったうちの会社の連中の名を挙げては懐かしがっている。

崖の縁に建っている水交社の食堂は、窓越しに眼下に深い谷を見下ろし、遙かに遠くの山や谷を見渡せる一級の部屋である。

いつ行っても人っ気のない立派な部屋で、白い布のかかったテーブルに向い、黒塗の膳に料理屋風の上品な碗や皿小鉢に盛られた日本風の食事……これでは南の島の山の奥のしかも、最後の場合に立て籠もるべき要塞工事の工事場通いをやっている男たちとしては、まったくのところ格好のつかぬ妙なもので、何だか別の世界に紛れこんで居るような感じである。だから時々具合の悪い事も起こってくる。

ある夕方、いつもの調子で工事場からの帰りに賑やかに食堂に入って行くと、開襟シャツに陸軍中將の記章をつけた老人が独り静かにテーブルに坐っていた。

我々三人は工事帰りの泥も幾らかついた作業服姿なのでどうにも少々気がひけたが、仕方がないので、いつもと変わって、いともおとなしく食事をした。

陸軍中將も気になると見えて、チラリチラリと我々に目を向ける……。『ガラッパチで不作法な、軍人でも無いらしいこの若造たちは一体何者なんだろう……？』といった顔つきで独り黙々と食事していた。

食事がすんで果物も終わったところで、Sが僕に向かっていつもの調子の大きな声を出した。「さーて、帰ろうや。將軍！」

僕は会社の仲間からは『將軍』という愛称で呼ばれているのだが、Sの声を聞いた陸軍中將閣下はビックリしたように食事の手を止め、顔をあげて我々の方を見た。

「うん、帰ろう」僕はつとめてさりげなく軽く返事して席をたったが、中將は怪訝そうな顔をしていた。

「バカだなーおまえ。大きな声で將軍だなんて、本物の將軍がビックリしてたじゃないか」

食堂を出てからSを詰ると、彼は口をすぼめて尖らすいつもの癖をやりながら、「ほほう、あんな爺さんが本物の将軍かい」と照れていた。

この将軍はそれほどの爺さんでは無かったが、病氣上がりの体をこの山に静養に來ているとことなく寂しげな影のある老人だった。ニューギニア方面のある地区の司令官であり、ある地区の参謀長も兼任していると言う珍しい現役の将軍であると、水交社のオヤジは言っていた。

将軍は食堂で毎回顔を合わせているうちに、すぐに我々とも親しくなって、暫くすると我々の『山の家』に毎晩遊びに來るようになった。

我々の山の家には階下の広間には大きな送信機が一台据え付けてあり、二階の部屋には短波受信機が置いてある。

F中將は日本からのNHKの海外放送を聞くのが楽しみで毎晩やって來るのがあった。F中將は無類の話好きで毎晩12時過ぎまで話続けた後、夜の闇のなかを杖をつきながらゆっくりと水交社に戻っていった。

F中將が次々と語る話は、これを纏めるだけでも数百ページの量になるくらい、我々の知らない世界の珍しくて面白い話の連続だった。

彼は士官学校や陸大の教官をやり、ドイツ駐在武官・航空隊の司令・航空学校校長といった経歴の持ち主だった。

しかし我々の前に現れるF中將は、そんな偉方の厳めしい将軍ではなく、街の何処でも見かけるようなザックバランな親父さんである。勿論我々の方は四角ばった物の言い方を知らぬ輩だから、気楽に親父相手のおしゃべりをして面白い話を楽しんでいた。

彼の話の中には皇族方の話もよく出てくる。

〇〇の宮はお酒が好きで、〇〇の宮はめっぽうお強いとか、天皇様はその時どうされたとか言う話がよく出てくる。

「〇〇の宮は教室の中で絶対姿勢を崩さない方でね、他の学生が困って居ましたよ。軍の学校は肉体訓練が激しいのでチョイチョイ居眠りする学生が居るんです。その連中が宮様に醜態を見られるのは具合悪いって、こぼしていましたよ」

駐在武官をしていたドイツの話もよく出てくる。ドイツ陸軍大演習を観戦する各国武官が国境の原野に列を作って立小便する話。

「白人の社会では軍人が紳士の典型ですが、戦争ゴッコの原っぱでは便所なんか勿論ないから、丘の端から戦況でも眺めているような顔をして一人が始めると次から次と並んで立小便です。そしてお互いに顔を見合わせてニヤリとするところなど、国と国の男の付き合いですよ」

その原野の真ん中で、ドイツ高官夫人のオシッコを各国武官が背中を向けた輪になって、兵隊の目から守ってやる話。

「長い外套の壁をつくり、真面目くさった顔をして脚を開いて腕組みして立ち並ぶ各国武官を想像してごらんよ、ウァファハハ……♪」

国境に独ソ両国が兵力を集中し一触即発の状態の時、各国武官が互いに酒を飲会いながら必死に情報を探り合う話。

そして親しくしているある小国の武官がそれとなく、何度も妙なヒントを囁いてくれたのに、それにピーンと気付かずに、独ソ開戦必至の第一報を参謀本部に叩き込む事に失敗して、酷く叱られた話。中将閣下の話は一つのヒントから次々と発展して際限なく続くが話の種は尽きない。

勿論、彼が参加した大東亜戦争の各戦線の話は出てくるが、ニューギニアの苦労話は、まだあまり生々しいせいか、またあまり華々しい話でないせいかほんの時々しか出てこない。



F中將が大東亜戦争の有名な将軍たちの名を呼ぶのを聞けば、東条以下すべて呼び捨てである。そのなかで唯一人、山下奉文将軍にだけ閣下を付けて彼が呼ぶのを聞いて僕は妙に思ったが、あえて理由は訊ねなかった。

彼は特に東条については、憎しみを以て呼び捨て、何かにつけて、異常なまでに非難攻撃した。ニューギニアで待ち焦がれた輸送船が武器弾薬の代わりに嗜好品など送ってよこしたと、東条を激しく罵る。

F中將が、NHK海外放送のなかで最も関心を以て聴くのは航空部隊活躍のニュースである。そして航空部隊戦死者の名が放送されると、F中將はそのたびに瞑目して掌を合わせ、深々と礼拝していた。

戦死者の一人一人が、かつての彼の教え子であり、かつての部下であったのだ。

ライター

「私は山形県の山奥で木伐りをしていたのですが、徴用されてからもう五年になります。木を切る仕事は好きなので苦になりませんが、どうも戦争がうまく行っていないようで心配です。日本は大丈夫ですか」

洞窟の奥で丸太の柱を切ったり、板を壁に張ったりしているショボショボしたおっさんが、休み時間に我々のところに来て話こんでいく。

シモスモキもみんなチのように聞こえる東北訛のこの人は土木工事や建築などやる施設隊で集団生活しているらしい。物腰し動作も物の言い方もスローモーションなので老人のように見えるが、それほど歳のではないだろう。

煙草を差し出すと貴重品でも貰うように「日本の煙草でしね、もったいないもったいない」と押し頂いてなかなか喫おうとしない。マッチを渡すと「マッチが有るんですか、マッチは大切なものだから、煙草の火を下さい」と言ってマッチを使わない。

我々もマッチは配給なので滅多にお目にかからないが、ライターがあるので別に不自由は感じていない。それにすぐ湿って火の付きにくい日本製のマッチは有り難さなど感じていないが、この人たちはそのマッチの火にも不自由して

いるのかもしれない。

我々はマッチの代わりにライターを頼りにして暮らしているようなものだが、インドネシアの街々の波止場や盛り場では、日本人を見ると子供たちが蟻のようにタカッテ来てライターの石を売りつける。何のことはない、針金をペンチで押し切ったような粒々を幾つか紙に包んだだけの代物である。

日本人は旺かんにこれを買うが、やっぱりこれが無いとライターが役に立たないからしょうがない。

大概の日本人は変わったライターを幾つか持って自慢している。銀製・黄銅製・大型・小型・細かい彫刻のある美術品級の高価な豪華版から、機関銃弾の薬莢に作りつけた変わった物や煙草ケース・置物など色々なライターがある。

油不用の橙色の火縄をブラブラ下げた安物のライターは街のどこでも売っている。これは風が吹けば吹くほどよく火がつくので、船の上や戸外で使う時はガソリンライターより遥かに役立つ便利なものである。

街ではポケットに燧石（火打石）を持って歩いているインドネシア人もいる。これは握りごろの木片に鉄片が埋めこんであるだけの代物だが、これを石ころとカチンカチンやって火をだす。火を出すのは簡単だが、その火を灯芯かモグサのような火種に移すのが難しい。

会社の戦場では、ライターが上手く付かない時など、インドネシア人職員がニヤニヤしながら、『燧石』と『ライター』で火つけ競争をやろうと挑戦してくる。

このマリノの山の住人たちは割竹で火をおこす。50cmの長さの二つに割った枯竹を、ひとつを地面に伏せもひとつはひっくり返して、背中合わせに十文字に擦り合わせる。5・6回擦るとすぐモグサに火がつき、火種をフウフウ吹きながら枯葉などに移して、たちまち大きく火をおこす。

我々が同じことを真似ると、腕が痛くなるほど擦ってもサッパリ火がつかないから不思議だ。

山の住人が持っている素晴らしいライターがある。

鹿の角の先端で作ったパイプ様の物の中心に穴を彫り、この穴に水鉄砲のように軸を叩き込むと、軸の先端につけたモグサに火がつくのである。

軸をソロソロと引き抜いてフウフウ吹きながらツケ木に火を移すのだ。我々がやるとこれまた相当難しい技術だが、山の住人はいとも巧みに見事にこれで火をつくる。

この鹿の角ライターは穴と軸を隙間なくピッタリと合わせるのが要点な筈だが、精密機械なしの手作りの彼らは軸の先に鞣皮を巻いて唾で濡らしてからポンと叩き込んでいる。

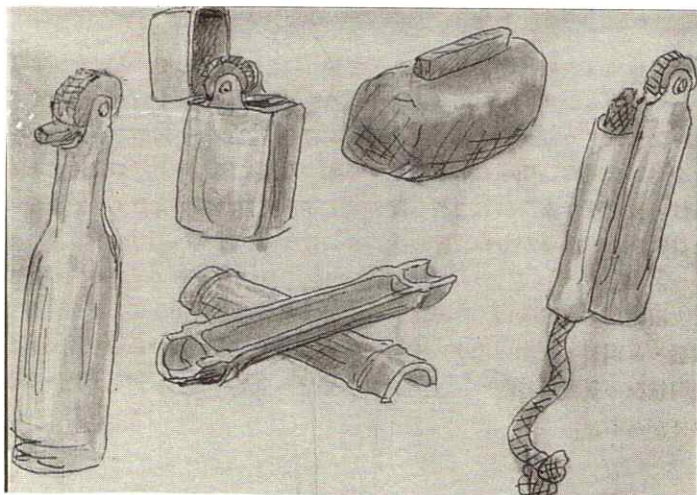
我々の工事場の下の方の沢では発電所が建設されているが、そこのディーゼルエンジンの専門家がこの鹿の角ライターを見て、面白がって調べていた。

穴の直径と長さを計算してみると、ポンと叩き込む空気圧縮気圧は大体3気圧以上になり、火がつくのも道理だわいと感心していた。

ディーゼルエンジンは空気を圧縮して35気圧くらいにすると、圧縮熱が600℃にもなるが、そこに霧状の重油を注ぐと爆発が起こるのを利用して回転力を作り出すというのが原理だそうだ。

ガソリンエンジンに較べると空気圧縮に耐える構造が厄介だが、燃料費が非常に安いというのが特徴だそうである。

鹿の角ライターは誰が考え出したのか知らないが、ボロ仙人のような山の住人が、近代科学の先端の原理を応用した鹿の角ライターを御使用になっているところが面白い。



ブ ラ ン デ ー

山の工事が忙しくなってきたので、『山の家』の住人であるKとSと僕の3人も兵隊たちの宿舎で皆と一緒に食事して、朝から夜まで彼らと行動を共にすることにした。・昼飯も山の工事場で兵隊が運んでくる食事を皆と一緒に食べる。

これは仕事の途中で、我々だけが山を越えて食事のために水交社に戻る暇がなくなった故もあるが、もちろん、電話器事件以来我々だけが別行動をとって一流ホテルの水交社で黒塗膳の食事をしている事が、どうやら気まずくなった為でもある。

兵隊と一緒にの食事はこれまた愉快で楽しいものである。

洞窟が点在している谷間の一隅に、竹と椰子の柱で出来たあずまやが建っているが、そこが我々が昼食をとる絶好の場所になった。あずまやは本職の土木屋さんが自分たちの為に作ったものかもしれないが、ニッパ葺きに柱だけの小屋は案外広く、通り抜けの土間の両側は竹で編んだ涼しい床になっていて、寝泊まりも出来る広さである。

食事は兵隊や人夫が馬でこの小屋まで運んでくる。海軍お決まりの厚くてガッチリしたアルマイトの四角い飯入れ・汁入れに、食器類もお決まりのアルマイトの大皿・中皿・小皿・飯椀・汁椀である。

兵隊の食事はなかなかの御馳走である。

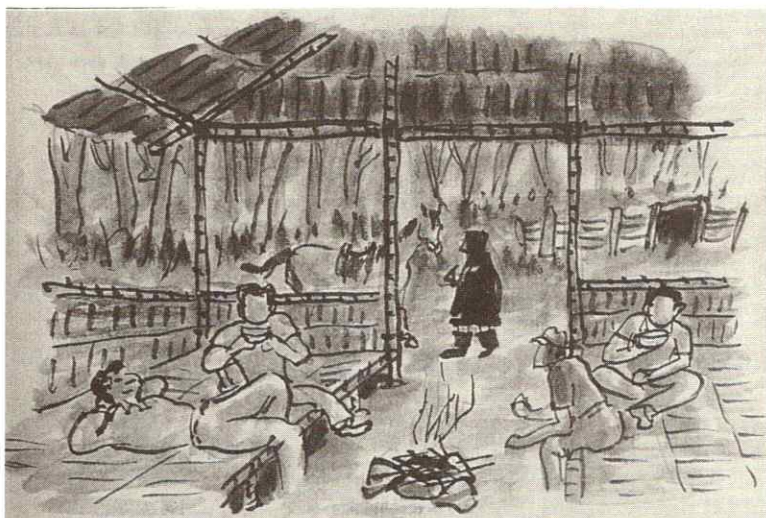
若い兵隊が作る料理なので、ほとんど肉と野菜のごった煮一点張りだが、大根があったり竹の子・初茸・蕨と色々入っている。

特に肉が豊富で豚肉はいつも入っており、鹿・猪・水牛の肉も現れる。とにかく、それが皆美味しい。

大根の茎の浅漬など皆大悦びでお茶漬がはずむ。

「うちの若い者の中に大阪の料理屋で板前の見習いをしていたのが居るんですよ。今まで捨てていた大根葉を見て、勿体ないと一夜漬を作ったのですが、評判がよくてねー」

とT兵曹が説明する。



雨期が近付いたせいか山の中は少々寒い。昼飯時の小屋の中ではいつも火を焚いているが、イカンカユ（乾魚）を焼いたりコーヒーも欠かさない。

涼しい山の中で火を囲んで食べる食事は腹が空いているだけに、幾らでも飯が食えるほど美味しい。

僕も若い者につられて二杯・三杯と飯を食っていたが、兵隊の配給量は相当多いとみえて、いつも洗面器一杯くらい残飯が出ていた。これもT兵曹が活躍する結果、米が豊富なのかしら……。

残飯は近くで働いている山の仙人たちに差し上げるのがいつもの例だが、僕は欲の深い俗仙人を見てしまった。

その日やって来た仙人は、洗面器一杯の残飯を貰うと礼も言わずスタスタと戻って行ったが、仲間の居る谷の方に行かないので変に思って僕は見つめていた。彼は仲間の方には行かずに隠れるように物蔭に行く。仲間から見えない場所に来ると、屈みこんで洗面器の飯を手づかみで食べはじめ、お菜も水もなしにみるみるうちに洗面器一杯の飯を平らげてしまった。

山の仙人の胃袋は相当でっかいものとみえる。驚きである。

兵隊の宿舎での食事でもあるものである。二階にある食堂の大きな丸テーブルを皆で囲んでワイワイ賑やかに競争で食べるのだが、山歩きの後のペコペコの空っ腹だから、飯の3杯や4杯は誰でもペロリッである。

T兵曹はいつも酒の用意を欠かした事はない。

食器棚の上からブランデーの瓶を取り出したT兵曹がドラ声を出す。

「オヤーッ。誰か内緒でチョッピリやったな」

ギョロッと若い兵隊たちを睨めまわすが、勿論これは冗談である。

「今朝ちゃんと印をつけといたんだぞ」

ブランデーの瓶には墨で線が一本ひかれているが、酒は線の上まではいっている。

「ちゃんと酒は入っているじゃないの」と僕が言うと、彼はニタリと笑う。

「この線はね、そんな甘っちょろい付け方はしないんですよ。実はこうしてさかさにしてから印をつけるんです。ハハッハ、ちゃんと入っておる。これは秘密、秘密」

瓶をさかさにすると、ブランデーは線のところにキッチリ入っていた。T兵曹は若い兵隊を見まわして、

「うーん、誰もチョロマカシていないな。お前たち、こんな秘密の線にひっかかるなよ。酒ばかりじゃないぞ。いろんな物に色々仕掛けがしてあるんだからな。気をつけろ」

彼は兵隊たちにそう言いながら、皆の湯飲み茶碗にブランデーを注いでまわる。

「おやっ、酒の肴らしいものが無いじゃないか。若い奴は気がきかねえなー。よーし、しょうがない。皆チョット待てやー。病院の賄いの兵曹さんところから、何かせしめて来るから」

T兵曹はうす汚れた戦闘帽を壁から取るとヒョイと頭の上ののっけて、スタスタと階段を降りて行った。

火 焰 木

マリノの別荘村を縦横に走っている大通りには緑濃い並木が繁っていたが、いつの間にか時期がきてどの木も大きな赤い花を枝一杯につけている。

火焰木だそうだ。マカッサルなど暑い平地には強烈な原色の熱帯の花は多いが、この火焰木の花は1個々々はそれほどドギツイ事もない大きな赤い花だ。ただその大きな花が大きな木全体に、まるで造花でも一杯くっ付けたように沢山咲くと強烈な真っ赤な姿になる。

道路の両側は、いやマリノ全体が目が眩らむような激しい赤で塗りつぶされたように見える。

しかし花が散り実がなると、今度はバカに形の変った大きな殻が木の下面に散らばっている。その殻はちょうど和舟（日本の小舟）そっくりの形をした固い殻で、そのまま子供の水遊びのお舟として使える立派なものである。大きさといい形といい耐水性といい、人間が作ったオモチャの舟よりはるかに自然で上品な和舟である。

火焰木は水辺の植物なのかしら、実に入った殻の舟を水に流すのか、それとも山の木だが、雨期の大水を利用して実を遠くまで拡散したいのかな。

花が咲き花が散り、実がなり殻が散ると、あたりは毎日々々小雨の降り続く雨期になっていた。我々は来る日も、来る日も雨合羽に身をかためてビジャビジャと山道を登って行った。谷間の洞窟に下る岩だらけの斜面は雨に濡れてズルズルと滑りやすく、うす暗く空を覆った巨木の下では、からみ合った宿り木の葉末から雨が降っていない時でも水滴がポタポタと垂れている。

そして洞窟の中の仕事はいよいよ本番を迎えて熱気が漂ってきた。どの洞窟も激しい人の出入りである。

洞窟の中はどうやら恰好がついてきた。床には板が張りつめられ、壁や天井は板で張りつめられた上、更にトタンが張られている。洞窟は谷の斜面に掘られているので穴の中は傾斜しており、床は雛段のように段違いに出来て居る。

しかもそれが周りをトタンで固めてあるので、カンテラで照らし出される穴の中の光景はまるで怪奇映画のセットのような、或いは潰された石油缶の中のような奇妙キテレツな姿である。

穴の中はジトジトと湿っていて、水滴はあたり一面のトタンの継ぎ目からポタポタと休みなしに垂れ落ち、部屋の中は穴の外と変わらないような水びたしである。

雨漏りの場所は大工さんに頼んで板を張り直してもらい、ブリキ屋さんに頼んで膏葉張りしてもらおう。しかしもう時間がなくなった。穴の中に無線の機械を搬入せねばならなくなってきた。

人間でさえやっと歩けるくらいの谷間の斜面を、重くて大きい無線機を谷底の洞窟まで運び降ろす仕事はこれまた大変な仕事である。

雨で濡れたゴツゴツした岩だらけの谷間で巨木の間を縫って重量機械を運搬する仕事はT兵曹いか兵隊や土木屋さんの活躍の舞台である。

無線の機械はトラックで尾根道の谷の上まで運び上げ、後は人力とロープと丸太で、雨でズルズル滑る斜面をソロリソロリと一寸刻みに谷間に降ろしていくやり方である。

機械には人間が蟻のようにたかり、アチコチの木の幹にロープを引き回した上、邪魔な木は斬り倒し、機械の下には次々と丸太を並べて敷いていく。

兵隊と人夫が支えたロープは少しづつウインチを緩めて、機械をゆっくり移動させて行く。

機械は僅かずつ斜面を下っていくが、岩を避けて逆に坂を登ったり、巨木の周りを一回転して傾斜を緩めたりしながらユックリ、ユックリ進んで行く。

まったく気がもめて時間のかかる仕事である。

しかし朝から晩までかかって、どうやら無事に全部の機械は洞窟の中に曳きづりこまれた。

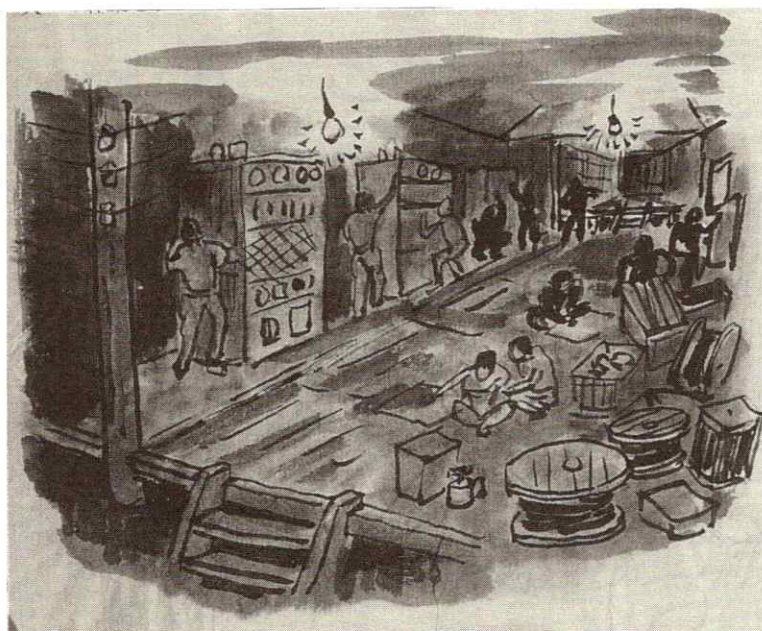
機械が穴の中の所定の場所に落ち着くと、いよいよ配線の仕事がはじまって我々電気屋の出番となってくる。しかし、下の方にある発電所の工事はまだまだ大きなディーゼルエンジンの据付中なので、電気が来るのはまだ先の事である。

早速、T兵曹が何処かから小さなエンジン付き発電機を借りてきたので、我々の洞窟だけは煌々と電灯をつけて工事を進めることになった。カンテラを頼りに仕事をしている近くの洞窟から見るとまるで文化都市のような明るさで、近所から見学者までくる始末である。

無線機はズラリと並べられ堂々たる光景となったが、穴の中の湿気で機械は何処を触ってもビリビリと電気が漏れて、調整どころの騒ぎではない。

またまた大工さんに板張りを修理願い、ブリキ屋さんに継ぎ剥ぎを頼み、電気屋は機械の中まで電灯をぶら下げる。乾燥のためだ。

穴の中は、材木・ブリキ・ドラム・部品函・真空函・線材が散らばり、夫々の作業をする人間でゴッタがえして足の踏み場もない。



ア リ バ イ

T兵曹の配下の若い兵隊は、顔触れが時々入れ替わっている。マカッサル司令部通信隊から数人づつ山に登って来て交代しているらしい。

兵隊の宿舎は軍隊ではあるが別に武器もなければ、訓練もなく、角ばった敬礼や軍隊口調の受け答えもやっていない。

宿舎には洗濯のためのバブ、掃除のためのジョンゴスが雇われているので、若い兵隊の仕事は食事の世話やT兵曹の走り使いが主な仕事だ。

マカッサルの街ではこの若い兵隊さんたちも、相当おっかない存在であるが、ベテランのT兵曹の前ではまるで中学生のようにおとなしく、ハイ、ハイと駆けずり廻っている。

T兵曹の仲間の連中もチョイチョイ山に登って来る。階級はまちまちだが同じような年配の兵隊たちで、見た目も羨ましいほど彼らは親しい仲間たちである。おそらく同じ釜の飯を一緒に苦労し、共に戦ってきた戦友なのだろう。

我々一般社会人から見ると、はるかに濃い血の繋がりとでも言うべき強い絆で結ばれているようだ。

僕も彼らの仲間とは顔みしりが多いが、時々見知らぬ兵隊から親しく話かけられて戸惑うことがある。こちらは、同じような服装をし同じような顔をした兵隊の一人々々を覚えていないが、向こうはこちらを良く知っているらしいのだ。僕がT兵曹と一緒に仕事をして親しくなっていることは、T兵曹の仲間全体と親しくしている事になっているのだ。

マカッサルの街でも、我々は無線通信という仕事の関係で軍の通信関係の兵隊たちとは親しく付き合っている。僕はあまりこちらから出かけた事はないが、うちの会社の若い連中はチョイチョイ司令部の通信隊や海軍送信所に出かけ、兵隊たちと飲んだりそのまま隊の中に泊まって来たりしている。

規律々々とやかましい軍隊も、何処かに底抜けの穴があってなかなか面白い組織である。

ある朝、『マカッサルから会社の人が来ていますよ』と兵隊に言われて、僕は穴の奥から明るい入口に出てきた。そこには大きな風防眼鏡を額に、革手袋

姿のM君が立っていた。

「これは珍しい。こんな朝早くどうしたの。車を飛ばして来たの」

「いや、オートバイで来ました。人っ気がないんで100km近く出せましたから、マカッサルから1時間で来ました」

彼は珍しそうに辺りの洞窟工事を見まわしながら人をはばかりている様子だったが、僕と二人きりになると真面目な顔になって話し始めた。

「実は調査に来たんですが、昨夜、Sはこの山に居ましたか」

「あたりまえよ。この山の中で何処にも行く所なんか無いよ。昨夜も僕と一緒に退屈していたよ。何かあったんかい」

僕が笑いながら話すと、彼も一安心したように苦笑した。

「それならいいんです。実は昨夜事件があったんです」

彼の話は次のような事だった。



昨夜、マカッサルの街を2人の特警（憲兵）が巡邏していると、或るピーヤの前で、彼らの姿を見て慌てて逃げ出した男がいた。さっそく捕まえて職務訊

問すると、ドギマギしながら『私はK.D.T.のSであります』と名のったが、特警の隙をみて逃げだしてしまった。

特警はすぐにうちの会社K.D.T.に電話してきた。

「会社にSという男が居るか」

「Sという男は居ますが、マリノの工事に出張中です」

という事で話は終わりになった。

しかし特警の方は本人が不在だという点と、民間人の服装はしていたが、返事が軍隊口調だった点が引っ掛かっているらしく、Sが山から下りて来たら、法務局に出頭してアリバイを説明しろという事になった。

会社の方も日頃が日頃のSの事なので、ヒョットしたら山の工事場から抜け出して夜のマカッサルに現れる事だって無いとは言えぬと疑い、一応、確かめて来いと、M君が山までオートバイを飛ばすことになったのだ。

話が終わって、Sのアリバイがはっきりすると、M君もサッパリした顔でオートバイに跨がり山を下っていった。

「おいS。昨夜はお前、本当に山に居たっけ。夜になって抜け出したんじゃないか？」と僕がからかうと、

「嫌だねー。あんたの横に寝てたじゃないかー」

Sは口を尖らして抗議したが、目が合うと大笑いになった。

我々は真犯人が誰なのか、もうチャンと見当がついていた。

峠 の 茶 屋

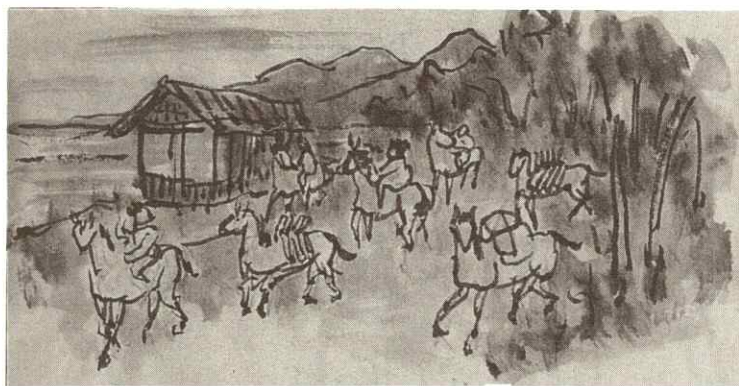
我々が毎日洞窟に通う尾根道の深い谷に臨んだ崖の縁に、インドネシア人のニッパ小屋が一軒ボツンと建っている。

小屋はチョット風が吹けば谷底に落ちそうなチャチなものだが、明ければなしの土間には作り付けの竹の長椅子や汚いテーブルもある。それに駄菓子や果物も売っており、コーヒーも出る峠の茶屋ならぬ、峠のコーヒー屋である。ここからの眺めは深い谷の向こうにマカッサルの平野が一望できる雄大な見晴らしである。

我々は毎日、山の往き帰えりにこの小屋に寄るのが日課になっている。朝は山坂を登って汗ばんだ体を拭いては休み、夕方穴からの戻りはここに寄ってコーヒーで疲れを癒す、雨の日は小屋の焚き火で暖をとり、雨に濡れた馬の背を拭いてやる。

山の工事場に材木やセメントを運ぶトラックの運チャンもここに寄って一服する。手作りの煙草を詰めてスモークした竹筒や、地酒を詰めた瓢箪を沢山積んだ馬の群を曳き連れた、馬賊のように逞ましい山の男たちもここに寄っていく。

椰子から作った黒砂糖で飲む、このコーヒーはお世辞にも美味しいものではないが、パノラマのような見晴らしの良い景色を眺めながら、疲れた後で飲むコーヒーはなかなか結構なものである。



時にはインドネシア式の餅菓子や駄菓子に手を出してみるが、さすがにこれは味より何より、いささか薄気味わるい。その点、果物なら良さそうなものだが、涼しい気候のせいか別に食べたいとも思わない。

この小屋のオヤジとは我々もすっかり親しくなって、我々が朝ニワトリや筍の調達を頼んでおくと、帰りにはチャンとそれが用意されている。地酒でも煙草でも頼んで断られた事がない便利な万屋である。

この山では蕨も初茸も筍も同時に手に入る。日本の季節感覚からいうと少々

変であるが、しかし考えてみると、年中太陽が頭上にある常夏の熱帯地方では、温度は季節によって変わるのではなく、土地の高さによって変わるのだ。マカッサルが灼熱の夏の気候であるのに、マリノの山の中は下の方は春のように暖かく、上の方は秋のように涼しい。雨の時などは冬を思わす寒さである。

洞窟の中の仕事を終えて、山からの帰り途中の蕨採りや初茸狩りはストレス解消でもあるが、食料補給の意味もあって我々の仕事のひとつである。

暗い穴の中で一日過ごした後、明るい尾根の草原の中を童心に返った大人たちが蕨採りに興じている風景はなかなか良いものである。

松は五葉松だが、林の中に敷きつめられた松葉の敷物は人っ気がないだけに5cmも溜まっている。歩くとまるで豪華な絨緞の上を歩くようにフワリフワリと弾力がある。明るい松林の中で湿った松葉のカーペットを踏みながら茸を捜すのも、何とも心の休まる楽しみである。

山の兵隊宿舎の米や肉といった食料は豊富であり、山の産物である蕨・大根・茸・筍も手に入ると、マカッサルに特別に請求するものは日本酒・現地ブランドー・街の煙草といった物で、この方は酒好きのT兵曹やSが抜かりなく手配している。

要するに、酒も煙草も食料も別に不自由はしていないが、唯一つ、夜の街の女の子がいる酒場に、勝手に飲みに行けない事が不自由といえば最大の不自由かもしれない。

しかし物は考えようである。

このマリノの山は要塞工事をやっていると言うのに、まだ一度も敵機に襲われたことは無いのである。

峠の茶屋の頭上スレスレを敵機の編隊が通過して行くのを、何度となく見て肝を冷やしているが、敵さんは知っているのか知らないのか、要塞工事のこの山には一発も爆弾を落とさない。

我々はこれまで、夜の空襲で燃えているマカッサルの火の手を何度となくこの山から眺めたが、マカッサルは最近では昼間も空襲を受けているようである。我々は峠の茶屋の上空を通過して行く敵機の編隊を眺めながら、

「今日はマカッサルの港かな、それとも飛行場を狙うかな」と、山に無関心な敵機の行動に、胸を撫でおろしている毎日である。



電 波 発 射

土木屋さん達は穴の中の仕事が大体目鼻がつくと、今度はそと周りの仕事に掛った。洞窟の出入り口を塞ぐように、柱と板で囲んだ土手を建て始めた。爆弾や爆風が穴の中まで飛び込まないように塞ぐのだが、おかげで穴の中はいよいよ陽の光の差し込まぬ地底に潜った感じである。

穴から穴え通ずる崖道も整備されて、山の要塞はいよいよ完成に近付いた。

我々が工事している穴から更に下方の穴で、日発のエンジニアが工事していた発電所も立派に出来あがった。広い洞窟の中に大きなディーゼルエンジンがどっかと据わっている。エンジンの基礎や冷却用の貯水槽は立派なコンクリート造りである。

我々が工事をやっている洞窟は司令部の神経系統とも言える通信関係なのに、木の柱に板の壁で、すべてトタン張りした穴倉で、コンクリート部分など何処にもない。

僕はニューギニアでもアンボンでも、海軍の施設はエンジン関係が立派だなーと気がついていたが、やはり海軍はエンジンで走る軍艦から成り立っている事がハッキリ判った。

海軍の司令部では、司令官について偉いのが機関参謀長だそうだ。

『言うことキカン参謀』と兵隊たちが陰口をたたいて怖れている訳が判る。

そう言えば、マカッサルの海軍司令部には通信参謀は居なかったのじゃないかな、僕は会った記憶がない。

電気が来るようになったので、無線機はいよいよ本格的に働き始めた。洞窟の奥深く収まった機械から、長いトンネルの壁に沿ってアンテナの線が張られ、その先は穴の入口からジャングルの中の大木の梢に引き揚げられる。

インドネシア人はひと抱えもある大きな木に、猿のようにスルスルと訳もなく登って行って仕事をする。幹の表面は苔に覆われ、蔦や寄生木が一面にまつわりついているが、特に多いのが鋭い刺が密生している藤の種類である。見た目も気味が悪いほど毒々しくて凄い蔓草である。

あのしゃれたステッキ・涼しい藤椅子・花籠・枕などの藤製品しか知らない僕には、刺で身を固めた毒々しい生木の姿はまったく想像もしていなかった。

『藤』の種類は100種もあって、1株から100本も芽を出すほど強く、長さは100mにも伸びるそうである。

頭が支えるほど低くて狭い、まっ暗なトンネルの壁には電灯・電力・電話・アンテナとやたらと線が張られている。アンテナ線も頬や肩が触れる位置に何本も穴の入口まで走っていて、裸の線の所どころにぶら下げてあるネオンランプは送信機が働くたびにチカチカと桃董色の怪しげな微光をまばたいてトンネルの中の暗闇を幻のようにボーッと照らしだす。

電波はもう空に向かって発射されているのだ。

我々は穴の中の送信機を1台1台調整しては電波を出してみるが、戦争最中のこととて軍通信の妨害にならぬよう、波を選んでチャットだけテストせねばならない。

どうやら機械が調子良く動きだして一安心すると、うまく出来ているもので、丁度その機械の天井から雪がポタリポタリと垂れ落ちてくる。我々は慌ててブリキ屋さんを頼まねばならない。

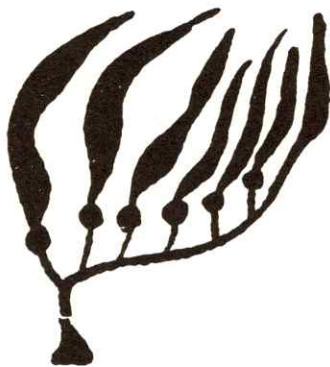


完成引渡しの立合い検査が行われる事になった。
マカッサルの司令部から、これまであまり見たことのない生きのいいエリート族の大尉や中尉がゾロゾロとやって来た。パリッとした正式の軍装をした身のこなしも物々しい連中である。

穴の中の機械の前に勢揃いすると、主任検査官の大尉は儀式でも執行するかのように、おもむろにポケットから紙切れを取り出して、或る周波数の数字を読み上げた。

機械をこの数字の周波数に調整するよう命じたのだ。
「その波に調整してあります。キイを叩けばその電波が出ます」
僕がザックバランにそう言うと、士官は怪訝な顔をした。
「君は海軍の波を知っとるのかね」

「アッタリマエデショ。敵さんだって皆知ってますよ」
と言ってやりたいところだが、僕が黙ってうなずくと、士官はチョッと口惜し
そうな顔をして、横に立っている通信兵に命令した。
「何処か近い処を呼んで見ろ。現用の波だから、あまり時間をかけるな」
通信兵がキイを叩くと受話器がすぐに応答する。
「沖縄と台湾が出ました」
「あー、もうよしよし。セレベス・ボルネオだけでいいんだ。沖縄が出るん
ならもうよい。次の機械だ」
通信兵が機械毎にキイを叩いたが、その度に各地の通信隊から『何事が起こ
った』とばかり喧しく呼びたてて来た。
立合検査はすぐに中止され、細かいテストはやらぬ事に話が決まった。





ニューギニアの一週間

バ　ン　ダ　海

飛行機はアンボンの飛行場を離陸すると、すぐ海上に出てグングン高度を上げながら東に向かっていった。

海の中に突き出た蒼黒い岬・その岬を縁どっている白いレースのような波打ちぎわ・海岸の林の中のニッパ小屋の部落が白い霧の中に見下ろされていたがすぐに視界から消え去り、後は空も海もない広々とした空間だけが窓の外に広がっていた。

夜は明けたらしく周りは明るくなってきたが、陽の光は見えず曇ガラス張りの真空の世界に浮かんでいるようだ。

単調なエンジンの音だけがゴウゴウと聞こえ、足元がしびれるように冷えてきた。

僕は手提げカバンの中から一冊抜き出した本を膝の上で読み始めた。昨晚、旅行の支度をしている時本棚で見つけた本を数冊カバンに放りこんどいたが、これは奈良の古美術を書いた本だった。

南の島に来てから2年近く、工事をしたり・機械を据え付けたり・あちこち飛び回ったりでユックリした気分を味あうユトリが無かった僕に、この本のお寺や仏像の古めかしい香りが妙に気をひいて持ってくる気になったのだ。

僕は飛行機の上であることも忘れて本のページに吸い付けられ、穏やかな仏像の顔や美しい彫刻の線や見事な古い建物の曲線を丹念に見ていた。

ふと、誰かに名前を呼ばれたような気がして、本から目を離しエンジンの音の中に聞耳をたてた。

「今泉君、今泉君。いま何時だね」

斜め後ろの人が僕を呼んでいるのだった。そこには若い海軍大尉が坐っているが見知らぬ人である。左手で右の手首を指しているので、僕は自分の腕時計を見て時刻を知らせた。

明るい客席には12、3人の人が夫々の姿で坐っている。海軍士官が二人・

兵隊が三人・若い航空兵が四人・報道班員が一人・ほかに輸送機関係の乗務員が二人だ。

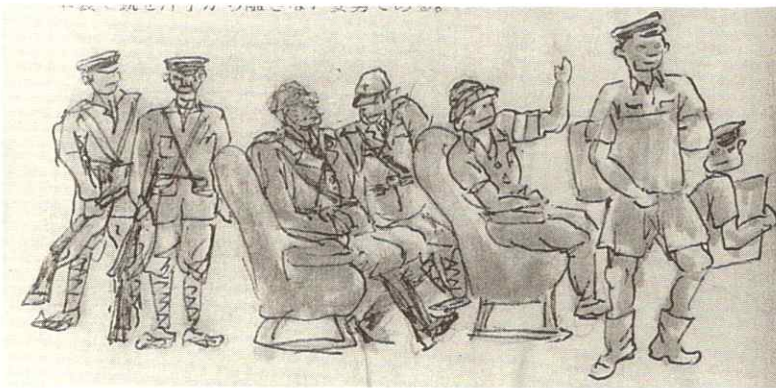
今の大尉は誰だろう……確かに僕の名を呼んだような気がするが、考えてみたが思いだせない。

僕はまた本に目を移したが、前の方の席に坐っている若い航空兵たちが次々に後ろのトイレに立つので興を削がれて本を伏せた。

航空兵は皆子供っぽい顔をした若者で、まるで中学校の上級生徒くらいの年頃らしい。海軍下士官の鰐のある制帽を頭にのっけてはいるが、兵隊というより鉄道員の帽子の被り方で、帽子も随分変形させている。

座席に坐っている時も、肩から吊るした航空地図の図板を膝の上に抱き、半袖半ズボンの防暑服姿で航空半長靴をひっかけただけなので、丸出しの膝小僧が冷え込むのだろう。

後ろの方にかたまっている兵隊達は年配の下士官や兵で、前線の警備隊えでも行くとみえて、革バンドに弾薬盒などの装備をキチンと身に付けた完全軍装で銃を片手から離さない姿勢である。



腕に報道班の腕章を巻いた新聞記者か雑誌記者は、顔色の良くないブヨブヨした男で田舎の郵便局の事務員といったタイプだ。

二人の士官のうちさっき話しかけてきた大尉は、色が浅黒いいかにも士官慣れした態度をしているが、学生あがりの技術将校らしく歳もまだ25、6だろう。今ひとりの方は中尉で下士官上がりと見えて、がっちりした体格に剣道の強そうな額を見せている。

一方僕の姿はと言うと、国防色の長袖防暑服に同じ色の長ズボンを履き、大きなヘルメットの置き場が無いのでそのまま頭にのつけたままである。

皆も退屈してきたとみえてあちこちの席で雑談が始まっているが、僕の席は隣の無い列で、又たった独りの変わり種なので話し相手も無い。

「もう、8時半か。じゃあ、もうそろそろトアールに着く頃だが、島は見えないかね」

「さっき、小さな島が二つ三つ見えたが通り過ぎてしまったよ」

などと話し声が聞こえる。

窓の外は相変わらず明るい空と広々としたバング海が、海も空も境目もなく同じ色に溶けてこんで拡がっている。太陽の光は時々、機内にサーッと差し込んで来たりするが、窓の外はただ一面に明るくて晴れているのか曇っているのかさえ見当がつかない莫々たる明一色である。

目の下の海面だけが縮緬皺の表面を見せて、時々白い雲が海の中を通り過ぎて行く。白雲が上か、海面が上か上空からは見究めつかぬ眺めである。

水平線に細長く島影が見えてきた。

島は幾つも見えるが、どの島も珊瑚礁ばかりで山の姿のない細くて平らな島ばかりである。

高度がグングン下がると海の色が次第に変化しているのがよく分かる。海の色は藍色から蒼・緑・青・淡青・灰色と七彩の色どりの変化を見せ、最後に牛乳色に変わったところで椰子の生えた砂浜の陸地になる。

草ボウボウの滑走路

ここの海は小さな珊瑚礁が幾つか塊りあって出来た海で、大洋のまっただ中というより深い山の中の湖のように、静かで穏やかな姿である。

牛乳色をした多彩な海も今まで見た珊瑚礁の海とは違っている。島々の形や微生物などの種類によって変わってくるのだろうかしら。

椰子の林の中に広場がチラリと見えた。広場の中心に十字架のある教会が見え、その前の広場の左右には緑の屋根に白壁の建物が5、6軒並んでいた。どの家も荒れはてて人の気配は無さそうである。それ以外は椰子、椰子、椰子の緑一色のジャングルしか上空からは見えない。

椰子の林や砂浜が右の窓に一瞬迫ってきたかと思うと、それが斜めに傾き、角度をまして逆にひっくり返えて左の窓に流れ込んでくる。奇妙な錯覚に頭が混乱するが、飛行機は大きく角度を変えているらしい。

飛行機はアッと思う間にジャングルの中に突っこんで行った。椰子林の中を掻き分けるように突進で行くと、目の前に緑の草原が現れてきた。狭い帯のような草っ原だ。

飛行機は大きくバウンドしながら地面に触れ、草をなびかせて草原を走った。やっとスピードがおさまって、ヨタヨタと翼を上下にあふりながらアヒルのように歩きだした。やっと止まった所は小さなニッパ小屋の前だった。

ファーッと足元の定まらない体で梯子を降りて地面に立ってみると、そこは椰子林の真ん中をバリカンで細長く刈りとったように、草がボウボウと生えている狭くて長い原っぱ……簡単な滑走路の一端だった。

ニッパ小屋は柱と屋根だけのガランとした待合所で、隅の方の机で陸・海の兵隊が数人当番の仕事をしているらしく電話がチリチリ鳴っていた。

小屋のすぐ横には土を丸く盛りあげただけの小さな防空壕があり、その土饅頭の上には三脚の上の大きな双眼鏡を覗いて対空監視をしている兵隊が居た。

陸戦隊の服装をした兵隊が我々の方にやって来て笑いながら言う。
「連絡が無かったもんで、テッキリ敵機だと思って空襲警報を出したり、また慌てて取り消したり、ひと騒動でした」

その話を聞くと日航の機長は顔色を変えた。

「何! 連絡が無かったんだって。じゃあ、油も用意して無いのかい。すぐやって呉れよ。油を積んだらすぐ出発するんだから」

「今連絡を取ったところですから、しばらく待って下さい」

機長はポケットから煙草を取り出しながら、ニヤッと表情をかえて兵隊に尋

ねている。

「どうかね。来るかね」

「はぁー。来ますね。毎日定期便で10時か11時ころ来ます。今何時ですか」

「9時だよ。そいつは困ったなー。とにかく油を急いでくれ」

筋肉質の西郷どんを思わせる堂々たる体軀の機長は、キチンとアイロンのかかった真っ白い半袖半ズボンに白い戦闘帽をキリリとかぶり、半長靴の航空靴を半びらきに構えたスマートな格好である。

今一度左腕の高級時計を見直している。

なるほど、滑走路付近の椰子の木はどれもこれも頭がちぎれたり、焼けただれて空襲の傷跡を残しているものばかりだ。

飛行機から降りた人々はあちこちに去って行ったが、僕は先ず小屋の裏の林の中に行って、ノウノウとした気分で藪のなかに小便を放ってからゆっくり煙草に火をつけた。

「今朝はアンボンからですか」

継ぎ剥ぎだらけの上衣を着て手製の下駄をつっかけた、陸軍の兵隊が近付いてきて、人なつこく話しかけてきた。

「アンボンは今でも賑やかですか。スラバヤとまでは言わないが、せめてアンボンぐらいいは行ってみたいですね」

いかにも懐かしそうにアンボンの様子をアレコレ訊ねてくる。

同じ兵隊でも、賑やかなスラバヤの夜の酒場や呑屋で景気よく酔っぱらって騒いでいるのも居れば、こうしてオーストラリア近くの前線の孤島で毎日空襲に脅かされながら半病人姿でいる兵隊も居るのだ。

彼も熱帯病にかかり皮膚病にもやられて、下駄をつっかけてヨロヨロと元気の無い姿で仕事だけはやって居るのだろう。

派手な色のガソリン車がやって来た。

双発ダグラス機の大きな翼の下にもぐりこむと、乗員や兵隊の手でガソリン積み込みが始まった。

連絡のための士官や兵隊もぞくぞく車でやって来て、小屋の内外は立ち話や打ち合わせの話し声で雑然と賑やかになってきた。

トラックから荷物を下ろして、飛行機からの荷物をトラックに移したり、別

れの挨拶をして次々と去って行ったり、大小の差こそあれ飛行場の風景はあわただしい。

感 度 あ り っ ！

小屋の中で雑然と交わされていた人々の話し声が、突然急に止まった。そのシーンとなった小屋の中に電話器に取付いている兵隊の声だけが響く。

「エーッ、感度あり。方向は230度。近付きつつあり」

電話器の兵隊は受話器を耳に当てたまま、大きな声で復唱している。電話が終わると小屋の中は雑然とした話し声が賑やかになったが、スッカリ前とは違って電話がチリチリと鳴るとトタンに辺りはサッと静かになる。

何度か電話が鳴った後、また電話係の兵隊が大きな声で復唱した。

「敵機は24機。当方に向かって近付きつつあり」

小屋の中の人々は自然に立ち上がって、ゾロゾロ小屋から草原に歩き出した。手を振って自然に話を続けているが、南の空が気になってどうにも不自然な格好である。

「さぁー、さぁー。いよいよ、おい出なさったぞ。早いとこ片付けて引き上げなくちゃ」

ガソリン車の兵隊達は辺りに散らばっている道具を手ばやく、掻き集め車に積み込んでいる。

「敵機は24機。肉眼でも見える」

電話の兵隊は皆の方をふり向いてから、電話に大声で復唱する。

「俺達も引き上げだ」 当直の兵隊たちも慣れた調子で机の上の書類を集めて手早く身支度している。

飛行機から降りた10数人と連絡に来た士官たちは、ひと塊りになって歩きだしたが、足は自然に唯一つしかない小さな防空壕に向かっている。

壕の上の監視哨も大きな眼鏡を三脚から取り外し、片手に抱えて饅頭山から下りてきた。兵隊たちの車もエンジンをかけて次々走り去って行った。

「おい、俺達は向こうに行こう。森の中に行くぞ」

ダグラスの機長は小さな防空壕に対し人数が多過ぎるのを見ると、仲間に叫んでスタスタと歩きだした。僕も黙って彼らの後に続いた。

我々は一列縦隊をつくって森に向かって歩き出したが、僕の後ろにも何人かくっついて来て長い列になった。

森の中は椰子の木や熱帯の樹木が空も見えないくらい繁っているが、薄暗いジャングルといった感じではなく、細い木ばかりヒョロヒョロと生えているので初夏の日本の若葉の森のようだ。

森の中には奇麗で大きな砂利道が迷路のように幾つも走っている。その道の奥にはコの字形の土手に囲まれた飛行機を格納する退避壕が造られていた。

我々がどうやら森の奥え入った頃、4発特有のウォン・ウォン・ワーンと不気味に響くエンジンの唸りが追いかけるように聞こえてきた。

我々は小走りになって森の奥え奥えと急いだ。

しかし、500mも進まぬうちに前方が急に明るく開けてきた。森のはずれまで来てしまったのだ。そこには淡青色の海が静かに広がっていた。

「見える、見える。来たぞ、来たぞ」と言う叫び声を後ろに聞きながら、我々は2mほどの崖を海岸の砂浜に跳び下りた。浜は砂のような岩のような妙に弾力のある珊瑚礁が固まった渚である。ゴツゴツした溶岩の低い崖から波打ち際までの10mくらいが潮のひいた砂浜で、海草や藻の塊が打ち上げられ、水溜まりが点々と残されている。



海岸に崖になっている岩は、浅間山や桜島の溶岩と同じような泡だらけの軽石で、波風に削られて色々な形の小さな洞窟が出来ていた。我々は思い思いに散らばって自分でもぐりこむ穴を捜した。

自分の穴が見つかり、その穴の前で空を仰いで立話しを始める人や、煙草に火を付けている人がいる。僕も波打ちぎわに出て煙草に火をつけ、一服深く吸いこんで一息つくと、どうやら気分が落ち着いてきた。

爆音はもう空を覆おってワンワンと響き渡っているが、目のまへの海は牛乳色に濁んで、時々ピチャリ・ピチャリと静かに汀を叩いているだけである。

沖には遠く近い平たい島が幾つも見え、そのどの島にも椰子の木だけがヒョロヒョロと数本から数十本生えている。まるで内海か湾の中のように穏やかな海は戦争も爆撃も知らないような平和な姿である。明るい光はあたり一面を間接照明のように柔かな色で包んでいる。

気味の悪いシュッ・シュッ・シューッという爆弾落下の音が聞こえ始めると、我々は物音に驚いた蟹の群のように一斉に岩蔭に走り込んだ。僕もさっき見つけておいた、丁度一人だけ入れる空間のある小さな岩穴にもぐりこんで腰をおろした。

全神経を爆弾の音に集中しながら、手にした煙草を無意味に口に持っていったのはフーッと煙を吐き続けているが、何とも言えぬ緊張した時間である。

ダダッダーン・ワーン・ワーンと爆弾の炸裂する音が次第に激しくなり、地響きがズシン・ズシーンと岩に伝わってくる。だいが遠いなと思っていると、こちらに向かって1発、2発、3発と近付いて来るのがある。

すぐ近くで何発目かが終わってホッとするが、目の前の海にはチッチッチー・シャボッ・ジュッ・ジュッと奇妙な音をたてて爆弾のかけらが水面に突っこんでいく。

爆弾は遠く近く、右から左、左から右と縦横無尽に列をつくって降ってくる。一発ずつ近付いてきて、背中後ろにでも落ちたように凄いショックと地響きを残して最後の一発は前の海に落下するのがある。思わず体を岩の壁に貼りつかざるを得ない。

炸裂する爆弾の轟音が次々に重なって最高潮に達してきた。爆発音は海の方向からも山彦となってワン・ワン・ワーンと戻ってくる。まるで大太鼓の中に坐っている感じで、耳鳴りがしてきた。

煙草一服の時間

これまでの2年近く、3日にあらず出会ってきた空襲ではあるが、こんなにも賑やかな音の饗宴は初めてである。飛行場にたった一機とに残されているダグラスに24機の敵機が、まるで基石でもばら撒くように物凄い数の爆弾を降り注いでいるのだ。その音のひとつひとつが重なり合って、海をわたり島に跳ね返って拡大されて戻ってくるのだから、まったく壮大な音響効果である。

不図、気がついて自分の左手を見ると煙草は相変わらずユラユラと紫の煙を静かにたなびかせている。そして、左手はまるで機械仕掛けのように大きくガタガタと揺れていた。

僕は我ながらチョット気がさして苦笑したが、さてその身震いを止めようとするが、どっかい腕は僕の意志を無視してガタガタ揺れ続け、どうしても大脳の指令を受け付けようとしなない。

爆弾の破裂音は次第に間隔が広がり、時々思いだしたようにドカン・ドカンと鳴りわたるだけとなった。空を覆っていたエンジンの音もいつの間にか遠のいていた。4発特有のあのワーン・ワーンと響くエンジンの唸りが、飛行機が既に上空を去った事を示している。

砂浜に白服姿が一人、二人と現れたので、僕も腰をあげて岩穴から外に出た。浜辺はスモッグに覆われたように煙がたなびき、硝煙の臭いが鼻をついて息苦しい。あたりはまださっきの大嵐の余韻が海一面に山彦となって残り、除夜の鐘のようにワーン・ワーンと響きを繰り返している。これはこれまでの空襲で経験したことのない珍しい現象で、何処から山彦が来るのか海上をみわたした。海上には椰子の島が点々と幾つか見えるだけで、もう平和な姿だ。遠く東の海上に幾つもの編隊に分かれた敵機の群が蚊とんぼのように小さく去って行くのが見える。

さっきから吸いかけの煙草はまだ僕の指の間でユラユラと煙を立てている。その吸いかけを思いきり吸ってから海に放おりこんだ。

まさに……生も死も、一服の煙草を吸いつくさない僅かな時間のなかで決まってしまうんだな……と感じた。

「飛行機はどうか。煙が見えないから燃えてはいないな」

機長は独言を呟やきながら、また先頭にたって森の中に戻って行った。

「あの時すぐ退避させときゃなー」

「でも、そう簡単に森の中に移動出来たかなー」

皆は勝手なお喋りをしながら機長の後ろについて藪のなかを歩いていった。森の中は木の枝がチギレ飛び、椰子の幹が裂け、どの木もどの木も生新しい傷口を痛々しく見せている。地面には白い裏を見せた木の葉が秋の山の枯れ葉のように敷詰まっている。

真新しいピカピカ光る鉄片が鋭い切り口をみせて無数に散乱している。拾ってみると、火傷しそうに熱くて慌てて放り出す。

小型破裂爆弾を数限り無くばら撒いていったらしい。

「飛行機は在るぞー」 列の先頭から歓声があがる。

飛行機はさっきのままの位置に悠然と翼を拡げており、その近くにはさっき残った連中が手をふっているのが見えた。

我々が近くまでいくと彼らが手でメガホンを作って叫んでいた。

「駄目だー。飛行機はやられたぞー」

小屋の前に皆が集まると、幸い怪我人は一人もいなかったの、改めて互いに無事を喜びあった。人々はまるで以前から知り合いであり、友人であり、仲間であったように親しくうちとけて話しあっている。

「防空壕は相当揺れたよ。何しろすぐ横にダグラスが控えているんでね」

そのダグラス機の翼からはガソリンがジャージャーと滝のように流れ落ちていた。乗員や兵隊たちはドラム缶を幾つも運んで来て、幾分でも回収しようと、ガソリンの滝の下に缶を並べている。

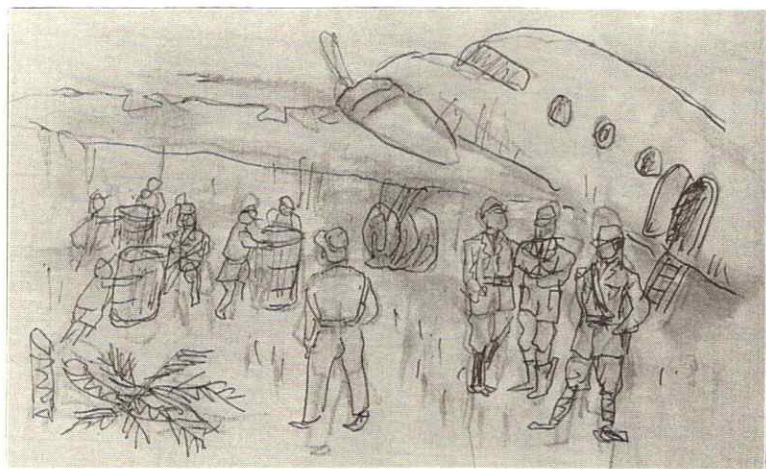
飛行機は翼や胴体の表面のあちこちが無残にも剥ぎとられ、エンジンにも孔があき、あちこち傷付いていた。

機体の内部は思ったほど酷くは無かったが、座席のカバーは剥げ壁には大きな傷跡がついている。

若い乗員が弾片を指先に持って、

「これは面白いですよ。機首のあの孔から飛びこんで、向こうの壁を擦り後の壁で跳ねかえって、今度はこっちの壁を機首の方に逆戻りしているんですよ」彼は推理を楽しんでいるように、気楽に話しかけてくる。この非常時に……。

「これじゃ、まったく使えませんな。早速救援機を頼まなくちあ」
機長も匙を投げて士官たちと打ち合わせている。



弁 当

草色サージの士官服に半長の航空靴をひっかけた、着流しの姿の新顔の若い大尉がいる。

「エンジンはすっかり取り替えればいいが、機体の方はジュラルミンにこう皺がよっちゃあ、もう修理も効かないよ」 彼は取り囲んだ士官たちに専門家らしく説明をしている。

この爆弾騒ぎはお互いの間の階級や立場の相違といったカーテンを吹き飛ばしてしまったらしく、お互いに何か親近感といった感情で心安く話合っているように見える。同一条件のもとで、生死の一線が無事に越えた喜びを共有して、極端に言えば何か浮き浮きとお互いに祝福しあっているのかもしれない。「もう昼なんだろう。とにかく食事をしようじゃないか」

士官の一人が言い出すと、一同は飛行機の傍を離れて待合室の小屋に引き揚げてきた。小屋のあたりもスッカリ様子が変わっていて、入口にあった蘇鉄の植込みは跡形もなくスッ跳んでおり、周囲の高い椰子の木数本は幹の上部を銘刀でスッパリ切落したように切り口を見せていた。

小屋は傾き柱や机も折れたりむしり取られたりしている。机も椅子もザラザラに砂を被っている。僕はどうやら使えそうな机に坐り、飛行機の中で貰った弁当の包みを開いた。紙袋の中にパサパサした飯が握りもせずに入っているだけで、福神漬がパラパラと振りかけてあった。唯それだけで、箸も付いていなかった。同じ輸送機でも、マカッサルやスラバヤで出した豪華な弁当を思いだす。パン・ハム・飯・牛肉・野菜・魚・果物・羊羹まで付いていたっけ。今更ながらアンボンの街の物資欠乏ぶりは相当なもんだなと感じる。

「箸がありますよ。水交社で作って貰った弁当が有りますから、一緒につきましょ。どうぞ」

飛行機の中で僕を呼んだ大尉が、箸を差出し弁当の包みを僕の前に拡げた。

僕は礼を言って手を出したが、この大尉は一体……誰なんだろう……と不審な気持ちである。大尉は僕に気易く言葉をかけてくるが、僕にはどうしてもこれまで彼に会った記憶は無い。ひょっとしたら、この人は軍人になる前はうちの会社に居た人かしらなどと考えた。

大尉と中尉は新顔の大尉と今一人の土地の士官らしい人と4人で食事しながら打ち合わせしているので、僕は黙って食事した。

小屋の中のあちこちで4、5人のグループが夫々食事しながら「脚がなくなっちゃ、いよいよ籠城だぞ。弱ったことになったなー」と色々相談が始まっている。独りぼっちなのは僕だけである。

士官たちの食事が終わると最後に、さっきの大尉が連絡にきた士官に言っている。「じゃあとにかく、士官宿舎の方の手配、お願いします。僕とS中尉とM大尉とそれにこの国際の人と、皆で4人です」大尉は僕の方をふり向いてからそう言った。連絡の士官は軽く敬礼して「すぐ迎えの車をよこします」と言って去っていった。

僕は思いきって大尉に声をかけた。

「さっきから色々有難うございます。失礼ですが私はあなたを全然存じあげて

いないんですが、どなたです」

何となくドギマギして妙な質問の仕方をした。

大尉はニッコリ笑って、それでも軍隊口調で、

「私はアンボンの司令部で築城の方をやっているK大尉です。司令部では何度もあなたをお見かけしていますよ。実はK参謀からあなたが一緒だからよろしく頼むと言われているんです。よろしく！ こちらは燃料廠のS中尉、こちらは航空廠のM大尉です」

K大尉は、がっちりと良い体格のS中尉と坊ちゃん坊ちゃんしたM大尉を紹介してくれた。

「私もS中尉もあなたと同じバボの仕事で行くんです。M大尉は出張の帰りで、あの飛行機に乗るつもりがこの騒ぎす」

K大尉は軍隊口調に学生口調を混ぜながら説明してくれた。

士 官 食 堂

我々はしばらく小屋の中で雑談を交わした後、迎えの車で飛行場を去った。車はジャングルの中とは思えない手入れの良い広い道路を走って行ったが、珊瑚礁の島だけに道路は軽石の碎石で固められて、コンクリート道路のように立派である。

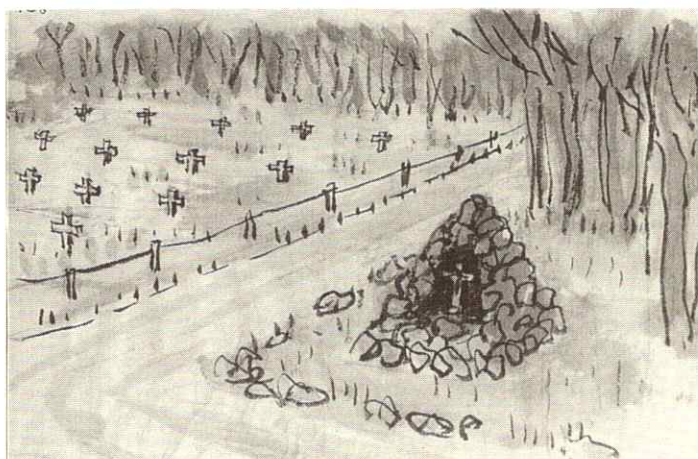
人っ子ひとり通っていない森の中のT字路の角には、岩を集めてセメントで固めた龕洞に十字架上のキリストの像が祭ってある。日本でならさしずめ、石地藏さんか猿田彦の道祖神がある場所だ。

道路際の広い墓地もきれいに手入れされた芝生の中に白い十字架の列が縦横に整然と並んでいて、いかにもエキゾチックである。

広いバンダ海に浮かぶ小さな珊瑚礁、熱帯地方の現地人が住んでいるこんな小島までキリスト教を布教した西洋人の怖ろしい情熱を今更のように感じさせる点景である。

車は木の幹だけしか見えないジャングルの中の一本道を走り続けていたが、突然なんにも無い道路の途中で止まった。促がされるままに、車から下りてジ

ヤングルのなかに踏みこむと、そこには木立の中に人が通れるだけの細い小途が続いていた。岩のかけらでゴロゴロする道は進むにつれて幾つにも分かれていたが、よく見ると木のま越しに点々とバラック小屋が群がっていた。



我々が案内されたバラックは4×9mくらいの、夏場のキャンプ地のバンガロウの感じのチョイとしゃれた小屋だった。鋸引の杉板をバンバンと張った感じだが、多分ラワン材だろう。

床が地面から50cmくらい高く張っており、2部屋にベランダ付である。奥の部屋はカーテンで仕切られているが、寝台が見える。手前の部屋は机と椅子で一杯である。

ベランダの手すりは皮つきの材そのまま、柱には赤と緑の派手なインコが吊られた止まり木に飼われている。手すりや柱には種類の違う南洋蘭やヤドリギが幾つもぶら下がっている。

「この小屋が士官食堂です。司令もおられるから、あがってどうぞ一服して下さい」 M大尉がホスト役で我々に説明してくれる。この土地に詳しいところを見ると、出張で此処には暫く滞在していたのだろう。

部屋の中には中老の少佐と赤い襟章をつけた軍医大尉がいた。

彼らはみな顔なじみと見えて早速色々と世間話が始まったが、さすがに兵隊もただのお役人であり、サラリーマンであるには間違いなかった。

話題は東京の夜の街の赤提灯での会話と同じく、昇進・転勤・交代・出張・失敗・酔っぱらい・病氣・仲間の噂話・などである。

軍医は病身らしい顔色の良くない30男で、神経質らしく眉をひそめて言う。「わしはアンボンに戻ることになるとるんだが、まだ交代の話を聞かなかったかい」この島の生活にはもうウンザリといった口調だ。

司令は長年海軍で叩き上げた兵隊らしく、潮焼けした顔は高級軍人というよりどこかの金物屋の親爺といったタイプで、若い士官たちに対しても丁寧な口のききかたをしている。

司令は奥の部屋で寝起きしているらしく、こちらの部屋は士官たちの食堂でありクラブであるらしい。

「おーい、当番」と軍医が呼ぶと、「はーい」と元気のない長い返事が木立の向こうから返ってくる。下駄ばきの兵隊がノソノソと現れてきた。熱病でも病んでいる歩きかたである。「何か美味しいものがあったら持ってこい。6人だ」兵隊はうなづくと、森の中の迷路の奥に消えて行った。

熱いコーヒーを御馳走になった後、我々は今晚泊るバンガローに案内された。林の中のゴロゴロした碎石の上を歩いて行くと、ヒョロヒョロと伸びた細い幹の林立以外景色は何も見えない。頭上は木の葉に覆われて葉蔭からチラチラ光が漏れるだけだが、あたりは明るくて暑くは無く、ジャングルの中という感じは無い。日本の初夏の林を散歩している感じだ。小道の奥には大きなバンガローが幾つも木の間に並んでいる。

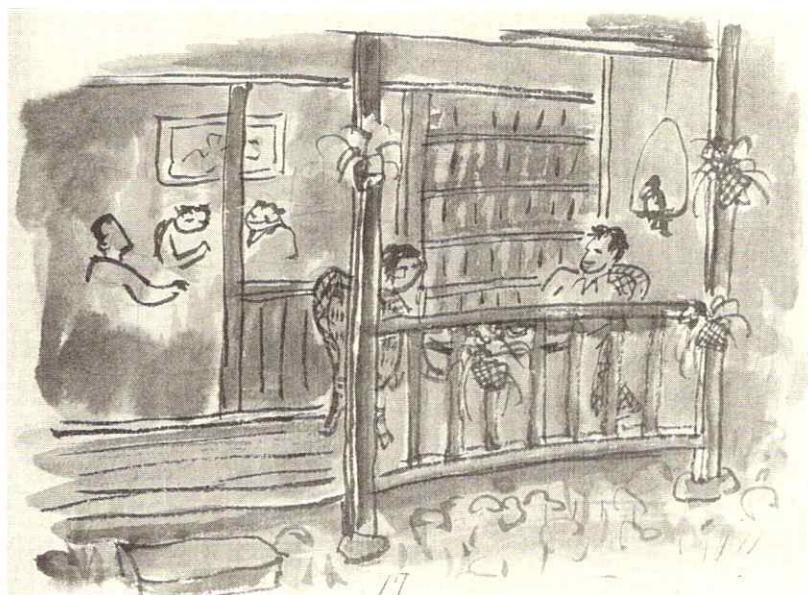
我々の小屋は手すりのある広い廊下に向かって部屋が4つ並んでいた。我々は二人づつに別れて、僕と中尉が同じ部屋に泊ることになった。

部屋は20㎡くらいの大きさで、木造蚊張付寝台が二つ壁際に在るだけの何ひとつ道具のないガラとした部屋だった。突当たりの壁に唯一つの小窓があり竹の棒で支えた跳ね揚げ式の木扉が付いていた。

鉋がかかってない柱や壁はビールの木箱で出来てるような物で、これなら自分でもチョイト出来そうな気がして、参考のために建物を見てまわった。

「夕方までひと眠りしましょう」中尉は肩から吊っている物々しい革バンド

を外して軍刀を壁にたてかけると、黒い巻ゲートルを丁寧に捲きとってから蚊張の中に潜りこんだ。僕も寝台に横になってしばらく本を見ていたが、今朝からの疲れでいつの間にか眠っていた。



銭湯のような風呂場

「食事の用意が出来ました」

兵隊の大きな声に起こされ身仕度して外に出てみると、辺りはすっかり薄暗い夕暮れになっていた。夕闇に包まれてシーンと静かな森の中は、前線の離れ小島に來ている事を急に思いださせる寂びしさが漂っている。

さっきの士官食堂に夕食が用意されていた。

6人が並んでテーブルに坐ると椅子も動かせないほど狭い。外は夕闇だが部屋のなかは更に暗く、うす赤いカンテラの灯をたよりに食事を始めた。

テーブルの上の御馳走はどれもこれも缶詰料理で、缶を開けて琺瑯びきの軍

隊の皿にコロリと移しただけのものだ。それでも、食糧事情の悪いアンボンで、ほとんど米と胡瓜と塩で過ごしている僕にとっては素晴らしい御馳走である。

軍人たちは食事の材料を見ると、いかにも又かといったウンザリした顔つきをしている。彼らは不味そうに食事をして、あまり話声も出さない。

食後ベランダの藤椅子でコーヒーを飲みながら雑談しているうちに、あたりはすっかり暗くなった。部屋の中のカンテラの灯は僅かにあたりをはの暗く照らしているが、外は真っ暗ななかに近くの本立だけがはのかに浮きだして見え、遠くの暗闇の中にも処々にかすかにチラチラ赤い灯の影が見える。

陽のある間そよそよと吹いていた風も夜になるとすっかり止まって、木の葉のそよぐ音も聞こえない全くの静寂の世界に変わり、あたりはシーンと静まりかえっている。

風呂がわいていると言うので部屋に戻った後、中尉と二人で出かけた。暗闇の森の中を手探りのようにして辿って行ったが、細い小道があるとはいえ、僕には暗くてさっぱり分からない。中尉は教わった道が分かるのか、あるいは目が良いのか、暗闇のなかをスタスタと歩いていく。

風呂小屋のバラックは小屋らしくない堂々たる立派な風呂屋だった。日本の何処にでも在る銭湯のように板張りの脱衣場があり、壁には衣服を入れる四角棚がずらりと作り付けてある。ただ材料がビール箱式の匏の掛かってないラワン材の板であるだけだ。

広いコンクリート流し場の窓際に、厚い木で出来た大きな湯舟が坐っている。湯は壁の外のドラム缶で沸かしてパイプで浴槽に導いている。

我々は早速湯舟にとびこんで、思い切り体を伸ばしてノウノウと銭湯気分を楽しんだ。湯舟は10人は入れるほど大きく、もう少し人っ気さえあれば浪速節でも聞こえてきそうな雰囲気である。

風呂場の中はカンテラの灯が一本揺れているだけでうす暗いが、明けっ放しの窓の外の壁際は、湯を沸かしているドラム缶の火が赤々と輝いていた。

焚口には兵隊が一人蹲くまって薪をくべている。

「湯加減はどうですか。少し燃しましょうか」

呑気な声で話かけてくる。

僕は南の島々にやって来てから2年近くなるが、初めて味あうノンビリした

日本の銭湯気分である。辺鄙な最前線、それもバンダ海の孤島で日本の銭湯を経験するとは、／ アンボン・マカッサル・ジャワ島でも冷水のシャワーを浴びるいわゆるマンデーで過ごして来たが、時に湯らしいものを浴びると体が熱くはてって後々までこたえるので、熱帯地方ではやはりマンデーが一番と思っていた。……しかし此の島の夜はヒンヤリと涼しいので湯あがりの気分もまた快適である。

まっ暗い宿舎に戻ると中尉はライターをつけて、部屋の隅からビール瓶を一本下げて来た。ビール瓶の王冠の中央からは短い芯が突き出ている。

中尉がそれに火をつけると辺りがボーッと明るくなった。ビール瓶式カンテラである。物珍しいので覗き込んでいる僕に中尉が笑いながら言う。

「このカンテラは具合の良い優秀アイディア商品ですよ。油が少なくなれば水を挿すと油が瓶の口に上がってくるし、間違えてひっくり返しても中の油は溢れないし安全ですよ。皿や空缶よりは優れたカンテラです」

しかしカンテラはうす暗くて本も読めないのもので、僕は早々に寝台に潜りこむことにした。

うとうとしたところで、近くのバンガロウが人声で賑やかになった。「スラバヤには連絡してあるよ」とか「無線機は修理できるよ」などと話声が聞こえてくる。ダグラス機の乗員が後片付を済ませて戻って来たのだろう。ひとしきり賑やかに聞こえてくる話声をウトウトと聞きながら、僕はまるで避暑地のバンガローでのんびりと一夜を過ごすような気分で、今日一日の変わった体験をむしろ楽しく思い浮かべながら、またいつの間にか眠っていた。

トアールの一日

清々しい気分で朝早くから目が覚めた。ベランダに出て新鮮な朝の空気に触れるとヒンヤリと肌に涼しい。

目に入るものは林立した木の幹ばかりで、景色は何も見えない。細い木の幹はヒョロ・ヒョロと高く伸びて、枝の先の若葉が空を覆ってあたり一面は柔らかな緑色で包まれている。

遠くの方は木の幹が重なりあって壁のように見え、密生しているように思えるが、実際はそれほど込み合っているはいなく、寧ろ植林でもしたように空間地が多い森の中である。

地面が白い溶岩のカケラで覆われており、そのせいか下草の雑草が生えて居ないので、森の中はジャングルといった感じではなく明るい公園の林の中といった感じである。

それでも空の上から見れば、密林に覆われたジャングルのように見えるのかもしれないが、この朝に関するかぎり、静かで明るい穏やかな緑の林である。

林の中の小道の傍に大きな溶岩を集めてセメントで固めた野外洗面所が造られている。何の事はない日本の都会の安宿で庭などに造られている、いかにも不自然な作り物の岩などと同じような感覚である。

しかしこの野外洗面所には貯水槽が付属しているところを見ると、此処は水に不自由している珊瑚礁の小島なので、雨水を蓄えるための生活の知恵で、最も簡単でてっとり早い屋外洗面所が造られているのだろう。

朝が早いのでこの天水は熱帯地方の雨水とは思えぬくらい冷たくて綺麗な水だった。

そう言えば、この土地に電灯も水道も無いことに昨日いらい何の関心も持っていない自分自身に気がついた。別に不自由を感じずる程の仕事を持っていないせいだろうか。

あたりは明るくなってきたが、うす緑の若葉に覆われてチラチラとしか見えない空からは光がさしてこない、どうやら今日は曇り空らしい。

林立する木の幹には、どの木にもヤドリギが根元から幹を高く捲きあげている。どうやら見たところ蘭の種類らしいが、幾種類もの色や形の違った綺麗な花が咲き乱れている。全く美しいものだと感じるが、専門家が見たら胡蝶蘭とか南洋蘭とかと言って狂喜する代物かもしれない？と見物して歩いた。

朝食は輸送機の乗員たちも一緒なので、別の大きな建物に用意されていた。次々と新しい建物にお目にかかるが、この土地は以前は相当の大部隊が居たとみえて、現在は使っていない建物がまだまだ幾つも在るようだ。兵隊たちのバラックも森のあちこちに在るようだ。

朝食の建物は講堂のような板張りの広間で百人は入れるくらい大きい。

部屋の奥は楽屋か支度部屋か調理部屋か、別室があって料理はそこから運ばれてくる。講演・式典・演劇・宴会・集会・に使う場所なんだろう。しかしやっぱり、ラワン材の鋸引きばなしの建物だ。

広い部屋の窓ぎわに机が幾つも繋がれて、司令が中央に坐り一同が左右に待って朝食が始まった。

食事の前に司令から、挨拶がわりにホットニュースが伝えられた。「救援機が今朝スラバヤを出発したという電報が入りました。夕方には着く予定です」

食事は朝食だというのに、早速缶詰料理である。味噌汁はあったが……。

朝食が終わると、日航の連中はすぐ飛行場にでかけて、一緒に士官たちは陣地を見に行くと出かけて行った。

僕は仕方が無いので、此の基地の無線施設を見ることにして、場所を聞いて独りでブラブラと出かけた。昨日車で来た道をそのまま 2 Kばかり歩いて行くと、森の中にそれらしい小屋がチラチラ見え、椰子の大木を利用して目だたぬようにアンテナが張ってあった。

小屋はスッカリ林の中に隠れているので、近くまで来ても気がつかぬくらいだが、建物の周囲には厚い爆風除けが築いてある。

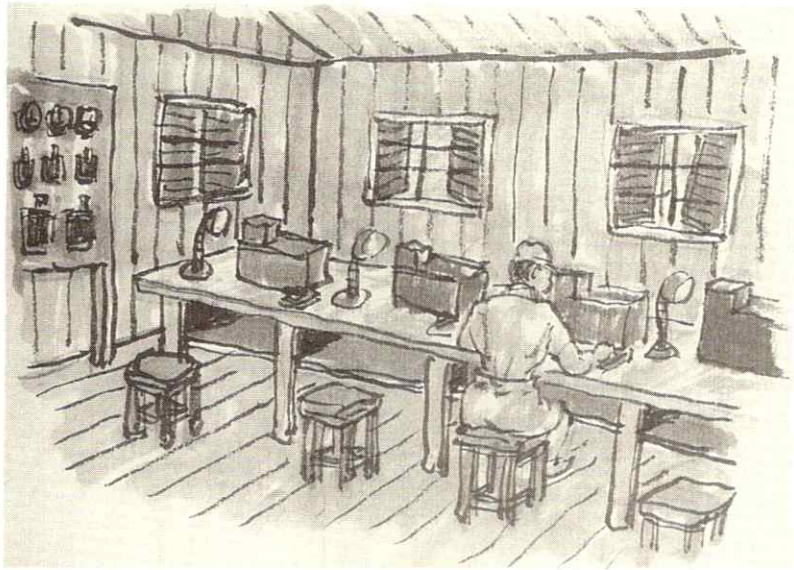
小屋の中は案外こざっぱりと出来ていて、半年前に僕がスラバヤの港から船に積んで送り出した無線機器が要領良くテーブルの上にキッチンと並べられピーピーと無線信号がスピーカーから流れ出ている。

電池室を狭い軒下を利用して屋外に作ってあったり、電源室は便利な受信機室のすぐ隣に出来ている。小さいながら実に良く出来た設備である。

僕は此処で初めてこの島がケイ諸島の中のトアールであることを確認した。「ここは未だ敵に見つかっていないらしく、空襲は一度も受けた事はありません。飛行場の近くの建物はたいてい何度も何度もやられています……」

ここでもさっそく空襲の話である。数人の兵隊がスラバヤ・アンボンと通信しているが、合間あいまに僕の話相手になってくれる。

人数も少ないらしく、部屋のなかもガランとしているが、兵隊たちは皆元気で、クッタクない明るい顔をしていた。



ひととおり無線所の内外を見てまわった後、……といっても小さな小屋ひとつだが、昼飯に間に合うよう僕は帰途についた。

人っ子ひとり通っていない森の中の立派な道をトコトコと歩いていると、独りで何処か山の中をハイキングしているようなノンビリした気分と、片一方やけに寂しい気分に襲われる。

急に空模様がおかしくなり雨がポツポツ落ち始めたが、別に濡れてもどうってこともない身の上、濡れるがままにゆっくりと歩いて雨の風情を楽しんだ。あたりは木の葉にシトシトと当たる雨の音が聞こえてくるだけの静けさである。

午後は寝台に寝ころんで本を読んだ。それに飽きるとベランダに藤椅子を持ち出して、木の葉を潤して降る静かで明るい雨足を眺めながらノートにペンを走らせて過ごした。

ベランダの手すりに両足を投げ出して、藤椅子に長くなって煙草を吸っていると、久しぶりに味あう神経の休まる一刻だなーと自分で思う。

同室の中尉も午後からは戻っていた。彼は口の重い青年でこちらから話しかけると色々言葉が出てくるが、いつもはただ黙って本をよんでいる。

笑う時も口のあたりをチョット歪めるだけといった風で、いつも口をキッと詰んでいる。別にイカつい堅苦しい感じではないが、田舎の模範青年といった、いかにも真面目な人柄であるらしい。

夕方うす暗くなってから雨空を震わせて飛行場の爆音が聞こえてきた。梢の隙間から大きなダグラス機の姿がチラと見えて飛行場の方向に消えていった。スラバヤからの救援機が予定通り着いたらしい。

夜になって隣のバンガローは、今日飛んできた連中も加わったのでしばらくは賑わっていた。我々は明日の出発が早いというので早々に寝台に潜り込んだ。夕方から雨は次第に小降りになり、シーンと静まりがえった林の中で枝から滴る雫の音がいつまでもポトリポトリと聞こえていた。

夜は相当に冷えこんで毛布を引寄せるくらいだった。

俊 寛

5時前にベッドから起き出した。まっ暗な中でビール瓶のカンテラに灯をつける。隣の部屋でもゴトゴト靴をはき服をつけている音がする。

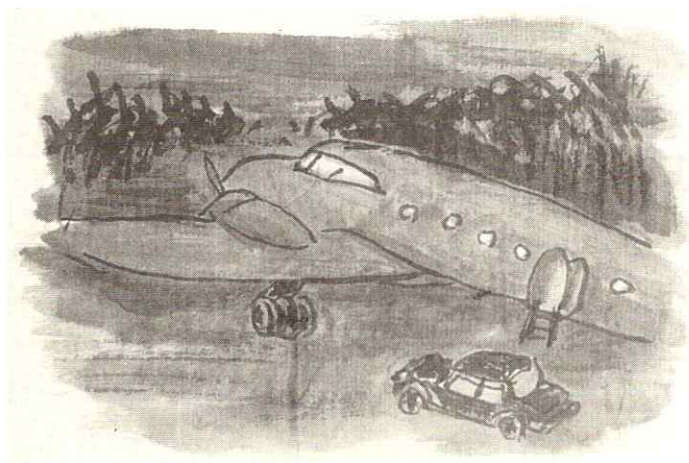
中尉は草色陸戦隊服に肩から吊った革バンドに軍刀を吊るし、脚は黒い巻ゲートルである。K大尉は同じ服装だが脚は黒革の長靴だ。航空廠のM大尉は昨日と同じく軍刀も持たぬ普段着に航空半長靴姿である。

迎えの車で飛行場に行く途中は全くの暗闇でヘッドライトに照らされるジャングルの様相が不気味である。空には雨あがりではあるが星が幾つか見えていた。

夜汽車のように電灯が明るい飛行場の窓々が、闇の中に夢のように浮かんでいた。

出入り口の下に車がとまり、我々が乗り込むと飛行機はすぐにエンジンを掛けて走りだした。飛行機の客は我々4人と前から一緒だった兵だけで、他に前の飛行機の乗員と救援機の乗員が4、5人座席に坐っていた。

飛行機はあっという間に空中に浮かんでいたが、上も下も黒一色で何処にも灯ひとつ見えず、上下左右の見当も付かない。



皆はすぐにコックリ、コックリ眠り始めた。

しばらく眠っていたらしいが痺れるような寒さに目を覚ます。窓の外は少しうす明るくなっていた。

大空から見る夜明けの色は美しい。水平線がボーッと明るくなり、桃色に変わり、いつの間にか緋色に紅にと空一杯の雲に染まってみるみる色を変えていく。その彩りの移りかわりはいかにも自然で、地上とはひと桁違った大きさと広さである。まさに壮大な夜明けといったところだ。しかし最後にあたり一面が明るくなると、空は端から端まで鉛色の雲に覆われていて、太陽そのものは何処からも姿を現わしてこなかった。

前の飛行機と後の飛行機の機長二人は、一番前の列の左右に別れて夫々窓側の席に坐っている。前の機長がガッシリした体格の好男子なら今度の機長は細っそりした美男子である。

若い乗員たちは仲間の人数が増えたので浮き浮きとはしゃいで、代わるがわる客席と操縦室の間を往ったり来たりして賑わっている。

水平線には長い雲の影のような島が幾つも見てきた。

客席の前方の壁にランプがとまり、「安全ベルトを締めろ」の標示がいつものように照らし出された。

両機長はそれを見ると、二人とも膝の上で丁寧にバンドを締めて、締めた後も何度も具合を試してなかなか慎重である。

僕は今までバンド締めはどうせ形式的な安全対策の一つなんだろうと高を括くっていたが、こうして二人のベテランが真面目くさってキチンとバンドを締めている所を見ると、飛行機の離着陸というものは素人の考えるほど簡単なものではなく、相当危険性の高い不安全な仕事であるらしいと思った。

僕も今後は必ずベルト締めをキチンと励行することにした。

低空で島に近付いた飛行機は海岸線上をひと舐めした後、今一度海上に出て今度は一直線に陸地に向けて降りていった。陸地は正面近くに小高い丘が見えるだけで広場らしいものが見えないので、気になって窓を覗いていると外が草の波になって、飛行機はドシンドシンとバウンドしながら陸地の上を走っていた。

飛行機が停まった所は草ぼうぼうの原っぱで、目の前300mには切り立った丘が迫っていた。上空から見た時は広場らしいものは見えなかったが、ここは遥か向こうに砂浜や松林が見える、丘と海岸の間の僅かな平地らしい。

我々は草原に降り立ってゆっくり煙草に火をつけたが、時刻はまだ7時半で草原の何処から人も人っ子ひとり姿を見せない。

乗員達はヤキモキして時計を見ながら待っていたが、しばらくしてやっと遠くから自転車を走らせて来る人影が見え、続けて自動車や自転車で人々が駆けつけて来た。

「バカに朝早くやって来たな。まだ寝てたんだぜ」

「のんびりしとるなー。今日はこれからすぐ出発して夕方までにスラバヤに戻るんだから、忙しいんだよ」

「すぐ出発するんだって。そりゃ弱った。俺の方にはもう一日分、荷物が残っているんだぜ」

「その分は待てないな。これだけは持って行くから、すぐ積み込みなよ。トアールで一機潰ぶされたんで、これはその救援機なんだ。もうこれで定期便はなくなるらしいよ。ダグラス機じゃあ危なくて駄目だということになるらしいんだ」

「じゃあ、俺はどうなるんだ。帰れなくなるじゃないか。この飛行機で俺も帰

るから連れていってくれよ」

「乗って行くんなら、早く荷物を片付けなよ。すぐ出発するんだから」

「弱ったなー。残った荷物もあるしー」

日航の駐在員らしいこの男は草原に積上げられた荷物の山を恨めしそうに振り返っている。飛行機から降ろされた荷物はトラック半分くらい草原に積上げられていた。

「ねえ、1時間ばかり待ってくれないか。荷物を片付けてくるから」

「駄目、だめ。時間が無いんだ。夕方までにスラバヤに戻るには、もうギリギリなんだから」

黙ってこのやりとりを見ていた副操縦士は、手を振って我々に合図した。彼はわざと無表情に我々に言った。

「乗って下さい。出発します」

我々が乗りこんで席につくと、副操縦士も梯子を登って来て機首の操縦室に大股に歩いて行った。その後に前の飛行機の副操縦士が続いて操縦室に入っていた。二人の機長も乗り込んでさっきの席に黙って坐った。

兵隊たちはいつの間に去ったのか姿が見えなくなって、飛行機の客は我々4人だけになっていた。飛行機はまるで我々4人の専用機と言ったところである。

昇降口ではさっきの男がまだ出入口の把手を握って、扉を閉めにかかっている乗員に向かって話している。

「おい、連れていってくれよ、もう来ないんだろ」

口調は笑顔をつくって冗談めかしているが、泣き笑いの表情で本気のような哀願である。

「だからさ、乗っちゃえて言ってるんだよ」

「でもねー、荷物がねー」

操縦室の窓から首を突出して後方を覗いたさっきのパイロットがちょっと眉をひそめながら大声で叫んだ。

「おーい。手を放せ。エンジンをかけるぞ！」

「ツメタイゾ……………」

プロペラは回り始めた。彼は仕方なしに手を放し、飛行機から離れて草原の中に佇ずんだ。若い乗員は彼の方を見やりながらゆっくりと梯子を引き上げ、

扉をバタンと閉めた。

飛行機は一回転して方向を変えると、ひどくバウンドしながら海に向かって離陸した。

今様・俊寛は草原の中にジューッと立ちつくして飛行機を見つめていた。

飛行機は鉛色の海上を、今度は低く這うように飛んでいた。

果てしないジャングル

飛行機が海上に出てから陸の方を見ると、この島は今まで見てきた珊瑚礁の島とは違い海岸からすぐに蒼黒い山が聳えており、その遥かさきの方には雨雲の下にジャングルに覆われた平らな島が幾つも雨にけぶっている。

飛行機はすぐに雨雲の中に突き込んでいったが、高度はグングン下がってジャングルの梢すれすれを飛んで行く。目の下は見渡す限り一面の樹海で密林の形相が物凄い。地面が煮えたぎってモクモク沸きたっているように見えて不気味である。

蒼黒いジャングルは地面を覆った敷物のように、遥かに果てしなく広がっていて目を一回転して見渡してみても樹海、樹海と密林しか目に入らない。

そしてその果ては雨雲にけぶる地平線のかなたに消え去っている。その広大なジャングルの中を縫うように、鈍く鉛色に光る大きな河がどれが本流やら、幾つもの支流に別れて大蛇がノタウッテいるようにうねうねと横たわっている。

さっきから海だと思っていた水面はどうやら河の下流であり、それもひどく大きな河か、洪水で溢れた水浸しの平原なのかもしれない。

雨は機体に降り注いで激しい音をたてているが、窓から見る雨は春雨のように穏やかにジャングルの梢を濡らしているだけだ。爆音に驚いた白鷺の群が密林の中から、白い紙切れのように飛立ってくる。宣伝ビラを地上から空に向けて捲き散らしたように白い斑点はヒラヒラと空に舞い上がり、見る間にその数は無数に増えて遠く広く広がっていく。

雨にかすんで目の前の景色がサーッと消えていったり、また何処からともなく鮮やかな姿を見せたりしている目下のジャングルや、漣ひとつ見えない鏡の

ような水面が大きく湾曲を繰り返している河は、まるでソフトな水墨画を眺めているようだが、ふと、気味悪い連想が沸き起こってくる。

何処まで広がっているか分からない、こんな人跡未踏のジャングルの上空でもしも飛行機が故障を起したら、／＼……。

あの美しいバンダ海の上空を飛んでいる時もチョット不時着のことを考えた。練羊羹のような美しい海面に飛行機がフンワリと着水するような気がして自分ながら可笑しかったが、このジャングルではどうだろう。あまりゾッとしない想像である。

飛行機はいつまでたってもジャングルの上を飛び続けている。地球全体を覆っているかのように広大に見えるこの緑の敷物の大きさに驚いていると、不思議な物が目に入った。

ジャングルのまっただ中に小さな禿のように、銅貨大の木のない平地が見える。平地のまん中には小屋があり、周囲には木の棚らしいものも見える。

明らかに人が住んでいるらしいが、このジャングルのまっただ中の一軒家でいったいどうやって生活しているのだろうか。

やれ電気がない・灯がない・氷がない・マッチがない・米が切れた・石鹸が切れたとチョット物資が不足すると悲鳴をあげている我々にとって、このジャングルの中で生きている住人はまさに驚異である。

ただ、ただ、感じいって見おろしていく。

雨は相変わらず激しく機体を叩いており、行けども行けども周囲はジャングルが続いている。飛行機は何を目標に飛んでいるのか、密林の上を低く梢の上を這うように飛び続けている。

どのくらい時間がたったのか、少しウトウトしていたらしかったが、急に飛行機が大きく傾いたので目が覚めた。すぐ目の前にジャングルの梢が大きく迫っており、窓に触れるばかりの近さである。

慌てて窓に顔を寄せると、目の下には泥海が一杯になって広がっている。河の岸には小さな木の栈橋がチラッと見えた。

不時着、／＼ 瞬間的にそう思ったが、飛行機はゆっくりと角度を取戻して平常に戻った。大きく旋回したらしい。

突然目の前に赤茶けた広い平地が現れた。飛行機が赤土の地面すれすれを走

り抜けるとコンクリートの滑走路が窓の下を縞目をつくって流れ過ぎていった。大きく立派な滑走路である。

滑走路に沿って壊れた飛行機の残骸が累々と横たわっているのが目に入ってくる。まるで飛行機のジャンク置き場のような異様な光景である。

突然、周囲の景色が停止した。

窓ガラスには雨の雫が筋をつくって流れはじめた。忽ち外の景色は歪んだ線となり、機内はムツとするような温かい空気が充満し、窓ガラスは一面に真っ白く曇って何も見えなくなってしまった。

客席の我々は皆、気が抜けたように黙ったまま坐り続けていた。しばらくたってから、乗務員に促されて手提げカバンを下げて出入口に出てみると雨の中に自動車が一台梯子の下に待っていた。

自動車は雨で光る滑走路を噴水のように飛沫をあげて走り抜け、飛行場を出はざれると綺麗な舗装道路をなだらかな丘の上に登っていった。

立木の少ない草の丘には赤や緑の屋根の洋館が緑の中に転々とみえる。その家々の庭には紅や黄色や色とりどりの草花が茂っていた。

丘の上からは、なだらかに起伏した平地が遥かに広がっているのが見渡せる。泰西名画に出てくる異国的な草原風景そっくりで、いかにも平和な景色である。しかしよくよく見ると、家という家はみな屋根や壁やどこかが傷ついていて満足な家は一軒もないようだ。

自動車が停まった所は大きな構えのバラックだったが、玄関の柱に『バボ警備隊本部』という厳めしい大きな看板がぶら下がっていた。

僕は初めて、此处が僕の今度の旅行の目的地、ニューギニア島のバボであることを知った。

今朝飛行機が立ち寄った処は、珊瑚礁の小島でないのも道理、ニューギニア島の一角、カイマナだったのだと僕はヤット気がついた。あの広大なジャングルこそ世界一大きな島ニューギニアの西の端の太平洋、というより大湿地地帯の一端、それこそ西の端の突先のチョッピリした部分だったのだ。

僕が海だと思っていたのは河であり、幾つもの島だと思っていたのは河の中に浮かぶ洲だったのだろう。それにしても、何もかも規模が一回りでっかいので僕は想像とはだいぶ狂いが有るようだ。

カイマナはニューギニア島の西南にある大きな河の三角州の一角に在るのだろう。街や部落は見なかったが今様・俊寛が印象的だった。

バボという土地も、ニューギニア島の西北にあるさぞかし物凄い処だろうと想像していたのに、第一印象はヨーロッパの田舎にでも有りそうな穏やかで美しい泰西名画のような風景が展開されたのにはいささか驚いた。

さて、どんな処か良く見よう。

警 備 隊 本 部

我々は巻ゲートルの兵隊に案内されて奥の応接間に落ち着いた。流石警備隊だけあって、案内嬢もゴツゴツ緊張で四角ばった兵隊である。部屋は応接間といってもコンクリート床に椅子・テーブルが有るだけだが、その藤椅子に腰を下ろし脚を長々と伸ばすと、皆の顔にやっとヤレヤレといったほっとした表情が浮かんた。どうやら雨はあがって、あたりはボカボカと春先のような陽気である。

「僕の方は施設隊長に用があるんだが、君の方は掌通信長に来て貰うようにするからな」 K大尉は僕の方まで心配して呉れながら、兵隊に指示を与えている。

コーヒーなど御馳走になっているうちに、若い少尉の施設隊長と年配の上曹の掌通信長がやって来た。上曹は兵隊としてはお爺さんのような年頃で顔付や態度など、僕よりずっと年上のように錯覚をおこす老けた感じだ。だが歳を聞いたら案外若いのかも知れない。

カチカチになって僕の話に受け答えする上曹を見ると、軍人でもない僕はいささかくすぐたく照れくさいが、すぐ横で大尉と中尉が少尉を相手にきつい口調で質問し調書を取っているの、行きがかり上僕も一応司令部からの重要指令を帯びて来たんだと言う格好で話が進むことになってしまった。はなはだもって妙な気持ちである。

K大尉は藤椅子に反り身になって、若い施設隊長の報告を聞いており、その傍でS中尉がその話の要点を筆記している。

M大尉は関係が無いとみえて、姿が見えない。

急に部屋の外が騒々しくなった。兵隊が靴音をたてて走り、何やら大声の報告が聞こえる。何かあったらしい。

「敵機が、敵機らしいのが飛んでいるんです」

応接間にも知らせがあったので、我々は仕事を中断してドヤドヤと部屋を出て中庭らしい広場に出た。

中庭から見上げる屋根の上には対空監視の櫓が出来ていて、監視兵が上空高く飛んでいる飛行機を追って双眼鏡を向けている。中庭には兵隊達も数人空を見上げている。飛行機は豆粒ほどに小さく見えていた。

「敵の飛行機らしいですね。友軍機は高空を飛ばぬことになっています」

「偵察機だろう。時々来るのかね」 大尉が聞いている。

「このところしばらく来ませんが、来だすと毎日のように来ます。陸軍の大部隊が居たころは、ひどくやられましたが、今じゃ、何も無いことを敵さんも知っているともえて、あまり来なくなりました」

「まゝ、俺たちの居るあいだは来てくれない方がいいなー、アハハハッ」

K大尉は大人のような笑い方をしたが、さっき部屋を飛び出して行く時のそそくさとした格好は余り大人の将校らしい態度ではなかった。

飛行機騒ぎが収まったところで、掌通信長は僕を建物の裏手に案内して、潰れた部屋や焼け爛れた部品・材料が散乱しているのを指差しながら説明してくれた。

「ここに通信室が在ったのですが、やられてしまったのです。本部は無事だったのですが、ここだけ見事にやられました。今はズーッと向こうの丘の下に土手に穴を掘って仮小屋で通信をやっています。午後からそちらに案内いたします」

風と共に去りぬ

我々が昼食した場所は警備隊本部から数百m離れた士官集会所といった建物だった。以前のオランダ人住宅をそのまま使っているらしいこの家は、屋根に赤十字のマークが描かれた病棟が幾つか並んでいる近くにあるから、医者

宅だったのかも知れない。庭の花壇には奇麗な花が咲き乱れ、垣ねにはバラの花が赤く咲いていた。

部屋は四つあって応接間や居間の調度品も以前のまま残っているので、部屋の中は垢抜けした西洋人の匂いがして、とてもニューギニアの辺境とも思えぬシャレタ感じである。

居間の本棚には厚い本がぎっしり並んでいるが、オランダ語なのかドイツ語なのか、医書なのかそうで無いのか、僕にはチンプンカンプンだ。

その中に珍しく英文の『風と共に去りぬ』が混じっていた。

食堂には白い上張りを着た年配の上曹らしい兵隊と飛行機乗りの若い中尉が居た。白い上張りのオッサンは司厨長かこの家の主らしい。飛行中尉は一時の滞在者で、髪を首筋まで垂らした背の高い緊った顔のザックバランな青年だった。

「輸送船の護衛で毎日飛んでいるんですが、船脚しが遅くてねー。今日で三日目ですが、同じような処をノタノタ走っていてまだ先に進んでいないんです。ウンザリしてやりきれませんよ」

テーブルに両肘をつき額に皺をよせて、いかにもウンザリしている表情で話をする。どうみても軍人というより大学生タイプである。

飛行場には『零戦』が3機いたが、この人が隊長で来ているのだった。

白いテーブルクロスのかかった食卓を囲んで6人で食事をしたが、普通の家で食事しているような気分で、戦争中のニューギニアの一角に来ていることを忘れていた。しかし、料理の中身はやっぱり材料が缶詰で、何の手も加えずコロリと器に移されているだけだった。しかしこの士官食堂はトアールとは違って器はすべて日本の家庭と同じような瀬戸物の茶碗や皿、小鉢だった。

ニューギニアの豪邸

昼食の後、我々は今晚泊まる事になっているホテルに行って休息することにした。ニューギニアの前線基地であるバボだから、ホテルとは言わず水交社とか迎賓館とか言うのだろうか、とにかく豪邸である。

飛行場を見下ろす丘のはずれに在る大きな建物で、前は広い芝生、裏は樹の繁った庭がある。オランダ時代は、この地を支配していた理事官の官邸だったのである。

前庭から石段を二、三段上がるとガラス張りのポーチになっていたが、我々が部屋に入って行くと、そこには先客が居た。

相撲取りのように堂々たる体軀の海軍中將が悠然と藤椅子に坐って、副官や参謀たちと地図を拡げて話こんでいた。地図を指差す將軍の掌の大きい事。ぼくの手の二倍もありそうだ。

仲間の若い士官たちは慌てて、堅くなって挨拶していた。

中將はホーランジャ地区の根拠地司令官として赴任して行くため、迎えの飛行機を待っているのだった。

ホーランジャはニューギニア島の北岸に在って、既にアメリカ艦隊が近くまで迫っており、明日にでも上陸作戦を始めるのではないかと噂されている最前線だ。

敵が攻めて来れば、あの辺りの日本軍の勢力ではひとたまりもない事は明らかである。この堂々たる將軍は司令官として、玉砕を覚悟で赴任して行くところなのだ。僕は遠くからチラチラとこの偉丈夫をぬすみ見していた。

K大尉やS中尉がバボにやって来たのも、敵の艦隊がこの地区に迫ってきているため、その対策の仕事で来ているのだ。僕の仕事もそれに関連した仕事であることも確かだ。

民間人である僕は会社の命令で来ている訳だが、妙なことに仕事の内容はあまりハッキリ言われていない。

軍は会社に正式に、軍の仕事を手伝うよう頼み、会社の幹部もそれを引受たのだろうが、中身は軍機密とかで何も判っていないのかも知れない。

会社の幹部は軍隊のようにハッキリ命令を下す事が出来ず、「軍から仕事を頼まれたから、チョイとニューギニアに行って調べて来てくれないか」

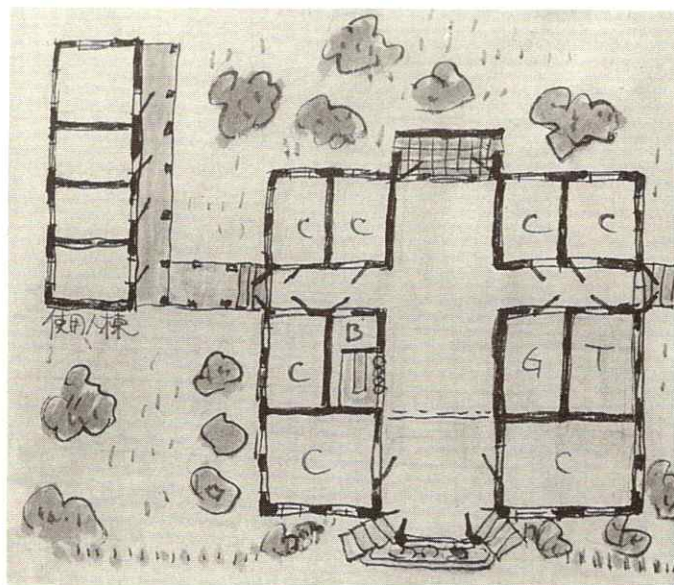
てな調子のお話になっている。

この邸宅はポーチの奥にタイル張りの広間があり、仕切りの大きな板戸を引くと広間が二つに仕切られて、前は応接間、後は大食堂あるいはパーティ会場

となる仕掛けになっている。

広間の片側にはスタンドバーの設備が出来ていて、以前はここでカクテルを飲んでダンスを楽しんで居たのだろう。広間の両側には幾つも寝室が続いていて、奥の方までに8部屋くらいある。広間は、今では何の飾りもなく、隅の方の天井には大穴まであいている殺風景さである。

広間の突当りは石のベランダになって裏庭に通じ、広間の奥は左右の廊下を通して庭に出られる。左側の廊下は屋外の廊下を通して別棟の台所・洗濯場・使用人の部屋えの通路となっている。右側の廊下にはトイレやマンディ場があった。



南の島々にあるオランダ人の家屋の形式は、大小あっても殆ど一定の型がある。先ず玄関らしいものがなく、すぐにポーチ・応接間・居間・食堂になっている。この寝室はこの片側か両側に1部屋から2・3部屋一般的で、この館のような大規模なものまで色々ある。

しかし、家の大小はあっても使用人の部屋や洗濯・台所が別棟になっている事は変わりがない。流石300年のオランダ植民地なるかなと、判る思いである。使用人は現地人なのだから。

この宿舎でも我々はまた二人ずつに別れ、僕と中尉は奥まった狭い部屋に入った。この坊主頭の中尉は几帳面な人とみえて、僕が昼寝をしている間にチャンとワイシャツ・下着を洗濯して窓に綱を張って干していた。

僕は昼寝の後、白タイル張りの美しい浴室でマンディ（シャワー）をやったが、肝心の水が生温いのでガッカリである。等身大の立派な鏡やピカピカのシャワー設備は近代的しゃれた物だが、水は屋根の上かどこかに天水桶を置いて貴重な雨水を貯めているのだろう。

これほど美しい西洋的風景が広がり、しゃれた洋館が建っており、電気もあるのに、水だけはあの冷たい水道の味があじわえなかった。

雨はすっかり上がって、照りもせず降りもせずといった明るい薄曇りで、暑くもなく寒くもない日本の春先のような快い温度だ。

毒 虫

午後から掌通信長に案内されて、飛行場とは反対側の丘の斜面にある仮通信所に行った。池のような湿地を目の前に、丘の下に穴を掘りこんで半地下壕のニッパ小屋だった。湿地の向こうはすぐ近くまでジャングルが迫っていて、ジャングルの立木も水の中から生えている。ジャングルまでの数百mの湿地は根元から切り取った木の株が水面から頭を出していて、濡れた碁盤に碁石をばら蒔いたように見える。

通信壕は狭くて暗くて汚くて、まるで乞食小屋である。これでは敵さんも爆弾が勿体なくて見逃してくれるほど、哀れな掘っ建て小屋である。

小屋の中は屋根裏も壁も柱も真っ黒くなっているので、明るい外から急に入るとしばらくは何も見えない暗さだ。

竹の床の上にアンベラを敷き木箱で代用した机の上に、海軍制式の受信機が1台黒い姿を光らしていた。その前にあぐらをかいた兵隊が一人、耳に掛けた受話器からピーピッピーと鳴る無線信号を受信していた。

竹の床の端に僕が腰をかけると、兵隊は耳から受話器を外して、信号をラッパ形のスピーカーに切り替えてから席を立った。土間に降りてきて隅の方で何

かゴソゴソ始めた。

暗さにも慣れて小屋の中が見えるようになってきた。狭い部屋には窓が1ヶ所あり、跳揚げ式の板戸が棒で支えてある。アンペラ敷きの隅には寝具が畳んであるところを見ると、ここで寝泊まりしているらしい。

土間の隅でゴソゴソしていた兵隊は、大きな缶詰の空缶を針金で吊るした湯沸しにコーヒーを煎れて持って来た。真っ黒い煤けたブリキ缶から注がれたコーヒーの味は格別のもので、兵隊の日頃の苦勞がジーンと伝わってくる。椰子製の砂糖も甘く、この場の雰囲気合う。

「此処は蚊はあまり居ないんですが、このブヨみたいな小さな虫がやけに多くて目も開けられない時があります。これに刺されても直ぐには痒くもないくらいですが、2、3日すると刺された跡が赤く腫れてきて、人によっては化膿したりして酷い目にあいます。あなたも首筋や手首など露らわさない方がいいですよ。今はただ煩いだけですが後に厄介です」

なるほど小さな虫が蚊柱のように塊になって襲って来る。僕は慌てて上着の襟をたてた。

「この虫は蚊帳の目を通して中に入るので始末におえません」

虫を片手で追いながら兵隊は人懐かしげに、色々と変わった話を聞かせてくれる。

「アンボンの方は今空襲らしいですよ。空襲電報を打っています」

彼はピーピー鳴るスピーカーの方も注意を怠っていない。

送信所はこの通信壕から丘を下って、奇麗な舗装道路を2kmほど歩いた飛行場の広い原っぱの中にあって、小さな小屋の中に大小の送信機が何台もゴチャゴチャと置いてあった。今ではこの中の一台か二台使っているのだろうがまるで倉庫だ。すぐ横にある大きな建物に据え付けてある100kWのディーゼル発電機も時々使うだけだと言っていた。

掌通信長は鉄の梯子を登って、見上げる大きなディーゼルエンジンの中段に上がり、機械の表面を撫でながら言う。

「私はエンジンの事は何も知らないのです。据え付けた専門家は動かし方と止め方だけ教えて引揚て行きましたから。私は時々これを動かしているんですが、まったく冷汗ものです」

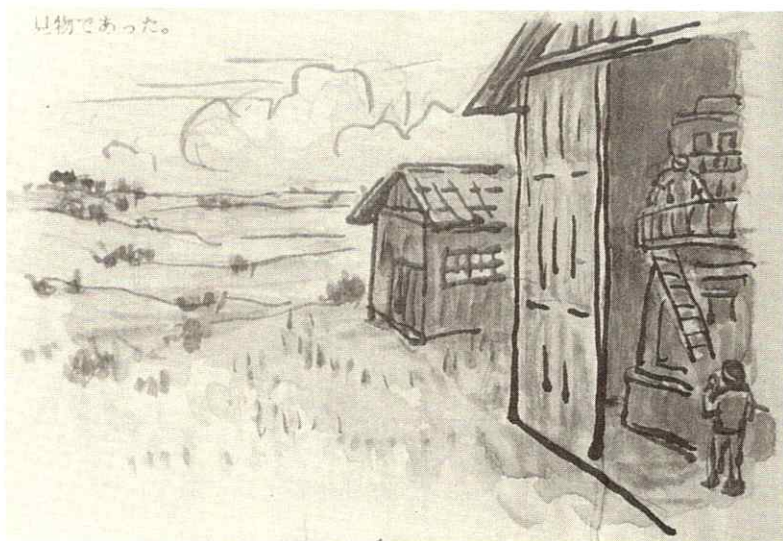
「通信連絡線のケーブルも、誰も教えてくれる人が居ないので、自分で勝手に敷設しました。とにかく線と線が繋がってれば良いというやり方で……」

彼は僕をケーブルが敷設してある場所に連れて行ってくれた。なるほど、鉛被ケーブルが地形にお構いなしに道路を横切り溝を渡り丘を越えて一直線に送信所と通信所の間の地上に置きっ放しの状態で繋いである。

この辺りは飛行場周辺の広々とした平地で、緩やかに起伏した低い丘が続き、広い空も穏やかだ。立派な舗装道路が伸び、赤や緑の洋館も点々と見える平和な姿だが、すぐ近くには大きな滑走路が延びていて、その両側には累々と壊れた飛行機や焼け爛れたエンジンが幾つも転がっている。

掌通信長は新しく造る通信所の予定地にも案内してくれた。さしづめ、こちら当たりが僕の仕事の目的地だろう。今までの場所とはまるで反対方向の飛行場を見下ろす丘の中腹だった。

僕は案内されるまま、のんびりと歩きまわったが、天気は暑くもなく寒くもないポカポカ陽気の気持ちよい気候だし、何処を歩いても人っ子ひとり出会わない無人の境で、飛行場周辺の丘や原っぱは際限なく広々と広がっていて、僕はハイキングでもしているような呑気な気持ちでテクテク歩きまわった。見るもの聞くもの、僕にはこれまで経験したことの無い日本離れた見物であった。



冒 険 着 陸

夕食のテーブルには飛行中尉の姿が見えなかった。

「さっき、一度着陸したんだそうですが、ついて来た筈の部下の機が見えないと言ってまた捜しに飛びたって行ったんだそうです」

白衣のオッサンが心配そうに話している。

「たった3機で飛んでいて、仲間が見えなくなる事があるんかしら。事故でなけりゃ良いがな」

「飛行場に転がっているあの残骸は事故なのかい、それとも敵にやられたのかな。随分あるね」

「うん。70機以上もあるそうだ。驚いたね。……もっとも、陸軍機が半分以上あるらしいが」

「陸軍じゃ、壊れたやつにガソリンをぶっかけて焼いてるって話じゃないか」

「ウン、無茶だよ。海軍の方は整備兵が一人いて、感心にエンジンも奇麗に手入れしてあったよ」

「部品を集めりゃ、何台か纏まんじゃない？」

「出来んことはないが、整備兵一人じゃねー。それに陸さんとうまく連絡が取れればねー」

「事故が多いのは滑走路が悪いのかね」

「施設隊長は設計通り工事してあると言っているが、よく調べてみなくちゃ判からないよ」

食事しながら色々な話が出てくる。我々四人はいつの間にか気楽な仲間同士になっていた。

食事の後は居間で煙草をのみながら雑談したり、本棚からあれこれ雑誌や本を引っ張り出して見たり読んだりした。

暗くなってから宿舎に引き上げ、ポーチで涼んでいると爆音が聞こえてきた。庭に出て上空を見上げると、赤と緑の標識灯が旋回を繰り返している。

「中尉が戻って来たな。こんな暗闇にうまく着陸出来るかしら」

飛行機は何回も何回も旋回を続け、時には地上スレスレまで降りて来るがまた上空に登って旋回を続ける。

地上では滑走路の方向で、大声で叫び合っている兵隊の騒ぎが聞こえてくる。やがて暗闇の中に明るい光の線が滑走路を照らしだした。トラックが2台、滑走路の端からヘッドライトを照らして居るのだった。

我々は飛行場を見下ろす、前庭の芝生の端まで行って、心配しながらジーンと見つめていた。飛行機のランプは、暗闇の中から光に向かって近付き地面に吸い付くように降りてきて、光の尾を曳きながら地上を走った。

ランプの光は時々、木や建物の蔭に隠れて消えたが、長々と一線を描いて横に流れ滑走路の端で止まった。

「上手くいったらしいな。全く危ないことをやるよ」

「着陸の時は全く危ないよ。わしもね、一度ひっくり返ったがね」

航空機の大尉は慣れると益々子供ばい話し方で、手まねを入れてよく喋る。「新設計の飛行機に同乗したとき、腕ききのパイロットだったがストップした瞬間トンボ返りしてね。……ブレーキが効き過ぎると反動で尻っぽが持ち上がって、クルリッとやるんさ。初めての飛行機はその効きかたの見当がつかないんで、難しいんだよ」



『銀 蠅』

夜になってから、S中尉の旧部下だったという人が一升瓶を提げて我々の部屋を訪ねて来た。我々3人は早速ベッドの上でチビチビ始めたが、やがて大尉たちも触角を働かして隣の部屋からやって来た。

大尉たちに較べると中尉は中々の酒豪らしい。だが5人で一升では皆で飲むほどの量ではない。それでも久し振りの酒なので我々はだんだんと調子づいてきた。

「もう少し酒の肴が欲しいな。いくらニューギニアでも缶詰ならあるだろう」と欲が出てくる。

「よし。僕が貰ってこよう。呉れるだろうな」 僕は酒の勢いで立ちあがった。「しょうがない士官たちが駄々をこねてるって貰って来て下さいよ」「よし、わかった。やってみる」

僕は星がチカチカしている暗闇に出て、警備隊本部の裏手の建物の戸を叩いた。ニューギニアでも流石に夜は冷えびえとして、酒にはてった体だが肌寒い。

主計長は寝ていたらしいが大きな鍵の束をぶら提げて、大儀そうに現れた。案内された裏手の倉庫の大きな扉を開けて中に入ると、僕はアッと驚いた。

懐中電灯に照らしだされた倉庫の中は、食料品の袋や箱や包みが高い山になってギッシリ積み上げられており、缶詰の山も僕の背より高く並んでいた。

「若い士官たちは全くしょうがない連中でね……」

主計長はブツブツこぼしながら、それでも大きな懐中電灯で缶詰の山をあれこれ捜して、表示を確かめた上3、4個選び出してくれた。

「酒の肴にはこんなのがいいでしょう」 となかなか親切である。

海軍では賄い荒らしのことを『銀蠅』と言うそうだ。

バボの一日

朝食の時、元気な飛行中尉の顔が見えた。

「昨夜は見ていてヒヤヒヤしたよ。上手くいきましたね」

「いやあ。失敗しました。こっちは怪我はなかったのですが、飛行機が脚を壊しましてね」

「滑走路があまり良くないって話ですが」

「さあー。どうですかね。自然と端の方に寄って行って、側溝に脚を突っこんだんです。中央部が少し高過ぎるのかな」

「部下の飛行機は見つかったのですか」

「いゃー、それが見つからないのです。カイマナにでも戻ったのでしょうか。今日、何とか連絡があると思うんですが」

彼は別に屈託もなさそうな顔をしてパクパク朝飯を平らげている。神経の方もだいぶ太そうである。

この士官食堂の食事はなかなか御馳走であるが、材料はやはり皆缶詰である。時には多少手に加えてあるが、それは日本式の器や皿に缶詰の中身をコロリと移すか、多少体裁よく移すかの差でしかない。

「野菜と果物がなくてねー」とこぼすのがこの土地の人、つまり白服のオッサンの口癖である。

どうやら僕は勘違いしていたらしい。ここが病院の一角なので、白い上張りのオッサンを看護兵と思っていたが、どうやらこの地最高の調理士、この部隊の司厨長と呼ばれる人なんだろう。

今日は朝から我々4人は別々に分かれて、夫々自分の仕事で過ごした。どうやら僕にもこの土地の様子が判ってきた。

バボという土地は大きな河に面したジャングルの一角をバリカンで刈り取ったように直径5kmくらいの広さだけ切り開き、中央に飛行場を設け山手に住宅など建て並べ、低い河に面した平地に製油所を建設する予定だったのだ。

建設資材を河から近い場所に集結しつつあった時に、戦争が始まったのだろう。河辺は資材の山である。

ニューギニア島の西部地区は、石油が地表面から湧出して自然に流れ出して

いると言う噂話まで有るくらいだ。

この土地に製油所建設が進められていたと言うことは、噂話も噂だけではないらしい。

ジャングルを切り開き、道路を作り、ジャングルの一角をバリカンで刈り取ったように直径5 kmくらいの広さを裸にし、中央に飛行場を設け、山の手の丘に住宅など建て並べた。大きな河岸には栈橋を作り河岸の平地に製油所を建設するための資材をせっせと運びこんで集積した。そこで戦争が始まってしまったと言う訳だろう。

しかし考えてみると、この大東亜戦争は元をただせば石油争奪が原因で始まっているのが現実だから、僕にもなる程なあと、物事が見えてくる思いだ。

夜の食堂で皆が顔を合わせると、待ち構えたように話が弾んでいる。今朝はあまり喋らなかつた飛行中尉もすっかり元気になってよく喋る。

「部下の飛行機はやはり、僕を見失ってカイマナに戻っていましたよ。今朝無事にやって来ましたよ」

「一緒に飛んで居ながら、途中で見えなくなるなんて考えられんな」

「ハッハッハッ。見えなくなるんですよ。チョッとウツカリすると、雨雲の中に消えてしまったり、入道雲を突きって外に出てみたら、仲間が何処にも居なかつたりするんだよ。昨日も雨が降って居たんで見えなくなっただよ」

「仲間と無線連絡はしないんかね」

「いつも30 m位先に顔を見てるんでね。ウインクだけで意志が伝わるんで、無線など面倒なんだ。それに無線はね、仲間より先に敵さんの方に良く通ずるんで、なるべく使わんようにしてるんだ」

長い髪を掻きあげながら、中尉はニヤッと笑う。

そう言えば、髪を伸ばしている陸軍の兵隊や士官は見たことがないが、海軍では逆に髪を伸ばしていない士官はほとんど居ない。今度、一緒になったS中尉のような坊主頭は全く珍しい存在である。

「今日はね、皆を集めて訓示をやったんだ。近く敵がニューギニア北岸に上陸する気配が在るってね。そうすりゃ、ここも第一線だからな」 K大尉は箸で空中に地図を描いて説明する。

「現在、食糧はどのくらい有るか尋ねたんだ。米がどのくらい有ると思うかね。

10年分って返事だったよ」「念を押すと今度は5年分と言う返事になっちゃってね」「100人で10年分なら、どさくさで200人になったら5年分かな…」

食事の後、居間の壁棚で麻雀牌を見つけたので衆議一決、夜はこの部屋で麻雀をやることになった。

この麻雀牌も以前の住人の私物とみえて、僕も初めて見るプラスチック製の大型パイだった。一万・五万・九万などの万子パイの隅にはアラビア数字で小さく翻訳の数が彫ってある。東・西・南・北もE・W・S・Nの文字が隅に彫ってあった。

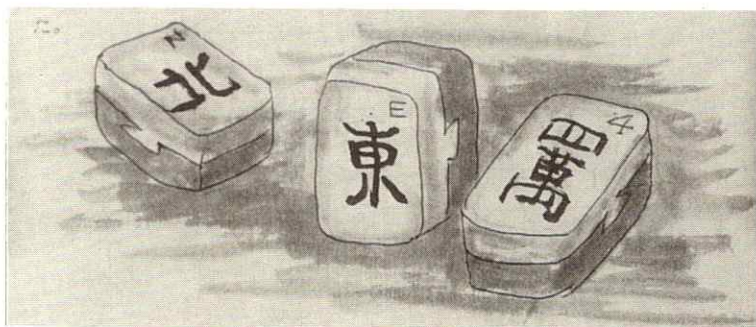
電灯は9時になると消えてしまった。消灯時間だ。

我々は蠟燭を借りて執念深くマージャンを続けたが、何か悪い事をしているみたいで余り面白くなかった。

真っ暗な夜の道を宿舎に戻る途中、警備隊本部の前では『誰かッ?』と鋭い誰何の叫びが飛んで来た。

M大尉が間髪入れずに、なれた口調で「M大尉ほか3名!」と吐き捨てるように答えて、歩哨の前を通り過ぎた。なかなかの良い呼吸である。

夜の空気は冷えびえとして身震いするくらいである。赤道直下のニューギニアとも思えぬくらいである。空には今夜も、星が沢山チカチカしていた。



ゴースタウン

宿舎から丘の下を見下ろすと、遙か飛行場の向こうに点々と部落が見え、更にその先に、オランダが製油所建設のために運び込んだ資材の山が、雨曝らしになっているのが見える。

其処に通信用の資材でも転がっていないかと、僕は朝食後ひとりで探検に出かける事にした。

道は有るのだが、なだらかな平原の向こうに場所は見えているので、とにかく一直線に、丘を下り原っぱを横切り飛行場を突き歩いて行った。

滑走路の近くの原っぱには壊れた飛行機が累々と転がっている。真新しい『呑籠』が片翼を僅か傷づけた姿でヘタバッテいる。陸軍の爆撃機だが、傍によってよく見ると、案外小さな飛行機である。

初めて近くで見るのが珍しいので、前後左右に回ってアチコチいじってみたり、覗いて見たりした。『部品を持ち去る者は銃殺に処す』なんて物凄い荷札があちこちにぶら下がっている。しかしこの広々とした原っぱには人っ子ひとり人間の姿は見かけない。

焼け焦げたエンジンやクニャクニャになったプロペラなど、幾つも転がっているが、中には新品同様ピカピカ光っている物もある。

遠くから見た時は坦々たる平地のように見えていたこの草原も、歩いてみるとかなりの高低があってウンザリするほど歩きである。

草原の中に新しい地肌を見せた小山が幾つも並んで聳えているので、そのひとつに登ってみると、山の頂きには火山湖のように、満々と水を湛えた池が出来ている。大型爆弾で出来た爆撃の跡だった。この新噴火口の直径は30m以上もある大きなものだ。この山の上から見渡す付近には、遠く近く新噴火口が幾つも列を作って並んでいて、以前には相当激しい爆撃があった事が想像できる。

30戸ばかり家並が建ち並んだ部落に辿りついた。道路を挟んで田舎店屋が並んでいる。簡単なニッパ小屋から木造トタン屋根のチョットした家まで入り混じっているが、どの家も半壊れの明けっぱなしの無人の家だ。

頭のちぎれた椰子の木や、焼け爛だれて枯木になった裸の木が倒れかかった

家並を見下ろしている。西部劇映画によく出てくるゴーストタウンのモットでない本物である。

この辺りも、大小様々な新噴火口の小山が道路だろうと裏庭だろうとお構い無しに土を盛り上げている。明るい昼間ではあるが、不気味に静まりかえっている死の街の草ぼうぼうの表通りを、僕は小走りに歩いていった。

崩れかかった店屋の半開きの扉の奥からヒョロリと誰か顔を出しそうで、薄気味悪さを通り越して、背中がゾクゾクする凄味さえ感じていた。

死の街を過ぎると、今度は鉄の街が現れてきた。

舗装のしていない広い道路を挟んで、両側は物資の山がうず高く積み上げられている。思わず立ち止まって、遥か彼方まで続くこの壮観に見とれるくらい夥ただしい量である。

直径1 m近い鋼管が道路際の草の中に幾何模様を描いて高く整然と重なっている。厚手の鋼板が高さ5 mくらい重ねて積まれたのが、延々と何処までも続いている。油タンクを造る材料だろう。

ブルドーザーも観兵式のように草の中に整然と並んでいる。見たところペンキのお蔭であまり錆てはいない。見上げるほどでっかい発電機が幾つも雨晒しになっており、小型だが新型の機関車が数台赤錆びて並んでいる。

まるで新品のようなポンプが雑草の中に切り株のように列を作っている。



広い大きな一本道の両側は物資の山だが、突当りは大きな河のでっかい木の
栈橋である。岸近くには鉄骨の工場のような大きな倉庫が並んでいる。

中を覗いてみると固くなったセメント袋や木の樽がウンザリする程詰まっ
ている。僕が捜している電線やケーブルを巻いたドラムも沢山あったが、どれも
これも焼け焦げている。逃げ出す時ガソリンでもかけて燃やしたのだろう。

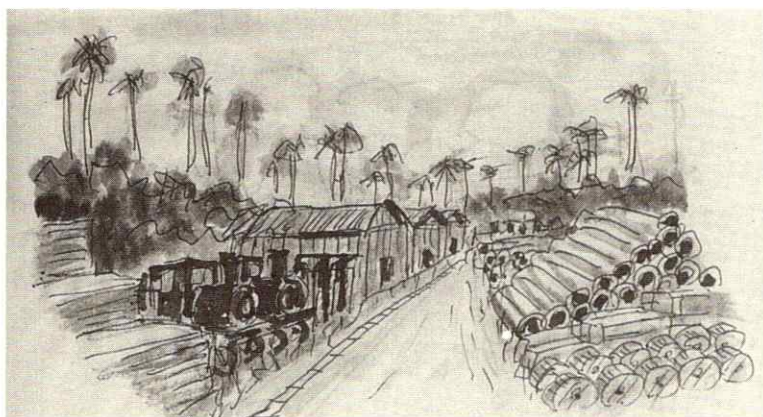
このあたりもシーンと静まりかえって人っ気がないが、別に薄気味悪くはな
い。物がいつも見慣れている文明の機械類であるせいだろうか。

とにかく、これだけの夥たしい品物を集めてジャングルの中まで、よくま
あ運んだものだと感じたが、僕には使えるものは何もなかった。

僕が鉄の街を後にして、宿舎に向かって歩いていると、シーンとした静けさ
の中からレールを走る機関車の音が聞こえてきた。僕が耳を疑って後ろを振り
返ると、遠く岸边の方から道路に敷いてあるトロッキのレールの上を豆機関車
が走ってくる。人声も聞こえてくる。よく見ると油で走る小さな機関車を日本
人が運転して何か荷物を運んでいた。

無人境で人に会えた喜びみたいな感激を受ける。

船で栈橋に着いた荷物をこの豆列車で飛行場まで運んでいるらしかった。



将軍メニュー

宿舎に戻ってみると我々のホテルはばかに賑やかになっていた。カイマナ根拠地司令官と幕僚たちが4、5人来ているのだった。

潮焼けした好々爺然とした老少将がボーチの椅子にドッカと腰を下ろしていた。その前のテーブルでは睨みの効きそうな中年の佐官が立ったり坐ったりして若い中尉や少尉に指示を与えたり、話あったりしている。そのたびに士官たちは散って行ったり集まって来たりして忙しそうだ。

僕がこれまで見た司令官は上品な老人が多く、あまり目が釣上がった将軍は見た事がない。少佐・中佐の参謀級になると、いかにも軍を動かしているのは俺だといった、頼もしくはあるがきつい顔や性格の男が多いようだ。

ちょうど、兵隊の中でも軍曹や兵曹長といった兵隊を動かしているのは俺だといった頼もしい連中が居るのと同じで、責任上そういったタイプが出来てくるのだろう。

今見えているお怖かなそうな中佐は前任参謀といった所だろう。

司令官の一行はアンボンに向かうために来たらしいが、定期便が先日の遭難事故以来飛行中止になったらしく、そのための対策を色々やっているらしかった。飛行機便が無くなった事は、我々にとっても事重大である。帰りの脚が無くなった事なので、我々4人の話題の中の最重要事項になってきた。

夜はお客さんが増えたので、我々の部屋に航空廠の大尉が割込んで来た。ただでさえ狭い部屋に寝台を三つも並べたので身動きもとれなくなってきた。

その代わり将軍一行ご入来のお蔭で、我々は食事のために士官食堂まで出かなくても、宿舎のただっ広い広間で食事が出来るようになった。

大広間の中央に設けられた、まっ白いクロスのかかった大テーブルで、司令官以下ズラリッと並んで豪華な食事をしていると、此処がニューギニアの一角で、近く敵が迫って来て第一線になるかも知れない場所だとは、到底考えられない妙な雰囲気である。

食事の形式や内容が、昨日迄の士官食堂のそれとはガラリと変わって、驚くほどの豪華版である。黒塗の膳に料理屋風の皿・小鉢が並び茶碗やお椀も本物である。

軍隊という処は戦争中のジャングルの奥まで、こんな日本食の道具をわざわざ運んで保管しているものとみえる。

御馳走は洋風あり和風ありで、刺身こそ出ないが吸い物・揚げ物・煮物とひと通りの日本食が料理屋式に見事に盛りつけられている。

とにかく見た目には日本の高級料理として出来ばえは申し分ないが、さて食べてみると、中身は今まで食べてきた食事と変わりばえのない、只の缶詰料理だった。

缶詰から移された中身が天ぷらの衣をかぶったり、上品にお椀の底に本物のような顔をして静かに沈んでいるだけだった。

トアールのジャングルの中では、缶詰の中身が軍隊のアルミ皿にコロリッと移してあったのが、バボの士官食堂では瀬戸物の皿・小鉢にコロリッと移してあった。それが將軍メニューともなれば、缶詰の中身に厚化粧を加えて外観だけは一流料理店風に格好をつけ、上品な容器で演出効果を挙げているのだ。

偉方たちは『ああ、やっぱり缶詰か』とガッカリしないのだろうか、それとも最前線のジャングルの中での高級料亭風の料理の雰囲気、懐かしい祖国を憶い浮かべて満足するのだろうか。

その気持ち判るような気もするが、やっぱり判からない。

食後に果物が出てきたのには驚いた。ふたこと目には『果物がなくてねー』とこぼして居た白衣のオッサンの姿を思い出す。この土地で初めてお目にかかる果物だ。

マレイ語でジュルクと言う小さなザボンのような蜜柑で、酸っぱくもなければ甘くもないパサパサした代物だった。

果物には司令官も驚いた風だった。

「ほほう。果物があるな。遠方から持って来たんだろうな。どうだ、兵隊たちも時には食えるかね」

司令官は温顔をほころばせて、硬くなって傍で給仕している若い一等兵を振りかえって話かけていた。

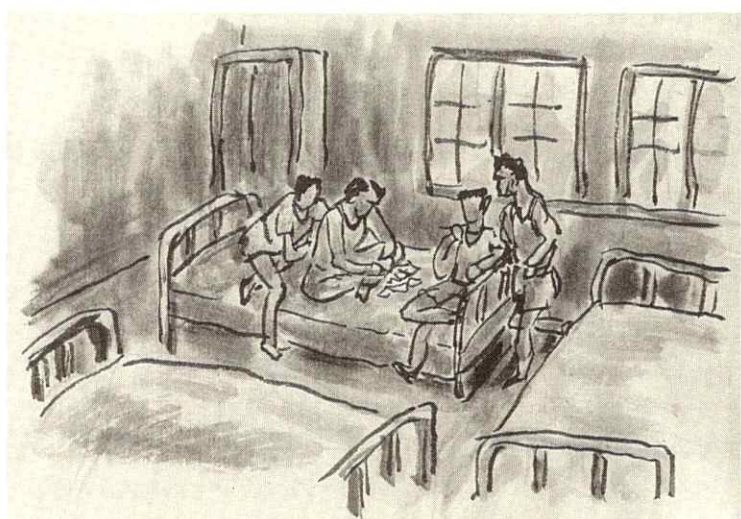
この夜はポーチを將軍一行に占領されたので、我々は夕方から付近を散歩したり、夜になってからは寝台の上に集まってトランプ占いやって過ごした。

これまでも、トランプ占いはチョイチョイやっていたが、今日はいささか本

気である。『果たしてアンボンにうまく戻れるのか』と4人は夫々、ある程度の真剣さで「よし、今度は俺が真剣に、もう一度やってみる」と夢中になって占いを繰り返した。

しかし、なんどやっても成績はサッパリで皆はガッカリした。

「司令官でさえ脚がなくて、こんな処で待機して居るんだからな。しかた無いよ、我々は」 と最後はお互いに慰め合うしかなかった。



トランプ占いの怪！

バボの位置は、日本の九州の真南辺りに在り、ニューギニアは日本全体の真南に当たる。緯度は南緯3度ぐらいでニューギニア島の西部に在る。

此処ではカーッと照りつける日は一日もなく、うす曇りの毎日は日本の春先の陽気で、暑くもなく寒くもない全くもって良い気候である。

午前中は特に風もソヨソと吹いてくるので、部屋の中はヒンヤリとしてま

ことに快適である。

朝食がすむと我々は何処へも出かけず、夫々書類を抱えて広間の大テーブルのあちこちに陣どった。ポーチでは今日も司令官一行が丸テーブルを囲んで話合っている。

僕はテーブルの端の裏庭がよく見える窓近くに坐った。静かで風もよく通る涼しい一角である。調べてきた通信所予定地の機器配置案の報告や設計図を纏める仕事にかかった。

大尉たちや中尉も夫々別々にテーブルに向かって仕事を始めている。部屋の中は司令官一行の低い話声が微かにあるだけの静けさである。

「国際の人、」

渋い静かな声に振り向いてみると、白髪頭の小肥りの司令官が僕の傍に立っていた。

「紙を2・3枚くれんかね」 と僕の便箋を指差している。

「会社名入りの社用箋ですが、よかったらどうぞ」 と僕は数枚剥ぎ取って差し出した。

「ああ、結構々々。どうも有り難う」

司令官はゆっくりした足どりでポーチに戻って行った。

僕は久し振りの机の上の仕事なので、いかにも大事な仕事をしているような満足した気分で仕事を続けた。

どうやら報告書が纏まった頃、兵隊が昼食の用意にテーブルを片付けにやって来た。

昼食後、昼寝から目を覚ました僕は、マンディ場でなま温水を浴びた後窓際のベッドの上でトランプを始めた。

「アンボンにうまく帰れるだろうか」「果たして飛行機で戻れるだろうか」祈るような真剣な気持ちは一枚、一枚のカードをめくる時の心のおののきが自分でも判かって、いささかバカバカしく思いながら何だかこのトランプ占いに運命が掛かっているようで笑えない気持ちである。

しかし、今まで何度やってもうまく出来なかったこのトランプ占いが、どうした事だろう今回は続けざまに2度も出来てしまった。

僕は思わず驚きの大声をあげて唸ってしまった。

「おかしいなー。よしっ、俺もやってみよう」

さっきから起きてきて後ろから覗きこんでいたS中尉が同じトランプ占いをやり始めた。おかしい事にこれもスラスラと出来てしまった。今度はM大尉がベッドに坐りこんだ。彼のトランプ占いもアッという間に出来てしまった。我々は妙な顔をしてお互いに顔を見合わせて言葉がなかった。

大尉と中尉はマンディ場から戻って、改めて裸の体をタオルで拭いており、僕はランニングシャツの上に服を着ている時、窓の外に飛行機の爆音が聞こえてきた。飛行場とは反対の上空である。

我々は窓に跳んで行って首を突き出して空を見上げたが、見えるのは繁った木の梢ばかりで、爆音は低空に聞こえるのに飛行機の姿は見えなかった。

「あれは陸軍の爆撃機の音だ。着陸するらしいぞ」

M大尉は飛行場の見える別の窓に跳んでいった。

その時、タイル張りの廊下をバタバタと靴音をたてて走って来た兵隊が、我々の部屋の前に止まってドアをノックした。

「飛行艇が着いたそうですから、すぐ出発の用意をしてください。司令官はもう用意されております」

我々は狐に摘ままれたように同時につぶやいた。

「なにっ。飛行艇だ！」「とにかく、出発準備だ！」

我々は驚くべきスピードで身支度を始めた。

我々は洋服タンスの中の衣類を手あたり次第カバンの中に放りこみ、濡れたタオルも生乾きのシャツもぬるぬるする石鹸も目茶苦茶に投げこんだ。

帽子を片手に靴を引っ掛けながら大急ぎで大広間を抜けて表口に出てみると、ポーチの前の道路には2台の乗用車が待っていた。

コツコツと歩き回っていた司令官は我々の姿を見ると、黙って車に乗りこんだ。

「飛行場の向こうの河に4発の飛行艇が浮かんでいるのが見えるでしょう」

兵隊が指さして教えてくれる。

「なるほど、いつの間に来たんだろう。さっきの爆音は確かに陸軍の爆撃機の音だったかー」 M大尉はポーチの石段の上で、まだ爆音にこだわっている。

広々とした草原の向こうに微かに光って見える河はそれほど大きくは見えない

いが、そこには大きな黒い水鳥が翼を拡げたように飛行艇が浮かんでいた。

「すぐ出発しますから早く乗って下さい」

車は丘を下り飛行場を横切りゴーストタウンを横に見て、物資の山の間の一本道を走り抜けて河の岸にでた。硬くて大きな木材で出来た頑丈な栈橋が岸から50mも河に突出ている。飛行艇は栈橋の沖、河の中流に鼠色の胴体をゆったりと水面に浮かべ、四つのエンジンを付けた長い翼をピンと張っていた。いわゆる川西製の4発大艇である。



大きな飛行艇

河は入江と言った方がよいくらい広い。遠い向う岸は水からすぐにジャングルになっており、こちらの岸は湿地のように草原や林が水に漬かっている。河は泥水が岸から岸まで満々と溢れてまるで海のように浪立っている。

車から降りた我々10数人は栈橋の先端から、柱に垂直に取り付けられた梯子をつたって水面の小さなボート、舟艇に移った。

栈橋の板の上をコツコツと歩き回っていた司令官は、最後に梯子をおりて舟艇の後方中央の席に腰をおろした。海軍では車や舟の乗り降りや、坐る場所までチャンと定めがあって、我々門外漢には可笑しいほど守られているらしい。

司令官もただぼんやりと散歩していた訳ではないらしい。

ランチには最上官が最後に乗り、将官なら黄色、佐官なら赤のケットを敷いた上にドッカと坐るらしいが、この鉄製のボート、上陸用舟艇はいわゆる『少発』だから、勿論ドッカと坐る訳にもいかず、皆が立ちん坊をしている中で司令官だけは何とか危なげに腰を沈めていた。

外海のように浪立っている河面をボートはドシンドシンと大きくピッチングしながら飛行艇に近付いて行った。遠くから見てた時は普通の爆撃機ていどにしか見えてなかったこの大艇も、傍に寄って見ると桁ちがいに大きな飛行機だった。

ボートは胴体の中央部にある出入口に近付こうとするが、波が高いのでドシンドシンと1 m以上も上下して、うっかりすると胴体に突き込みそうになって、とても乗り移るどころの騒ぎでは無かった。

ボートは機首の風下で波の少ない側に廻わりこんで行った。

飛行機の鼻先には救命具を身につけた乗員が数人現れてボートとの間にロープを固定した。その作業も簡単ではなかったが。

大艇の鼻先の下にかじり付いたボートからは、先ず司令官が上と下から助けられてツルツルしたジュラルミンの鼻先に這い上がった。

ロープを頼りに大艇の鼻先に這い上がると、いや引釣り上げられると、そこにはポッカリと大きな穴があいていた。マンホールに潜りこむ要領で穴の中に潜りこむ。トタンに頭の芯がジーンと痺れるガソリンの臭いだ。

狭い通路は壁も床も裸の金属でピカピカ光っており、油でツルツル滑ってまともには歩けない。通路の天井や壁は線や管がギッシリ張りついていて物々しい。見上げる高い処に操縦席があって複雑な機械や計器がギッシリ並んでいる。仕切りの壁の楕円形のハッチを背を縮めて、潜水艦の中のように潜り抜けて奥に進むと、突き抜けた処はガラんと大きなカラッポの部屋だった。

旅客機なら座席がずらりと並んでいる場所だが、軍用機だけあって椅子ひとつ無く、壁もフレームの骨がむき出しで薄い皮一枚で外界と接している。

胴体の両側には卵形のふくらんだ窓があるが、取り付け金具はあるが銃はない機関銃座である。機関銃の動く幅だけプラスチック風防にスリットが明いているので、外の風が音をたてて入ってくる。

尻っぽの先の狭くなった場所には大きな無線機がある。飛行機のものとしては随分大きな送信機だ。先端は機関銃座の丸窓があいているが、ここにも機関銃は無かった。

飛行艇のカラッポの胴体の中に我々十数人、士官・兵隊・白眼の軍属たちが乗り込むと、すぐにエンジンが掛かって機体はブルブルと振動を始めた。

さらば ニューギニア！

振動が次第に激しくなり、河の水が丸窓を洗い始めると飛沫の中にチラチラ岸辺のマングローブの緑の林が上下左右に移動しはじめた。

立ちん坊の我々は前後左右に振り回されるので、壁のフレームを指先でやっ
と摘んでツルツル滑る床の上を、互いによろめき合いぶつかり合いながら我
が身を保つのに懸命である。

水飛沫が一際高く湧き立って、窓が水の中に没してしまったように見えた後、
いつの間にか大艇は水面を離れて空中にフワリと浮かんでいた。

飛行艇はみるみるうちに高度を上げて、視界がグングン広がってくる。上空
から見ると、なるほど大きな河である。うねうねとのたうって平地を過ぎて海
に注いでいる。その海もよく見ると陸に囲まれた小さな湾で、本当の海は遥か
彼方の水平線の向こうに広々と広がっている。

機内が急激に冷えてきた。隙間の開いている機関銃座からはエンジンの轟音
が喧しく響き、針のように痛い寒風がビュウビュウと吹きこんでくる。

指は硬くなって伸び縮みしなくなり、唇の色は紫に変わって口を動かすのに
も頬から口にかけて顔の皮がパリパリして声が出ない。

寒いので皆は思いおもい腕を擦ったり足踏みをしたりしているが、いくら掌
を握ったり開いたりしても硬くなった指は柔らかくはならない。

とにかく、やり切れない寒さである。

春のようにボカボカと暖かかった熱帯の 地から上空に飛び上がって僅か数分
のうちに、極寒のような温度に出会って体の方が面食っている事だろう。

蒼黒いジャングル・赤茶けた平原・緑の草原と色とりどりの 地や、銀色の

大きな河・淡青色の海・日本軍が建設中のマッチ箱大に見える飛行場などが次々と目の下を過ぎていく。もうニューギニア島の西端らしい。

白い綿雲の塊が次々に、その景色の上を横切っていく。景色全体がファーッとまっ白く消えていくかと思うと、また何処からともなく現れてくる。

千切れ雲はまったく綿屑そのものである。雲の影は思わぬところで地面を黒い模様染めて、その影が静かに移動している。

赤茶けた岩肌に枝振りの良い松の木が数本生えている小島が、幾つか海に浮かんでいる。まるで日本画のなかの島のように思っているうちに忽ち後方に消え去っていく。飛行艇は広い海上に出てニューギニアの島影は遥か後方に見えなくなった。

前方には果てし無く海が広がり、空には白い雲が幾つとなく浮かんでいる。水平線は雲の中に霞んで消え、島影ひとつ何処にも見えない。

目の下には綺麗な縮緬皺の海面が穏やかに広がっているが、この辺りは敵の潜水艦が出没する中心とかで、機内の人々は皆窓に寄ってその姿でも発見出来ないかと熱心に海面を見下ろしている。

人々は皆黙りこくって左右の窓の辺りに塊っているが、口をきいても相手に聞かえず、手真似をしたり相手の耳に口をくっつけて言わねば話が通じない。

我々は轟々たる爆音に圧倒されて、ただ寒さに震えているだけである。

救命ジャケツを身につけた乗員が後部の無線機にやって来て、機械の前に坐って通信を始めた。まだ若々しい兵隊で久し振りで生のいい本物の兵隊を見たような気がする。防寒帽を頭に載せ着ぶくれしたジャケツ姿だがなかなか格好がいい。

それより何より、救命ジャケツは浮袋というより飛行機乗りにとっては防寒具の意味が強い事がやっと判った。こちらは寒さで震えあがっているせいで。

1時間近くも海の上を飛んでいた。海の上は飛行機は安定していて、汽車・汽船より揺れが少なく快適である。飛行艇は大きな箱をぶら下げて飛んでるみたいな飛行機だから特に安定があるんだろう。

ただ寒さだけが応えるが、これは設備のよい旅客機と違って、やっと思ひもかけずに便乗させて貰った軍用機なのだから文句を言う訳にはいかない。

セラム島が見えてくると高度がグーンと下がってきた。トタンに今まで硬く

て動かなかった指の関節がほんの少し動きだした。

島の先端にドボの部落が見えたが、覆いかぶさる蒼黒いジャングルの中に僅かばかりの家や栈橋・鉄塔などがチラッと見えた。

部落の真上に来て見ると爆撃の跡など見えないが、原始林の島と言われるだけあって周囲に迫っているジャングルの表情が凄まじい。

飛行艇はセラム島を斜めに横断するらしく、分水嶺の山の頂きに手の届きそうな傍まで迫っていった。上空から見ると、島の姿は地形図の模型を目の前に眺めているのと同じとも変わりがない。

分水嶺の山の頂きから幾つもの筋になって流れ出た山の巒が二つ三つ集まると傾斜の鋭い沢となり、沢が幾つか集まると谷になる。谷が幾つか合流して岩や石を押し流した後、川となって砂利や砂を運んで次第に緩やかな巾の広い河となっている。

河は平地に出ると、掌のように巾を拡げ、広い平地では扇形に流れを開いて川原や砂原を裳裾のように拡げた形で海に注いでいる。

飛行艇は山を越えると山の背から、山の切れ目に沿って次第に海に下っていく。セラム島は山脈の北側と南側では全く違った顔をしている。北側は荒々しい山肌がジャングルで覆われているのに、南側は緩やかな山肌がまるで女性の肌のように和らかだ。南側の海岸は広々とした砂浜が長閑に広がっているのに対し、北側はゴツゴツした岩石の断崖が続いた海岸なのは全く対称的である。

飛行艇はセラム島の南に出ると、高度をグングン下げて海上を西に向かった。広い砂浜には部落があちこちに見え、海面には波の尾を曳いて帆を張った漁舟が点々と走っていた。

ス コ ー ル

南の海上に白い雲の数が増えて、西の方遙か前方には黒い雲が壁のように海上に立塞がっている。高度は海面がすぐ目の下に見える程低く下りて来ている。

機内の温度がムツとするくらい暖かく、手足は自由に動くようになって唇の色は赤みがさしてきた。

やがて飛行艇はまっ黒い雨雲の中に突っこんでいった。

空から見た雨足は銀の矢のように鋭く、機体に当たる雨の音は機関銃で弾丸を撃ちこまれているようにパチンパチンと激しい金属音を響かせている。その音も激しさを増してくると連続音となって、滝にでも打たれているように凄い音になってくる。

機のローリング・ピッチングも激しくなって、大艇自身が上下左右に振り回され始めた。ガツンと突き上げられてはドシンと下に落ちこみ、傾いたままズブズブと横滑りしてやっと止まったと思うと、反動でガシンと反対側に傾く。

傾いたまま横滑りする時は、翼の先端が海面に触れるのではないかと、思わず身を乗り出す。窓から覗いている我々はまったく生きた心地ではない。

機は海面すれすれに這うように飛んでいる。見おろす海面の波模様だけハッキリ見えるが、あたりは夕暮れのように薄暗くちょっと離れた海面は黒雲の中に消えて何も見えない。

機内の我々は傾斜せるたびに、塊になってあちらにヒョロヒョロ、こちらにドタドタとのたうち回ってよろめく。掴まる所は裸の壁のフレームしかないが、それを指先で摘むのが精一杯でチョットした衝撃ですぐ体ごと持っていかれてしまう。

黒雲の中の数十分、いや数分かもしれないが、その時間が過ぎると雨雲が少しづつ薄らいできて霧が晴れるように辺りが明るくなってきた。

前後左右の海上に点々と小さな島、岩山の島が無数に散らばって居るのが見えてきた。と思うと、それがサーッと黒雲の中に掻消されていく。

土も草もないゴツゴツした岩だけの小島には枝振りのよい松が数本生えているだけで、裾を海水に浸し雨に濡れた美しい岩肌が薄墨色の中に光っている。

黒い雨雲を突き抜けると、そこには大小様々な小さな島が散らばっていた。

上空はまだ薄い雨雲が覆っているので、辺りは夕暮れのように薄暗く遙か遠い海上だけに明るい空間が見えていた。

雨に濡れた岩と松の島々は人間が描いた山水よりもっと絵画らしく見えて、とても自然界の本物とは見えないからオカシイ。支那の南画などに描かれた妙ちくりんな山・岩・樹々は頭の中から捻りだしたものではなく、こうして実物がチャンと存在している事を初めて知った。

飛行艇は散らばっている無数の小島の間を縫うようにして西に向かって進んで行った。やがて正面に大きな島が現れた。島は海からそそり立つ断崖に囲まれている。飛行艇はその崖にぶつかるほど近くまで直進して、直前で急に方向向を転じて断崖に沿って島を左に廻りはじめた。

この島は樹木が鬱蒼と繁っていて、山頂から真っ直ぐに断崖になって海に落ちこんでいる。人っ気の無さそうな島である。

飛行艇は左へ左へと廻りこんで行ったが、岬になった島の突端が見えてきた。その岬の鼻の上に真っ白い灯台が一本、色鮮やかに立っていた。

見覚えのあるアンボン湾の入口である。

飛行艇は灯台の上をすれすれに越えて、岬の向こう側に廻りこんだ。そこには二つの半島に囲まれた大きなアンボン湾が西に向かって静かに横たわっていた。

『アンボンの兵隊は元気じゃのう！』

岬の頂きの灯台付近の幾つかの建物・海岸添いの崖道・湾の反対側の平らな岬・その平地にある飛行場と、僕は見覚えのある場所をキョロキョロ探し求めた。一週間前、僕はあの飛行場からニューギニアに向けて飛びたっていったのだ。

すぐアンボンの街が見えてきた。港の棧橋・埠頭・倉庫の群・点々と湾内に浮かんでいる大きな船や帆かけ舟・山から海まで傾斜した街を埋めている家々と街並み・山手の緑の中に見える赤やクリーム色の洋館。

山も海も美しいアンボンの港と街を通り過ぎて、飛行艇は次第に海面近くに舞い降りていった。大したショックもなく着水した処はアンボン郊外の椰子林に覆われたガララの沖合いだった。

ガララには海軍の水上飛行機の基地がある場所だ。

飛行艇が着水して暫くすると、ガララの基地から鉄製のボート『小発』が迎えにやってきた。波静かな湾内なので我々が軽々と乗り移るとボートはすぐガララの岸に向かって颯爽と走りだした。

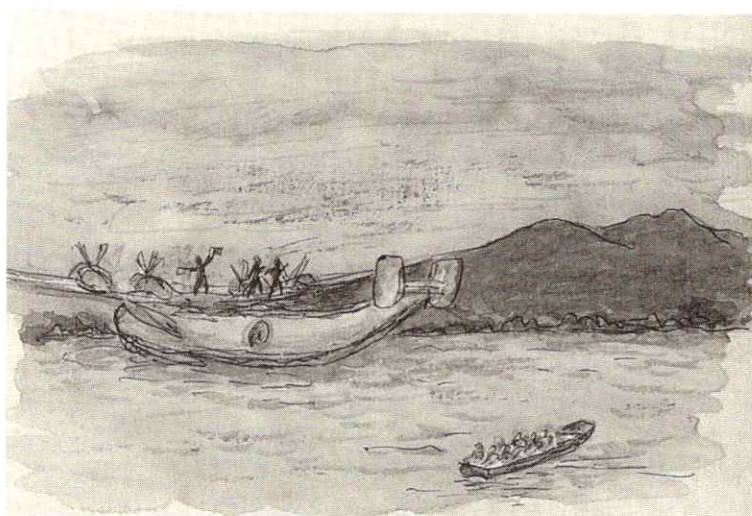
しかし100mも走らぬうちにエンジンが奇妙な音をたててストップしてし

まった。二人の兵隊がエンジンカバーを開けて首を突っこんでガタガタやっているがサッパリである。後ろには司令官がドッカと坐っているので、兵隊も気が気でなく玉の汗を流してやっている。

見かねた士官たちも傍に行って口を出し手を出す、船頭多くしてエンジンはさっぱり動かない。ボートは風に流されてあらぬ方向に漂っていった。

近くの海上に白鳥のように堂々と浮かんでいる飛行艇の翼の上に、数人の乗員が現れて手旗信号を始めた。ガララの基地と連絡を取っているらしい。

あたりは夕暮れが迫り、海上はすっかり薄暗くなってきたが、エンジンは直らずボートは漂流を続けていた。



遠く岸の方からオールを鳴らしてカッターがやって来た。艇長の元気のよい声に合わせて、10人くらいの兵隊が漕いでいる大型のカッターだ。

我々のボートに向かって近付いてくる。

ボートの傍まで来るとカッターからロープが投げられた。だが届かず二度、三度投げられたがその度に僅かに届かず海に落ちた。

じれったくなった、カッターの艇長が大声で叫んだ。「飛び込め、！」 その声と同時に、バネ仕掛人形のように何人かの兵隊が服のまま座席から横っ跳びに海に跳飛んだ。

彼らは泳ぎながら、皆でロープを抱えてボートまで引張ってきた。

「アンボンの兵隊は元気じゃのう」

司令官の満足げな低い声が聞こえた。

ガララの海岸にはコンクリートで築いた小さな栈橋があったが、我々が上陸すると其処に数台の自動車が待っていた。

司令官はじめ人々は車に分乗して次々とその場を去っていった。僕と一緒にいた士官たちもいつの間にか姿が見えなくなっていた。

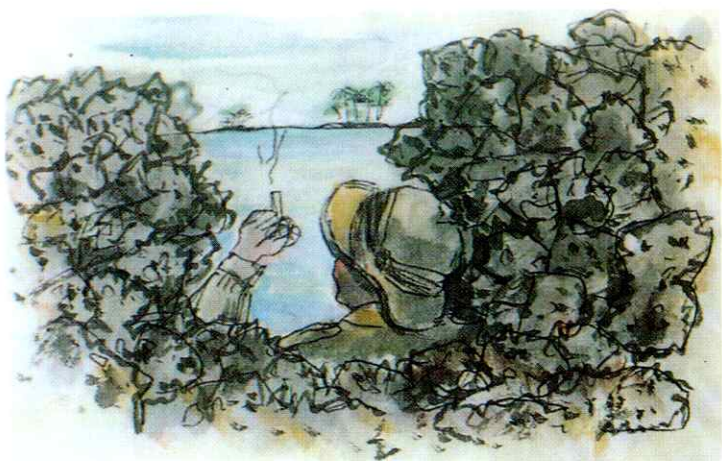
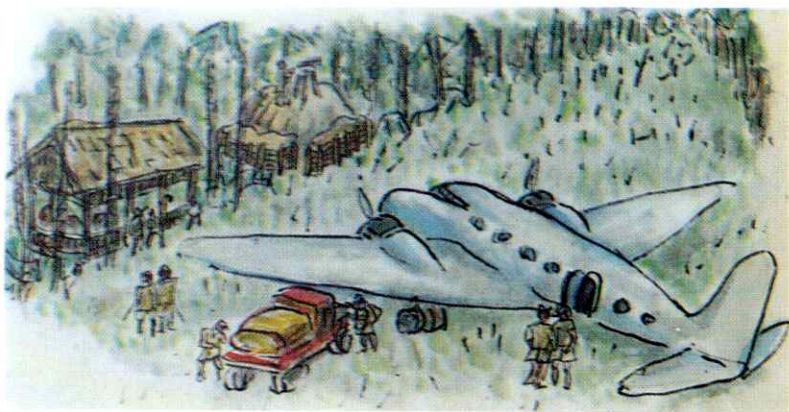
僕は黙って皆が去っていくのを眺めていた。

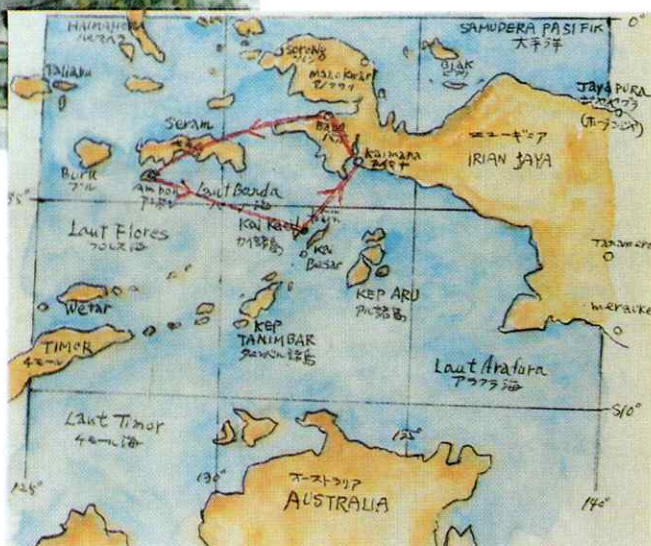
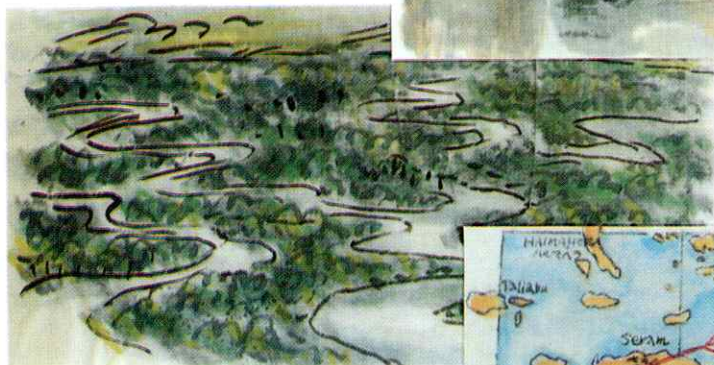
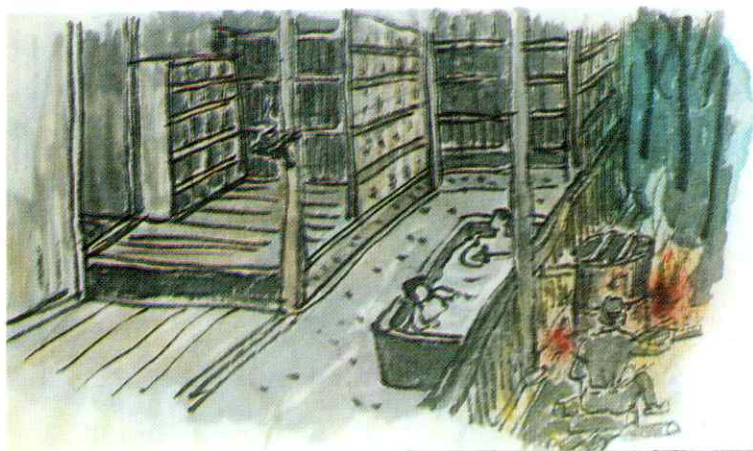
「さあ、これに乗りませんか。一緒に帰りましょう」

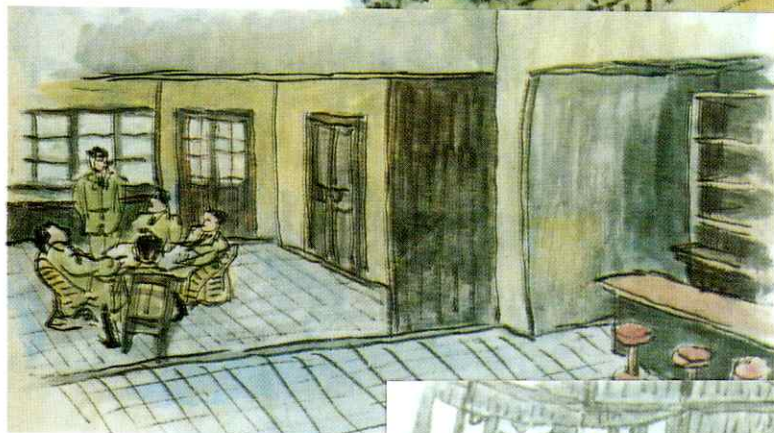
声をかけて呉れた人は、アンボンの海軍司令部で見かけた事はあるが、僕は知らない少佐だった。少佐は近くにまだ残っている人々にも声をかけて、自分も小さくなって席についた。

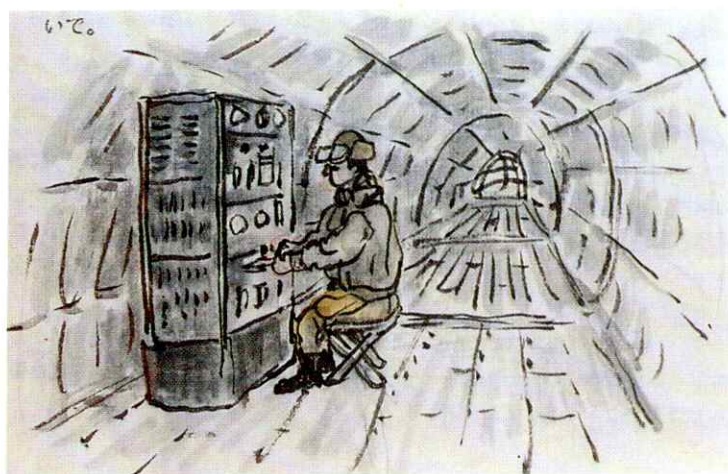
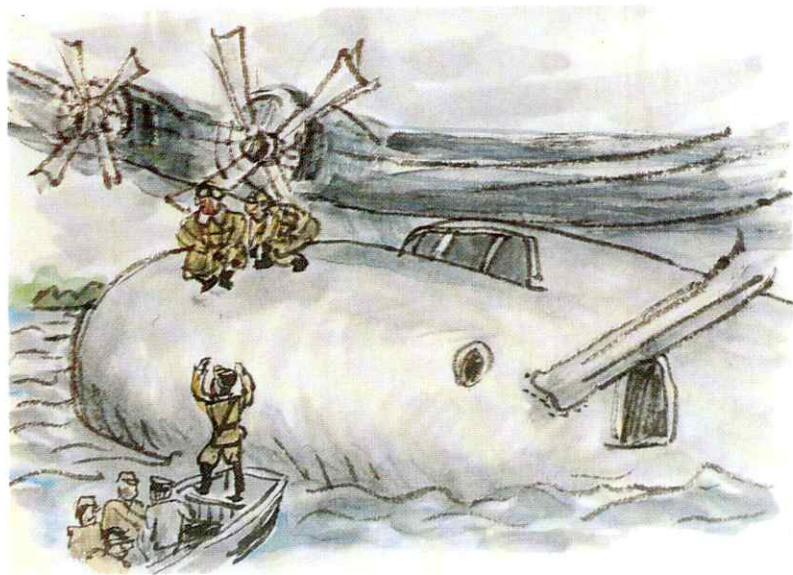
車はもう暗くなった海岸の椰子林の中の一本道をアンボンの街に向かって走って行った。

— 終 —









敗戦前後

敵の暗号

空襲のサイレンが鳴ってから随分時間がたったのに、敵機の爆音も対空砲火の音も聞こえてこないの、不審に思って防空壕から出て空を眺めた。

広い受信所の芝生の広場の周囲は、マカッサルの街の中なので人家の屋根々に囲まれているが、街は樹木の多い家並みだから緑が多く、所々に椰子の木が高く聳えている。空は青く晴れ、白い積乱雲がギラギラと輝いていてあたりは静かだ。

ゴーッという轟音が低い空の一角から聞こえてきた。

赤い焰と黒い煙の尾を曳いた4発コンソリテッドが、巨大な火の塊となって街の上空を斜めに切って落ちてくる。飛行機の形をした大きな火の塊は街中心街の屋根をかすめて、赤いレンガの街並の向こうに突っこんでいった。場所は港の中か、その沖合いあたりだ。

激しい衝撃音が響きわたり、地震のような大きな地響きが伝わってきた。

遙か高空での空中戦や、黒い煙を曳いて落ちていく敵や味方の飛行機は、僕もこれまで何度も見たことがあるが、いつも遠くの方に落ちていくのでその結果は見たことがなかった。それだけに、こんな大きな敵機が目の前で墜落するのを見たのは初めてなので、大きなショックだった。

マカッサルではこれまでも時々空襲警報のサイレンは鳴っていたが、最近はその頻度が増加し、夜も昼もおかまいなしに敵機が襲ってくるようになってきた。

南太平洋の島づたいに西に向かっているアメリカ軍もどうやらニューギニア島の北部からフィリッピンの近くまでやって来ているらしい。

会社の修理課になっている整備工場には、敵機から押収した無線機器が色々持ちこまれている。海軍の司令部が敵の無線機の構造や使用電波を調べて呉れと依頼してくるのだそうだ。



しかし敵さんも情報が簡単に漏れないように、無線機にはあれこれと工夫した仕掛けが施されている。海に落ちた敵機の無線機は水に浸かると、表示の文字がみな溶けてしまって読めないようにしてある。無傷の無線機を手に入れても、周波数を表示した文字板を取り外そうと衝撃を加えると、トタンに粉々に飛散る材料が使っている。

敵の無線機には見慣れない変わった物もある。大きな空のタンクのようなブイの中に無線機と電池が入っていて、標式電波を自動的に発射する装置になっている。

敵さんはこのブイをマカッサル港の沖に放おりこんで行くが、このブイからの電波を頼りに、暗夜でもマカッサルを襲って来るのだ。

日本側も躍起になってこのブイを捜して拾い揚げているが、拾い揚げると彼らはまた放りこんで行く、といった事を繰り返しているらしい。

救難ボート用の無線機などの一式もよく出来た物がある。

海面を染める染料・非常食糧・釣道具などと一緒に無線機も付属している。

この機械は携帯用の小さな無線機で、ゴムボートの中で両膝の間に挟んで両手で自転車のように、ハンドルを廻すと発電して自動的にSOS電波を発信するようになっている。アンテナは行燈型の風で空中に吊り上げるしくみである。海上はいつも風が吹くのだろう。

修理課では我々の宿舎の仲間であるH・S・Aの諸君が、こんな敵さんの機

械を改造して背中に担いで運べる携帯無線機を幾つか造っている。

いよいよ敵がマカッサルに上陸して来た時、『山の要塞』あたりで最後の決戦に使うヤツを司令部から頼まれて造っているらしかった。

敵さんの暗号帳らしい物が手に入った。

と言ってもこれは、火にも水にも消えない普通の印刷物で漫画で描いた子供の絵本のような紙片れだった。

色々な型の船の絵が色付きで漫画風に沢山描いてあり、夫々船の型の呼名が書きこまれている。商船がメリー、タンカーがフォックス、三島型貨船がブルドックと言った風に決められている。なるほど船の種類も随分あるものだなと、面白く眺められる絵本である。

日本人は次々にやって来る台風に5号とか6号とか、味気ない番号を付けて呼びたがるが、アメチャンはジェーンとかエメリーとか女の名前をつけて喜んでいる。

これは国民性の問題かも知れないが、種類の多い船の型をこうした親しみ易い呼名で言うやり方はいかにもアメリカ式だが日本の場合はどうしているのだろう。

とにかく、アメチャンは船型の呼び方も『暗号』とまではいかなくとも、愛称か略号のような使い方をして情報伝達を短縮、簡素化して上手く利用しているらしかった。

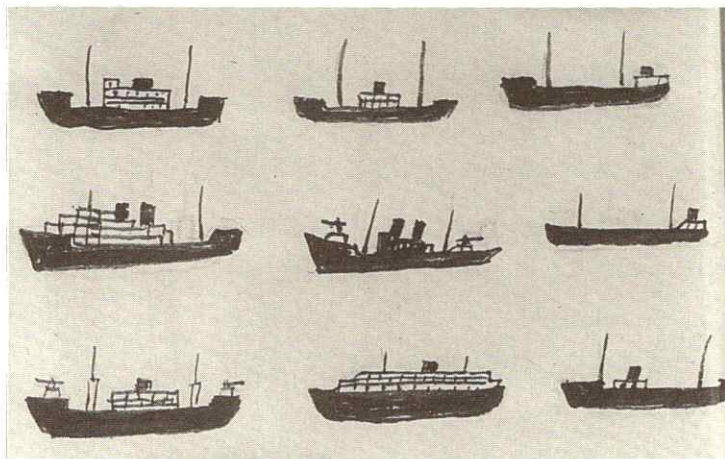
『15. 30. マカッサル港からブルドック1隻出港、北進中』なんて無線情報が敵機から発信されているのかもしれない。

我々の仕事場の受信機には、敵さんの飛行士の喋っている電波が時々入ってくる。彼らが報告している日本船の情報は、例の漫画暗号帳を見るとよく判る。マカッサルの港から出たばかりの日本貨物船の動静を敵機が報告しているのだ。

早速、司令部にその事を電話すると、
「お知らせは有り難いが、その敵機をやっつける飛行機がこっちに無いんだよ。どうにも仕様がないう」

司令部の通信長は情けない返事をする。

アメチャンの船の型のニックネームは、我々の仲間がお遊びで使わして貰う事になってしまった。



黒　　い　　馬

敵機の群が昼間でも度々マカッサルの街を襲ってくるようになったお蔭で、こちらの仕事もチョイチョイ中断されて防空壕でひと休みと言うことが多くなってきた。

僕はこの二年近く、空襲の激しい前線の島アンボンで仕事をしていたので空襲騒ぎには慣れっこであるが、やっと後方基地マカッサルに戻ってヤレヤレと思っていたのも束の間、またまた防空壕通いである。

空襲のサイレンが鳴ると、受信所で働いている妻子持ちのインドネシア人従業員は大急ぎで仕事を片付け、夫々慌てて家に戻っていく。家族を抱えていない我々日本人やチョンガーのインドネシア人はその点のんきなもので、悠々と仕事を片付け戸締をしてから、建物の裏手に出来ている小さいが頑丈なコンクリートの防空壕に向かうだけである。

しかしおかしいもので、僕など街なかで空襲にあっても近くにある立派なよその防空壕には這入る気がなくて、わざわざ遠い道をハラハラしながら受信

所の防空壕まで自転車を飛ばして戻ってくる。

僕の見たところでは、マカッサルの街の中では空襲の被害の跡はほとんど見かけない。港の設備はさすがに相当やられているが、これは3年前に我々が日本から着いた時から壊れていたから、日本軍が攻撃の時に日本軍かオランダ軍かどちらかがやったのだろう。

敵さんの攻撃だって、これまで主として軍事施設を狙っているのだろうが、素人の僕には敵さんのやり方はどうかしていると思えない。森や林で埋まっている郊外に大きな爆弾を落としたって、壊れたニッパ小屋の二、三軒はアッという間に再建されるし、レンガと石で出来ているマカッサルの市街地に焼夷弾をばら撒いてもめったな事では火がつかない。

我々の受信所は仕事の性質上敵の攻撃目標の一つらしいが、毎回の空襲でやられるのは受信所周辺の民家ばかりで、広い原っぱの真ん中にある受信所はいつも無事である。

狙った物にはなかなか当たらないものだ、僕は思いこんで安心しているが、我々の周辺に住んでいるインドネシア人たちこそいい迷惑で、我々を相当恨んでいるかもしれない。

我々の受信所には空襲のたびに軍から特警（海軍の憲兵）が駆けつけて来て、警報が解除になるまで待機警戒している。我々にとっては頼もしい心強い存在であるが、時々具合の悪い事もある。

僕が会社のインドネシア人にピストルを持たして運搬の役をやらしていたのを見つけられて早速お小言である。

「ピストルはあなたをインドネシア人から守るために、軍があなたに預けてあるんでしょう。それをインドネシア人に持たしとくなんて……」

「いゃー、参った。でもね、あの拾四年式とか言う軍のピストルは大きくて重いんでね。空襲のたびに持って歩くのはシンドイんだな。戸棚に納いこんで忘れるとお目玉だろう。使ったら使ったで、弾を何発なにに使ったと記録して報告しなけりゃならんし。まったく大変な厄介物なんだよ」

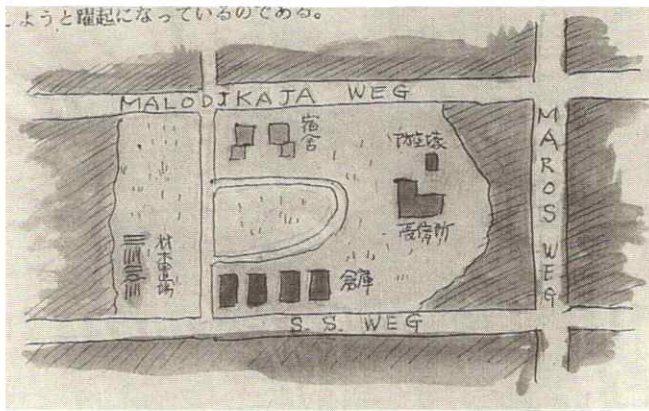
こっちだって、忙しい時もあるし、飲んでいる時だってあるから、僕はピストルを忘れずに持出す役を、若いインドネシア人に命じてやらしていた。

我々の宿舎は受信所から50mくらい離れた芝生の広場の端に在るが、宿舎

で飲んで酔っている時も、サイレンがなると受信所の防空壕に避難する。

千鳥足で防空壕まで来たものの暑くて中にいたたまれず、外の芝生にひっくりかえって涼んでいるうち、よい気持ちに寝込んでしまったのを特警が担いで防空壕に入れてくれた事もあった。

しかし特警が空襲のたびに受信所にとんで来るのは我々を保護するのが主目的では決してない。彼らは何とかして街に潜んでいる敵のスパイを摘発しようと躍起になっているのである。



夜の空襲がある毎に、受信所の広場を囲んだ街並みのアチコチから受信所を中心として赤や緑のロケット花火が2発・3発と揚がるのがショッチュウである。

灯火管制で真っ暗な夜空にフラフラと登っていくドギツイ色をした火の玉を見上げるのはちょっとす気味悪いものである。

『特警』は花火を見ると大急ぎで飛んで行って発射された辺りを捜しているらしいが、いつも道路わきに差してあったという花火の焼け残りを持ち帰って来るだけで、怪しい人影を見たとかスパイを捕らえたという話は聞いた事がない。

敵の飛行機が来ると狼煙が揚がる場所を見ると、確かにスパイ活動をやっている人間が何処かに潜んでいるのだろうが、果たしてあんな花火で効果があるのだろうか、僕は疑っている。

遙か彼方の高空を飛んでいる敵機にあんな花火の火が見えるのだろうか。見えたにしても狙いをつけるのに何か役にたつのだろうか。

しかし夜の空襲で受信所の広場の片隅の材木置き場がやられて火事になってしまった。我々が防空壕から見てみると、広場に落ちてきた焼夷弾はアチコチで火の手をあげたが、どれもこれもすぐに消えていった。

遙か向こうの材木置き場のニッパ小屋の屋根の端だけが蠟燭の火ほどチョロチョロ燃えている。

「今なら消せるから消しに行こうや」 若い連中は飛び出そうとしているが、あたりはまだバラバラ焼夷弾が撒かれている最中なので、特警が防空壕から出る事を固く制止した。

小屋の屋根の火は見るみるうちに燃え広がり小屋は炎の塊になって夜空を焦がした。300坪ほどある材木置場には大きな丸太が山のようにこずみ上げて在るが、それにも火がついた。

薪の山に火がついたような物だが、暗い夜空に材木が燃えるのは物凄い焰が壮観であった。空襲警報が解除になると消火作業が始まったが、案外簡単に火は消し止められた。

翌朝火事場に行ってみると、辺りは何もない草原の中なので別に被害もなく丸太の山も表面が黒く焦げただけで、まだアチコチで細い白い煙が立っていた。ただその辺りに日頃見慣れない黒い馬が一頭ヨロヨロとさまよい歩き立ち去ろうとしない。

材木置場の近くには馬小屋があって、我々がいつも乗って遊んでいる馬が3頭飼われていたが、小屋は空っぽで馬の姿は見えない。

SとKが大きな声を出している。

「よう。見てごらん。この黒馬はうちの白馬じゃないかい。可哀いそうに黒焦げに火傷したんだよ」

我々に鼻をすり寄せてくる黒馬は確かに我々の白馬に違いなかった。火傷で全身黒焦げになっているので黒馬としか見えない。喉が渇くとみえて我々に水を求めて来るらしい。バケツで水を飲ませてやっても切りがなく、何処までも我々の後をついて来て、宿舎の広間から食堂までついて来る。

全身火傷のこの馬に、我々はどうしてやれば良いのか判らず、馬に詳しいイ

インドネシア人に聞いても、黙って首を振るだけである。

我々は何ひとつこの馬にしてやる事が出来なかった。

近頃は戦局がアメチャン、ベースになって来たので、敵さんもだいぶ余裕が出来てきたとみえて空襲の様子が変わってきた。

昼間の空襲も低空飛行が多くなり、街には大型爆弾を落とし郊外には焼夷弾を撒き散らしていく。

街が爆弾でやられると、レンガ造りの2・3階の家々は瓦礫の山となり、電灯線や電話線はズタズタになってしまう。会社の電話屋さんはそのたびに忙しい。

受信所の若い連中も物好きに空襲の後で『電話屋さんが忙しいだろうから手つだってくる』なんて勝手な理由をつけて仕事をサボって被害見物に出かけて行く。

だが、ほうほうの態で戻ってきて青い顔して言ってる。

「すげいの見てしまった。俺は気持ちが悪くて、今日の晩飯は食べそうにないや」

低空でやって来る敵機はレーダーで捕捉するのが難しいとみえて、空襲警報が間に合わなくなってきた。サイレンが鳴って我々が防空壕に駆けつける頃には、敵機の姿は見えているのに轟々と爆音が街の上空を覆っている。

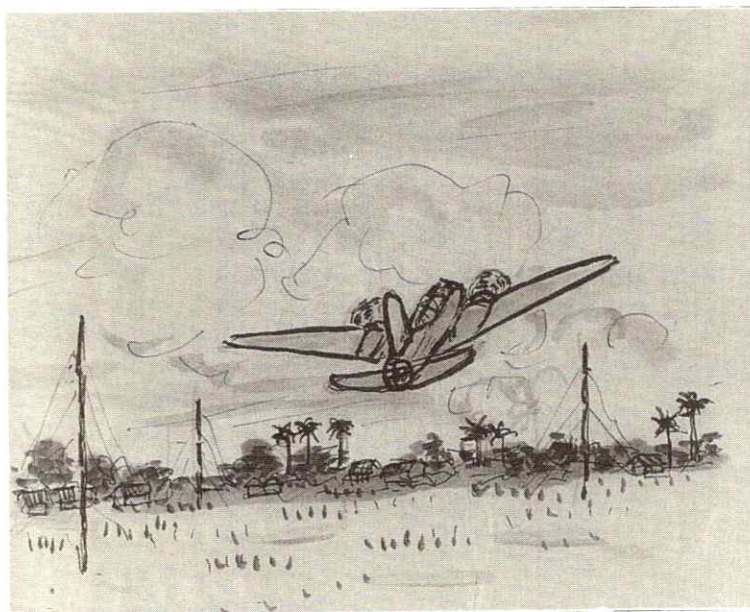
いつも飛んで来る『特警』の兵隊も間に合わないとみえて姿を現わさない。

防空壕の入口で敵機の爆音の方向を捜していると、大きな空気の摩擦音が後ろからザーッと背中を襲ってくる。

突然、すぐ後ろの街並の屋根すれすれに敵機の編隊が現れ、防空壕越しに頭上をかすめて行く。

過ぎ去る敵機の尾部機関銃座には敵兵の顔が見え、目と目が会って思わず拳を振り上げると、先方も途端に狙いをこちらに向けてザザザーッと機銃を射ちかけてくる。

しかし弾痕は僕の前方30mさきに土煙を揚げて、土煙の列は広い受信所の草原を点々と遠ざかって行った。



匍 匍 前 進

僕に召集令状が来たのでビックリしたが、一日応召という訓練のための点呼召集だった。

集合場所はマカッサル郊外の椰子林が点々とある広場だった。集まって来た顔ぶれはマカッサル在住の民間会社の中年層の日本人の群で若者はあまりいないようだ。

先ず草っ原に整列させられ、長い竹の六尺棒を渡された。この竹の棒は竹槍ほど長い竿では無いので銃剣の代わりだろう。

早速竹の棒を持って気合をかけながら、前進後退を繰り返す銃剣術の訓練が始まった。兵隊の号令でウンザリするほど何回もこの動作が繰返えされる。僕

は中学の時に剣道・柔道はやった事があるが、銃剣術は初めての経験である。

学校教練でやったような、横隊になったり縦隊になったり右に向きを変えたり左に曲がったり回れ右をやったりするマスゲームも何十回となくやらされた。

この団体行動は肥ったのや細いのや、元気の良いのやヨロヨロした年配も混じっているの、一応やった事はあるに違いないがマゴマゴする場面も次々と出てきて、よそから見ていたらさぞかし面白い見せ物だったろう。

一番参入したのは匍匐前進という、軍事訓練では基本とも言えるべき動作の訓練だった。地べたに長く伏せて体をなるべく低く保って、肘と膝だけで地べたを這って前進して行く動作はえらい重労働である。

目標地点までやっと這って行ってヤレヤレとホッとすると、指揮者はすぐに次の目標を設定して更に前進を命令する。最後は文字通り、顎を出してノビたところで一休みの休憩になる。

攻防演習のような戦争ゴッコもやった。これは中学生の時にやった野外演習の趣があってけっこう面白かった。

稲の刈り取られた跡の田圃の中を走ったり伏せたり、インドネシア人の家の庭や椰子林の中を慎重に前進したりするが、戦況は我々にはサッパリ分からない。

我々とはとにかく一日じゅう、飛んだり跳ねたり走ったり伏せたりして、ヘトヘトに疲れ果てた日暮れ時になって、やっと元の広場にもどって整列した。

やれやれこれで終わりかと思ったら、集合した我々の正面に一段高い台が設けられて講評という儀式が始まった。

学校教練の時から聞き慣れた軍人ばり講評という奴は一定の型があるらしい。いや型が有って中身が無いらしい。褒めて貶なしで貶して褒めて更に一段の発奮努力を要望することになっているらしい。

最後にこのマカッサル地区の根拠地司令官である海軍中將が台に登って、「敵が近くまで来ており、戦局重大な折から民間人も体を鍛えて大いに頑張ってくれ」という主旨の挨拶をした。

司令官が台から降りると、突然参謀肩章をつけた陸軍の佐官が台上に駆け上がった。目を釣り上げて昂奮している。

陸さんは顔を真っ赤にして大声を張りあげて絶叫型演説をした。

『想定…海軍軍政がインドネシア人を甘やかした為、つけ上がったインドネシア人独立派が暴動を起こして、只今海軍司令部を襲撃中である。全員は駆け足をもって直ちに海軍司令部に急行せよ』　と言う意味らしかった。

我々の駆け足行進は直ちに開始された。

マカッサルの市内に向かうゴアウエイを蟻の大群のごとく、我々日本人の集団はザッザッザッと、いやヨトヨトヨトと街の中心に向かって進んで行った。

この駆け足行進はどうやら予定にないハプニングのように僕には思える。海軍司令官の挨拶の中にあった『インドネシア人を愛撫して仲良く手を握って敵英米に勝抜こう』という言葉が単細胞の陸さんにカチンときた結果ではなかろうか。

被害甚大なのは走らされる我々である。将校や兵隊たちも一緒に走っているが、走るのは彼らの商売である。我々はそうはいかない。

我々の駆け足も最初の2分、3分はなんともなかったが、次第に息が苦しくなり体じゅうに汗が流れ出して、あえぎあえぎ走る事になってくる。

まさに楽じゃない駆け足になってきた。

竹鉄砲を担いだ異様な姿の日本人トアントアンが、あえぎあえぎ舌を出してヨトヨトと走る姿を、インドネシア人達は街道筋の椰子の木陰にたむろして見つめている。

落伍者が次第に増えて道ばたの溝に屈みこんでゲイゲイやっているが、駆け足はおかまもなく続いている。司令部までの行程の半分くらいまで来るとさすがに僕もへばってきた。と言って道は街の中に入ってきているので知った顔もチラチラ見えるから今更落伍する訳にもいかない。

初めは顔や背中から熱い汗が出ていたが、もう冷たい汗に変わって体じゅうビッショリである。いよいよこれは駄目だわいと思った時、突然隊の先頭が道路から外れて傍の空地の広場に回りこんだ。やれやれ、これで小休止かなと一安心する。

しかし全員が広場に入りこむと、駆け足はいやにアッサリと中止となった。想定終わり、解散である。

先頭を走っていた、あの参謀肩章に長靴の陸さんがへばってしまったのかもしれない……。

爆 弾 埋 設

マカッサルの街では現地召集が始まった。

在住の日本人の若者の大半が徴募され、何処か近郊の山の中に集結して部隊を編成して戦闘訓練を始めているという。

我々の宿舎で一緒に暮らしていた若手の4人もゴソッと軍に持っていかれてしまった。朝から晩まで一つ釜の飯を食って、呑むのも遊ぶのも行動を共にしていた、特に元気の良い連中だっただけに、残された我々の周囲はまるで火が消えたような寂しさである。

唯一人残った若者であるI君も、ガランとした宿舎で年配者3人相手では調子が合わず、酒を呑む時しか話の種がなさそうである。

I君が腕から指先までまっ黄色に染まった手を差し出して見せる。

「火薬の調合をやらされているんです。黄色い粉をこね回すんで、一日仕事をすると石鹼であらっても色が落ちないんです」

割当てマカッサルの事業所から日本人を供出して軍の施設の何処かで、武器弾薬の現地製造をやっているのだが、我々の所からはI君が代表で出かけている。

「手はかぶれないかね」

「毎日やっている、やられるって話ですが、僕は時々なんで別になんともないですよ。あそこの仕事は単純でツマラナイ仕事ですが、エヘッヘッヘ……芸者や料亭の仲居さんが交代で狩り出されて来るんで、賑やかで結構面白いですよ」

I君はケロッと呑気そうな話をするが、黄色火薬現地製造の話は何もしない。だが街の話によると鉄製の水道管・電柱・ガス管など鉄パイプを集めて迫撃砲などまで造っているという。

其の現地製迫撃砲の取り扱い実習訓練に僕は呼び出された。

集められた民間人50名は郊外の野外演習場らしい原っぱに連れて行かれた。

迫撃砲を前にして下士官が細かく説明してくれたが、その爆撃効果は大きいのに、砲の構造は簡単で取扱いは訳はないという話だった。

見たところ筒と弾だけのこの砲は、打ち上げ花火そのもので、なるほど簡単

なものであるが、弾丸を目標に命中させるにはコツがあるのでチョット習熟が必要らしい。

実際の発射を見学する事になった。

迫撃砲を操作する兵隊以外は遙か後方にさがって凹地で身を伏せて見る事になった。目標の的は50m先に大きなのが置いてある。

我々が首をもたげて見ていると号令一下、砲身に弾が落とし込まれ発射されたが、弾は的の方に飛んでいかずにその場で炸裂して砲身のほうがスッ飛んでしまった。

発射した兵隊は慣れているとみえて、巧みに身を隠して怪我ひとつしていないが、鳴りもの入りの実演と訓練はそれっきり中止になってしまい、我々は砲身破裂の実況を見せて貰っただけだった。

ある日の夕方あたりがうす暗くなった頃、兵隊が数人乗った小型トラックが受信所の広い敷地の入口から静かに入ってきて玄関先にとまった。

事前に話があったので、我々は従業員がみな帰った後ジョンゴス二人だけを残して待っていたのに。トラックの荷台には1m以上もある大きなプロペラ付爆弾が鮪のようにゴロンと転がっていた。

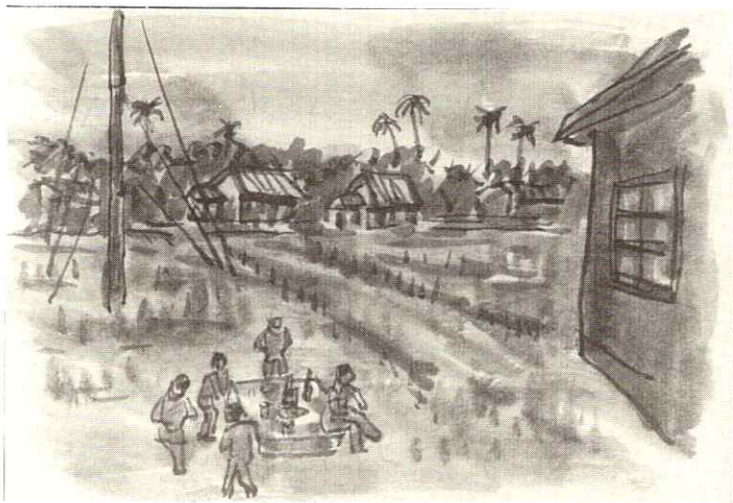
我々は言葉もあまり交わさず兵隊を受信室に案内した。受信機がズラリと並んでいる部屋の中央の床のダクトの蓋を取り外し、早速兵隊とジョンゴスの手でダクトの底を掘り始めた。底は砂地だったので作業は簡単に進み時間はかからなかった。50cmほど砂を掘った中に大きな爆弾をソッと寝かし、後は元通り埋め戻してダクトの蓋を閉めた。

兵隊が引き揚げた後、我々、日本人3人とジョンゴス2人は玄関前の草原に出て、朝礼などに使う台に腰を降ろして休んだ。

蒼い空には月が銀色に光り、広い受信所の草原やその周囲の人家の屋根々々も月の光に白く輝き、周囲の家々や林の影は黒くシーンと静まりかえっていた。我々は互いに無言のまま放心したように坐っていた。

しばらくして誰かが『一杯飲もうか』とつぶやいたので、宿舎からありあわせの酒と肴を持ってこさせてインドネシア人と共に互いに無言で飲んだ。

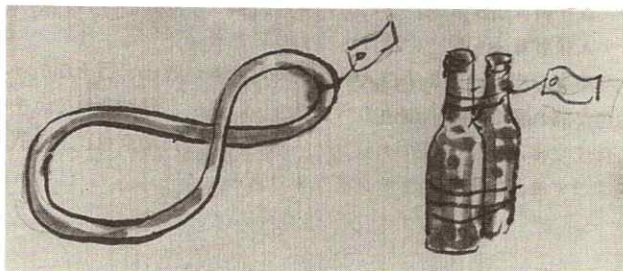
灯のない広い芝生の中だが、月の光は煌々と輝いて明るく、物音ひとつしない冷たい夜気の中で、無言で飲む酒は酔う酒ではなかった。



翌日兵隊が持ってきたお土産を点検した。

ガソリンを詰めたサイダー瓶数本と、火薬を詰めた自転車のチューブ数本だった。効能書きによると、いわゆる火炎瓶は襲ってきた敵の戦車に身を挺して近接し、これをブツケルと戦車は動けなくなると書いてある。またチューブ爆弾は自殺用に使えると書いてある。このチューブを大木の幹に巻きつけて火をつけると、大木はスバリッと切れて倒れると書いてある。

この恐ろしい危険物の保管には弱った。従業員には秘密なので、事情を知っている2人のジョンゴスと相談して安全な場所に格納した。



スパイ、スパイ、スパイ！

人間とは不思議な者である。

司令部から話があった時『インドネシア人には絶対、秘密にして日本人の手だけでやってくれ』と言われたが、僕はトッサに『インドネシア人2人だけは使います。作業に時間をかけちゃ拙いですから』と言ってしまった。

『君、そりゃ困るよ。機密事項なんだからな』 電話相手の司令部の通信長は渋っていたが、

『ああ、そうか。そのインドネシア人2人と言うのは、君が司令部の地下通信室の工事をやった時使った、あの2人か。うんあれなら、いいだろう』

と話はOKとなった。

僕が司令部の通信所を地下壕に移す工事を頼まれた時、インドネシア人を司令部の中に連れ込むのは困ると言われていたのに、強引に2人だけ連れて行って工事をしたのを彼は覚えていたのだ。

人間とは不思議な者である。

インドネシア人従業員に隠れて工事をやるのに、どうして最下級のジョングス（下男）2人だけを使う気になるのだろうか。僕はトッサにそう決めてしまっただけで、その理由は自分でもよく判らない。

日頃、掃除や草取りといった仕事をしていて学校出のネクタイ族や皮膚の色の白い職員たちに顎で使われているこのジョングスたちを、イザと言う時僕は どうして使う気になるのだろう。

インドネシアという国は数千の島々と数百の部族から成り立っていると言われるが、我々の受信所で働いている従業員も色々な部族出身で、まるでインドネシア人種展覧会を見ているようなものである。

一見、顔形から皮膚の色まで白人そっくりな者もいれば、目玉がギョロリッとして髪が縮れ唇の厚い赤銅色のパプア系もいる。頭がきれてテキパキ仕事をこなす女事務員は『カッチャンゴーレン（焦げた南京豆）』と我々はアダ名をつけてるが、典型的なアンボン人である。

女性的でしなやかな優男はジャワ人、粗野で激しい気性の男はマカッサル人やブギス人である。皮膚の色は栗色だが顔形は西洋人といった混血児もおれば

漢字も支那語も知らない支那系もいる。

みんなインドネシア人には違いないが夫々独特のタイプを持っており、またお互いにじっくりいかない何かがあるように思える。

会社の人事課のT君が受信所にやって来て、声をひそめて僕に言う。

「あなたのところでは、今度若いインドネシア人を採用したそうですね。話に聞くとその男は技術も持っていないし仕事もろくに出来ないのに給料だけはいいいので、他の連中の間で問題になっているようですね」

いよいよお出でなさったなと僕は思った。

「ばかに詳しく知っているんだね。何処からの情報なんだい」

「それは……。私は人事が商売ですからね、全職員の勤務振りはチャンと調べてありますよ。とにかく彼の働き具合が問題ですから正式採用の時は給料をも少し下げて貰いますよ。いいですね」

T君はチョッと得意そうに身をそらした。

「ジャー仕方ないから本当の事を話すが、実はあの男は軍のスパイなんだよ。うちの連中の中に敵に通じているのが居るらしいって、特務機関がスパイを入れたんだ。敵のスパイを捜し出すためのスパイさ。僕の方としては仕事は大して出来ないし給料は高いし、あまり有り難くないが軍に無理やり頼まれるし、本人も真面目ないい青年なんで僕はソーッと置いてるんだ」

「そうなんですか。そいつは全然知らなかった。それじゃもう少し給料を上げたっていいですよ」

「よせよ。今でも困っているのに」

T君お自慢の彼の情報網もあまり当てにはならないらしい。それにしても彼が利用しているスパイ野郎はうちのドイツなんだろう。

受信所で働いているインドネシア人従業員たちは、けっこう愉快地賑やかに、やれバトミントン大会だ誕生日パーティだと仲間同士でお祭騒ぎをやるのが大好きで、みんな仲良くやって居るように思えるのだが、果たして事実はどうなんだろうか。

賑やかで明るい性格のアンボン系は人懐っこい筈なのに、インドネシア人からは白い目で見られているようだ。回教徒のインドネシア人の中で彼らだけがキリスト教徒であるせいもあるが、戦前オランダの手先になってインドネシア

人を圧迫したシコリが残っているのかもしれない。

ジャワ系はその他のインドネシア人たちからは一目置かれているようだ。ジャワ島とその他の島々との文化の歴史の差が大きく、ジャワ系がインドネシアの中核だとすればその他の島々出身は属領人種だといったヒケメを感じているのだろうか。

支那系にいたっては全インドネシア人から白い目で見られ、何事につけても除け者扱いされている。これは受信所ばかりでなく、街でも地方でも国全体でも見られる現象だが、これは伝統的に支那人に国全体の経済力を握られている腹いせ的な反発なんだろう。しかしこれは実力の問題で、僕が見ても支那系一人の能力はその他のインドネシア人5人分に匹敵するわいと、日頃実感しているくらいだから、支那系に対する風当たりは強い訳である。

白人系や白人との混血人は日本の占領下の現在では、存在そのものが厄介な問題である。何か事件が起こると必ず彼らが怪しまれ、中には憲兵隊に引っ張られスパイ容疑でブチ込まれ、さんざん調べられたあげく無実で戻って来るのがチョイチョイある。

とにかく、怪しいと思えばどれもこれも皆怪しく、日常の楽しげな仕事ぶりを見ていると、誰ひとり怪しげなのはいない。

軍のスパイ、特務機関のスパイ、会社のスパイ、それに本物の敵のスパイが皆一緒になって受信所の中で楽しく仕事をしている訳である。

僕はそんな事にはあまり興味が無いのでドイツとも明けっ放なしで付き合っている。

日本人退去！

軍当局の内部では混乱が起きているらしい。

天皇肉声放送のすぐ後に司令部から『本日の放送に関しては一切外部に漏らす事を禁止する』と言って来たかと思うと、翌日には『昨日の放送はデマ放送であると言う事になったからそのつもりで』と電話がかかって来る。

受信所に用でやって来る人々も、まるで見て来たような噂ばなしを囁やいて

行く。『司令官は奉勅で、若手士官連はあくまで戦うと頑張っているんだ』、『いや、そうじゃないよ。海軍が奉勅で、陸軍が徹底抗戦を主張しているんだそうだ』。

いろいろな情報が流れているが、もちろんラジオも新聞もこの事については何も発表しない。

しかし、数日後には新聞が大見出しで天皇放送のニュースを伝え、ややこしい表現で敗戦の事実を認め、戦争の終わった事を報道した。どうやら冷却期間が過ぎて軍部も落ち着きを取り戻し思想の統一が出来たらしい。

占領軍の先発が来たという話・捕虜たちが釈放されたという話・軍の設備や機材が引渡される話・日本人民間企業の接収が行われる話・日本人は全てマカッサルから退去させられる話・日本人の集団集結地が設営されている話・耳の速い日本人が色々と情報を知らせてくれるが、街の中に出掛けていない僕には本当の事は判らない。

我々の職場はこれまでの状態と何の変わりもなく、日常業務が続いている。東京からの電波もいつもと変わりなく、無線電信も無線電話も平常通り東京との間で業務を続けている。

会社の連中も東京付近に家族を残している者などは、この際とばかり電話をかけてお互いの安否を確かめあっている。

インドネシア人従業員も平常通り仕事をしているが、我々日本人と顔を会わすと、何となく目のやりばに困るといった風だ。以前よりかえってオドオドしているように見えるが、これは我々日本人の僻みであろうか……。

昼の日中に兵隊が数人乗ったトラックが受信所にやって来た。受信室の真ん中にコッソリ埋めた大型爆弾を掘り出しに来たのだ。兵隊たちは賑やかに笑いながら受信室に入りこみ、アッサリと爆弾を掘り出して持って行った。

インドネシア人職員は哑然としていた。

「トアン。全く酷いですね。我々は今まで何も知らずに爆弾の上で仕事をしてたんですか……」

「うん。敵が上陸して来たら、ボーンとやる予定だったが、そんな事にならなくて良かったよ」 まったく返事にならぬ返事を僕はした。

受信所の建物のすぐ傍には、オランダが爆破した元の受信所の跡が残っている。日本軍が上陸して来た時オランダの手で爆破されたのだ。今では取り片づけられてコンクリートの基礎だけが残骸を見せている。

「まったく同じような事を考えるものなんですね」

インドネシア人職員は感慨深そうな顔で話す。

「あの時、我々はお互いに最後の別れの挨拶を交わして受信所を出ました。皆が芝生の広場の端まで来た時、大きな音をたてて受信所は爆破されました。悲しかったです……皆は土煙の中に壊れていく受信所に別れの手を振り何度も後ろを振り返りながら帰っていきました。あんな事は一度だけでもう結構です」

捕虜が釈放され占領軍が到着すると、マカッサルに住む日本人は街を去って郊外にある日本人集結地に移っていった。

我々の所からは、若い I 君と修理課の H 君の二人は移っていったが、僕と T 君の二人はそのまま居残る事になった。東京との通信が依然として継続されているので、業務を占領軍に引渡すまで残って居なければならない。

以前は大ぜいの若い連中で賑わっていた我々の宿舎は、僕と T 君の二人きりになってしまった。我々は日本人の居なくなったマカッサルの街の中で暮らしているたった二人の日本人なのかもしれない。

広い受信所の敷地の芝生の広場の向こうの端には、大きな倉庫が 4 棟ならんでいる。その中にはこれまで買い集めた会社が必要とする資材……自動車・オートバイ・皿・小鉢・ノート・鉛筆まで……そのまま残っている。

広場の中央には受信所の局舎があり、その周囲はアンテナを張った高い木柱が聳びえ、針金のステイが広場に入り組んでいる。

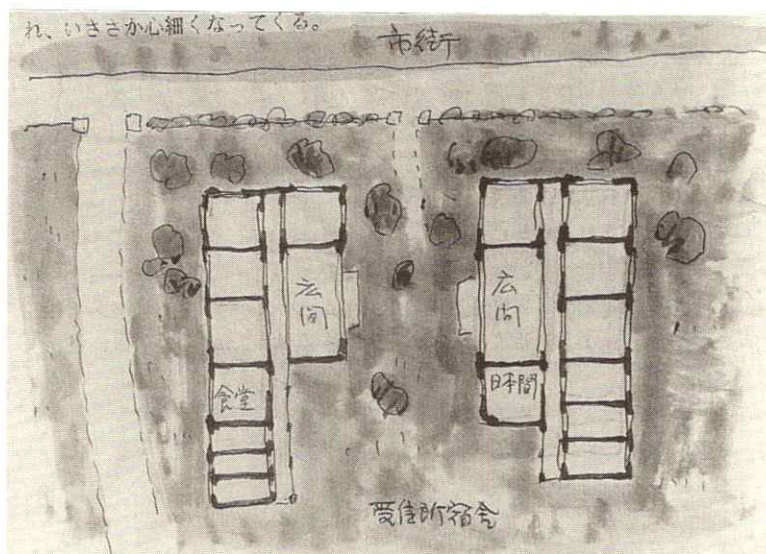
広場のこちらの端には我々の宿舎が 2 棟建っているが、これは会社の手で建てたお自慢の建物で、夫々コンクリートの広間とベッド・タンス・机だけの広さの居間が 4 部屋ずつあり、一方の棟には食堂、も一方には日本風畳敷き 6 畳の座敷が設けられている。

1 棟に一人ずつの暮らしになった僕と T 君は、ガランとした宿舎の中で、食堂で、顔を会わせても別に話の種もない。

T 君とは戦前、日本の神戸の職場で一緒に働き、ジャバのスラバヤでも顔を会わせ、またこうしてマカッサルで同じ職場で過ごしているが、敗戦まで共に

することに成ってしまった。

日暮れの夕涼みに、二人で藤椅子に長くなって煙草をふかしながら無言で過ごしていると、まさに我々は陸の孤島に漂着しているような寂しさに襲われ、いささか心細くなってくる。



占領軍現れる

僕が最初に出会った占領軍は雲につくような大男のオーストラリア兵だった。受信所の事務室で机に向かっている僕の所え、若いインドネシア人職員が小走りで行って来て注進する。

「今、表からこちらに向かって占領軍のオーストラリア兵が一人入って来ましたよ」 僕はいよいよおいでなさったかと、覚悟を決めて玄関に出た。

大きな鍔広のカーボーイ帽を被り、臍のあたりにバカでっかいピストルをぶらぶらさせた、毛脛を出した半パンツ姿の大男で、僕を見ても何も言わずに大きな兵隊靴の音をたてて玄関から中に入って来た。彼はそのまま受信室に入り

こんでノソノソ歩き回り、廊下に出ると各部屋を覗きこんでは入ってみて歩き回った。僕は後ろからついて行っただが、彼は一言も喋らず何もしないで、そのまま又玄関からノソノソと出て行った。

これを皮きりに、その後は妙な奴が次々とやって来た。

老人のようにヨトヨトした見すばらしい白人がやって来て、弱々しいマレイ語で喋る。一見して収容所から解放された捕虜だった男と判る。

「私たちが今居る所は電球が無いんです。若しも有りましたなら2ツばかり分けて貰えませんか」

立場が逆になっている事がまだピーンときてない風の、気の弱そうなオッサンで、本職の兵隊では無いらしい。僕は黙って電球を渡してやった。

アンボン人の兵隊が4人賑やかにやって来た。

「俺たちは荷物を運搬するのに車が無くて困っているんだ。ここには自動車が有るが俺たちに呉れないか」

陽気な連中だが人を食ったような皮肉な笑い方をする。

「そりゃチト無理だね。第一ガソリンが無いだろう。とにかく、先ず君たちの司令部の許可証を貰って来るんだね。そしたら何でも上げるよ」

「許可証、／ そんなもの呉れる筈がないじゃないか。だから内緒でコッソリ呉れよ。ラジオなんか山ほど有るじゃないか、一つくらい良いだろう」

「駄目だッ、／」

来るお客さんも、来るお客さんもラジオを呉れと言う。なるほど、ラジオは受信所の廊下にまで沢山と積み上げて置いてある。これは日本軍が没収した物を預かっているの、元の持ち主の記録もある。

元気なアンボン兵たちにも断ったが、彼らはブツブツ言っただが、凄みもしないでアッサリ引き揚げて行った。

ニュージーランドの報道班の記事をつけた若い男がやって来た。だいぶ戦線をウロツイタとみえて、白い皮膚が日焼けして真っ赤な可愛い青年だ。

これはいささかインテリらしく、やたらと何でも欲しがらないが、やっぱりズカズカと受信所の中を歩き回る。

事務室の棚に飾ってある我々仲間のバトミントン大会の優勝カップを見つけて呉れと言う。

「これは我々の私物だからやってもいいが、こんな物どうするんだい」

「まさか、戦争に勝った記念に優勝カップを国に持って帰るんじゃないよ。我々の宿舎が殺風景だから飾りたいだけだよ」

部屋に入って来た時はだいぶ緊張していた彼も、やっと少しリラックスしてたらしい。僕がカップの入っていた函を出してやると、ジャーついでにかっぷを入れて運ぶ適当なバッグは無いかときた。

サーテと僕が辺りを見まわしていると、彼はズックのカバンを見つけてそれを僕に挙げて見せ、カップ函を詰めながら『サンキュー』と帰って行った。

やって来る連中は兵隊の襟章・肩章・寄せ書きした日の丸を寄越せと言うのが多い。初めのうちは巻き舌でベラベラ喋る彼らの英語そのものがよく判らない上に、彼らが何を欲しがっているのか見当もつかなかった。詳しく説明させると、ヒラヒラ暖簾の下がった日本兵の戦闘帽や日本刀を仕込んだ軍刀といった日本の兵隊の持ち物ばかりである。

民間人である我々の所には何ひとつ無い物ばかり、彼らは欲しがっているのだ。

……彼らはこれから国に帰った時、何処々々の戦闘で日本兵と一騎討ちの格闘をやって、やっと手に入れた品物だと、記念の品を取出して自慢して見せたいのかな……。

こんな風にかくと、彼らはおとなしくやって来て紳士的に品物を要求するように思えるが、どっかい彼らはピストルをぶら下げた荒くれ兵隊で、こちらは敗戦国の丸腰の市民なのだからたまらない。

彼らは先ず赫かしの脅迫を居丈高に浴びせかけ、それがうまくいかぬと判ると、今度は人情をくすぐって来るし、煩く哀願の手を使う。

しかしとうとう、僕は何一つ品物を彼らに渡してやらなかった。

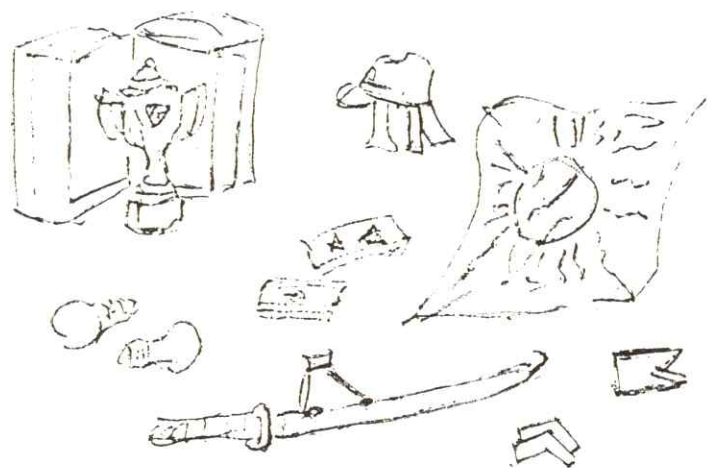
不思議な事に彼らの使う英語には非常に判りやすい英語とさっぱり判らない英語があるようだ。占領軍のバリバリした奴の英語など、勝手にまくしたててこちらにはサッパリ判らないが、ちょっとショボクレタ奴の英語は判り易い。

僕はその英語の判り易さの程度で、『ハハーン、こいつは日本軍の捕虜になった事があるのだな』と見当をつけた。

なかには判り易い英語で、自分が日本軍の捕虜になっていた頃の話や、むし

ろ懐かしそうに話す奴もいる。

僕の英語も日本が勝っている頃は、大概の事は不自由なく通じたが、敗けた途端あまり相手に通じなくなってしまった。



混血兵哀れ！

スマートな白服姿のオランダ海軍士官が二人、自動車を受信所の玄関に乗りつけて来た。運転手の水兵は大きなセパードを連れてお供している。

この連中は受信所には全然興味を示さず、すぐに広場の向こうに在る大きな4棟の倉庫を見せろと言う。

僕はいささかシェパードがうす気味悪かったが、鍵がないので駄目だとはねつけた。彼らは怒って何やらわめいていたが、僕が相手にならないので業をにやして引揚げていった。

だが、すぐに倉庫番のインドネシア人が蒼い顔をして僕のところに跳んで来た。彼らは直接倉庫に出かけ、倉庫番を脅かして鍵を持っている事を吐かせたらしい。僕は仕方がないので倉庫に出かけて士官達の為に倉庫を開けさせた。

広い倉庫の中は物資の山である。何段にもなった高い棚には建築資材・事務用品・自転車・オートバイ・食事用の皿・椀・小鉢までありとあらゆる物が置いてある。とにかく会社の仕事に必要な資材は何でも買い溜めされて納まっている。

オランダ士官達は珍しい物を見つけると何でも欲しがったが、僕はそのたびに首を振って断った。彼らも一応言ってはみるが、断ると別にこだわりもなくアッサリしたものだ。

最後に彼らはペンキ缶の山を見つけて、赤・青・白の小さなペンキ缶を三つ呉れと言う。自動車の鼻に付いているブリキの国旗に色を塗りたいのだと言う。どうなる事かとハラハラしていた僕はホッとして、笑いながら彼らに言ってやった。

「チャンと受取りのサインをするなら渡ししょう」

僕が近くにあった紙切れを差し出すと、大きな士官の一人が苦虫を噛みつぶしたような顔をして、左手で乱暴にサインを書きなぐり、ペンキの缶をわし掴みして去っていった。

僕が昼食後の休憩時間に、宿舍の広間で藤椅子に長くなってウトウトしていると、いつの間に来たのか占領軍の服を着た若い兵隊が一人、椅子の横に突っ立っていた。

顔かたちは西洋人だが皮膚は小麦色のハーフカストの混血兵で、マッサラの兵隊服に折畳み帽をスマートに被っている。背も高くなかなかの色男だ。

「お前たち戦争で敗けた国の人間がこんな広い住宅に、独り悠々と昼寝していて、戦争に勝った俺たちはまだ戦時中と同じバラックに寝泊りしているなんておかしいと思わないか」ときた。弁舌も滑らかでよく喋る。

話を聞いてみると、やっと捕虜から解放されて自由の身になり、家族と一緒に暮らせる筈なのに、家が無いため妻と赤ん坊は知人の家に居候しており、自分は兵隊のバラック暮らしだと言う。

家族と一緒に暮らす家を捜しているらしかった。

僕もチョット可哀いそうになって、ペラペラ喋る彼の話を黙って聞いていた。彼は喋りながらキョロキョロ辺りを観察していたが、我々日本人二人が二棟の家に一人ずつ住んでいて、まだ空部屋が4つもある事に気がついた。

途端に彼は『俺はどうあっても家族を連れて来てこの家に住むんだ』と言い始めた。そんな事出来る筈がないと僕がいくら説明しても、もう彼は狂ったように聴こうともせず、とうとう家族を連れに行くと言って急ぎ足に出て行った。

僕と彼のやりとりを誰かが報らせたとみえて、受信所からルグブレヒ親爺がニヤニヤ笑いながらやって来た。ルグブレヒ親爺はインドネシア人職員の親分役をやっている老人である。

「今、占領軍の司令部に電話しましたよ。誰か士官を一人よこすから心配しなくて良いって話でした」

しばらく親爺と話しているうちに、占領軍の士官がやって来た。背広姿のインテリ風で、軍人臭のないスマートな紳士だった。

「私はオランダ軍の中尉ですが、本職は土木関係のエンジニアです。無線のエンジニア二人だけで此処に残って居るんじゃ日本人の仲間が居なくて淋しいでしょう。それに兵隊達がチョコチョコやって来るそうですが、私の方も此処は立入り禁止令を出して居んです。それでもやって来て何か厄介な事があったら電話して下さい。いつでもやって来てツマミ出してあげますよ」

我々は食堂でコーヒーを飲みながら、この士官とおしゃべりを続けていた。

さっきの兵隊が3輪車二台に妻と赤ん坊と大きなトランクや荷物を載せて我々の家の庭に乗り込んで来た。

待ち構えていた士官は、早速彼らを食堂のテーブルに坐らせてコンコンと説得を始めた。初め元気のよかった兵隊も、士官の話を聞いているうちにスッカリおとなしくなりジッとテーブルを見つめている。

僕が部屋に戻り仕事に出かける支度をしていると、兵隊夫婦はどうやら納得したらしくスゴスゴと車で去って行った。

日暮れ近くなった頃、T君と夕涼みしている所え昼間の兵隊が又もや顔色を変えて跳びこんで来た。

荷物を積んだ3輪車が途中から見えなくなったと言う。

「私と妻が前の車に乗り、妻の借りている家まで来て後ろを見ると、付いて来た筈の荷物を積んだ車が居ないのです。待っていても来ないので捜したんですが判りません。こちらに戻って来ては居ませんか」

彼は半泣き顔で僕に尋ねるが、もとより此処に来る筈もない。

彼ら白人やハーフカストは昔から現地人に対して尊大な嫌な存在であった事は確かだが、インドネシア人特に下層階級を動物視していた。しかし、今やその仕返しがかくのごとくである。

昼間の兵隊は又慌てて、薄暗くなった街に飛びだして行った。

敗戦後の逃避行

マロスからランガへ(セレベス島)

～帆かけ舟の旅～

マロス脱出

荷物を山積みし、その上に人間が鈴なりになったトラック2台が、並木の大本でトンネルのようにになった舗装道路をスピードあげて走って行く。

並木道は水が満々と流れている小川に沿った土手の上の一本道で、遥かな遠くまで続いている。あたりは広々とした平野で見渡す限り田圃が広がっていた。日本の真夏のような強い光線がこの平野いっばいに輝いて、周りの景色はカサカサに乾いているが、この並木のトンネルは快よい日陰を作ってトラックは涼しい風を切って走っていた。

2台のトラックには10数人の日本人が様々な姿で、それぞれ面白い恰好をしてトラックの上の荷物にしがみついている。ヘルメットもいれば鳥打帽もあるし、戦闘帽も登山帽もいる。服装もオリーブ色の防暑服や白の半袖半ズボン姿、中には白麻の背広服もいる。

この連中は誰も彼も複雑な顔をして押し黙ったまま、背後にダンダン小さく消えていくマロス日本人集結地の建物の群を見つめていた。

しかし、並木道の途中で先頭のトラックが突然に停まった。前方からウス気味悪いガマのような占領軍のジープがやって来たのだ。ジープは運転席の鼻先に近よって、赤ら顔のオーストラリア軍将校が何やらペラペラと喋っていたが、すぐ、日本人集結地に向かって走り去った。

2台のトラックは一本道の中で、苦勞してUターンし、今出てきたばかりの日本人集結地へすすぐと引返した。

出発してからまだ10分とたっていない時間だ。

大東亜戦争敗戦の日、我々はセレベス島マカッサル市の街中にある会社の受

信所でいつもと同じ日常業務として、東京のNHKから放送される天皇の肉声を受信し、これを街の放送局に中継した。

放送局には陸・海軍の司令官以下軍の幹部や民政府の幹部が待機していて、これを聴いた。だが街の中には放送されなかった。しかもその翌日、我々の所に『昨日の放送はデマ放送であるから、一切口外を禁ず』というお達しが

しかし、何事も知らされていない筈の街の中からは、いかにも尤もらしい街の声が聞こえてくる。

「司令部は奉勅派と抗戦派に分かれて大もめだそうだ」

「いや、海軍が奉勅で、陸軍が抗戦だそうだ。これじゃ、いよいよ内戦が始まるぞ」

だが騒ぎはすぐに収まったとみえて、数日後に敗戦の事実が新聞に報道され、連合軍の捕虜たちは解放された。占領軍の先遣隊がマカッサルに到着すると日本人の民間人たちはマカッサル郊外の一角に集結して集団生活に移った。

僕と同僚のT君は会社の無線施設を占領軍に引渡すため、日本人のいなくなった街の中に二人だけ心細く居残りを続けていたが、引継ぎを終えると日本人集結地に滑りこんだ。

しかし、僕たちが日本人キャンプに合流出来てホッとしたのも束の間だった。日本人集団はマカッサル市北方30kmのマロス部落に集団移転させられた。

数百人の日本人集団はリュックサックやトランクを担いで、熱帯の直射光線が照返すアスファルト・ハイウェイを蟻の大群のように長い列をつくって歩いた。朝早くマカッサルを出発してマロスに着いたのは陽が落ちてからだった。

マロスの日本人集結地は素晴らしい所だった。そこは、広い平坦なマカッサル平野が岩のゴツゴツした崖が連なる山並みに接する山麓の谷川のほとりで、農耕に適する広大な敷地があった。

ここは日本の商社が現地で味噌・醤油・清酒などを製造するために設備した工場で、大きな建物が幾つもあり材料を自給する広い畑もある訳である。

建物の一つには、巨大なコンクリート槽が幾つも並んでいて日本人千人が10年食える量の味噌が貯蔵されていた。

セレベス島の各地から集まってきた千人近い日本人は、夫々の職業、能力に

応じて、家を建て、電気を起こし、水道をひき、牛・豚・鶏・家鴨・山羊を飼い、畑をつくり、10年は持つような自給自足に不足ない設備を整えていった。

でっかい工場の中には床を張り、ゴザの寝場所をつくり、でかい食堂、大きなボイラーを据付けた炊事場、舞台のある演芸場に娯楽室、コンクリート床の養豚・養鶏舎にシャレタ水洗便所ができ、医学博士が数人もブラブラしている病院など、次々に完成していった。

我々は昼間は畑仕事や運搬仕事にかり出されたり、職業柄電話や電気の線を張ったり、演芸場のマイクやアンプといった放送設備の整備も忙しかった。

一日の作業が終わって夕暮れになると、敷地の中の谷川が自然のプールになっている場所で、老人も若者も子供になって岩場を泳ぎ回り、水遊びして汗を流す。釣りに夢中なものも、せっせと洗濯しているものもいる。

日本人が集結地の設備を余り完備したのがまずかったらしい。今から一週間ほど前、マカッサルに來ている占領軍から、期限つきで日本人はマロス集結地から立退くよう命令が來た。

立退く先はマカッサルから100kmほど北方にあるマリンプンという大草原で、何一つ設備のない山の中の荒野だそうだ。

立退き命令に対して様々な交渉が行なわれたが、結局は日本人が自分達の手で運べるものだけは運んでよいと言うのが精一杯の成果であった。

日本人集団が保有している限られた数のトラックでは、100kmの道のりを運べるものはホンの僅かではないことは明らかである。

しかし、日本人は占領軍の裏をかくて、インドネシア人の舟を集めて、舟で人間や物資を海上から運ぶ方法を考え出した。マロスから最も近い街道筋の大川の舟付き場までトラックでピストン輸送し、川を舟で下って海に出て海上100kmを北上しマリンプン近くの海岸に荷を上げて、そこから再びトラックのピストン輸送で運ぶやり方だ。

その方法でも運べるものには限度がある。と言って、生活物資を残して行くのも糧の種、食えるものは皆食って仕舞うことになった。それからというもの、毎日々々、牛・豚・鶏・家鴨料理にお汁粉・ぜんざいといったあきれ果てた御馳走の連続になった。

物資運搬の目鼻がついてくると、いよいよ人間とその荷物の輸送も始まり、

マロスに集結した日本人は次々と出発していった。そして、今朝になって我々の出発する順番が回ってきた。

我々は朝早く本部建物の前に集まって、夫々のリュックサックやトランクを2台のトラックに積みこんだ。やっと整理した僅かな荷物である。

……我々のトラックが途中からスゴスゴと集結地に戻ってくると、本部ではジープで来た占領軍と交渉が始まっていた。占領軍は日本人が舟で人員物資を運んでいることにやっと気がついて、これを禁止するためにやって来たのだ。だが、交渉は纏まって今日のトラック2台だけは黙認し、以後は認めないという事になった。

インドネシア独立の歌

我々はこれが最後の便となった2台のトラックに這上がった。虎口を脱するような気持ちだが、手を振って見送ってくれる残った仲間の顔が何となく恨めしげに見えて申し訳ないような気もする。

しかし、この出発は決して気楽なものではない。既に数日前から不穏なニュースが頻々と伝えられているからだ。物資輸送のトラックが途中の街道でインドネシア人の暴徒に襲われ、互いに石合戦をしたあげく積荷を幾つか奪われたとか、川のなかで船が襲われ乱闘のすえ荷物を奪われ日本人が何人か怪我をしたと言う話である。

今日もこれからどんな事が起きるやら見当もつかぬ我々は、マロスに別れを告げるセンチな感情と同時に前途に対する莫とした不安から、複雑な気持ちの出発である。

しかし、前途にどのような危険が待っていようとも日本人が日本人の意志で行動出来る事は、占領軍に命令され監視されて行動するより遥かにましだと思う気持ちは、自由を愛する人間の本能的なものであろう。

トラックは再び川沿いの並木のトンネルを過ぎ、舗装だけは立派な田舎道をピチピチとタイヤの音をたてて快適に走っていく。

再出発した2台のトラックには会社の連中が10人近く乗っている。幹部の

老人達から20代の若者まで、偶然の組合わせで出来たひとかたまりのグループで、ごく親しい連中もいれば顔は知っているが余り口をきいたことが無い人もいる。その他の人々もマカッサルやマロスの集団生活で知り合った人や全然初めて見る顔もある。

道路ぎわではあちこちで、インドネシア人が我々のトラックを見つめていた。女子供や婆さんまでニッパ小屋から飛出してきて奇妙な表情で我々を見送っている。

バナナを少しばかり軒に吊して売っているニッパ小屋の前では、裸の子供が親指を立てて前に突き出しながら「バグス、バグス、！」と叫んでいた。

「バグス」と言うマレイ語は『上等』という意味で、親指を立てて目の前に突き出すしぐさはインドネシア人が一素敵だ・一うまくいった・一ナイス・一上等・などを動作で示すときに好んでやるしぐさだ。

我々がマカッサルからマロスの集結地に逃れて来たとき、この子供たちは我々の情けない集団を見て小指を突き出して蔑む態度を示していた。あの時からまだ僅かの期間しかたっていないのに、何が彼らを小指から親指に変えさせたのだろうか。

僕は『インドネシア独立運動』のせいだと思う。

日本の敗戦と同時にインドネシア全土は独立運動の大波に沸き立ってきているが、こんな田舎の部落にもその波音が響いてきているのだろう。

我々のトラックの正面から、街ではあまり見かけない荷車かりヤカーのようなドッカル(馬車)がやって来た。黒い顔にお白粉を斑に塗った派手なインドネシア服装の若い女が乗っていた。赤い唇がどぎつく、まともな女性では無いらしい。すれ違うとき、トラックの上の我々を見とめた女は突然立ち上がって狂人のように甲高い声で叫び始めた。「日本上等、！ 日本バグス、！ 大インドネシア万歳、！ インドネシア独立万歳、！ インドネシア独立万歳、！」と千切れるように手を振りながら、何度も何度も唄うようにマレイ語で叫んだ後、インドネシア独立の歌を声高く歌いながら遠ざかって行った。姿が見えなくなっても、歌声はいつまでも微かに聞こえていた。

大東亜戦争での日本軍のオランダ追放は、オランダに利用され或いは利用していた上流、中流階級や一部のインドネシア人にとっては具合の悪い事であっ

たが、オランダによって圧迫され無視され、虫けらのように扱われていた一般民衆や下層階級には、日本は救いの神の到来と映ったようだ。

「白人に征服されたインドネシアを助けるため、救いの神が白い馬に乗って東の方からやって来る」というインドネシアの伝説を、僕はあちこちでインドネシア人から何回となく聞かされた。日本がその救いの神であり、またそうあって欲しいと言う意味で彼らは僕にその話をきかせたのであろう。

僕はマカッサル郊外のゴアにあるラジャ（王様）の館を訪問したことがある。オランダがインドネシアを征服する以前に、この地方を支配していたラジャだが、名目だけの部族の首長として存在していたのである。

館と言っても、ただ大きいだけの高脚のがっちりした木造建物だった。神楽殿のような広い板の間で拝謁したが、ラジャがあぐらをかいている玉座の後ろの壁を見て僕は驚いた。

壁にはここを訪ずれたオランダは勿論、ヨーロッパの王族、殿下、妃殿下の写真が西洋式にむやみやたらと飾ってあったが、壁のまん中一番正面の玉座の後ろに明治天皇と昭憲皇太后のセピア色に色が変わった古い御真影が飾ってあった事だ。

しかし、大東亜戦争が進行して日本の軍政が形をなしてくると、日本が第二のオランダになるのではないかと、インドネシア人は危惧を感じていたに違いない。

日本の敗戦はそのインドネシア人の危惧をふっとばすと共に白人の実力低下ぶりも、その実体を充分に示してくれた訳だ。

インドネシア人はインドネシア独立の絶好のチャンスは今、迎えていることを一人、一人が皆感じているのであろう。

メラ・プティの旗

マロスの街の入口には占領軍の検問所があって、トラックはその前でストップした。運転手の涉外係が番兵に紙切れを差し出すと、帽子も被らず襟をはだけたオーストラリア兵が自動小銃をこ脇に抱えたまま、面倒くさそうに受取っ

て、一応もっともらしく目を通し形式的にトラックの上を見まわしてから「OK」とどなった。

売られていく奴隷のように、トラックの上で先方の値ぶみを待っていた我々はやれやれ第一関門突破だとホッとする。トラックはとたんに生きかえった馬のようにガッガーッと勢いよく走り出した。

「あのオーストラリア兵たちは、字が読めるのは余り居ないらしいぜ。俺の仲間にひどいのがいて、あのマロスの集結地から夜な夜な街に夜遊びに出かけているのが居たが、紙切れに横文字をチョロチョロ書いておけば、奴ら読めないんで、何でも『OK』で通してくれるんだと言っていたよ」

「いやぁ、まったく。奴らはオーストラリアの大平原で百姓だったり、カーボーイをやった連中なんで10人のうち3、4人しか字が読めんらしいな。その代わり牛の始末など見事なもんだぜ。こないだ食えるだけ食おうと牛を殺すことになった時、千人からいる日本人で牛を殺して解体出来る奴が居なかったのに、番兵のオーストラリア兵が上等のビフテキを交換条件に自動小銃で簡単に牛をたおし、皮の剥ぎかた、肉の取り方を教え、後始末まで指導してくれたよ」

第一関門を無事通過して今までの緊張が解けた我々はやっとノンビリした雑談も出るようになった。

トラックはこぎれいな洋館や芝生の広場など見える樹木の多いマロスの街を抜けてマロスウェイと言うセレベス島を南北に走るハイウェイに出た。あたりは木陰ひとつ無い広々とした田圃の中の一本道で、トラックは旦々たる舗装道路を北へ北へと走って行く。

この辺はセレベス島南部の西海岸で、北上するトラックの右手田圃の果てには低い山波が並行に走っており、その境目はゴツゴツした岩肌の崖が屏風のように壁を作っている。

左手は遠くまで平地が広がり、その果てはマカッサル海峡の水平線にまでつながっている。広い平地は射るような太陽の光線で真っ白に輝き目がクラクラするほど眩しい。

時々、林の中に人家が数軒集まった部落を通過するが、人影は見えない。道路の左右遥か遠くにも田圃の中に木立の固まった部落が現れてくるが、部落に

よっては高い旗竿に、赤と白が上下半々に塗られた旗が翻っている。

陸地測量部の標識のようなこの旗が「メラプティ、メラプティ」とインドネシア人が呼んでいるインドネシア独立旗である。メラは赤、プティは白というマレイ語である。

戦いに破れて落ちのびて行く日本人、進駐したものの一握りの数しかない占領軍、武器も物資も乏しいインドネシア独立派、そしてあちこちに翻るメラ・プティの旗である。

メラ・プティの旗を見ると、我々は多少ホットした気持ちになる。人跡稀な山の中で人間に出会ったように、人懐かしい気持ちがするから妙である。

彼らは別に我々の味方でも敵でもない筈であるが、ただ何となく親しみを感じ、現在の我々のみじめな気持ちのなかに、彼らの独立に対する熱意を一しゅ救いと感じているらしい。

しかし現実には、彼らインドネシア独立派のゲリラ活動で、日本人はいろいろな形で被害を受けている。

日本軍が進駐してくる占領軍に引渡すため、各地に保管している武器、弾薬や物資は、インドネシア独立派にとっては最も手に入れた品々である。

警備している日本兵は、かつて自分が教育した旧部下のインドネシア兵（兵補と言っていた）から独立運動のため引渡しを懇願され、強要され、脅迫され、拒絶して傷ついたり、罰を覚悟で引渡したり、強奪されたり、武器もろとも彼らと行動を共にして脱走した話など数多く聞く。

インドネシア独立派に投じた日本兵や民間人も、その動機は情・愛・義・欲と色々だが、一人、二人の個人的行動から10数人の集団脱走まで、ヒンピンと起こっている。

我々が今朝まで暮らしていたマロス日本人集結地でも、毎晩のようにインドネシア人暴徒に襲われていた。殆どは夜警の警備員との小競合いで退散したが、時には真夜中に全員が叩き起される騒ぎになることもあった。

そして若い日本人が血気にはやって暗闇のなかに暴徒を深追いして傷ついた。インドネシア人は暗闇の中でも目がよく見えるのに、日本人は夜は盲も同然ということをおぼれた結果である。

暴徒が独立派と関係あるかどうかは別として、とにかく日本人の豊富な物資

が襲撃の目的なのである。

前のトラックから警戒警報が伝えられてきた。

「此の先のあたりで、数日前日本人のトラックが襲われた。道路のまん中に丸太を数本転がしといて、トラックが止まるとワッと押し寄せ石を投げってくる。日本人がトラックの蔭で防戦している隙に、荷物をかっぱらっていくのだ。奴らが隠れていそうな場所をよく見張ってくれ」

あたりの景色は何の変哲もない静かな田園風景が広がっているだけである。

田圃はよく実った稲田や青々しい稲田もある。点々と見える農家も割合立派である。集団追剥ぎは何処から現れるかと、我々は極度に緊張して周囲を見張っているが、それらしい様子は全くない平穏そのものである。

トラックは広い平地の中的一本道を、北に向かって唯快調に風を切って走って行く。

プ ラ ウ

トラックは大きな河にのぞんだ部落に入ると、長い木の橋を渡る手前で左折し河岸に沿って街の中に進んだ。河岸の道路を挟んで小さな家並が連なっているが、中に大きな倉庫が幾つか並んでいる。

巾のひろい河は岸から岸まで満々と濁った水が流れている。兩岸には何十隻ものプラウ（インドネシア帆船）が舳っている。人の往来も賑やかなこの街は地方物産集散の中心地らしい。僕はこの地方にはあまり詳しくないがパンカゼネという所らしい。

トラックが大きな倉庫の前に停まると、この街に配置されている日本人が数人現れてきて、我々を歓迎して炎天の下で立ち話が始まった。

「じゃなんだい。このトラックが最後の便と言う訳だな。それじゃ俺たちもカイン（布地）やサブン（石鹼）など始末して、皆と一緒に此处を離れなくちゃ……。今から交渉して、舟は今晚じゅうにみな出さないと後が煩さくなりそうだな」

我々は倉庫の中で休憩する事になった。倉庫はコンクリート製ではないが木

造白壁造りの日本でも昔よく見かけたようなガランドウの高い屋根だ。

ガランとした部屋の中は干魚や穀物の匂いが漂い、うす暗くて涼しかった。その湿ったような空気の中に腰を下ろして休んでいると、日本の古い港町の倉庫の中にいるような、心の安らぎが感じられる。

片隅には干魚の包み・砂糖・米の袋・布地の梱包・雑貨類が無造作に相当の量が積上げてある。これが我々日本人の今では唯一の財産かも知れない。

倉庫で休んでいる間に我々が乗る舟が決まった。倉庫前の道路の石垣から2mほど低くなった河面にゆったりと揺れているプラウだった。

プラウは12、3トンくらいの形が支那のジャンクによく似た可愛い舟で、早速荷物の積み込みである。

我々はトラックで運んできた荷物や倉庫のなかの米・砂糖・炭などを慣れない手付きでイヤ怪しげな腰付で担ぎあげ、岸から舟に掛かっている狭い道板でヨロヨロしながら舟に運んだ。

ボサボサ髪が目玉がギョロリとした人相の良くない船頭や水夫は赤銅色の裸姿で舟の手入れや片付け仕事をしている。我々に対してはまるで無関心といった態度だ。

水夫の一人が船首のドラム缶にバケツで河の水を汲みこんでいる。尋ねてみると飲料水だと言う。我々が飲む水かときくと、そうだと言う。

驚いた我々が河の水は怖ろしくて飲めぬと言うと、このゴツイ男は笑いながらブギス訛の分かりにくいマレイ語で言った。

「トアン、大丈夫だよ。河の水は表面と底の方は駄目だが、中間にある水は飲めるんだよ。どうせ、トアンたちは水を沸かして飲むんジャロが、関係ないよ。俺なんか、いつもこのまま飲んどるが何ともないよ。ほれ飲んでみようか」

彼は紐のついたバケツで、教えるように河の水を汲んでみせ、わざわざ我々の目の前で飲んでみせた。

我々は慌てて大きな水瓶を持込み、井戸の水を積みこんだ。

この小さなプラウには勿論客室や食堂など是在るはずはない。我々は荷物を舟底の板敷の上に積上げ、その上に勝手にごろ寝するのが寝室である。

舟首の6畳ほどの板の間が青天井の炊事場であり、食事場である。

舟の屋根は竹とアンペラで編んだ苫で、かまぼこ形にスッポリと舟の上を覆

っている。ファファ弾力があるが、我々が2、3人その上を歩いても平気なくらい丈夫なものである。海に出たら帆で走る舟だから、河の上では大きな帆は捲かれて屋根の上に置いてある。船体に較べると随分大きな帆で、これも竹の骨とアンペラで出来ていて長さは船の長さの2/3以上もありそうだ。

我々数十人の日本人は3隻のプラウに夫々荷物を運びこんだが、これまで肉体労働をするのはインドネシア人で何もしないで指揮をとるのが日本人だったのに、ここでは重労働している日本人を大勢のインドネシア人が遠巻にして見物している。

中には河岸の船具を腰を下ろしてボンヤリ見物している本来のインドネシア人らしいのも居るが、うるさく付まとう子供たちに混じって我々の前後をうろつく者もいる。

「あの角刈りのアンチャンを見なよ。あいつは我々を偵察に来てるんだぜ。日本人が来るといつも奴がすぐ現れるんだ。何かスパイらしい事をやってるに違いないな」

グレン隊風の歩き方をする、目つきの良くない若い男が我々の動きを覗き見するようにやや離れた場所をウロウロして、いつまでも立去らない。

乗 り 遅 れ

昼食の握飯は、此の土地のカバラカンボン（村長）らしい大きな屋敷の中の木陰の芝生で食べた。この家は表通りのゴチャゴチャした家並から奥に入った街の裏手にあたり、立木の多い閑静な場所に在って、庭の先はもう田が遥かに広がっていた。

家は木と竹で出来ているが、床が地上から高い高脚造りの建物で大きくて立派であった。その家族も流石にこの地方の有力者一族といった態度の見える品のある老人や若者達で、男も女も我々に対して親切だった。この地駐在の日本人とは身内のような親しさで話していた。

我々は用意してくれたお茶など御馳走になって、涼しい木陰でのんびりと今朝からの緊張を緩めることができた。

昼食を終わって、煙草を吸いながら一息いれていると、表通りから日本人が一人この場所に走りこんで来た。

「みんな、すぐに舟に乗って下さい。とにかく早く乗って舟を岸から出来るだけ遠く離して下さい。オーストラリア兵がジープでこちらに向かっているって知らせがあったんです。とにかく大急ぎで舟に行ってください」

我々は後片付けもそこそこに、迷路のような路地づたいに泡を食って河岸に跳んで行った。我々が河岸の舟に乗りこんだ時、隣にいた舟はもう数10mの河の中に漕ぎだしていた。

我々の舟には会社の仲間が一同となって乗るのだが、バラバラ走って来る人数はなかなか揃わない。先に岸を離れた舟はグングンと下流にくだり始めたが、我々の舟は岸を離れることが出来ない。

人数が大体揃ったようなので当たってみると、一人足りない。I君だ。I君はマカッサルで、僕と同じ宿舎で暮らしていた呑んべいで無軌道な、元気の良い若者である。皆はジリジリした気持ちで舟の上から叫んでみたり、岸に上がってあちこち走り回って捜してみたが、I君は何処からも現れてこない。先に進んだ舟が下流に見えなくなったので、遂に待ち切れなくなった我々の舟も岸を離れた。

上流の橋の辺りにジープが砂塵をあげて現れた。／＼

我々の舟はゆっくりと河心を川下に移動していった。約束では2隻の舟は2kmばかり下流で落合って、後始末をしてくる連中を乗せた最後の一隻を待つ事になっていた。この連中が今やって来たジープとの交渉をやっている筈である。我々は積残してきたI君を心配して岸辺の道路を見張っているが、彼は現れず、舟は流れに乗って静かに下っていく。

舟が100mほど下流に下った頃、倉庫の立並んだ岸辺にI君が現れた。彼は岸辺にいなかった舟を捜してキョロキョロ走り回っている。彼は我々が彼を呼ぶ叫ぶ声にやっと気付いて河岸を下流に向かって走り出した。

彼の姿はニッパ小屋の蔭に隠れたり、岸辺の林の辺りに現れたりするが、狂ったように手を振って「停まってくれ、停まってくれー」と、走りながら叫んでいる。

竹藪が岬のように河に突き出した蔭の、岸から余り離れていない場所に舟は

停まった。小さな栈橋などある洗濯場かマンデー場（水浴場）らしい。

彼はインドネシア人のカヌーを頼んで舟に漕ぎよせてきた。どうやら船頭はチャンと心得て舟を操っているらしい。

やっと舟縁に手をかけた彼の顔は泣き笑いの表情でクシャクシャになっていた。皆からからかわれたり励まされたりしながら、彼は船の上に引張り上げられた。

「あー。オドロイタ。倉庫の前に行ったら舟が居ないじゃないか。インドネシア人に聞いても、言葉が通じないし。舟を見ても皆同じような舟ばかりだし。とにかく闇雲に岸边を走ったよ。舟に近付いても道がないし、あってもカヌーが無いし……」

舟に上がったI君は本当に半泣きで喋っていた。

I君を乗せると、舟は本格的に竿を入れて河の中央を下流にむかって下り始めた。

疑 心 暗 鬼

人家の多い街を出はざれると両岸は竹藪や椰子の林が多くなり、水の中から草が茂っている水辺風景に変わってくる。水の浅い岸边では女子供が胸まで水に浸かってマンデー（水浴）をしたり、岸边の木の小さな栈橋で洗濯をしている。

濁水が岸から岸までいっぱいに流れているこの河は、狭い場所はかなり速く平地では巾広くゆっくりと流れている。湖のように波ひとつない広くて静かな場所もある。

舟は既に2km以上も河を下った筈なのに、一向に停まる気配を見せない。下流の何処かで落ち合うことになっている先に進んだ舟の姿も、後から来る筈の舟の姿もいくら捜しても目には見えない。

不安になった我々は人相のよくない船頭や水夫に舟を停めるように話かけるが、誰が喋っても通じるのか通じないのか、彼らは舵取りや棹さしに熱中して我々を相手にせず、舟は停まらない。

我々はこの舟に乗った時、皆で相談して各自シャツ一枚を脱いで彼らにプレゼントしたのだが、どうやらこの下心のある贈り物の効果はなさそうだ。

舟に乗ったら船頭まかせさっ……と言う格言が日本にあったっけ……。

元来この地方はセレベス島中部のブギス族が住んでいる地方で、我々が居たセレベス島南部のマカッサル族とは言葉が違うし、標準マレイ語もこの地方ではあまり通じないらしい。

インドネシアの街々で「マレイ語を使いましょう」とマレイ語使用奨励のPRステッカーが貼ってあるのを、僕は見ている。この地方の連中にとっては、我々日本人が喋る怪しげな片言マレイ語はまったくの外国語としか聞こえないのかもしれない。

ブギス族は歴史上有名な南方海賊の本場で、彼らは舟を操る事が朽みな海の男として知られている。東はニューギニアから西はシンガポールの西まで小さな舟で航海し、時には海賊に早変わりして内外の船を襲うので船乗り達から恐れられていた。

つい先日、日本人の舟が襲われた話では船頭が舟を橋桁に寄せ着けると、トタンにインドネシア人が次々乗り移ってくるし、水上からカヌーが何隻も寄ってきて石合戦になり、乱闘が始まり、日本人が怯むと荷物を奪って逃げたという話である。

インドネシア人暴徒の目的は日本人その者ではなく、日本人が運んでいる物資が目的ではあるが、どっちみちやられるのは日本人である。

我々も注意されて、こっそり戦闘用の石ころを各自一袋づつ用意して乗船している。

舟があまりに停まらないので、一番若くて元気の良いA君が胴の間の荷物の間からゴソゴソ這出して、船尾の板の間で舵を握っている船頭の所にニジリ寄って得意のマレイ語で交渉し始めた。

船頭は肋骨が見えるほど痩せていた老人だが、引締まった筋骨は逞しく陽焼けした顔はゴツゴツ黒光りして殊に目が鋭く物凄い面構えをしている。

クドクドと喋るA君のマレイ語を聞き流して舳先を睨んでは舵を操っていた船頭が突然大声で怒鳴った。

「トアン、トアンは怖がっているのか、！」と。

船頭は怒声で他にも何やら叫んだが、僕に分かったのはこの言葉だけだった。代表選手はスゴスゴと引き下がり顔をしかめて戻ってきた。残りの連中はトタンに黙りこんで、不安な顔つきで互いに目を見合わせたきり、何も喋らなくなった。

ブギス族

ブギス族はセレベス島に住む土人。人種学上はマレイ派のボルネオのダカール族（ダイアク族）とジャワ族の混成人種である。

南洋30余種の種族中、その風俗と体格が一番日本人に似ている。皮膚は黄褐色で目の色は黒く、頭髮も黒い波状型で身長は平均約160cm。女の数が少ないため女一人に男二人の享楽に耽り、独木舟を海に浮かべて鯨群を追う。

風俗は裸体人種であるため至極簡単であるが、真珠やアワビの貝殻を細工して首に飾り頭にも装飾をほどこす。食物は魚類と果物を好み、自ら生産する労苦を嫌う。常に闘争的で他と争い殺戮を事とする。

家はモンスーンの迫害が激しいため低い葺屋を建て、マホメット教を信ずる者が多い。女は腰巻（サロン）ひとつであるが、海浜で取った魚類や真珠をサロンに包む習慣があり、女尊男卑で最近では人肉食いの記録はない。

性質は剽悍で冷熱の度が激しく、他の種族には見られぬほど仲間の死者に対し丁寧な葬儀を行い、火葬を嫌ってすべて土葬で敬意を払う。

女は貞操観念なく、13、14歳になれば自由に男を迎える。酒を好み音楽舞踊を愛して騒ぎ、労働を嫌って日夜唄い遊ぶ。

酋長の生活は王侯貴人を真似、一村落に集団して外敵のために当たる準備を怠らない。特徴は椰子油を体に塗り極楽鳥の羽根で家の内壁を飾り、また頭や腰にそれを飾る。

（昭和7年度 平凡社 大百科辞典）

槍 の 束

30分ほど流れを下ると、舟は両岸が緩い崖になった低い山あいさしかかった。見上げる両岸の丘の上の椰子林の中にはニッパ小屋が密集し部落は河岸に沿って続いた。

犬や鶏の鳴き声が聞こえ、子供たちの叫び声も賑やかだ。舟を見つけた子供たちが斜面を河べりに駆け下りてきた。舟は両岸の部落に挟まれた幅の狭い河の中央に停まった。

「おい、危ないぞ。みんな戦闘準備しとけよ」

我々は互いに囁きあって身支度をした。

カヌーが一隻岸から舟に漕ぎ寄せられると、船頭と若い水夫が一人このカヌーに乗り移って岸に渡って行った。

我々は俎の上の鯉のように覚悟をきめて、狭い舟の中で彼らのなすがままにまかせて、唯ジーッとなりゆきを見つめているより仕方がなかった。

暫くすると岸の人声が賑やかになって、またカヌーが岸から舟に漕ぎ寄せられた。近づいたカヌーを見ると、槍を5、6本束ねて抱えた男が乗っている。我々は息をのんだ。

しかし、そのカヌーに乗っている船頭は珍しくニコニコ笑いながら、槍を指差して我々に向かって何か喋っている。

カヌーが舟べりに着くと、若者が槍の束を舟の上にガラガラッと投げ上げた。船頭はニコニコ笑いながら大きな房が沢山ついたバナナの一枝を抱え上げて「トアン、トアン食べよ」と、我々の方に差し出した。

舟にあがった船頭は、槍の鞘を脱ぎ捨て我々に見せながら説明し始めた。

「この先に海に出る河口があるが、あそこはよく海賊が襲ってくるから、その時はこの槍で一戦やるんじゃ。わしの家に寄って持って来たんじやが、手入れが悪うてのう、赤錆ジャワイ。水夫も二人乗って来るけん心配しんしゃんな」

飾り気のない朴訥な彼の言葉は、我々には半分もよく分からないが、彼の言っている事は十二分に我々にピンと伝わってくる。

我々は今までの緊張がメロメロと溶けてホッとすると同時に、改めてこれから先に対する不安を感じてきた。それにしても、こんな素朴なブギスの海の男

たちを疑っていた自分たちが恥ずかしくて、申し訳ない気持ちでいっぱいであった。我々は船頭好意のバナナを有り難く頂き、時が時だけに最高の贈り物だと感激した。

我々は心も和やかに、色々積み込まれる航海の道具を、彼らと賑やかに喋りあいながら見物した。

夕 暮 れ の 河

裸の上半身が黒光りした、筋骨逞しい若者が乗り込んでくると舟は再び動きだした。岸边では女や子供たちが手を振って叫んでいる。舟の上でも水夫たちがこれに応じていた。

舟は穏やかな水面をゆっくり進んで広々とした平野の中に出た。見わたす限り山の見えない大地の中を満々と水を湛えた大河は右に左に蛇行を繰り返して行く。バナナ林、椰子林、大きな竹藪、こんもり繁った森が次々と現われ、その間にニッパ小屋の部落が点在している。僕にとっては初めて見るゆったりと広い水のある風景である。

いつの間にか太陽は西に傾き、激しかった陽の光は赤みを増して和らぎ、大空一杯が赤みを増してきた。点々と見える竹の家からは夕餉の支度の白い煙が真っ直ぐに空にあがって、辺りに夕暮が迫ってきた。

舟の上では胴の間の荷物の上や風通しの良い屋根の上で寝転んでいるノンキ者や、舟首のふなべりで煙草をくゆらしながら放心したように大空を眺めている仙人たちもいる。

誰もが肩の骨を外されたような脱力感に、すっかり黙りこんで話声も聞こえてこない。

うす墨色に塗りつぶされていく広い河面と、曲がりくねった水路の先々に影の島のように浮かぶ森や林を眺めていると、自分が独りきりで大空と大地の間に坐って居るような寂しさを感じる。

この舟上の夕暮れは、時が時、場所が場所だけに今までに味わったことのないシーンと心が沈澱するような静けさの一時であった。

ふと気がつくと、曲がりくねって蛇行している水路の遥か前と後ろに、出発のとき離れてしまった仲間の舟が見え隠れしながら航行している。その上いつの間現れたのか、我々の周囲には二人乗りや数人乗りのカヌーが何隻も水スマシのシのように往ったり来たりしている。

カヌーはずっと先の水路の曲がり角まで矢のように走って行ったかと思うとクルリッと向き替えて今度は遥か後方までスイスイと滑って行く。カヌーの男たちは我々にはまるで無関心のように、舟の側を振り向きもせずには漕ぎ抜けて行く。

雲一つない大空は刻々と色を変えて赤い色彩を失っていったが、気がついた時には全天に砂のように星が輝いていた。

あたりが暗くなると広い水面だけが鼠色に光って遥かに続いているが、周囲の土手や対岸の林は墨絵のように鼠色の中に黒く浮かんで島のように見える。岸辺の暗闇の中に点々と気味の悪い赤い火が燃えている。舟が近付いた時よく見ると、土手の上の農家の水牛小屋の前で蚊やりの枯草を燃やしている火だ。火に映えて人影が動きのどかな話声が聞こえる。舟の上はすっかり暗くなって隣に坐っている仲間の見分けもつかなくなってきた。

あたりはすっかり暗闇になって、舟の上も水面も兩岸も見わたす限り黒一色に塗りつぶされたが、空だけは全天を埋めた星が澄みきった大気のなかで水平線から地平線まで見事な光の半球となって広がっている。

これまで南の島々の色々な場所で、美しい星空を何度となく眺めてきた僕だが、こんなに美しい星の半球は見たことがない。

ふわふわと足場は悪いが、ソファーのように弾力のある舟の屋根の上に寝転がって頭上一杯の星を眺めていると空が段々と明るくなって、シャンデリア輝く大サロンに迷いこんだ気分になってくる。

暗闇の中で水面を走り回っているカヌーの一隻が、我々の舟に漕ぎ寄せて来た。モジャモジャ髪の半裸の男が、舟べりで見下ろしている日本人の一人にだみ声でどなった。ドスの利いた声だ。

「煙草の火をくれ。あったらタバコもくれ」

日本人が薄気味悪そうに火と煙草を渡すと、彼は案外きさくにお喋りを始めた。顔つきはオッカナイが人はよさそうだ。

彼らは我々の舟を護衛するために雇われた男たちで、彼らのカヌーは我々の護衛艦だったのだ。おそらく、この若者たちは、我々が昼飯に寄ったカパカンボン（村長）と言うかこのブギス地方の一有力者の配下なのだろう。後から来る舟に乗っている、この地方駐在の日本人世話役が布地や石鹼を材料に交渉して契約した護衛兵なのだろう。

我々は心強くなると同時に益々心細くなってきた。

船尾の甲板では仲間の連中が星の話をしている。天体の事に詳しいT氏が説明役だ。僕も日頃から星に興味を持っていて、オランダ製天星図の本を手描きで筆写した本を捨てきれず、リュックサックに入れてこの舟の中まで持ち込んでいるが、僕には星を楽しむ心の余裕がないのか、ただボンヤリと空を見上げているだけである。

仲間たちは「南十字星」を捜しているらしい話声が聞こえるが、この季節のこの時刻では「南十字星」は地平線のあたりで、見える筈はないと僕は捜しても見なかった。



海 賊

何時間かたっていた。僕はいつの間にかウトウト眠っていたらしくザワザワとした人声で目を覚ました。皆がしきりに暗闇の先を指差し、見透かしている。僕も目をこらしてジッとその方向を見つめていると、すぐ近くに十隻ちかい舟の影がおぼろげに見えてきた。人の声も風にのって微かに聞こえてくる。

我々の舟は静かにその舟のかたまりに近づいて行った。舟がお互いに近づくと水夫たちはお互いに何やら声を掛けあいながら、舟を次々と順序よく並べて駐車、じゃない駐舟していく。

あちこちにチラチラ微かな灯が見えてきた。舟の船頭の前に一つだけあるカンテラの灯だ。

舟の群は皆日本人が乗っている舟で、今朝早くから次々と出発した舟が河を下って皆此处に集まり、海に出るための風待ちをしているのだった。

此处は河が海にそそぐ河口の近くらしい。

舟は今まで、流れの浅いところでは棹をさし、深いところでは櫂で漕いで来たが、海に出たら帆を張って風で走るため、風の方向が変わる夜半までこの河口で待機するのだそうだ。

我々の舟が到着したための一時の騒ぎが収まると、辺りはまたシーンと静まりかえった。我々の船も前から並んでいる舟の間に挟まって静かに揺れながら、時々舟べりでピチピチと微かな水音をたてていた。

静かな暗闇の奥から何やらザワメキが聞こえてきた。控え目な騒ぎは舟から舟に拡大されて伝わってきた。水夫や船頭たちがブギス語で互いに呼び合い叫び声を上げ、あたりは騒然となってきた。

船頭が積み込んだ槍の束をほどき、ガラガラッと板の間に投げだした。

「海賊が来た。トアン、トアンも用意してくれ」

船頭は我々に叫ぶと、水夫たちも次々と何やら命令を下している。水夫は隣の舟に叫びながら錨綱を曳き、棹をさして舟を動かし始めた。

突然、暗闇の中にパパーンと銃声が一発、響きわたった。

我々はこの銃声に、脳天をどやされた様な衝撃を受けた。これは本番も本番、本ものの海賊襲来で、映画や小説の海賊襲来の場面とは違うんだという事を思

い知らされたのだ。

「おーい、石を呉れ、石を、／＼」

日暮れ時から我々の舟の周りを走り回っていたカヌーが暗闇の中から現れて舟べりから叫んでいる。石のはいった袋を荒くれ男たちに渡すと、彼らは鬼のようにガラガラと大声で笑いだす。

「こんな卵のような石じゃ、相手の人間は死なないよ。これじゃ、せいぜい目が潰れるくらいで役にたたんな。もっと大きな石は無いのか、なあとアン、トアン、／＼」

さんざん文句を言いながら、それでもカヌーは闇の中に音もなく消えて行く。「石は椰子の実くらい大きくないと駄目じゃよ。相手がやって来て舟べりに手を掛けたら、その指を叩き潰すんじゃ。それでも這い上がって来る奴は上からガツンと頭をめがけて脳天を叩き潰すんじゃよ」

船頭は船尾の舵のところにドッカと坐ったまま、騒ぎのなかで我々に物凄い注意を与えるが、目はジーンと暗闇の中を見つめている。

胴の間に降りて荷物の間に置いてある石の袋を捜していると、大きな男のお尻にぶつかる。頭を荷物の間に突こんで尻を持ち上げ、縮こまっている男だ。それも一人二人では無いようだ。

「うえっ、気持ちが悪い。尻など撫でるなよ」

M氏の声である。日頃から仙人めいて、とぼけた風格のこの半老人が暗闇の中で頭隠くして尻隠くさずをやっている姿を想像すると、緊張した騒ぎの最中ではあるがお可笑しさがこみあげてくる。

騒ぎの場所は、集まっている我々の舟の先端の方らしいが、風に乗って大きく聞こえてきたり小さくなったり、暗闇の中では距離の見当がつかない。

何やら怒鳴り合ったり叫んだりしているらしいが、チャンバラらしい音は聞こえない。しかし、舟の方でも雑然としたザワメキの中から時々景気をつけるように「うおーっ、うおーっ」と関の声があがる。これは日本人の一大合唱である。「トアン、トアン。われらは今から舟を漕ぐから、檣のほうを受けもって戦ってくれ。奴らが来たらよく狙って突刺すんだぜ。ほれ、檣、／＼」

水夫たちは鞘を払った錆槍を、次々に日本人に渡して櫂を操りだした。槍の数はほんの5、6本だったので、僕には渡ってこなかったが、生まれて始めて

本物の海賊とやりあうために、槍を持たされた日本人の困った顔が暗闇の中で見えるようだ。

「ヤレヤレ、大変な事になったな。インドネシア人はこの暗闇の中で、目が見えるのかね。俺には何にも見えないぜ。相手が見えなくちゃ、槍を持っても刺しようが無いな」 聞きおぼえのある声がボヤいている。

どの舟も暗闇の中で同じような騒ぎをやっているとみえて、人声が賑やかである。「ウオーッ、ウオーッ」の関の声が頻繁に上がり出した。

我々の舟でも同じように怒鳴っているが、これは意識的に怒鳴るのではなく自然に出てくる声なのだ。叫び声は全身 震わして腹の底から出てくる関の声で極度の緊張感や恐怖心理が一時的に全身から放出されて、その後何となくサッパリした気分になる。しかし、緊張や恐怖はすぐ戻ってきて、再び大声を出さざるを得ない心理になってくる。これは仲間の連中も皆同じとみえて、関の声の間隔もピッタリ同じくなって一大合唱となる。

関の声は、極度の恐怖のストレスを一時的に体外に放出する物理的ストレス解消法である事を知ったが、これは自分ではコントロールすることは出来ない自然発生の物であることも分かった。



襲って来た海賊と我々のガードマンであるカヌーの群の間の石合戦や、罵り合う騒ぎは、一時はすぐ近くで喧しかったが次第に海の方に遠のいていって、あたりが段々静かになってきた。

漕ぎ戻ってきたカヌーの話によると、海賊は20人乗りの大型カヌー4隻で襲ってきたが、こちらのプラウが10隻近くも屯し警備の護衛兵まで居たので、戦力不足と判断したのか、彼らは前哨戦だけで海上に退散していったと言う事だ。

「あいつら、全く卑怯な奴らだ。名をなのれと言っても、名も言わずに逃げやがった。この沖にある小さな島の奴らに違いねいんだが」

カヌーの連中は勝ち戦さに浮きたって、煙草をねだりにきては得意になってお喋りしていく。

この河が海に注ぐ沖合いには小さな島が幾つかあるが、その島の部落は昔から有名な海賊部落で、時々こうしてよその舟を襲っているらしい。

しかし海賊と言っても、こちらから見た場合の話であって、我々を警備しているカヌーのガードマンだって、結局は布地や石鹼で雇われている一部族に過ぎない。時と場合によっては他部族の舟を襲って物資を頂戴しているのかも知れない。

今夜襲ってきた連中も、初めから我々が頼めば我々の用心棒として警備隊に早替わりするくらいの取引はするのだろう。

どうやらこの海賊さわぎも、部落対部落、部族対部族の対抗といった話具合で、ヤクザの世界の出入りで殴りこみを掛けたり、掛けられたりするといった出来事なのかも知れない。

浪速節で有名な天保水滸伝で、飯岡の助五郎と言う博徒の親分はスッカリ悪役にされているが、彼の部落・銚子港近くの飯岡の町では部落の護り神として彼を祭った神社まである。飯岡町の顔役として、漁港の建設、修理、保守や部落のもの事に睨をきかし、役人との交渉や他部落との争いに乱暴な実力を示す煩い男だが、この部落にとってはなくてはならない必要悪といった存在だったのである。

よその部落から見れば、厄介な海賊ならぬ陸賊だったのであろうか。

「あの海賊野郎は名乗りもせずには逃げたんだから、今晚も一度やって来るに違

いないよ。今度はもっと大勢で武器もうんと用意して来るじゃろ。こちらも今のうちに準備しとかにゃ」

船頭は船尾に仁王立ちになって、暗闇の中に何が見えるのか、沖を透かし見ながら喋る。

「奴ら鉄砲を持っていたじゃないか」と言うと、船頭が笑いだした。

「あれは、こちら側が射ったんじゃないよ。トアン、トアンは海賊が射ったと思ってあんなに慌てたのか。ウワッハッハー」

我々もこれを聞くと、銃声一発、慌てて胴の間に駆け込んださっきの醜態を思い出して、みんなおもわず心から大笑いした。

「もう少ししたら風が変わって帆が張れるんじゃない。そしたら水夫の手が空くが、それまではトアン、トアンが槍を持って見張りをやって呉れや」

船頭の命令で日本人は、船首や船尾の何も見えない真っ暗闇の中で、ぼやきながら風が変わるのを待った。

風の向きが変わると、どの舟も一斉にガラガラッと帆を張った。大きな帆である。長い帆は巻きとられて屋根の上に縛られていたが、帆柱に張られたのを見ると横に長い長方形の帆で、片側の大半は船体の外の海上に突出して広がっている。

ひと塊になって並んでいた舟の群は、ヨット競走のスタートよろしく次々に滑りだして行った。映画なら勇壮でロマンチックな音楽伴奏が付くところだが、実際は風の音も波の音もない完全な暗闇無声映画だった。

「もう大丈夫だ。いくら速い20人乗りのカヌーでも、帆を張ったプラウにはかなわないよ。奴らが来たらわしらがやっつけますだ」

槍はやっと水夫の手に戻った。

舟が走りだすと僕は急にガックリと疲れが出て、そのまま荷物の山の上にゴロリと横になった。快い眠気に襲われてたちまちグッスリ眠ってしまった。

僕はウトウトした中で、人声が聞こえたり舟が岸辺に停まった気配を感じたり灯の光がチラチラしたのを見たような気もしたが、僕は何の心配も不安も感じないで、グッスリと眠りこけていた。

海の上の朝

爽やかな朝風に目を覚ました。舟は相当に揺れている。寝ている人間を跨ぎ、ゴロゴロ積上げた荷物の間を抜けて胴の間から船首の板の間に出ると、まだ薄明るい光の中に広々とした海が蒼黒く広がっていた。

肌寒い海の朝風の中で、大きくピッチング・ローリングする甲板に立って見渡すと、遥か東の水平線にはまだ光の当たらないセレベスの山々が黒く長く横たわっており、西の方には朝日を受けて七彩の明るい雲の下に水平線が見事な半円を描いて広がっている。

広い海上には我々の舟以外には一隻の舟影も見当たらない。昨夜一緒だった10隻近い舟の姿は海上360度見回しても何処にも見えない。

舟は大きく揺れているが、あたりの海面は至極穏やかな表情である。海に較べてこちらの舟が小さ過ぎて、小さな波やうねりに大きく揺れているに過ぎないのだ。

しかし何というスガスガしい気分の、素晴らしい朝であることか！
思いきり両手を広げて背伸びをし、胸と口を一杯に開いて大きな大きな深呼吸をする。

船尾の板の間には船頭がドッカとあぐらをかいて坐っている。一晩じゅう坐り続けなのか、昨日最初に見た時と同じように、両手を左右に伸ばして、舵の把手を握まえ、ジューッと前方を睨らんでいる。舵は船尾の両側にあって夫々の把手が船頭の座まで伸びているのだ。船頭は痩せこけた仁王様の彫刻のように身動きもせずに坐っている。

船首では風にあわせて、帆綱を締めたり緩めたりしている水夫や、火をおこして朝飯の支度をしている水夫もいる。

舟の屋根の上には、一晩じゅう屋根の上で過ごしたらしい半白の老人が一人坐りこんでいる。白い烏打帽を耳まで深く被り、よれよれの白麻の背広に皺だらけの長ズボン姿で、青い顔をして船具にかじりついている。

「胴の間は風の通りが悪くて、ひどく船酔いするし、万一の場合の事もあるんで少し寒いが、風が冷たくて気持ちのよい、屋根の上で一晩じゅう眠らないように頑張っていたんだ」 老人は哀れな声で僕に説明する。

仲間の連中も次々と目を覚まして、胴の間からフラフラと板の間に現われてくる。中にはチョイと外の景色を眺めては、揺れる舟に胸を押さえ青い顔をして荷物の間に逆戻りするものもいる。

一方、元気な老人もいる。D老人は頭がツルツルに禿げあがった、会社の偉方の一人だが、日頃、Y談の大家でもあるが、昨夜もあの緊迫した空気の中でエゲツナイ話をして、若い者を笑わしていたが、今朝も早くから板の間に現れてハチャイでいる。

「腹がへったから、飯を作ろうや」と先にたって食事の用意をし始めた。

ちっぽけな七輪に火をおこして、消炭壺のようなインドネシア人の釜で飯を炊き、缶詰や乾魚・梅干・味噌汁と、持ち込んだ材料で結構美味しい朝飯が出来た。

しかし鰯腹食べたのはこの老人と僕くらいのもので、他の連中はチョッと口をつけて途中で止めたり、中には始めから手を出さないものもいる。それでもコーヒーだけはたくさん手が出た。

ランニングシャツ一枚に膝をだした半ズボンの裸足で、板の間にあぐらをかいての食事である。老いも若きも、偉方から下っ端まで、地位階級は抜きにして、何の気兼ねも束縛も受けない思い思いの恰好で、熱くて甘いコーヒーをフウフウすすするのは、これまた格別に素敵なものであった。

ひんやりした朝のそよ風に吹かれながら、奇麗な海や空の色を背景に、板の間に車座になってコーヒーをすすり煙草をふかす。お互いに昨夜の醜態を冷やかしたり、ヒヤヒヤだった内心を白状したり、とんだ武勇伝を披露したりとの放談は明るい笑い声のなかで果てし無く続いた。

「なーんだ。お前は舟が海に出てから先は知らないのか。舟はあれから先、何処かの岸辺に寄って錨を降ろしたんだぜ。俺はこの時もまた敵襲かと結構心配したんだが、舟に何やら積み込んだり、応援の若者が降りていっただけで何事もなかったんだ」

仲間の一人が僕の質問に説明してくれた。

僕は舟が帆を張ったトタン、安心して眠ってしまったが、夢うつつに聞いた人声や灯がチラチラするのを見たように思ったのが、話を聞くとやっぱり本当だったのだ。

話を聞いてみると、僕の安心はちと早過ぎたようだが、しかし現在は広い海の上に我々の舟だけが風を受けて快く走っているのだ。

自動小銃を肩にピストルをブラブラさせる占領軍兵もやって来ないし、インドネシア人暴徒も出てこないし、大型カヌーで襲ってくる海賊も、もう帆で走っている我々の舟に追い付ける筈はない。

我々はノウノウと広い海を眺め、のんびりと舟旅を続ければよいのだ。我々はまったくの自由の身なのだ。



何もする事がない

時間がたつにつれて、あたりは目も眩む明るさになってきた。透きとおった青空に白い雲が幾つか浮かび、太陽は白熱の光を放って頭上に輝いている。風はそよそよと吹き通って、感じとしては日本の秋の空気のようにサラサラした肌触りで暑さより涼しさを感じる。

海は滑らかな瑠璃色に輝き、緩やかなうねりになって船べりに碎ける。白い泡は光を受けて淡青色に透きとおって、砕いた宝石の屑のように美しい。

船はセレベス島の山々が遥かに霞んで見えなくなるくらい、沖あい遠く離れていると思うと、いつの間にか浜辺の椰子林のなかに人家が点々と見えるあたり迄、陸地に近付いている。と思っているうちに、また船は遥か沖あいに向かって進んでいる。風に向かって走る帆船は何度もなんどもタッキグを繰り返し

ながら進んで行くのだ。

陸地に近付くと漁舟らしい小さな帆船も幾つか浮かんでいるのが見える。昨夜我々と一緒だったプラウらしい舟も、水平線の彼方に小さく一つ、二つ見える。だが広々とした海上にはそれ以外の船は何も見えない。

海面には時々、木ぎれ・大きな木の枝・椰子の実の殻などがふわりフワリと漂ってくるが、それ以外魚一匹見えず飛び魚も跳び出さない。

胴の間の荷物の間に寝ころがったり、屋根に登って座り込んだり、波模様の変化をボンヤリ眺めたり、板の間に煙草を吸いながら仲間と駄べったりするほか、することがなくなってしまった。

何ひとつやる事のなくなった我々は、ヒタヒタと単調な音で舟べりを叩く波の音を聞いているうちに、いつの間にか目をつむってウトウトと居眠りを始めている。

自由も平和も有り余って、そろそろ退屈しはじめてきた。

水 洗 便 所

「おーい。一体、便所は何処にあるんだ。この舟には？」

「便所なんか有るもんか。船首のところに止まり木が舟べりから、海に突き出ているよ。舟べりを乗越して行って、足を止まり木に掛け、両手はしっかり舟べりを掴まえて、海に落ちないようにシャガンでやるんだよ」

「囲いは無いのかね」

「そんな物あるもんか。しゃがんだ下は美しい海水の水洗便所だよ。風通しは良いし、涼しくていい気分だぜ」

教わった男は妙な顔をして舟べりを越えていき、姿が見えなくなった。しばらくして、「ウォーッ！」と奇声を発して、その男が舟べりから首を突き出して大きな声で報告している。

「今、大きなうねりが来て、波頭が尻を叩きやがった。こりゃー、まったく涼し過ぎるわー。しかし気持ちいいなー」

沖に出ると水夫たちは、時々帆を締めたり緩めたり、風の方向に合わせたり

するくらいで、あまり仕事は無いらしい。帆綱を繕ったり、海水を汲んで船体を洗ったり、磨いたりしている。

風がとまって帆がたるんでくると、水夫は帆綱を締めた後、船首の柱に吊ってあるドラを、ボーン、ボーンと叩き始める。

「ふーむ。このドラを叩くと神様が風を送って呉れるのか。じゃあー、俺が叩いてやろうか。日本人が叩いても風が来るかな？」

水夫と手まねを交えて話こんでいるのが居る。

彼は面白がって、ドラを叩きはじめた。ボーン、ボーン、ボーンとドラは余韻を残して海の上を流れていく。不思議な南の国の情緒を周囲に振り撒きながらの音は広がっていく。

「ありゃりゃ。ほんとに風が吹いてきたぜ」 叩いている本人は子供のように喜んで大声をあげ、仲間の日本人まで呼んで叩くのを止めようとはしない。

船頭は陽のカンカン照る日中も、昨夜と同じようにあぐらをかいた姿で、仏像のようにじーっと船尾の板の間に坐っている。

船頭の膝の傍には、ガラスを張った小さな汚い箱のなかにカンテラがはいっている。椰子油がはいった缶詰の空缶だが、これがこの舟の唯一の灯である。羅針盤も船頭の膝の前に置いてある。羅針盤といえば体裁がよいが、直径80mmくらいの磁石で、骨董的価値の有りそうなヨーロッパ製の時代物で、盤面には細かく方位が刻まれている。羅針盤は手作りの汚れた小函に収まって板の間にポツンと置いてある。

ス コ ー ル

船頭は舟の中心線と磁石を睨んで舟を操っているらしく、帆柱を見通して前方の海上を、ためつすがめつ睨んでみたり、何を目標にしているのか首を床に擦りつけるようにして、前方の空を見上げたりする。

時には目標の邪魔になるのか、船首でウロチョロしている日本人に怖い顔をして手を振り、場所を空けるよう怒鳴ったりする。

陽が高く上がるにつれて、セレベス島の上空には白い雲がムクムクと湧きあ

がってくる。ギラギラひかる白雲は時々刻々その形を変え、雲の上に雲峰が積み重なり入道雲が入道雲を生んで、やがて空を覆いつくす壮観となる。

いつの間にか雲の峰が横に崩れて流れだす。見るみるうちに、白雲は色が変わってうす鼠色の雨雲となり、水平線のあちこちに海上低く垂れこめてくる。見ているうちに空の半分は黒雲に覆われ、雲の支えの切れた所々に白い紗のカーテンが海面まで垂れ下がってくる。

壮大なスコールの大パノラマである。

辺りは夕暮れのようにうす暗くなっているが、陸と反対の沖の水平線にはまだまだ入道雲が幾つか高く残っていて、まっ青な空をバックに強烈な光を受けた雲がまっ白く輝いている。

時々冷たい風がサーッと吹き抜けていく。

スコールの雨足に叩かれて、海面の色が灰色に変わっている場所が、広い海面かあちこちに斑点のように眺められる。スコールの紗のカーテンは風に舞うように、近付いたり離れたたり左に飛んだり右にゆっくり移動したりして踊る。スコールのカーテンは我々の舟の近くまで何度も迫ってくるが、ひらりと身をひるがえして、なかなか思わせぶりである。

遙か西の水平線は、相変わらず青い空と照り返す海面がギラギラ光っている。時々大きな雲の影が海面を横切ると光の反射はサーッと消えて、あたりは夜のようなになる。だがすぐ、雲は去って夜が明けたような明るさが戻ってくる。

スコールは我々の舟に、パラパラと飛沫を落とすだけで行ってしまった。

太陽が西の空に傾くと、ギラギラと輝いてはいるがもう刺すような厳しさはなくなって柔かな光になっている。空も透き通る青から蒼い空に変わっている。時々高い雲の峰に反射してまっ白い光を放つが、もう雲も海も遠くに見え陸地も赤味がまして、目を刺激しない。

やがて壮大な落日が始まる。海の上の夕日 姿は想像以上の物である。荘厳とも神秘的とも言える大きなドラマとしか言いようがない。

西の水平線に太陽が迫ると、海も空も見えるもの全てが赤い色彩のあらゆる混合のなかで変化していく。勿論これは言葉や文字の世界のものではなく絵画の世界のものだが、絵具でこれが描けるものだろうか。

空も海も陸地も舟も、次第に青みが増し藍色となり、紫色と変わり、やがて

は灰色からうす墨に塗り潰されている。海から遠くに見える陸地の浜には部落の人家から夕餉の白い煙がたなびいているのが見えていたが、それもやがてうす墨のなかに消え、チラチラと火だけが点々と残っている。

そして黒い墨絵のような陸地の山々の形だけが、水平線上に長く残って後はみな暗闇のなかに何も見えなくなっていく。

舟の上ではカンテラの灯が唯ひとつ、あたりをぼんやり照らし出すだけだが、その中に置物のような船頭の姿が相変わらず不気味に浮かびあがって、乗っている生き物も声ひとつ出さない。

海の上の夜は昼間の暑さにひきかえ、ヒシヒシと冷えこんできて涼しい。空は今夜も満天の星で埋められている。街のインドネシア人が星の光で新聞を読んでいるのを見て驚いたが、海の上の星の明るさは我々でも新聞が読めそうに思えるくらい明るい感じだ。

舟べり近くの海面には、舟のつくる波に無数の夜光虫がまるで光の帯のように漂っている。舟はキラキラ輝く宝石の裳裾を長々と曳いて走っているようだ。

あらゆる緊張から解放された喜びも、我々だけの自由を味あう楽しさも、狭い舟の上の3日目ともなると、何もかも鼻について退屈さにウンザリしてきた。

胴の間に寝転がってみたり、甲板に出てみたり、屋根の上に這上がってウロウロしてみたり、朝から晩までちっとも変化のない毎日である。

海の上を眺めても、この3日間同じように左手に広々とマカッサル海峡の水平線が拡がり、右手にはセレベスの島影が低く長く横たわっていて少しも変化がない。

舟は遙か沖あいに進んだり、陸岸近くに迫ったりするが、次々に現れて来る岬や部落はどれもこれも同じように見えて、舟はまるで同じ場所を往ったり復たりしているのではないかと疑いたくなる。

仲間の連中も思いは同じとみえて、入れかわり立ちかわり船頭のところに行って「いつ頃、目的地に着くのか？」と尋ねている。船頭の返事は「もうすぐ、

もうすぐ」の一点張である。

船頭の所に行った男は、自分の推測を混じえて目的地ランガに到着する予定を皆に披露しているが、昨夜の話では今朝、今朝の話では昼頃、昼の話では夕方だと、まったく当てにならない情報である。

僕や仲間たちは、夜ともなればそれこそ白河夜舟で、グッスリと寝こんでしまうので真相の程は分からない。風が止まる夜半過ぎには舟も動けなくなるだろうし、風の向きによっては同じ場所を何度もタッキングせねばならないのが、帆かけ舟の宿命だろうと僕は余り気にもならない。

舟のなかで一番元気な、禿げ頭のD老人も退屈さにウンザリして身をもてあましているようだ。

「一日じゅう何もやる事が無いのが、こんな苦しい事とは知らなかったよ。こんな時、一杯あればなー」

左手を口迄持っていて、盃をあける恰好をしてみせて、苦笑いしている。こちらもつい、釣りにまれて唾をのむ。

「おい、I君。例の奴はどうした」僕はゴッソリとI君に訊ねてみた。

集結地を出発するとき、I君がゴソゴソと土地製の椰子酒ブランデーを水や瓶に詰めて荷物のなかにしまいこみ……「ちゃんと手に入れておきましたからね。大事にしまっただけチャンスが来たらいつかやりましょう」と言っていたのを思い出したのだ。

「それがねー。あの海賊騒ぎのとき、皆がガラガラ荷物をひっくり返したでしょう。水筒は栓が抜けてるし、調べてみたら数滴しか残ってないんです。口惜しいっただけ。全く残念でした」

彼はいつもの癖のおどけた言い方で僕をガッカリさせた。

「あやしいなー。お前のことだから、こっそりやったなー」

「とんでもない。正真正銘、嘘は言いませんよ。こぼれたあたりの舟板まで、ペロペロ嘗めたくらいですよ」

僕は彼の話をぜんぜん信用していなかった。彼とはマカッサルで一緒に暮らしていた仲間なので、彼が異常とも言える酒好きである事を、僕はよく知っているからだ。

彼がこの舟に乗り遅れて河岸を走りまわっている時、トタンに僕は思ったも

んだ。奴は、また酒を売る店を探してウロウロしてたんで、遅れたんだなーと。
当たらずとも、遠からず。彼が酒を無駄にこぼすような事は絶対にない。

ブギスの海の男

舟に乗って海上に出た第一日目は『親船に乗ったような』、心温まる思いを十分に味あわせて貰ったが、今では『舟に乗ったら船頭まかせ』、より外にどうする事も出来ない諦めの心情を十分に味わっているところだ。

船頭と言えは、まったく大したものである。我々が舟にのりこんで以来いつ見ても船尾の板の間に、舵の柄を片手で握って坐りこんだままである。

水夫たちと話し合う事もなく、我々が話しかけても一言か二言しか返事をしない。席を立ったのも見たことがないが、いつ用事をたして、いつ寝ているのだろう。しかも夜叉か鬼神のような怖い表情をして四六時中、帆柱だけを睨んでいる。

しかし僕は、この船頭が舟を河の真ん中に停めて、自分の部落からカヌーで槍を運んで来た時の事を忘れない。

疑心暗鬼で脅えている我々の前に、大きなバナナの大房をほおり出して、『トアン、トアン、食べなよ』と言ったときの船頭の顔を。

船頭はきっと、素朴で剛毅で純粋な海の男に違いない。

僕は、インドネシアの海を縦横に走り廻るブギス族の海の男を書いた本を読んだことがある。

会社の仕事でジャワに出張した時、スラバヤの本屋でインドネシア風俗を英語で書いた本が棚に並んでいるのを見つけた。出張中の身で、飛行機の手荷物には15kgに制限されているので、買うわけにはいかず、もっぱら立読みした。

そのなかに、ブギス族の船乗りの事が書いてあったのだ。

ブギスのプラウは中型になると、舵が二本ついている。もちろん船頭は両手でこの舵を握ってどっかと坐って舟を操る。

舟が更に大きくなると、二本の舵に夫々一人ずつ舵手がついて、その間に船頭がどっかと坐る。ところが舵手の席は船外に張り出した梁の上で、下は海で

ある。居眠りしようものなら、海に落ちるという命がけの仕事なのである。しかも航海中、不眠不休で日夜走り続ける厳しい経験を長年堪え抜いた海の男が最後に船頭の資格を獲得するのだ。

ちっぽけな磁石ひとつで、東はニューギニアの涯から西はシンガポールの西まで、太陽と月と星とあちこちの島影を頼りに、広い海を自在に走り廻り、何日も不眠不休で指揮をとる事が出来るのは、こうした命がけの修練の結果なのであろう。

航海中は不眠不休であるかわり、目的地に到着するとまず神に感謝の祭を捧げた後、盛大な宴を開きたらふく飲み且つ食うのがしきたりだそうだ。

プラウには色々マジナイやシキタリや迷信があって面白いが、我々が見たドラを叩いて風を呼ぶのもそのひとつだろう。大きなプラウでは胴の間に鶏を飼っているそうだ。鶏がコツコツと餌をつつくと舟虫が驚いて、船腹の舟板に住み着かなくなると言う訳である。

や っ と、 上 陸 ！

狭い舟の中で毎日々々、左に広々とした水平線、右に近付いたり離れたりするセレベスの島影、といった同じ景色を眺めていると、舟の上で何日すごしているのかははっきりしなくなってきた。

たしか5日目の昼すぎだろう。我々の舟は広い砂浜の海岸に、直角に舳先を向けて近付いていた。

海岸は白い砂浜が長々と拡がり、砂丘の向こうには疎らな林が見え所々椰子の木々の群が高くそびえていた。海岸近くには人家や倉庫らしい建物が並んでおり、奥のほうには部落も在るらしくニッパ屋根がチラチラ見えている。

我々は船首の板の間や屋根の上にあがって、ものも言わずジーッと陸地を見つめている。海岸には日本人らしい人影も見え、広い海岸には我々のと同じような舟が2隻、3隻と浜辺に近付いているのが見える。

海の色は次第に淡青色に変わって、海底の砂模様がユラユラと見えるくらい浅くなってきたが、岸への砂浜は遥かに遠く相当に遠浅の海らしい。日本でなら

一流の海水浴場になれそうな綺麗な海である。

帆は降ろされ、水夫は竿を使って舟を動かしているが、舟底が時々砂につかえて進みにくくなってきた。

舟底が砂にめりこんで、舟は完全に動かなくなった。

波打ちぎわまでは、まだまだ5、60mはあり、水深もかなりあるように見える。仲間の連中は、さてどうしようかとお互いに顔を見合わせて、様子を伺い誰も言葉を発しない。

誰も動きそうにないので、僕は思いきってズボンを脱ぎ舟べりに手をかけ水に跳びおりた。水は胸のあたりまでしか無かった。

歩きにくい水のなかをヨイショ、ヨイショと浜辺まで進んで、波打ちぎわから砂丘に駆け上がった。砂浜は焼けついていて熱くてユックリとは歩けない。砂丘から林の中の倉庫らしい建物を目標に、なるべく砂を踏まないように、チョロ、チョロある草や海藻を選んで小走りになって急いだ。

倉庫らしい建物の付近には白い兵隊の作業服を着た日本人が何人も歩いている。現地応召して入隊した若い日本人が、この地ランガに先遣隊として来ていると聞いていたが、その連中らしい。

僕は其のなかの一人に、我々の会社の人間が来ているかどうか尋ねてみた。すぐ伝えてくれたとみえ、倉庫の陰から顔みしりの会社の人が急ぎ足で現れた。挨拶もそこそこに、僕の仲間…マカッサルの宿舎で一緒に暮らしていた若者たちの消息を尋ねた。即座に答えが返ってきた。

「居ますよ、いますよ。すぐ来るよう連絡しましょう」

この倉庫の前の通りはメンストリートとみえて、人通りが多い。皆兵隊の作業服を着た日本人ばかりだ。僕は半袖の上着は付けているが、腰から下は濡れたパンツ一枚の裸足ときているので、少々照れくさい。しかし、待つ間もなく懐かしいマカッサルの仲間が次々と姿を現した。

「ようよう。来たなー。舟は何処だ」 顔を見るなりの挨拶である。

「舟は沖に停まっているあれだ。俺独り、今海を歩いて来たんだが、会社の連中が皆、あの舟に乗ってるよ」

「じゃあ、早速みなで荷物を降ろそうや。KもSも皆、呼んでこいや」

我々の仲間は敗戦の数カ月前まで、マカッサルの受信所の宿舎でひとつ釜の

飯を食っていた連中である。ワイワイ賑やかに飲を食い酒を飲み、夜の街に出かけるのも行動を共にした仲間だが、若い連中はAもSもKも現地応招で兵隊にとられ、残ったのは船で一緒に来たI君だけだった。

そして図らずも、今妙な所でしばらくぶりの再会となった訳だが、彼らは以前とチットも変わっていない野放図で朗らかな若者達だった。

我々はワイワイ喋りながら浜辺に向かい、そのままジャボジャボと水の中に入って行った。

我々は舟に向かって水のなかを歩きながら、別れて以来のつもる話やマカッサルでの思い出話を夢中になって喋りあった。彼らの話によると、我々がこれから行く目的地マリンプンは、此处から車で30分くらい山奥の高原の中の何ひとつない草ぼうぼうの原っぱで、日本人集結地としてこれから建設せねばならぬ荒地なのだそうだ。彼らはこの海岸に駐在して舟で運ばれて来る日本人の荷物を陸揚げしてトラックでマリンプンに運ぶのが、この頃の海の仕事だそうだ。

舟の連中は我々の姿を見つけると、大声を上げて再会を喜んでいる。気風のいいA君は舟の連中との久しぶりの応酬もそこそこに、舟に着くとすぐ這い上がって甲板に仁王立ちになって叫んでいる。

「舟の奴は泥棒みたいな奴らだから、荷物をチョロまかされないように、よく調べるんだぞー。さぁー、荷物を降ろすから一人、一人浜まで担いでいけよー」

荷物は次々皆の肩で岸に運ばれ、砂浜に積みあげられた。

「危ないから、最後によく調べなくちぁー」

A君は胴の間の床板まではがして底を調べている。

A君ら若者たちは、先遣隊としてこの地に来る途中トラックや舟でインドネシア人暴徒に襲われ、石合戦の末荷物など奪われた辛い経験の持ち主たちである。インドネシア人に対してすっかり用心深くなっているらしい。

我々はたとえ数日とはいえ、一緒に過ごした朴訥でゴツツイ船頭や水夫たちにいささか親しみを感じているので、彼らに対してあまり疑い深いやりかたは、気がひけて辛かった。

我々は舟を離れる最後に、夫々ランニングや半袖シャツを脱いで彼らに渡して来た。

我々が舟を離れると、水夫たちは舟べりから手を振って「スラムット・ジャラン。スラムット・ジャラン（ご機嫌よう、さようなら）」と叫びながら、帆を張る支度をはじめ、竿で舟を沖に向かって押し出していった。

こちらが手を振って叫び返すと、彼らは踊りあがって合図し、ポーン・ポーンとドラを鳴らしながら沖え沖えと離れて行った。

我々は荷物を皆砂浜に積みあげてしまうと、ガックリときて皆が皆荷物の上にへたへたと腰を降ろしてしまった。誰ひとり喋りもせずしばらくは放心状態である。

「濡れついでに海水浴でもしようか」 若い者の声に皆は立ちあがった。

老人も若い者もまた黙って、ジャボジャボと海の中に入っていった。

我々はすっかり子供に返ったように、禿頭の爺さんから屈強の若者までバタバタ泳いだりボチャボチャ水を掛け合ったりした。

まるで日本の何処かの海水浴場で遊んでいるように水遊びに夢中になったが、それこそ何年振りの事だろうか。

2、30分も水の中で我をわすれて過ごした我々は、やっと平静な気分になって砂浜の荷物のところへ戻ってきた。

遙か遠くまで続いている浜辺には、いつの間にか数隻のプラウが着いていて、あちこちで荷揚げをやっている。一緒だった船はまだ半数も着いていない。砂浜のあちこちに、舟毎に作業しているのは日本人のグループばかりで、夫々楽しそうに賑わっていた。

太陽は既に西に傾き、暑さも消えて濡れた体にそよ風が快よい。我々も元気回復して笑い話に興がっていた。

我々の居る場所から背後に在る砂丘の、疎らな林の中から赤いワンピースの若い女が一人現れた。背のスラリと高いインドネシア人の女の子だ。

砂浜の日本人の男たちは、砂の中から湧いてきた天女の姿に、一斉に作業を止めて視線を集中した。

女の子は他の集団には見むきもせずに、真っ直ぐに我々のグループの方に向かってくる。皮膚の色は小麦色だが、若々しいスマートな美人である。

コップを沢山載せた盆を両手で捧げ、砂の中をしずしずと歩いて来る。

「シラカン、ミノム（どうぞ、おあがり下さい）」 娘は付き添ってきた背の

高い若い男からコーヒーポットを受け取って我々にコーヒーを注いでくれた。疲れた後の実においしいコーヒーだった。我々は狐につままれたような顔をして娘の一挙一動を見守ったが、我慢できなくなった一人が若い男に尋ねている。

「一体これはどうした訳ですか」

「ご存じ無いですか。この妹はマカッサルの会社で働いていたんですよ。会社の皆さんが来られたと聞いたので、コーヒーでもと思って来たんです」

我々はまたもや、へなへなと力が抜けてしまった。

「ああ、そう言えば君、居たね。思いだしたよ」

電話局長をしていたD老人が禿げあがった額を叩きながら娘の前に歩いていった。娘はニッコリと笑ってしなをつくった。

ジャンボ玉子焼

我々の一夜の宿は、この海岸から奥にはいった部落の中の一軒と決まって我々は各自荷物を担いでボクボクする砂の道を歩いていった。

部落は店らしい家も何軒もあるニッパ小屋の村で、中央に大きな井戸のある広場があった。浜辺近くなので、この井戸が唯一の真水の水源なのかもしれない。

我々は早速、大きな円形の石畳になっている井戸端で真水の行水をつかって体を洗った。総勢百人近い日本人の群が真裸になって、深い井戸の周りで水をかぶったり洗濯する様子はかなり荘観であっただろう。部落じゅうのインドネシア人男女、子供が我々の周りに物見高く群がって見物していた。

潮風にネチャネチャしていた髪から顔から体じゅうを石鹸で洗い流すと、生き返ったようなサッパリした気分になり、衣服、下着も久しぶりに綺麗に洗濯されて臭も消えた。

井戸の周りの広場には八方に綱が張られ、洗濯物がギッシリ干されて、お祭りの満艦飾の万国旗のようになった。

我々が割当られたニッパ小屋は、通りに面したコンクリート床の小さな店屋か倉庫のような狭い家だった。表の部屋に綱を張って洗濯物を乾し荷物を積み

あげ、裏の部屋のコンクリート床にアンペラを敷いてゴロ寝する寸法である。

どうやら一夜の宿の設営が終わった頃、あたりはすっかり暗くなって狭い部屋の中は人いきれでムンムンしてきた。

I 君がニヤニヤしながら僕の傍にやってきて、コッソリ囁く。

「皆がね。海岸の小屋で待っているんだよ。そっと抜け出しましょう」

突然の話なので、僕は何のことか分からなかったが、彼が左手で酒を飲むしぐさをしたので、やっと気がついた。

舟から荷物を降ろしてくれた若い仲間の連中が、久し振りの再会なのでゆっくり会いたいと言う訳だ。

「今になって抜け出すのはチョッと拙いが、もう皆な寝るばかりだからソーッと出かけよう」 僕はトタンに決心してしまった。

マカッサルの宿舎で一緒に暮らしていた悪童連中と久し振りのお喋りをしたい気持ちは矢も盾もなく、飛んで行きたいくらいである。

暗くて狭い路域を抜けて I 君が案内するままに行った場所は、我々が上陸した海岸の蔭あたりと思われる処だった。あたりは真っ暗なので僕にはサッパリ見当がつかない。

「やぁー、来たきた。ここだよ。中にはいれよ。立派な椅子もあるよ」

暗闇の中から S 君の声だ。

そこには竹の柱のあずまや風の小さなニッパ小屋があった。あたりは立木の疎らな砂丘なので、海岸の茶店なのかもしれない。

狭い土間には作りつけの木のテーブルがあり、両側は壁に作りつけの竹のベンチである。部屋は三方壁なしの明けっぱなしで、おくには部屋があるらしい。テーブルの上には缶詰の空缶に椰子油を入れたカンテラが油煙を立ててあたりをボーッと照らしていた。

「ここには駄菓子とコーヒーしかないが、A 君が何か持って来るよ。缶詰は持って来たよ。ところで、お前はんじんのチュウを持って来たんか」

I 君は上着に包んで後生大事に抱えて来た物を、勿体ぶって灯にかざして見せてからテーブルの上に置いた。まるで爆弾でも扱うような慎重な手つきで、中から取り出した物はブランデーの瓶であった。

「オヤッ！ お前、やっぱり持って来ていたのか。呆れたね。船の上ではもう

無くなったって、あれほど頑張っていたのに」

「將軍、そこが計略ですよ。あんな爺さん連中の居るところで勿体なくて出せますか、命がけで運んできた貴重品ですからね」

「こぼしてしまったなんて、よくまあ、しらっばくれたもんだ」

「こぼしたのは本当ですよ……水筒の分は。あれは惜しかった」

「その話も、今となっては信用できん」

「いやあー、本当ですよ。泣きの涙でしたよ」

聞いていたSやAも、笑いながらIをからかう。

「Iがブランデーをみすみすこぼすもんか、みんな自分の口の中にこぼしてしまったんだよ」

A君が大きな竹籠をテーブルの上に抱えあげた。籠の中には鶏卵がぎっしり4、50個はいていた。

「ウワーッ、随分沢山持ってきたな」

「ここで手にはいる食料はこれしか無いんだ。これで何か料理を作らせよう」
彼は暗闇に向かって大声で怒鳴った。

小屋の奥の闇の中からインドネシア人の男がぬーっと姿を現し、竹籠を受け取ると音もたてずに小屋の外に消えていった。

缶詰が開けられブランデーをチビチビなめ始めると、そろそろ口が滑らかにすべりだした。

粗末な木のテーブルを囲んで、K、S、A、Iと僕は椰子油のどす暗いカンテラの灯の中で、久し振りの奇妙な場所での奇妙な会合を喜び合い、マカッサルの宿舎で一緒に過ごした頃の気分に戻って喋り合った。

彼らは現地応召で街を離れて、山の中で兵隊の訓練を受けていたが、すぐ敗戦となり山を下ると、追われ追われの身となって、このランガの海岸にやって来たのだった。一人々々の話が面白くて、哀れで、可笑しくて、可愛そうで、しかも愉快的話だった。

小屋の外の暗がりの中で、さっきの男は椰子油の焼ける音をジューッ、ジューッさせていた。砂の上に大きな石を集めて臨時の竈を作り、枯れ木や流木のかけらを焚いているらしく、時々ぱーっとあたりが明るくなる。

四角いブリキの菓子缶のような物を操作して卵を焼いているらしい。

出来あがって運ばれて来た物を見て我々は驚いた。恐ろしくでっかくて厚い玉子焼きだった。厚さは5 cm、大きさは30 cm四角もあろうかという、文明堂のカステラ級のジャイアンツ玉子焼きだった。

「でっかい玉子焼きだなー」と言いながらひとかけらを口に入ると、

「こりゃ美味しい。驚いた。あの男たいした腕だぜ」

「うん。美味しい。あんなペロペロのブリキ缶で枯れ草など焚いて、よくまあ、こんな美味しい玉子焼きが出来るもんだな。凄い料理人かもしれないぜ」

我々は期待していなかっただけに、この美味しい玉子焼きにはびっくり仰天してしまった。

「I君が命がけで持ってきたブランデーも近來にない素晴らしい物だが、この玉子焼きも近來珍しい、素晴らしいものだな」

我々はすっかり嬉しくなっていた。

「それにしても、I君のブランデー、呑んべいのお前がよくまあ我慢して、長い道中を後生大事に抱えて来たもんだなあ」

「あたりめいよ。いよいよ何も無くなった時、將軍と二人で飲もうと思っていたんだ。それにしても、お前たちに会って、その取っつきが役に立って、よかったなあ」

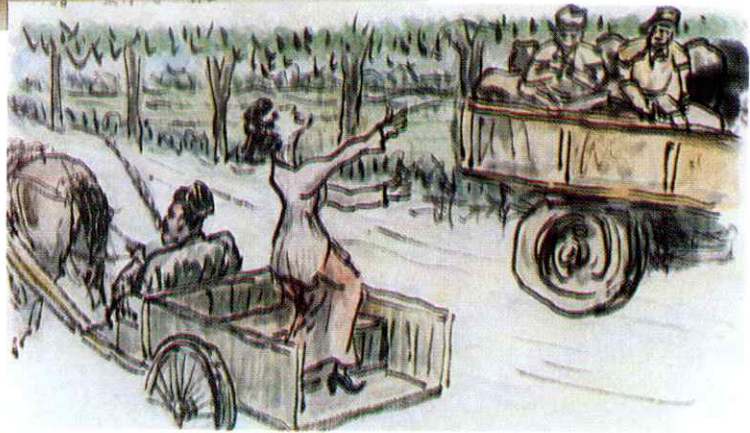
「うん。よかった、よかった。テレマカシ。テレマカシ、バーニャだ」

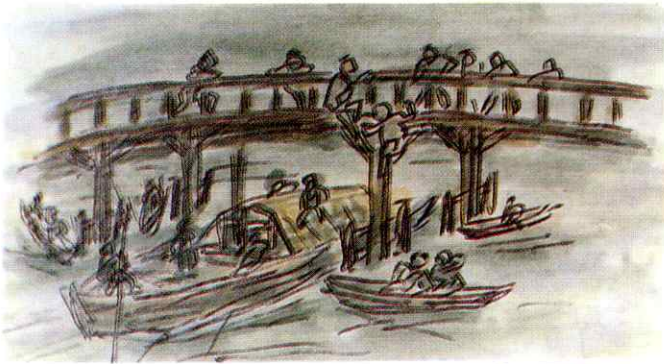
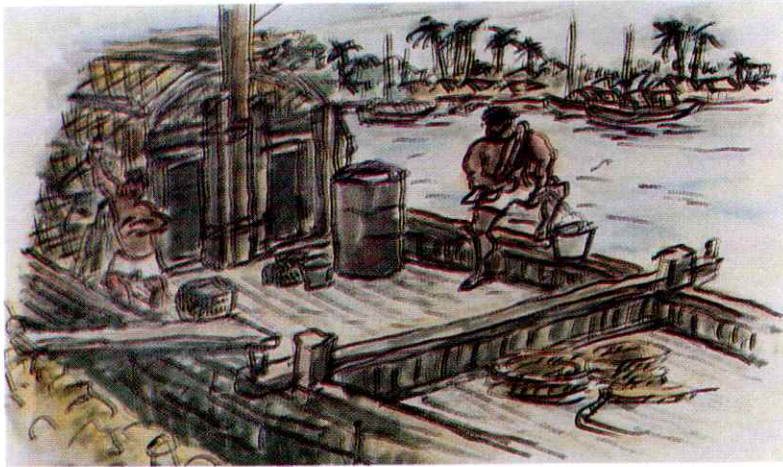
玉子焼きは、食も充分満足させるほどの量であった。久し振りのブランデーと懐かしい仲間との再会で、我々は身も心も楽しくなって時間のたつのも忘れて語りあった。

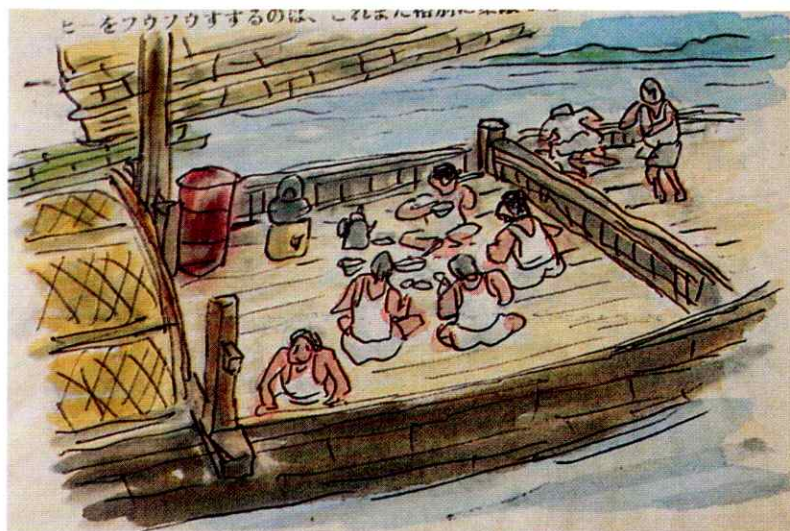
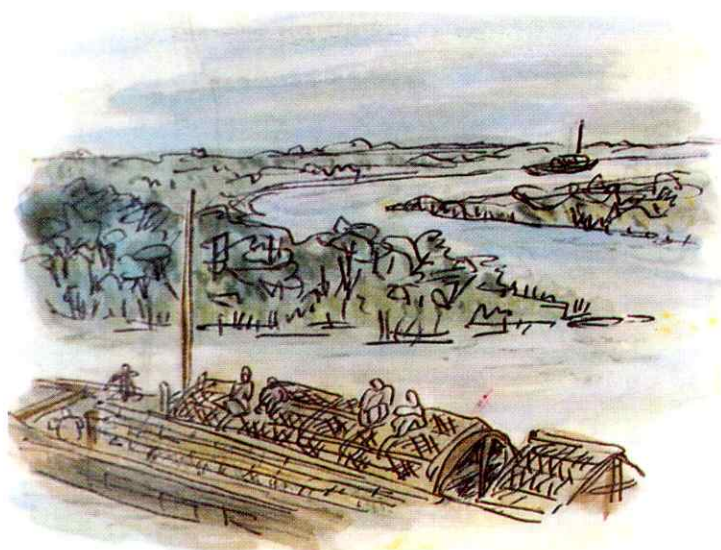
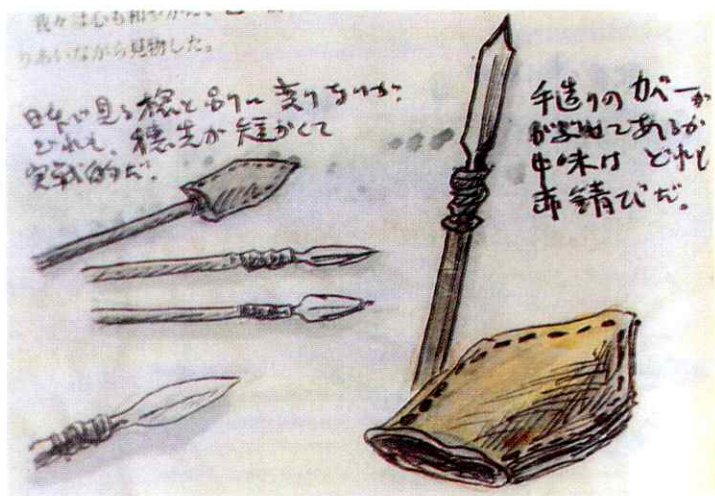
海岸のあずまやは夜が更けると冷えびえとうすら寒くなってきたが、我々は心暖まる楽しさで今までの心配や苦勞をすっかり忘れて快い時をすごした。

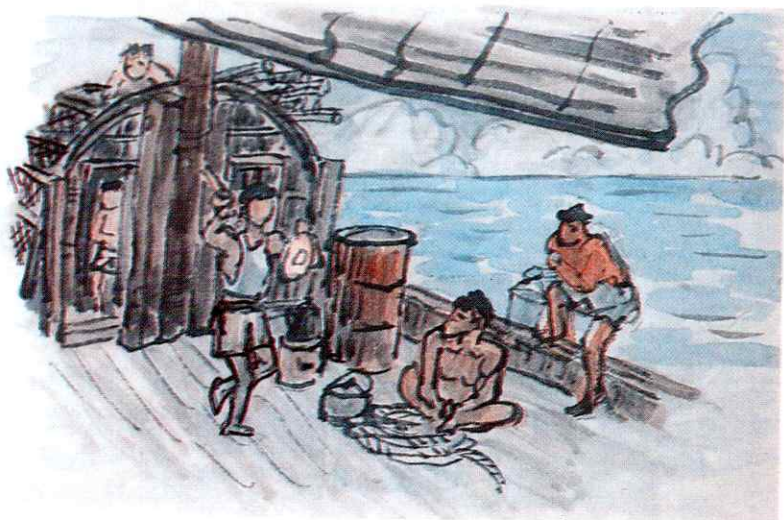
I君と僕はほろ酔いのよい気分で、暗闇の中を部落に戻った。馬小屋のようなコンクリート床の狭い部屋に戻ってみると、部屋いっぱいには張られた蚊帳の中のアンペラの上に、仲間の連中が鮪を並べたようにゴロゴロと横になって熟睡していた。

我々二人は隙間を捜してソーッと潜りこんで横になった。
横になるとたちまち僕は眠ってしまった。



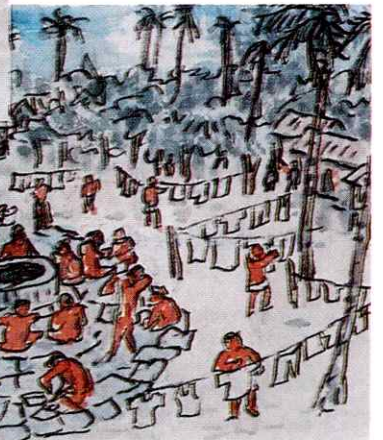
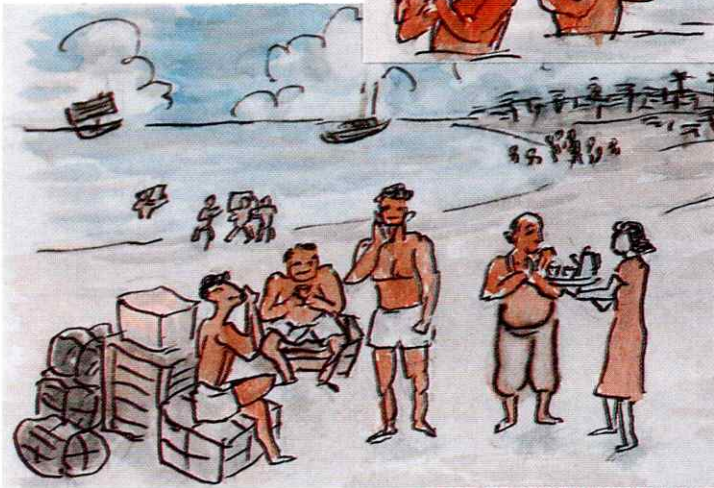
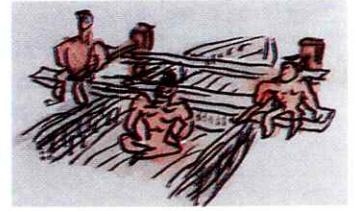
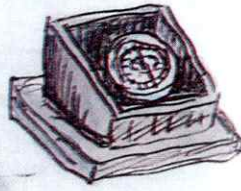






ノイローゼだなと心配になった。





著者略歴

- 大正元年（1913） 父の任地台湾新竹州にて生る。
- 昭和 4 年（1929） 福岡修猷館中学卒。（父母が神戸御影在住の為「玄洋社」より通学）
- 同年 官立無線講習所入学（現電通大）船舶通信技師を目指す。
- 昭和 8 年（1933） 官立無線講習所卒。（漫画に興味を抱き昭和初期の東京の様子を描き続ける）
- 同年 国際電話㈱入社 台湾観音受信所勤務。
- 昭和 13 年（1938） 2 月結婚。国際電話と日本無線合併 KDD となり、KDD 小野受信所（兵庫県）へ転勤。
- 昭和 17 年（1942） 南方（マカッサル方面）へ会社より派遣。
- 昭和 21 年（1946） 南方より帰国。（南方で描いた絵は占領軍に没収される） 国際電気㈱へ転職。
「南方の記録」書き始む。
- 昭和 51 年（1976） 自由退職。
- 平成 4 年（1992） 没
- 酒を好み、反骨精神旺盛で系列を嫌い、あらゆる事に興味を持ち、外出にはスケッチブックを必ず持参した。
- スケッチ、油絵、ワープロ、フランス語（NHK 講座）、旅行と多趣味で亡くなる前まで散歩以外は机に向かっていた。
- フランス語は読めるまでになり、10 年の成果を喜ぶ。
- 生死を共にした友達と会うのを最大の楽しみとしていた。